日本応用心理学会
第83回大会

The Japan Association of Applied Psychology



発表論文集

会期：2016年9月1日（木）～2日（金）
会場：札幌市立大学 看護学部（桑園キャンパス）
大会委員長：山本勝則（札幌市立大学）

日本応用心理学会

第 83 回大会発表論文集

2016年9月1日（木）～2日（金）

札幌市立大学 看護学部（桑園キャンパス）

目　　次

特別講演・大会委員会企画連続講演・ワークショップ・研修会

特別講演 …… 1
9月2日（金）10:40-11:40　大講義室
Well-being を目指すコミュニケーション研究
司　会　者　　藤井 瑞恵（札幌市立大学）
講　演　者　　大坊 郁夫（東京未来大学）

大会委員会企画連続講演 …… 2
9月1日（木）13:10-15:10　大講義室
シミュレーションが持つエラー防止と技術トレーニングへの可能性
司　会　者　　山本 勝則（札幌市立大学）

講演1：産業場面で生じるエラー行動とシミュレーション
講　演　者　　深澤 伸幸（東京富士大学）

講演2：看護教育・継続教育とシミュレーション
講　演　者　　中村 惠子（札幌市立大学）

自主企画 WS 1 …… 6
9月1日（木）9:30-10:30　講義室4
精神看護シミュレーショントレーニング
～学外実習に臨む学生を対象として～
企　画　者　　戸田 岳志（九州看護福祉大学）
司　会　者　　緒方 浩志（九州看護福祉大学）

自主企画 WS2 …… 7
9月1日（木）15:20-16:20　講義室4
気持ち良い体験をしよう～こころに響く看護師のマッサージ
企画・司会者　　大野 夏代（札幌市立大学看護学部）
山本 勝則（札幌市立大学看護学部）
話題提供者　　大野 夏代（札幌市立大学看護学部）
山本 礼美子（看護師）

自主企画 WS3 …… 8
9 月 2 日（金）9:30-10:30　講義室 4
治療的・教育的な価値を高める引き継ぎとするために
― セラピストは何を引き継ぎ、何を受け取るべきか ―
企画・司会者　佐藤 佑貴（福島学院大学福祉学部）
話題提供者　渡辺 智之（目白大学心理カウンセリングセンター）
内海 裕里花（福島学院大学大学院心理学研究科）
佐藤 佑貴（福島学院大学福祉学部）
指定討論者　内藤 哲雄（福島学院大学福祉学部）

自主企画 WS4 …… 9
9 月 2 日（金）13:10-14:10　講義室 4
植物の癒し効果を評価する：
農業、医療、そして応用心理学からのアプローチ
企画・司会者　木村 友昭（MOA 健康科学センター）
話題提供者　水野 百合子（奥熱海療院）
中川 祥治（農業・環境・健康研究所）
内田 誠也（MOA 健康科学センター）
指定討論者　松本 洸（日本大学芸術学部）
烏帽子田 彰（広島大学医学部）

学会研修会 A …… 10
9 月 1 日（木）15:20-16:20　講義室 1
研究と実務の融合
― 犯罪者プロファイリングをとおして ―
講　演　者　岩見 広一（北海道警察本部科学捜査研究所専門研究官）

学会研修会 B …… 11
9 月 2 日（金）9:30-10:30　講義室 1
人間関係と働く人々の well-being
― ソーシャル・キャピタルの視点から ―
講　演　者　小野　公一（亜細亜大学経営学部）

ポスター発表　9月1日（木）

ポスター発表 A（会場：体育館）9：30 ～ 11：30

在席責任時間　9：30 ～ 10：30

一般・原理

A01　垂直・水平錯視再考
—I.　水平線を基線とする錯視量カーブ—
○渡邉　拓人　帝塚山大学大学院心理科学研究科　13
小原　宏基　帝塚山大学大学院心理科学研究科
川合　悟　帝塚山大学心理学部

A02　垂直-水平錯視再考
—II.　垂直線を基線とする錯視量カーブ—
○小原　宏基　帝塚山大学大学院心理科学研究科　14
渡邉　拓人　帝塚山大学大学院心理科学研究科
川合　悟　帝塚山大学大学院心理科学研究科
帝塚山大学心理学部

認知・感情

A03　リスクコミュニケーション場面における信頼の規定因に見透かされ感が与える影響
○静間　健人　関西大学大学院社会安全研究科　15
土田　昭司　関西大学社会安全学部

A04　コートサイエンス　お辞儀の量刑への影響について
—お辞儀の判決への心理的影響—
○岩崎　章浩　HERO 法律事務所　16
来田　宣幸　京都工芸繊維大学
太田　智子　株式会社中央ビジネスグループ

A05　左利きに関する心理的負荷の研究
—POMS-VAS, 唾液アミラーゼ, 描画法による比較検討—
○佐藤　茜　千葉工業大学大学院工学研究科　17
安藤　昌也　千葉工業大学先進工学部

A06　注視点解析を用いた筆跡分類課題方略の分析
○関　陽子　科学警察研究所　18

A07　ユーモアの種類と笑い声に関する量的分析
—コントと落語における観客の反応の比較—
○高山　藍　東京大学医学部附属病院　19
藤澤　伸介　跡見学園女子大学

ポスター発表

発達・教育

A08	特別支援教育における被虐待児への対応に関する研究（10） 緊急調査の報告―地域別の調査対象の概要と特別支援教育の実態などについて―	○林　幸範 石橋　裕子	池坊短期大学 帝京科学大学	20
A09	特別支援教育における被虐待児への対応に関する研究（11） 緊急調査の報告―地域別の虐待に対する対応などの実態などについて―	○石橋　裕子 林　幸範	帝京科学大学 池坊短期大学	21
A10	大学生を対象とした部活動における集団への適応感の研究 ―横断的データを用いた検討―	○来田　宣幸 吉田　浩之	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 群馬大学教育学部	22
A11	中学生を対象とした部活動における集団への適応感の研究 ―縦断的データを用いた検討―	○吉田　浩之 来田　宣幸	群馬大学教育学部 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科	23
A12	小学校から中学校への進学による環境変化に伴う学習習慣の変化 ―私立中学校における事例検討―	○大門　耕平 来田　宣幸	近江兄弟社中学校 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科	24

臨床・相談

A13	大学生の希死念慮とレジリエンスに関する調査	○才野　雄大 神澤　創	帝塚山大学大学院心理科学研究科 帝塚山大学心理学部	25
A14	「医療安全の意識」に関する因子構造 ―新たな尺度編成を巡って―	○兵藤　好美 田中　共子	岡山大学大学院保健学研究科 岡山大学大学院社会文化科学研究科	26
A15	食物アレルギーと対人関係不安の PAC 分析	○杉山　沙羅 杉山　大成 内藤　哲雄	福島学院大学大学院 中島村教育委員会 福島学院大学福祉学部	27

矯正・非行・犯罪

A16	Polygraph 検査における返答の音声分析	○安木　博臣	福岡県警察科学捜査研究所	28

A17	自動車に対する悪戯傷の検討 3 —チェックシートによる加害行動の分析—	○阿部　光弘 染矢　瑞枝 桐生　正幸	三井住友海上火災保険株式会社 三井住友海上火災保険株式会社 東洋大学	29
A18	眼球運動指標を用いた虚偽検出 —非接触的測定における刺激呈示法の検討（2）—	○小野　洋平 石岡　綾香 軽部　幸浩 谷口　泰富	駒澤大学文学部 駒澤大学文学部 駒澤大学文学部 駒澤大学文学部	30
A19	虚偽検出検査における質問と刺激価の影響	○石岡　綾香 小野　洋平 軽部　幸浩 谷口　泰富	駒澤大学文学部 駒澤大学文学部 駒澤大学文学部 駒澤大学文学部	31

社会・文化

A20	体育・スポーツ系学生の健康観に関する研究（I）	○大関　貴久 田崎　元久 福場　久美子 森脇　保彦 岡田　龍司 岡崎　祐史 藤田　主一	東日本国際大学経済経営学部 道都大学経営学部 日本体育大学体育学部 国士舘大学体育学部 近畿大学経営学部 武庫川女子大学健康スポーツ科学部 日本体育大学体育学部	32
A21	体育・スポーツ系学生の健康観に関する研究（II）	○田崎　元久 大関　貴久 福場　久美子 森脇　保彦 岡田　龍司 岡崎　祐史 藤田　主一	道都大学経営学部 東日本国際大学経営情報学部 日本体育大学体育学部 国士舘大学体育学部 近畿大学経営学部 武庫川女子大学スポーツ科学部 日本体育大学体育学部	33
A22	セルフコントロールと先延ばし行動の関係 —日中比較を通して—	○向　佳怡 神澤　創	帝塚山大学心理科学研究科 帝塚山大学心理科学研究科 帝塚山大学心理学部心理学科	34
A23	恋愛関係崩壊後の関わりと愛着スタイルとの関連について	○山口　司	北星学園大学大学院社会福祉学研究科	35
A24	平和構築・紛争予防プログラムの評価 —プロセス評価の試み—	○池田　満 福田　彩 宮城　徹	南山大学人文学部 東京外国語大学総合国際学研究院 東京外国語大学国際日本学研究院	36
A25	在仏日本人留学生のソーシャルサポートネットワーク	○鉄川　大健 田中　共子	岡山大学大学院社会文化科学研究科 岡山大学大学院社会文化科学研究科	37

ポスター発表

A26	座位お辞儀の印象評価	○武田　知也	株式会社テイスト 京都工芸繊維大学	38
		来田　宣幸	株式会社テイスト	
		太田　智子	株式会社中央ビジネスグループ	

産業・職業

A27	男女共同参画社会における地方自治体職員の職業性ストレスに関する研究	○徐　贇君	帝塚山大学大学院心理科学研究科	39
		森下　高治	帝塚山大学大学院心理科学研究科	
A28	ワーク・エンゲイジメントを高める心理的・組織的要因	○天池　雅彦	名古屋市立大学大学院人間文化研究科	40
A29	公的自己意識と他者意識が演技行動に及ぼす影響	○芳賀　千夏子	中京大学大学院心理学研究科	41
		松本　友一郎	中京大学心理学部	

看護

A30	看護師の初期キャリア発達に関する研究	○竹内　久美子	千葉県立保健医療大学健康科学部	42
		松下　由美子	佐久大学看護学部	
A31	統合失調症当事者の服薬体験に関する予備的考察	○佐々木　晶子	札幌市立大学大学院看護学研究科	43
		山本　勝則	札幌市立大学看護学部	
		守村　洋	札幌市立大学看護学部	
A32	服薬の問題へのかかわりについて（3）	○荒木　晴海	欣助会吉祥寺病院	44
		林　潔	白梅学園短期大学	
A33	服薬の問題へのかかわりについて（4）	○林　潔	白梅学園短期大学	45
		荒木　晴海	斤助会吉祥寺病院	

介護・福祉

A34	職場における障害者雇用が従業員の否定的ステレオタイプ形成・軽減におよぼす影響	○蒲倉　聡	日本大学大学院総合社会情報研究科 東京都肢体不自由児者父母の会連合会	46

A35	スクール・ソーシャルワーカーからみた重要業務のPAC分析	○杉山　大成 杉山　沙羅 内藤　哲雄	中島村教育委員会 福島学院大学大学院 福島学院大学福祉学部	47

スポーツ

A36	体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（6）―体罰容認態度へ影響する要因の分析―	○市川　優一郎 福場　久美子 宇部　弘子 鈴木　悠介 深見　将志 小川　拓郎 軽部　幸浩 藤田　主一	日本大学文理学部 日本体育大学 日本体育大学 東京都立板橋特別支援学校 日本大学商学部 埼玉県体育協会 駒澤大学 日本体育大学	48
A37	体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（7）―自由記述からの検討―	○福場　久美子 市川　優一郎 宇部　弘子 鈴木　悠介 深見　将志 小川　拓郎 軽部　幸浩 藤田　主一	日本体育大学体育学部 日本大学文理学部 日本体育大学児童スポーツ教育学部 東京都立板橋特別支援学校 日本大学商学部 埼玉県体育協会 駒澤大学文学部 日本体育大学体育学部	49
A38	異文化圏の日本人サッカー選手・指導者が求める心理支援のあり方	○高井　秀明	日本体育大学体育学部	50

ポスター発表　9月1日（木）

ポスター発表 B（会場：体育館）9：30 ～ 11：30

在席責任時間　10：30 ～ 11：30

検査・測定

B01	行動特性と職種適性 ―職種に必須なコンピテンシーとその測定―	○星　洋	社団法人　行動特性研究所	51
B02	着装基準尺度の作成の試み（2） ―50代を対象とした場合―	○松原　詩緒	文化学園大学現代文化学部応用健康心理学科	52
B03	花および写真の鑑賞による心身の癒し ―癒しの嗜好と心理生理学パラメータとの比較―	○内田　誠也 木村　友昭 山岡　淳 松本　洸	一般財団法人 MOA 健康科学センター 一般財団法人 MOA 健康科学センター 一般財団法人 MOA 健康科学センター 日本大学芸術学部	53
B04	大学生向け留学準備教育スケールの開発の試み II ―新柔軟性尺度の作成―	○橋上　愛子 廣山　祐仁 髙橋　千佳 竹内　康子 岡部　忠司 村上　裕子 長船　直子 井上　孝代 外島　裕	東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 東京海上日動メディカルサービス(株) 明治学院大学 日本大学	54

発達・教育

B05	注視回数の多さが双方向的関係志向に及ぼす影響	○加藤　信子 佐藤　大輔 内藤　哲雄	福島学院大学大学院心理学研究科 福島学院大学大学院心理学研究科 福島学院大学福祉学部	55
B06	大学生のチームワーク訓練効果に見られる適性処遇交互作用について	○古屋　健	立正大学心理学部対人・社会心理学科	56
B07	大学生女子のアイデンティティと父親・母親の養育，心理的結合性 ―「家庭の雰囲気」に注目して―	○平田　裕美	女子栄養大学	57

B08 動詞の誕生 ―幼児期における主体と対象の動きをとらえた言語表現の生成過程― ○萩原 広道 京都大学大学院人間・環境学研究科 58
田中 真介 京都大学国際高等教育院

B09 叱っている子どもが反抗する時への対応 ―教職経験者への PAC 分析― ○佐藤 大輔 福島学院大学大学院心理学研究科 59
加藤 信子 福島学院大学大学院心理学研究科
内藤 哲雄 福島学院大学大学院心理学研究科

人格

B10 コーピング・スキルが精神的健康に与える影響 ○木島 恒一 北陸学院大学人間総合学部 60

B11 日本版 Shyness 尺度の意識度と自己統制感に関する検討 ○松田 浩平 東北文教大学 61
佐藤 惠美 東北文教大学／東京富士大学

B12 日本版 Shyness 尺度の意識度と主要 5 因子に関する検討 ○佐藤 惠美 東京富士大学 62
松田 浩平 東京富士大学／東北文教大学

B13 大村政男と血液型心理学 ―日本応用心理学会における活動を振り返って― ○藤田 主一 日本体育大学 63
浮谷 秀一 東京富士大学

臨床・相談

B14 大学生の臨床心理士に対するイメージおよびニーズに関する調査 ○岡田 和久 日本大学文理学部 64

B15 親密な人間関係を持つことへの不安の PAC 分析 ○鈴木 秋絵 福島学院大学大学院臨床心理学専攻 65
内藤 哲雄 福島学院大学福祉学部

B16 メンタルヘルスにおける心理教育の役割 ○宇部 弘子 日本体育大学児童スポーツ教育学部 66
前橋赤十字病院
木村 真依子 前橋赤十字病院

ポスター発表

矯正・非行・犯罪

B17	官民協働刑務所に関する態度と公正世界観の関連 —栃木県および島根県居住者に対する調査から—	○上瀬　由美子	立正大学心理学部	67
B18	犯罪不安が犯罪認知件数の推定に与える影響 —調整要因としての集合的効力感—	○中川　知宏	近畿大学総合社会学部	68

社会・文化

B19	存在脅威管理理論における不謹慎、所属意識、他者関係希求への効果	○大西　麻仁 土田　昭司	関西大学大学院社会安全研究科 関西大学社会安全学部	69
B20	対人場面における行動の適切さの判断に影響を与える要因 —専門性の違いによる影響—	○伊坂　裕子 和田　万紀	日本大学国際関係学部 日本大学法学部	70
B21	スリランカ人の非言語コミュニケーションの PAC 分析	○内藤　哲雄	福島学院大学福祉学部	71
B22	組織における不正行為を暴くか —中国企業従業員の内部告発に対する態度の調査—	○王　晋民	千葉科学大学危機管理学部	72
B23	大学生におけるテーマパーク体験の心理的要因を探る —ポジティブ感情の役割—	○雨宮　俊彦	関西大学社会学部	73
B24	勤労者の転職経験と仕事への意欲、well-being	○大坊　郁夫 角山　剛	東京未来大学モチベーション行動科学部 東京未来大学モチベーション行動科学部	74
B25	ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク認知に与える影響	○髙橋　尚也	立正大学心理学部	75

B26 保育士の対保護者コミュニケーションの検討 —幼稚園教諭との比較— ○日向野 智子 東京未来大学こども心理学部 76
山極 和佳 東京未来大学モチベーション行動科学部
藤後 悦子 東京未来大学こども心理学部
角山 剛 東京未来大学モチベーション行動科学部

産業・職業

B27 新規学卒就職者の組織社会化に対する企業研修の効果 —3時点時系列データを用いた検討— ○竹内 倫和 学習院大学経済学部 77

B28 企業のワーク・ライフ・バランス施策が従業員の離職抑制をもたらす心理的メカニズム ○鄭 有希 学習院大学国際社会科学部 78
竹内 規彦 早稲田大学大学院経営管理研究科

B29 TPI(東大版総合人格目録)の2高点尺度について II —判断レベル2での高得点尺度の組み合わせ— ○外島 裕 日本大学商学部 79

B30 学校組織レベルのエンパワーメントを構成する要素の検討 ○池田 琴恵 東京福祉大学短期大学部 80
池田 満 南山大学

看護

B31 看護師の情動知能尺度の信頼性と妥当性 ○中島 正世 神奈川大学大学院人間科学研究科 81
杉山 崇 神奈川大学大学院人間科学研究科
神奈川大学

B32 医療観察法病棟における他害及び自傷の要因に関する研究 ○石川 真 独立行政法人国立病院機構花巻病院 82
山本 勝則 札幌市立大学看護学部看護学科

B33 自己評価能力向上のための指導方法 —看護学生のメタ認知能力の実態— ○関口 恵子 埼玉医科大学短期大学看護学科 83
所 ミヨ子 埼玉医科大学短期大学看護学科
蒲生 澄美子 埼玉医科大学短期大学看護学科
宮﨑 素子 埼玉医科大学短期大学看護学科
天野 佑美 埼玉医科大学短期大学看護学科
小池 啓子 埼玉医科大学短期大学看護学科
今野 葉月 埼玉医科大学短期大学看護学科

ポスター発表

介護・福祉

B34	歩行観察における印象評価と動作評価の関係 —オノマトペと歩行異常性尺度を用いて—	○大桐　将 来田　宣幸	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科	84
B35	白杖で叩いた時に生じる音を用いた対象の硬さ判断における握り方の影響	○布川　清彦	東京国際大学人間社会学部	85

ポスター発表　9月2日（金）

ポスター発表C（会場：体育館）12：10 ～ 14：10

在席責任時間　13：10 ～ 14：10

一般・原理

C01	物体の慣性系情報が持ち上げ時に知覚される重さに与える影響 —手元から物体重心までの距離の影響—	○川合　悟 渡邉　拓人 小原　宏基	帝塚山大学心理学部心理学科 帝塚山大学大学院心理科学研究科 帝塚山大学大学院心理科学研究科 帝塚山大学大学院心理科学研究科	87
C02	尺度信頼性係数の信頼区間の被覆確率 —連続変数データによる検討—	○服部　環	法政大学現代福祉学部	88

認知・感情

C03	商品の選択と購買に関わる応用心理学的研究（1） —Product Placement の効果の検討—	○Penwannakul Yuwadee 坂井　信之	東北大学文学研究科 東北大学文学研究科	89
C04	商品の選択と購買に関わる応用心理学的研究（2） —「限定」ラベルが商品の魅力度評価に及ぼす影響—	○坂井　信之 Penwannakul Yuwadee	東北大学文学研究科 東北大学文学研究科	90
C05	くすぐったさの感覚が異性との会話時の距離に及ぼす影響	○岡村　靖人	甲子園大学大学院心理学研究科	91
C06	高齢者の交通場面における注意機能	○小菅　英恵 佐藤　七瀬 熊谷　恵子	筑波大学大学院 筑波大学大学院 筑波大学	92
C07	身体満足感と身体可変性との関連	○大村　美菜子 沢宮　容子 小島　弥生	東京福祉大学学生相談室 筑波大学大学院人間系 埼玉学園大学人間学部	93

発達・教育

C08	記憶術の習得過程に関する事例研究	○藤田　勉	長野県短期大学幼児教育学科	94

ポスター発表

C09	成長感と自尊感情および自己意識との関連	○佐藤　舞	早稲田大学大学院文学研究科	95
C10	大学生の食事マナーと過去の食習慣等との関連 —心的特性を含めた分析—	○亀岡　聖朗	桐生大学医療保健学部	96
C11	小学校内での負傷予防を目指した安全教育の有効性検証 —校内版「ひなどり」の有効性評価—	○中井　宏 岡　真裕美 臼井　伸之介 森泉　慎吾	東海学院大学人間関係学部 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科 大阪大学大学院人間科学研究科	97
C12	机上名札提示による授業中の私語抑制効果に関する考察	○濱　保久	北星学園大学文学部心理・応用コミュニケーション学科	98

人格

C13	首尾一貫感覚の3要素の組み合わせに関する探索的研究 ～友人関係態度、ストレス・コーピングと日常いらだちとの関係から～	○銅直　優子	流通科学大学人間社会学部人間社会学科	99
C14	姿勢に対する評価および意識とQOL —成人男女を対象に—	○鈴木　公啓	東京未来大学	100
C15	主観的ウェルビーイングの測度に関する研究（10）	○角野　善司	高崎健康福祉大学人間発達学部	101

臨床・相談

C16	学校コミュニティにおける学校マネジメントシステムの開発に関する研究 —A中学校においての介入実践的研究　生徒を対象に—	○山口　豊一	跡見学園女子大学文学部臨床心理学科	102
C17	ケース引き継ぎのスキーマに関するPAC分析（5） —学校臨床における前任者としての事例から—	○佐藤　佑貴 内藤　哲雄	福島学院大学 福島学院大学	103

社会・文化

C18 新たな援助規範意識尺度作成の試み — ○山本　陽一 — 筑波大学大学院人間総合科学研究科 — 104

C19 メイク顔刺激の作成と妥当性の検討 — ○九島　紀子 — 立正大学大学院心理学研究科 — 105
上瀬　由美子 — 立正大学

C20 謝罪による信頼回復
—逆転効果を巡る検討— — ○渥美　惠美 — 東北福祉大学健康科学部 — 106
大渕　憲一 — 放送大学宮城学習センター

C21 趣味への熱中と受動的幸福感
—オタクの幸福感の検討— — ○山岡　重行 — 聖徳大学心理学科 — 107

C22 日中大学生の交友関係の実態に関する実証的比較分析 — ○施　桂栄 — 関東学院大学人間共生学部
大原記念労働科学研究所 — 108

C23 高齢の保育・教育者の役割の PAC 分析 — ○午来　和子 — 福島学院大学大学院心理学研究科 — 109
齋藤　厚子 — 福島学院大学大学院心理学研究科
佐藤　大輔 — 福島学院大学大学院心理学研究科
内藤　哲雄 — 福島学院大学大学院心理学研究科

C24 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討（1）
—対象別の選択理由の特徴— — ○西村　太志 — 広島国際大学心理学部 — 110
古谷　嘉一郎 — 北海学園大学経営学部

C25 子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討（2）
—自尊心と一般的信頼が代理人選択に及ぼす影響— — ○古谷　嘉一郎 — 北海学園大学経営学部 — 111
西村　太志 — 北海学園大学経営学部
広島国際大学心理学部

産業・職業

C26 リスク受容経験とベネフィット認知・リスク受容との関係 — ○森泉　慎吾 — 大阪大学大学院人間科学研究科 — 112
臼井　伸之介 — 大阪大学大学院人間科学研究科

C27 ヒューマンファクター教育における効果の持続性 — ○畑岡　真紀子 — 西日本旅客鉄道株式会社安全研究所 — 113
和田　一成 — 西日本旅客鉄道株式会社安全研究所

C28 商品選択における文脈効果
—3 選択肢場面と 4 選択肢場面の比較—
○蜂屋　真　流通科学大学人間社会学部　114

C29 組織での安全作業に関連する性格特性についての研究
○稲葉　緑　JR 東日本研究開発センター　安全研究所　115
楠神　健　JR 東日本研究開発センター　安全研究所

交通

C30 事故発生時の責任の予測と道路横断意図の関係は横断者の年齢で異なる
○紀ノ定　保礼　大阪大学大学院人間科学研究科　116

C31 高齢ドライバーの認知機能と運転行動の関連
○中村　行宏　帝塚山大学大学院心理科学研究科　117
蓮花　一己　帝塚山大学心理学部
多田　昌裕　近畿大学理工学部

C32 視覚刺激の動態提示による識閾の低下
歩行者事故抑止への新しい着想（仮説）
○長塚　康弘　新潟大学　118

看護

C33 看護学生のレジリエンスからみたメンタルサポートのあり方
○中本　明世　千里金蘭大学看護学部　119
金沢大学大学院医薬保健学総合研究科
近藤　純子　千里金蘭大学看護学部

C34 看護学臨地実習で学習の停滞を経験した学生と学生の指導に困難を感じる教師の PAC 分析
○堀　良子　北里大学看護学部　120

C35 基礎看護学実習における社会人学生の特徴
—学生の満足度調査—
○武士　由美　甲南女子大学看護学研究科　121
阿児　馨　常盤大学看護学部
國宗　多恵　甲南女子大学心理学部

C36 看護学生（1 年次と 2 年次）の医療安全管理意識の比較
○蒲生　澄美子　埼玉医科大学短期大学看護学科　122
所　ミヨ子　埼玉医科大学短期大学看護学科
関口　恵子　埼玉医科大学短期大学看護学科
宮﨑　素子　埼玉医科大学短期大学看護学科
今野　葉月　埼玉医科大学短期大学看護学科
小池　啓子　埼玉医科大学短期大学看護学科
天野　佑美　埼玉医科大学短期大学看護学科

特 別 講 演

大会委員会企画連続講演

自主企画ワークショップ

学 会 研 修 会

Well-beingを目指すコミュニケーション研究

講演者：大坊郁夫（東京未来大学）

人と人を結ぶために欠かせないコミュニケーションは空気みたいなものである。自分の個性を築き、社会的な帰属性を得るのもコミュニケーションすることによってのみ可能である。

相互の意見を交える場合の言葉の用い方は論理的、意識的になされるものの、日常的な多くの場面では、コミュニケーションしていること自体に気づいていないことも多い。いわゆる非言語的コミュニケーションにその例を多く見ることができる。しかし、暗黙裡に行っている行動にこそ、当該者の本音が表れやすく、多くの規則性を知ることができる。これまでのコミュニケーション研究において多数の規則性が明らかになってきている。

さらに、コミュニケーション・メディアの革新によって、コミュニケーションの方法の変化のみならず、チャネルの持つ機能自体も変化しつつある。加えて、コミュニケーションは多くのチャネルによって構成されており、個々の持つ機能と総体的な働きを勘案する必要がある。

コミュニケーションの目的は、自分のメッセージを正確に伝え、相手のメッセージを過不足なく受け取り、互いに「分かりあう」、「満足できる」関係を築くこと、そして、その関係を拡張し、自他の違いを認めつつも、住みやすい社会を維持していくことであろう。これは、換言するならば、個人のwell-beingの向上を目指しつつ、同時に社会のwell-beingを目指すことに外ならない（両者は背反的に捉えられがちだが、個人は社会に含まれ、社会は個人によって成り立つので、本来は背反的ではない）。コミュニケーション研究においては、メディア環境を勘案しつつ、個人の行動と対人関係ひいては社会の有り様を同時に考える必要がある。

このような視点を踏まえて、以下の諸点について述べたい。

1. コミュニケーションの機能を総合的に捉える
2. コミュニケーション・チャネルを複合的に扱う
3. 場を活性化するコミュニケーション行動
4. コミュニケーション・スキルを向上させる研究
5. well-beingな社会を目指すためのコミュニケーション研究

【大会委員会企画連続講演】9月1日（木）13:10-15:10　大講義室
（趣旨）

シミュレーションが持つエラー防止と技術トレーニングへの可能性

講演者：深澤伸幸（東京富士大学）
講演者：中村惠子（札幌市立大学）
司会者：山本勝則（札幌市立大学）

企画の趣旨

応用心理学は、人の認知および行動と、現実社会で生起する事象との関連を扱うことが多い学問分野です。

生起した事象を解明するためには情報収集と分析が行われますが、原因や影響要因を明らかにするために、シミュレーションが用いられることがあります。出来事をシミュレーションで再現することは、事象の解明の有力な手段です。そして、その後の対策を検討するためにも役立ちます。　一方、シミュレーションは、今後生起する事象を想定して、そこで人が行うことを求められる行動を身に付ける訓練に用いられることもあります。将来に向けた技術トレーニングとしてのシミュレーションは、必要な技術を身に付けるための強力な手段です。そしてそれと共に、直面することが予想される状況に取り組むための、心準備としても役立ちます。

このような性質を有するシミュレーションは、昨今、技術開発、リスク管理、技術トレーニングなど様々な分野で用いられています。この連続講演では、シミュレーション研究とシミュレーション教育に詳しい、二人の先生をお迎えしてお話をしていただくことにしました。

深澤伸幸先生には、事故とヒューマンエラーとの関連を解明するために、シミュレーションを活用する方法についてお話いただきます。

中村惠子先生には、看護教育・看護継続教育場面での技術トレーニングへのシミュレーションの活用についてお話いただきます。

技術開発、リスク管理、技術トレーニングなどの実践的課題に取り組むために、そこで生じている認知と行動の分析と行動変容を目的としたシミュレーションの活用の可能性を、実践例を通して検討したいと思います。

シミュレーションは、シミュレートされる現実との関係では、仮想現実です。しかし、現代社会は、デジタル化の進展に伴って、あらゆる分野でバーチャルな世界が優勢になりつつあります。特に、札幌は “初音ミク” 発祥の地と言われ、仮想現実が、現実世界で市民権を得た場所です。リアルとバーチャルを繋ぐシミュレーションについて、応用心理面からの可能性を語るのにふさわしい場であると思います。

産業場面で生じるエラー行動とシミュレーション

講演者：深澤伸幸（東京富士大学）

〔以下講演の要旨〕

１．はじめに（行動分析や行動の変容にシミュレーションを活用する利点）

産業場面において、作業行動の分析や、各種の学習に伴う行動の変容を目指す人文・社会科学研究に、シミュレーション（仮想現実）技法を援用することには次の点で有効である。何故ならば、人が産業場面で行っている様々な行動の根本には時間の流れ（文脈）が強く働いているためである。具体的に述べれば、時々刻々と移り変わる外部環境の変化に応じ、人は絶えず知覚や認知を働かせ、環境が我々に示す事態や状況が内包している意味に関して予測や判断を行い、その場に応じた適切な行動を取り続けているためである。

ヴントに始まるとされる現代心理学では、主に心理学実験の手法が採用されている。その多くは室内における実験という形式で行われており、この手法もある意味でのシミュレーション技法と考えることができる。しかしながら通常の心理学実験においては、解明すべき要因を一つないし二つと制限しており、限定された条件の下で明快な結果を入手することができる一方で、より広く人間行動に適応する際には、実験結果をそのままの形で現実に当てはめることには難しい面もある。

そこで、日常場面における人間行動の仕組みへの理解をより深めることに加え、ハード面やソフト面での有効な対策を提案することが可能と考えられる、シミュレーション研究が今日強く求められてきている。つまり、心理学実験の範疇に入るものの、時間の流れを加味したシミュレーション場面での作業行動の研究を通じ、たとえば作業場面で生じるヒューマンエラー行動の発生過程を明らかにすることが可能である。

本講演では、時間の流れ、つまり場面の推移に関わる文脈を発生させる方法で行われた２つの異なったタイプの研究を紹介する。

○　コンピュータで制御されたシミュレータ装置を用いた研究

○　危険感受性訓練を用いた脳内コンピュータの活用研究（職場安全風土醸成研究）

２．シミュレータ装置を用いたヒューマンエラーの発生過程の記述・分析研究

作業場面において発生するヒューマンエラー行動（人的過誤）を記述・分析することを目指した、シミュレーション研究を紹介する（深澤 2014）。研究概要は省略するが、本研究ではCGIを通じて被験者に提示される列車運転時の景観の中で、被験者は通常の列車運転作業に近い模擬作業を行った。使用したシミュレータは、O 電鉄から営業線の路線図を拝借し、この情報をコンピュータに組み込み、景観も路線の情景と対応するようにCGI化された。本講演では、３つのエラー行動の発生過程を報告する。

２．１．出発信号の誤認事例

本研究は、１日４時間（午前２時間、昼食休憩１時間、午後２時間）で、２日間の事前研

修に加え、5 日間の連続実験（実験開始 2 日間の習熟実験、その後の 3 日間のヒューマンエラー誘発実験）から構成され、被験者は事前に模擬運転中は「指差し喚呼」を行うようにインストラクションを受けていた。信号誤認は実験開始 3 日目の午前に発生した。被験者 A は、常習的に指差し喚呼を行わないという違反行動を取っていたが、他の 4 名の被験者はいずれも指差し喚呼を実践しており、列車を誤発進させることはなかった。

2．2．大幅な停止位置不良事例

5 名の被験者の内でも最も安定し、ほとんど停止位置不良を起こさなかった被験者 B は、模擬運転にも慣れてきた習熟実験 2 日目の午後に、停止位置を 100m 以上も行き過ぎるという事例を引き起こした。サーカディアン・リズムからも予測されるように、午後の微睡の時間帯と呼ばれる 14:30 に、大幅な停止位置不良事例を引き起こした。模擬運転として行われたすべてのパフォーマンス、脳波の含有率を検討したところ、ブレーキを入れるあたりで θ 波有意となり、ブレーキ操作が行われなかった。その後 α 波が一時的に優位となった後、β 波が急速に優位となり、行う必要がない加速行動を取った。結果として通常の運転曲線とは全く異なった曲線が示され、大幅な停止位置の不良が発生した。

2．3．驚愕に基づく作業手順の省略事例

被験者 C は、習熟も早く安定した模擬運転を行っていた。駅構内へと進行していく中で、安心しきっていた時に突然 ATS が起動し、運転台にベルが鳴り響いた。この事態に直面した C は驚愕動転し、鳴動している ATS に手を伸ばしてこれを解除した。これにより鳴動は止み、その後 C は停止位置まで列車を運転し、所定の停止位置に停止した。O 電鉄のシステムでは、列車が駅を通過することを防ぐために駅中央からは 15 ㎞／h 以下の進行となっており、事前研修済みであった。ATS 解除後は速やかに再設定の手続きを取ることが必要となるが、驚愕などの情動が起こると、目先の対応により、再設定の手続きが省略された。

3．危険感受性訓練を用いた脳内コンピュータ活用研究（職場安全風土醸成研究）

本研究では、実際の列車運転場面を撮影した写真を教材としている。きわめて原始的なシミュレーション手続きであるが、静止画の観察を通じ、その場面がその後どのような方向に推移するのか、そこで各人はどのような行動を取るべきかを、脳内コンピュータを働かせて考えさせる手続きが危険感受性訓練である（深澤、2014）。訓練参加者は各人の知覚・認知のあり方や、潜在する危険源に気づいていくことが示された。

4．まとめ

人文・社会科学がシミュレーション技法を援用する場合、最先端のシミュレーション技法を目指すのではなく、文字通り「模擬作業場面」を設定することが重要である。その際、この手続きの中に時間の流れやその流れに伴って生じる外部環境の変化といった文脈を提示、あるいはこの文脈を各人に意識させること、気づかせることが重要である。

引用文献：

深澤伸幸　ヒューマンエラーの心理学入門、国際文献社、2014

看護教育・継続教育とシミュレーション

講演者：中村惠子（札幌市立大学）

医療技術の高度化や患者の高齢化、社会構造の多様化・複雑化などに伴って、療養生活支援の専門職としての看護師に対する社会の期待は大きい。また、医療安全や倫理的問題に対して社会の意識が高まっている現在、専門職の継続教育は重要な課題であり、従来型の OJT（on the job training）による教育のみでは困難である。特に看護職は、患者に侵襲のある高度な医療行為や複雑な患者心理・家族心理があり、「まずはやってみる」ということでは満足や安心感が得られる看護実践にはなり得ない。さらに、専門的知識や技術も複雑かつ膨大になっており、医療行為の難易度は高く複雑化している。

その対策として、可能な限り臨床の現場に近い状況が疑似体験（仮想現実）できる、シミュレーション教育が用いられている。シミュレーション教育の場は、学習者が「失敗しても患者へ影響することがなく安全に練習できる」ようになり、繰り返し学習することが可能となった。最近では、模擬患者を活用したより現実性のある演習や ICT を用いた e-Learning による学習、精密で精巧な模型などが盛んにシミュレーション教育に導入されている。

今回の講演では、シミュレーションの基本構造を踏まえながら、看護継続教育（専門職として教育）に着目したシミュレーション教育の現状と可能性について述べる。同時に、本大会のテーマにもなっている「心理」に触れる予定であり、参加者の皆さまの参考になれば幸いである。

1. シミュレーションと医療界
2. 看護教育・継続教育について
3. シミュレーション教育を支える教育論
4. シミュレーションの基本構造
5. シミュレーションの利点
6. シミュレーションが越えられない壁（限界）
7. 看護継続教育におけるシミュレーション教育の現状と可能性
8. シミュレーション教育で「心理」を学べるか？

【自主企画 WS1】 9月1日（木）9:30-10:30　講義室４

精神看護シミュレーショントレーニング

～学外実習に臨む学生を対象として～

企画者：戸田岳志（九州看護福祉大学）

司会者：緒方浩志（九州看護福祉大学）

キーワード：シミュレーション教育、模擬患者（SP）、看護学生

【企画趣旨】

近年、わが国において、医療の高度化や多様化に対応するため医療技術の向上を目的に、または新人教育のひとつのトレーニングとしてシミュレーション教育が導入されている。看護教育においても、看護実践能力の育成・向上を目的にシミュレーションを取り入れた教育が活発に行われている。

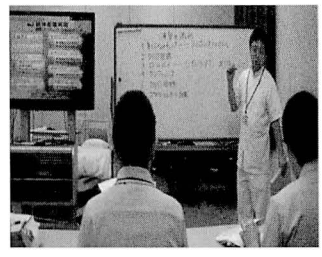
しかし、精神看護学教育においては、シミュレーターの開発が困難であることや看護技術が状況依存的であり評価が困難なことなどにより、導入が遅れている。そのような状況の中で、米国等では模擬患者（Simulated Patient＝SP）を導入したシミュレーション教育やシミュレーターを用いた教育などが展開されてきている（山本ら　2013）。

私立看護系大学である当大学において、統合カリキュラム導入後、三年次の臨地実習に臨む前の位置づけとして、看護統合演習Ⅰという科目が開始された。この科目は、6領域（小児・成人・老年・母性・精神・在宅）での演習を集中的に取り組む授業となっており＜表1＞、対象者の状況に応じて必要な援助を判断し実施することで、看護に必要な実践力を学ぶことを目的にしている。精神看護学では、講義（座学）で学んだ知識をリアリティのある演習にすることでより高い学習効果を期待し、模擬患者（SP）を用いたシミュレーション教育を行っている。

1．実習室ごとのグループの動き　　＜表1＞

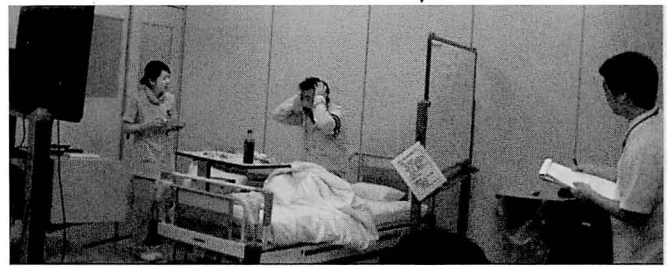
			教室	424教室	基礎看護実習室	基礎看護自習室	在宅看護実習室	541・542 546・547 演習室	第2看護実習室
			領域（bed数）	小児(8)	成人(8)	老年	在宅(4)	精神(4)	母性
4月7日	木	1	演習	B	D	E		C	A
		2							
		3		D	B	A	E		C
		4							
4月8日	金	1	演習	C	A	D	B	E	
		2							
		3			E	C	A	D	B
		4							
4月11日	月	1	演習	A	C		D	B	E
		2							
		3		E		B	C	A	D
		4							

模擬患者（SP）を用いたシミュレーション教育を行い始め5年が経過した。その間、事例やSPの選定、教育、評価など試行錯誤しながら現在の形になった。

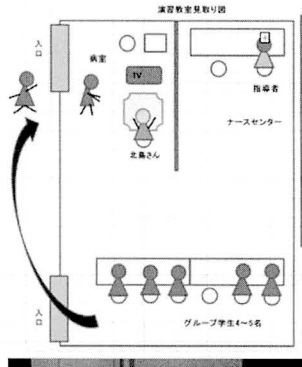


←オリエンテーションと流れについて説明

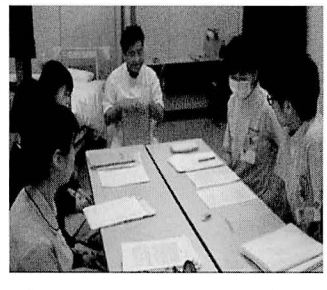
実際の演習風景



今回のワークショップにおいて、その一部を紹介させていただく。これからも、看護実践能力の育成・向上のためには改善していかなければならないことがあると考えており、精神看護におけるシミュレーション教育について、参加者から意見やアドバイスをいただきたい。



← 1グループ5名程度で、順次模擬患者相手に演習を行っていく。終了後、全員でカンファレンスを行い、それぞれの気づきや思いについてディスカッションし学びを深める。



← 他領域と比べて患者像をイメージすることが難しく、演習では患者役と学生の間で想いのズレが生じたり、非現実的な訴えに対し対応に戸惑う場面も多かった。カンファレンスで意見を出し合うことで“患者に関心を寄せる”ことの重要性や感情に焦点を当てた介入方法などの学びに繋がっていた。

【自主企画 WS2】 9月1日（木）15:20-16:20　講義室４

気持ち良い体験をしよう～こころに響く看護師のマッサージ

○大野夏代、山本勝則　（札幌市立大学看護学部）
山本礼美子　（看護師）
キーワード：マッサージ，「気持ち良い」，看護

【企画の趣旨】

WHO 憲章の前文の中で、「健康」とは、「病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。」と定義された（日本 WHO 協会訳）。この定義からは、こころと身体の健康は等しく大切であると読むことができる。

私たちの日常的な体験においても、こころと身体は深く関係があり、気持ちが病んでいるときには身体も不調になったり、また逆に、身体の病気があるとき気持ちも落ち込んだりする。

ヴァージニア・ヘンダーソンが提唱した 14 項目の人間の基本的ニードの中には、飲食や排泄などの主に身体的ニードの他に、「自分の気持ちを思いのまま表現したい」「信念に従って生きたい」「感動や成長、そして自己実現を目指したい」など「こころ」に関連するニードが示され、人間を全体として視るとき、こころと身体の両方を観察する必要を知ることができる（ヘンダーソン：湯槇訳，２００６）。

看護においてはまさに、「こころを通して身体を整える」また「身体を通してこころを整える」という考え方と技術がある。数多い医療職の中でも、これ等の技術を有するのは看護師であると思われる。

本自主運営ワークショップでは、「身体への働きかけ（マッサージ）によりこころを響かせ気持ちの良い状態」を作り出す。「こころに響く」とは、ここでは、皮膚に対して行ったマッサージの刺激が心地よくこころに伝わり身体全体に影響する様子を表すこととする。

【話題提供】

◆「気持ち良い状態」と心身の健康の関係　大野夏代

中範囲看護理論であるコンフォート理論では、「コンフォートとは、『緩和、安心、超越』に対するニードが、経験の 4 つのコンテクスト（身体的、サイコスピリット的、社会的、環境的）において満たされていることにより、自分が強められているという即時的な経験である」と定義される。コンフォートが高められると病者は健康を希求する行動に同意し、健康に望ましい行動を、より行うことができる。それによりさらにコンフォートを高め深めることができる。このコンフォートの影響は看護師にも表れることが体験的に知られており、コンフォートを提供する過程で看護師は、創造性と満足度を促進し、看護師は特定の機関に満足する。それがさらに機関の存続と繁栄を促進する。（コルカバ, 2008）

このようにコンフォートな状態は、健康を改善することが知られる。

◆患者を対象とするマッサージ活動の実際　山本礼美子

話題提供者ら看護師有志は、気持ち良い時間の提供を目的としたマッサージを入院患者を対象に行っている。週に 1 度、総合病院の婦人科病棟を訪問し、軽擦法を中心に実施する。入院患者にとっても負担にならない実施時間を検討し、患者一人あたり 15 分間とした。病棟看護師と連携し、全身状態や部位がマッサージに適した状態であることを確認する。患者が希望する部位を希望の姿勢で行うため、仰向けのまま、背中のマッサージをあえてすることもある。これまでに 500 件の実績がある。鍼灸指圧マッサージ師で看護師であるアドバイザーを確保し、技術的な相談ができるような体制にしている。実施者 3 名で体験を共有し、技術の向上を目指すため、定期的に練習会を開催している。

患者の反応を紹介する。マッサージによる患者の発言は、例えば以下のとおりである。「気持ちがよい」「楽になる」「触っているだけのマッサージなのに後までですごくいいんだよね」「温かい」「エネルギーをもらっているような気がします」

客観的な患者の状態の変化としては、呼吸数の減少、呼吸の深化、末梢体温の上昇、顔色の改善、表情が明るくなる、寝てしまう、などである。

マッサージの実施を繰り返し希望される方も多く、患者に受け入れられていることを感じる。

マッサージは患者のために行っているが、実践を継続する中で、実施者に対する副次的効果もあることにも気づいた。マッサージを行うことにより、看護師もまた元気を得るということである。このことは、仕事に対する動機づけになり、手厚いケア、こころのこもったケアに繋がり、仕事満足度の上昇が期待される。さらには近年問題となっている、中堅看護師の離職を防止する一助になる可能性もあると考える。

◆参加者同士のマッサージ体験　大野夏代

身体へのアプローチ（マッサージ）により心を整え、「気持ち良い状態」を作る。身体内部の感覚に注意を向け、それらを丁寧に受け取り、「気持ち良さ」を吟味する。デモンストレーションの後、ふたり一組になり、うつぶせになり背部のマッサージを行う。

１．　基本手技「軽擦法」「圧迫法」

軽擦法は、どのような対象者に対しても、「気持ち良さ」を安全に提供できる手技である。

２．マッサージの三原則

「垂直の法則」「持続の法則」「集中の法則」の 3 つを、マッサージの 3 原則という。相手と呼吸を合わせ、こころをこめて、ゆっくりマッサージする。

こころに響く技術の素晴らしさを、味わってください。

【文献】

キャサリン・コルカバ（太田喜久子監訳）　2008　コルカバコンフォート理論―理論の開発過程と実践への適用　医学書院
小板橋喜久代・荒川唱子　2013　リラクセーション法入門　日本看護協会出版会
日本 WHO 協会　健康の定義について　2016 年 6 月 8 日閲覧
http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html
ヴァージニア・ヘンダーソン（湯槇ます監訳）　2006　看護の基本となるもの　日本看護協会出版会

（おおのなつよ・やまもとかつのり・やまもとれみこ）

【自主企画 WS3】 9月2日（金）9:30-10:30　講義室４

治療的・教育的な価値を高める引き継ぎとするために

―― セラピストは何を引き継ぎ、何を受け取るべきか ――

企画・司会：佐藤佑貴　（福島学院大学福祉学部）
話題提供者：渡辺智之　（目白大学心理カウンセリングセンター）
内海裕里花（福島学院大学大学院心理学研究科）
佐藤佑貴　（福島学院大学福祉学部）
指定討論者：内藤哲雄　（福島学院大学福祉学部）
【キーワード】心理療法，引き継ぎ，セラピューティック

【企画の趣旨】

ケース担当者が都合により治療継続できなくなるとき、引き継ぎという事態が生じる。引き継ぎは別れと出会いのプロセスであるが、そのことがクライエントにとって治療上の害とならず、成長の材料となるならば、引き継ぎの意味がさらに高まるものと考える。

本企画では、何を引き継ぎ、何を受け取るのかという点について整理し、引き継ぎの価値を高めるディスカッションの場としたい。

【話題提供】

■渡辺智之「事例から引き継ぎについて考える」

心理療法において引き継ぎが行われるとき、クライエントは前任セラピストと別れ、後任セラピストと出会う。そのプロセスの中でクライエントは何を体験し前任から後任には何が引き継がれるのだろうか。セラピストの都合による引き継ぎについて２つ事例から検討する（事例については当日報告する）。

前任セラピストはクライエント同様悲しみや寂しさを味わうこととなる。また、自己都合で引き継ぎになってしまったことに対する申し訳なさや罪悪感を持つ。後任セラピストとしては、通常の心理療法と比べ、ある種のやりにくさを感じる。その”やりにくさ”はクライエントを通して前任のセラピストの影を見るからであろう。それは時にプレッシャーとなったり、」時には治療者としての万能感をくすぐることにもなる。

クライエントの年齢やそれまでの治療期間にもよるが、引き継ぎが必要な事態が生じた場合、私は一旦、その心理療法を「閉じる」のがよいのではないかと考える。終結する方向でクライエントと話し合うべきであるように思う。セラピストの都合による終結は、本来あるべき終結の形ではない。しかし、安易に「引き継ぎ」という選択は避けるべきである。クライエントとセラピストには非常にパーソナルな関係性が存在しており、容易に他者に交代できるものではない。別れに伴い生じる感情に向き合い、まずはお互いが十分に味わい検討する作業が必要である。対象喪失から生じる感情を整理する mourning work を行わなければならない。その過程で継続して心理療法が必要か見えてくるのではないだろうか。

■内海裕里花「動物介在療法にみる引き継ぎ」

私は、精神科クリニックで動物介在福祉士として勤務している。近年注目されている治療法の中に「Animal Assisted Therapy（動物介在療法）」があるが、通常の心理療法の中に犬を介在させる方法によってクライアントとの関係性促進、社会的スキルトレーニングなどの効果を感じ、用いている。このような立場におけるカウンセリングの「引き継ぎ」という問題に対して、以下のような 3 つの視点から、話したい。1 つめは、犬中心の関係性から治療者中心の関係性の転換時における犬から人への引き継ぎについて、2 つ目はクライエントの状況によって犬のタイプを変える必要がある、もしくは何らかの事情によって犬を変えざるを得ない時の犬から別の犬への引き継ぎ（これは人から人への引き継ぎとはまた違った特徴を持つと考えている）について、3 つめは私と犬という関係性から他の治療者（＋犬？）への引き継ぎが必要な場合についてである（このときには治療者のみの引き継ぎのみならず、犬が介在することによって生じていた効果も引き継ぐ必要がある）。いずれにおいても、治療の引き継ぎという本シンポジウムでは特異な視点であるが、人から人への引き継ぎにおける重要な視点を考える上でもまた、両者を比較し、示唆を得たい。

■佐藤佑貴「PAC 分析でみる引き継ぎにおけるセラピストの体験」

PAC分析とは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）は、指定討論者の内藤哲雄が開発した研究手法で、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」である。今回はこの方法による、セラピストの引き継ぎの体験に関する研究について報告する。

初学者および中堅セラピストを対象に実施したが、両者とも引き継ぎにあたり「申し訳なさ」を感じ、クライエントの今後の成長を期待している点は共通している。しかし、初学者は情緒的揺れ動きへの項目とクライエントの今後への期待がイメージの中心をなしており、それを支える専門的視点のイメージが非常に少なく、重要度も低くなっていることが特徴で、中堅セラピストとの大きな違いであると言えよう。

また、引き継ぎという“別れ”についての捉えも初学者と中堅セラピストでは異なっていると言える。中堅セラピストは「別れが Cl をさらに成長させる」と糧として捉えているのに比べ、初学者のデンドログラムでは“別れ”の体験を踏まえた見通しが出てきていない。このような治療プロセスを意識した態度は、セラピストとしての専門性を支えるものであろう。これは臨床心理士の育成にあたって初学者に教授すべき重要な視点であると考える。

本研究によって、セラピストは担当するクライエントの支援において、どこまで担うことができたのか、これからの課題はどんな点にあるのか、最終的なゴールをどう考えているのかなど中長期的視点の中の自分との関わりについて明確なビジョンを持てる人材を育成することが質の高い臨床心理士養成には欠かせない点であることが示唆された。

（さとう　ゆうき・わたなべ　ともゆき・
うつみ　ゆりか・ないとう　てつお）

【自主企画 WS4】 9月2日（金）13:10-14:10　講義室４

植物の癒し効果を評価する：農業、医療、そして応用心理学からのアプローチ

企画・司会：　木村　友昭　（MOA 健康科学センター）
話題提供者：　水野　百合子（奥熱海療院）
　　中川　祥治　（農業・環境・健康研究所）
　　内田　誠也　（MOA 健康科学センター）
指定討論者：　松本　洸　（日本大学芸術学部）
　　烏帽子田　彰（広島大学医学部）

キーワード：農医連携、園芸療法、癒し、芸術心理学、生理心理学

【企画の趣旨】

2011 年の日本応用心理学会（第 78 回大会、信州大学）において、「自然や植物とのふれあいにおける情操的・心理的効果」というテーマでワークショップを開催した。自然や植物を観察し、ふれあうことが、人間の情動にどのような効果を及ぼすのか、意見交換した。人間に対する効果の計測法として、質問紙による方法が検討されたが、生理的な評価方法についての議論は不十分であった。現場への応用については、中学校での教育と発達障がい児に対する療育の事例が紹介され、応用心理学的な観点からコメントが寄せられた。それから 5 年が経過し、植物を利用した新たな調査研究や、さまざまな活動が行われてきている。

本年のワークショップでは、農業、観光、医療や福祉などの現場における「植物の癒し効果」にフォーカスを当てる。会員と共同研究を行っている他分野・異職種の専門家を招き、植物の癒し効果の評価と現場への応用について、指定討論者、および参加者を交えて意見交換したい。

【話題提供】

◇自然や植物の癒し効果を活用する園芸療法実践の現場から

（水野百合子：奥熱海療院）

園芸療法とは、医療や福祉の領域で支援を必要とする対象者に対し、自然や植物との関わりを通し、心と身体の健康や社会生活における健康の改善、回復を図るものである。

奥熱海療院では、2006 年より園芸療法を実施してきた。対象者の症状やニーズに合わせ、自然を身近に感じる工夫が施された院内や園芸療法専用の庭、また隣接する有機農業の圃場・花苑を利用し、自然を「感じ」、植物を「育てる」・「採る」・「使う」プログラムを実施している。

当プログラムの対象者は、発達障がいを持つお子さん、不登校生徒、精神障がいを持つ成人、さまざまな疾患の回復期、維持期にある患者さん等、障がいや疾患を持つ方から、健康増進を目的とした個人や市民グループなど多岐にわたる。対象者が自然や植物と関わることを通し、視覚・嗅覚・聴覚・触覚・味覚の五感に刺激を受け、この体験が対象者の身体・精神・認知・社会的側面に変化をもたらす。変化とは時にうつ病患者の意欲の高まりとしてあらわれ、問題行動の多いお子さんの優しさや自信となり、一度失われた希望を取り戻し、生きる力に繋がるなど、幅広いものとなる。

本ワークショップでは園芸療法の現場の声として、当院における取り組み事例を紹介し、その特徴や効果、課題等について検討を行う。

◇大規模ヒマワリ畑の景観が人に与える癒し効果

（中川祥治：農業・環境・健康研究所）

大規模ヒマワリ畑を観光資源としている北海道北部の名寄市において、日本大学芸術学部の松本らが開発した日芸版「癒し」評価スケール（以下、癒しスケール）を用い、ヒマワリ畑の景観が人に与える癒し効果を検討した。

調査は平野部に位置する畑 365a（以下、平坦地）と山裾部に位置する畑 266a（以下，傾斜地）で、2012 年 8 月に実施した。畑を鑑賞した観光客に，癒しスケール調査票への回答を依頼し、平坦地で 187 名、傾斜地で 61 名の回答を得た。

いずれの調査地においても、主たる評価項目である『癒し総合得点』は高いレベルを示し、既存の調査における著名な日本庭園群の値と比較しても同等以上であった。そして、ほとんどの回答者が「ある程度癒された」以上の癒しを感じており、種類としては「治療的」な傾向が強かった。『癒し総合得点』と共に測定される下位評価項目の内複数の得点は、平坦地よりも傾斜地で高かったが、その要因は、後者の見通し感が優れていることや、畑の形状が曲線の入った不定形的であることが考えられた。なお、両調査畑の癒しの違いは男性より女性で顕著であった。本調査の知見は、農業と観光と健康が連携したヘルスツーリズムに繋がることが期待される。

◇花や庭園の癒し効果の計測と評価

（内田誠也：MOA 健康科学センター）

自然を眺めることができる入院環境が薬の使用量を減少させるという研究（Ulrich、1984）が報告された。それ以降、花や植物がある環境が人の心理や生理に及ぼす影響について多くの研究が行われている。花や植物は心理的に癒されることから、精神神経、内分泌系、免疫系の関連に基づいて評価する方法が一般的に用いられている。森林によって血圧や唾液コルチゾールの低下（李、2011）、NK 活性の上昇（李、2011）、花によって表情筋の変化（山根、2002）やコルチゾールの低下（大塚、2009）、認知機能向上（望月、2015）等が報告されている。

我々は、癒しの客観的な評価法として肩の硬さを評価する筋硬度計測を注目している。肩の筋硬度計測はストレスと関連があることから、ストレス緩和の簡便な評価法として有効であると推測している。本ワークショップでは、花や自然散策の生理的・心理的な影響を、癒し評価スケール、肩の筋硬度計測、心拍変動等で計測し、解析した。日常生活で花を生けて飾って鑑賞する際、花を生ける満足度が癒しの重要な要素である考え、他人が生けた花との比較も行った。自然散策では新緑の庭園（苔庭）を散策した。その結果、花の鑑賞や自然散策は肩の筋硬度を低下させ、副交感神経活動を活性化させ、生理心理的に癒すことを報告する。

（きむら　ともあき・みずの　ゆりこ・なかがわ　しょうじ・うちだ　せいや・まつもと　こう・えぼしだ　あきら）

研究と実務の融合

― 犯罪者プロファイリングをとおして ―

講師：岩見　広一（北海道警察本部科学捜査研究所専門研究官）

キーワード： 社会的認知，モードⅡ科学，フィールド・ワーク，共同知，ソーシャル・ネットワーク

【はじめに】 犯罪者プロファイリング（offender profiling）は，犯人の検挙を支援するために，犯行現場における犯人の行動を分析し，未知の犯人の人物像を捜査員に提供する手法である（Geberth, 1990）。わが国の2012年におけるこの手法の実施件数は，573件であった（警察庁, 2013）。しかしながら，20数年前まで，わが国の警察でこの手法を詳しく知る者は，ほとんどいなかった。つまり，この手法の研究が開始されてから，実務での実績が認められて一般化するまでの過程は，心理学を実社会に貢献させる過程といえる。また，新規事業を既存業務に持ち込み，組み込もうとする，伝統的価値の変化を目指す試みの一例と捉えることも可能である。

本研修では，わが国における犯罪者プロファイリングの発展の経緯を例として，新たな手法に関する研究を実務に融合し，この手法を新規事業として従来事業の問題解決に必要な手段として，成立させていく過程について，社会心理学等の多領域の視点から解説を試みたい。

【犯罪者プロファイリングの研究手法】 この手法についての組織的研究は，1970年代に米国連邦捜査局（FBI）が開始した。FBIは，連続殺人犯等との精神医学的，臨床心理学的な面接調査による事例分析を経て，犯行行動に対応させた犯人像の類型を見出した（Ressler et al., 1988）。1980年代には，英国の環境心理学者David Canterが，統計分析に基づく手法を実施した。彼は，FBIの手法に強い実証的基盤や理論的枠組みが欠如していると痛烈に批判した。Canterの手法は，過去に発生した事件データを非計量的多次元尺度構成法等の多変量解析を用いて分析し，類似性の高い行動群を見出し、犯罪行動の検討を行った。Canterが発展させた捜査心理学の領域では，行動の類似性が高い犯人群が，類似した特性を持つという前提を相同仮説という（Mokros et al., 2002）。社会心理学の視点では，相同仮説は，行動と属性の共変関係に基づく対応推論理論と類似した概念であり，社会的認知に関する仮説や理論が適用できると考えられる。

【わが国における犯罪者プロファイリングの研究】 わが国で，この手法の組織的研究が開始された1990年代当時，連続幼女殺人事件，地下鉄サリン事件，連続児童殺傷事件などが発生し，実際に刑法犯の認知件数も急増した。わが国では，Canterの手法に倣って，相同仮説を実証しようとする研究が多い。これらは基礎研究に位置づけられ，単変量解析，クロス表分析，多変量解析，ベイジアンネットワーク，ROC分析等による推定精度検証といった統計手法が用いられている（渡辺, 2004; 渡邉ら, 2006; 財津, 2011; 萩野谷, 2016）。ここまでの過程では，警察の心理職による活動が主体である。

【実務の形成過程】 わが国での実務は，2000年に北海道警察において，心理職と警察官の混成3名による専従班が設置されたことで開始した。基礎研究を進めながら，捜査現場に適用できる実務的手法を確立することが求められた。すなわち，心理職による活動だけではなく，他の専門職や捜査員を含めた他分野との協働が不可欠であった。連続事件の実務的手法として，一連事件の情報を集約し，同一犯による事件を推定する事件リンク分析，犯人像の推定，犯人の居住地等の拠点推定，今後の時間的・地理的な犯行予測等の分析手続きが形成されていった（横田ら, 2013）。また，この手法から推定された4W1H情報は，捜査員が犯人の発見，容疑者の割出等に結びつくような捜査手法に活用されるパターンが多かった（岩見, 2006; 2011）。

現場心理学や社会心理学の視点では，実務的手法の開発は，単一の学問領域だけでは完結せず，複数の学範を融合して，実社会の問題を解決しようとするモードⅡ科学，あるいは，心理職以外の職業層との異業種交流といった概念で説明できる。また，実務的手法を確立するための過程は，心理職自ら現場と関わっていくフィールド・ワークといえる。その過程で実務に効果的なパターンを見出し，この手法が捜査に与える影響力を認識し，アクション・リサーチによって，心理職と捜査員という共通言語に乏しい異業種間の共同知の蓄積へと結びついていったと考えられる。

【研究と実務の融合】 実務的手法は，属性推論に関する研究知見を単純に適用して推定するのではなく，実際の犯罪捜査状況を精査し，捜査に活用できる重要な事項を優先して推定される。

社会心理学の立場では，属性推論の処理は2過程モデルで説明できる。統計分析はカテゴリー依存型処理，事例分析はピースミール処理となる。特に，事例分析は，状況要因を考慮し，自動推論や統計分析の単純な適用による係留を，認知資源によって調整する役割を担っている。

また，推定結果を活用するためには，単なる推論結果の提出ではなく，実際の捜査活動に反映させる働きかけが必要であった。文章心理学の観点では，推論結果を記した報告書等は，捜査活動を展開させるための企画書に相当し，読まれる・理解される・採用されるの3原則が満たされる必要がある（齋藤, 2010）。社会心理学の視点では，組織的な捜査に反映させるために，分析者と捜査員の紐帯，さらに捜査員間の紐帯を結ぶソーシャル・ネットワークへ働きかけ，捜査全体を結束させるネットワークとして強化していく配慮が重要となる。

また，研究と実務には，研究知見を実務に適用する場合，実務から研究課題を得る場合といった，Fig. 1に示した双方向の関係性がある。研究では持続性と関与性，柔軟性と自己修正性，微姿勢と全体性といったフィールド・ワークの視点が不可欠である（箕浦, 1999）。実務では問題の同定，状況診断と解決プラン，介入活動，活動結果の評価，その過程での学習結果を介入活動のプランに取り込むといった，アクション・リサーチの視点が重要と考えられる（箕浦, 2009）。

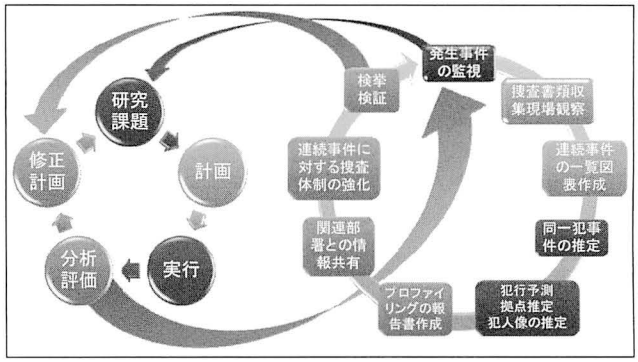


Fig. 1. 研究サイクルと実務サイクルの融合

（いわみ ひろかず）

人間関係と働く人々の well-being

― ソーシャル・キャピタルの視点から ―

○　小野　公一
（亜細亜大学　経営学部）
キーワード：well-being　ソーシャル・キャピタル　ソーシャル・サポート

【はじめに　：　人間関係と well-being の関係】

近年、well-being という言葉がしばしば登場するようになった（応心 82 回大会）。well-being という言葉自体は、安心・安寧というような訳が与えら心理的な側面で言葉のようにも思われているが、働く人々の well-being を働く人々の生活のさまざまな場面・側面における“健康・健全な状態”として考える（小野 2011）と捉えるのならば、経済的・物理的、生理的、社会的、心理的 well-being も存在することになる（小野 2011 第 2 章）。小野（2010）は、先行研究を整理して、心理的 well-being や主観的 well-being が、働く人々の生きがいに近似する概念であると位置づけている。

ハーズバーグ（1964）の動機づけ―衛生要因理論が登場して以来、仕事の中で人間らしく生きるためには、内発的な動機づけに関連する要求を満たすこと、すなわち、マズローの言う自己実現要求を充足することが必要であるとみなされることが多かったように思われる。

しかしながら、近年の働く人々の要求を見ていると、そのような自己実現・成長要求の充足だけでなく、社会への貢献や対人的な接触に対する要求も少なくなく、離職理由を見ると人間関係が、大きな要因として浮かび上がって来る。

また、山下(1998)は、実証研究のデータをもとに、「自立性」や「有能感」で構成される内発的要因だけでなく、外発的要因である「人間関係」もまた、「仕事が楽しい」や「仕事に生きがいを感じる」という項目で構成される「仕事の楽しさ」に強い影響を与えることをパスモデルで示している。

上田（2016）の社会関係資本と対人関係の関係についての文献レビューを要約すると「自己決定理論では，対人関係，自律性，能力という３つの心理的要素を向上，達成することが well-being にとって重要であると説明している。また，人々が主観的に感じる well-being の要素を明らかにした研究では，対人関係や自律性，個人的成長などの充足が重要となることが明らかとなった」とすることができる。

これらのことは、働く人々の心理的な well-being にとって人間関係がきわめて重要であることを示しているように思える。そこで、ここでは、人間関係をソーシャル・キャピタル（以下、引用等によらない時は SC と略す）という視点でとらえ、働く人々の well-being との関係を見ていくことにする。

【ソーシャル・キャピタルとは何か】

「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」という言葉が初めて印刷物に登場するのは 1916 年、学校内の地域センターについての議論である（Cohen. D. &Prusak, L. 2001）、とされているが、その展開が飛躍的になったのは、コールマン（1988）とパットナム（1990）の研究による所が多い。

パットナム（2000）は、社会関係資本が指し示しているのは個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範である、としているが、稲葉陽二と大守隆（2011）は、「平たく言えば，信頼，「情けは人の為ならず」「持ちつ持たれつ」「お互い様」といった互酬性の規範，そして人やグループの間の絆を意味している。」と、SC を紹介している。

この SC 論は、1980 年代後半以降は公共的，連帯的なソーシャル・キャピタル論と，個人主義的，競争的なソーシャル・キャピタル論に分化してそれぞれ発展した〈糸林 2007、Grootaert, C.　et al. 2004〉とされているが、個人にとっての意味を強調したのがコールマンで、パットナムは社会や集団の財とみなす立場であるということができよう。

【ソーシャル・キャピタルのもたらすもの】

SC は、個人と社会・集団の 2 面でとらえられるが、それらに何をもたらすのであろうか。

個人の面については、C. Kadushin（2012）は、　個人レベルの SC は，身体的・精神的健康，あるいは適応や幸福感などの個人の well-being を増進するとしている。相田潤・近藤克則（2014）も well-being との間に関係があるとしている。

健康に関しては、「信頼」が健康と関連している（長谷中崇・髙瀬慎二　2014）や、個人の健康が増進され，長命で生き生きと社会に関わりうる素地となる（池田謙一　2014）との主張をはじめ、多くの研究がそれを主張している。

健康以外では、キャリア発達との関係の論究も多く（Adler, P. S. and Know, Seok-Woo　2002）、とりわけ私的なキャリア発達支援メンタリングとの関係を明示するもの（Baruch, Y. & Bozionelos, N. 2011）もある。

それ以外にも、心理的 well-being の中核をなす幸福との関係についての論究も多い（Baker, W. 2000, Kadushin, C. 2012）。

その一方で、組織の効率や社会の安寧（低い犯罪や、人々の健康など）に多いに貢献するという研究も多い。

【まとめ　ソーシャル・キャピタルと well-being】

SC の重要な側面は、ソーシャル・サポートであり（Kadushin, C.　2012）、ソーシャル・サポートは、住民が日常の問題に対処するために利用する SC の一形態である（Carpiano, R. M.　2008）とされ、両者の関係は非常に強いことが分かる。ソーシャル・サポートの一形態ともいえるメンタリングが、生きがいという働く人々の心理的 well-being に大きな影響を与えることを、小野の数次にわたる質問紙調査は示している。そのような立場に立てば、SC として理解される人間関係は、働く人々の well-being に大きく関与するものと思われる。

今後の研究の課題は、SC に関する現実のデータを伴う研究は、コミュニティや高齢者を対象にした福祉場面でのものが少なくないように思われ、産業・組織心理学の立場では、働く人々に焦点を当てた研究が必要とされているという点にある。また、SC は、個人にも集団・社会にも同時に存在するわけであり、2 つの側面にどのように同時に関係するのかという研究も必要である。

これらについては、できれば、現在進めている質問紙調査による研究のデータをもとに論じていきたい。

（小野公一）

研究発表（ポスター発表）

1日（木）

垂直・水平錯視再考

―Ⅰ.水平線を基線とする錯視量カーブ―

渡邉　拓人[1)]　小原　宏基[1)]　川合　悟[2)]
(1)帝塚山大学大学院心理科学研究科 [2)]帝塚山大学心理学部
キーワード：視知覚，垂直-水平錯視，錯視量

【目的】

今回の研究は、垂直・水平錯視を用いて視覚機構の解明を行うものであり、いずれは全ての錯視に関する要因の究明やより人間に近いロボットアイの開発、そして、心理学教育への応用を目的としたものである。これまでの垂直・水平錯視の研究については、現象面から見ても発生機序に考えても、中心性、直線性、視野差や目の動きなどを要因としている理論が諸説存在する(Künnapas, 1955 , 1957; Schiffman & Thompson, 1975)。その中で、今回の研究では、①対称性、②直線性、③単眼両眼差の 3 つについて検討する。また本発表では Künnapas (1955)の錯視量の結果と本研究との結果を照らし合わせ比べる。

【方法】

実験参加者：大学生および大学院生 12 名(男子 7 名、女子 5 名)が参加した。平均年齢は 22.17（*SD*=2.76）歳であった。

刺激：VisualStudio2012 を用い開発した。開発したソフトウェアは、基準線(以下、基線とする)を 7 等分した位置に被験者の操作できる線(以下、操作線とする)を無作為に表示させた。表示される基線に対し、操作線の長さをゲームのコントローラーのジョイスティックを操作することにより、1(pixel)ごとに変化させ、被験者が基線と操作線の長さが同等であると納得がいく長さまで調整するように指示した。

実験手続き：実験について説明および同意を得た後に実験を行った。実験時のスタイルは、被験者には目線とパソコン画面が直角になるようにパソコン画面の正面から 500(mm)離れた場所に座らせ、椅子および机の高さを調説することで眼の中心窩とパソコン画面上の基線の中心点が直線上になるようように位置を合わせるようにした。実験参加者は、パソコン画面に映る基線を見ながら、ゲームコントローラーを用いて、検定線を調節する。基線の長さと決定線の長さが同等であると判断した場合に、課題終了ボタンを押して、次の課題に進んでもらった。その中で決定線定位置や錯覚方法、単眼複眼は、実験参加者ごとに無彩区で行うことでカウンターバランスをとった。また実験中の視覚への他の刺激をなるべき排除するため、室内を暗室にし、パソコン画面も黒色の板を基線の中央に丸く繰り抜いたもので覆った。

試技数および実験時間：実験参加者に対して、単眼(左右とも)と両眼の 3 条件、基線の長さを 25(mm)・50(mm)・75(mm)の 3 条件、そして決定線位置(左：L、左よりの左中心：LLM 中心よりの左中心：MLM、中心：M、中心より右中心：MRM 右寄りの右中心：MMR、右：R)を 7 条件として、錯視方向を上と下の 2 方向の垂直・水平錯視図について各 1 試行を 2 度(3×3×7×2×2＝計 252 試技)行い評定を求めた。実験時間は実験説明を含め約 60 分(休憩時間 10 分を含む、1 試技 10 秒程度)であった。

【結果・考察】

Künnapas(1955)の実験の結果(図 1)と本研究の結果(図 2)を見比べると、錯視量に違いが見られており、また垂直線位置によっては錯視量が本研究のほうでは正方向にも出ており、Künnapas(1955)の研究とは違う形になっている。また、本実験のデータを細かく見てみると、25mm($F(6, 66)=2.69$, $p<.05$)では L が M の錯視量と同じぐらいあり、LLM、MLM、MRM、MMR では、錯視量が正の方向に錯視が生じていた。50mm($F(6, 66)=2.95$, $p<.05$)では、L と M が錯視量が同じぐらいであり、LLM、MLM、MRM、MMR と R が錯視量が同じぐらいであった。75mm($F(6, 66)=3.36$, $p<.01$)では、L、LLM、MLM、M のに錯視量が多く、MRM、MMR、R は錯視量が多くなかった。全ての長さで、L に比べて R のほうが錯視量が少ないことが分か Künnapas(1955a)研究などで言われている左右対称の形にならなかった。

【引用文献】

Künnapas , T. M. (1955) Influence of Frame size on apparent length of a line., *Journal of Experimental Psychology*, *50*, 168-170.

Künnapas, T. M. (1957) The vertical-horizontal illusion and surrounding field. *Acta Psychologica*, *13*, 35-42.

Schiffman, H. R. & Thompson, J. G.(1975) The role of figure orientation and apparent depth in the perception of the horizontal-vertical illusion. *Perception*, *4*, 79-83.

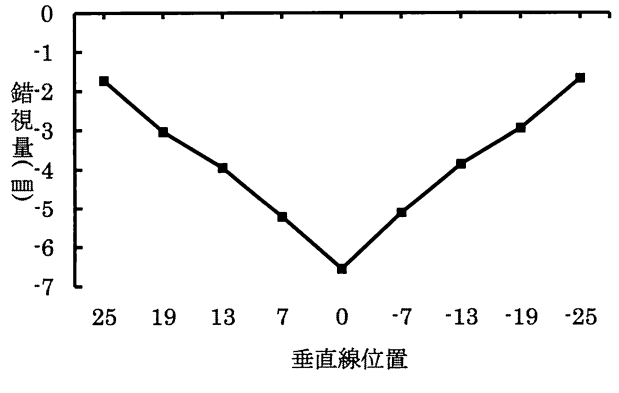


図 1 Künnapas(1955a)の錯視量

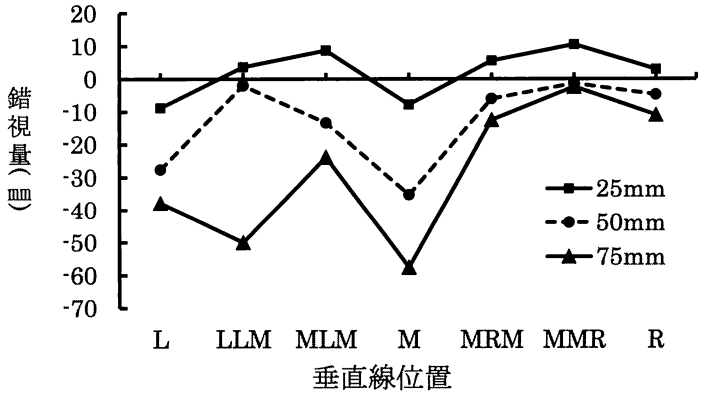


図 2 本実験での錯視量

垂直-水平錯視再考

— Ⅱ．垂直線を基線とする錯視量カーブ—

○小原　宏基[1)]　渡邉　拓人[1)]　川合　悟[1)2)]
([1)]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2)]帝塚山大学心理学部)
キーワード：視知覚，垂直-水平錯視，錯視量

【目的】この研究は，垂直-水平錯視を用いて視覚機構の解明を行うものであり，全ての錯視に関する原因の究明やより人間に近いロボットアイの開発，そして心理学教育への応用を目的としたものである。これまでの垂直-水平錯視の研究については，現象面から見ても発生機序的に考えても，中心性や直線性，視野差，利き目の影響など理論が諸説存在する(Wundt, 1862, 1898; Künnapas, 1955a, 1955b, 1957; Schiffman & Thompson, 1975; Prinzmetal & Gettleman, 1993)。その中で，今回の研究では，①対称性，②直線性，③単眼両眼差，④各錯視方向における錯視量の一致性の4つに絞り，パソコンなどの精密機器を用いた実験により再考することを研究目的とする。

【方法】(1) **被験者**：帝塚山大学の大学生および大学院生男女24名(男性12名，女性12名：平均年齢22.13(*SD*=2.11)歳)が同意の上実験に参加した。

(2) **刺激**:VisualStudio2012を用いて垂直-水平錯視実験刺激用プログラム(図1参照)を開発した。開発したソフトウェアは，基準線(以下，基線とする)を7等分した位置に被験者の操作できる線(以下，操作線とする)を無作為に表示させた。表示される基線に対し，操作線の長さをゲームコントローラーのジョイスティックを操作することにより，1(pixel)ごとに変化させ，被験者が基線と操作線の長さが同等であると納得いく長さまで調整するように求めた。

(3) **実験の手続き**：実験についての説明および同意を得た後に，実験を行った。実験時のスタイルは，被験者には目線とパソコン画面が直角になるようにパソコン画面の正面から500(㎜)離れた場所に座るように求め，椅子および机の高さを調節することで眼の中心窩とパソコン画面上の基線の中心点が直線上になるように位置を合わせるようにした(図2参照)。被験者は，パソコン画面(図1参照)に映る基線を見ながら，ゲームコントローラーを用いて，操作線長を調整する。基線長と操作線長が同等であると判断した場合に，課題終了ボタンを押して，次の課題に進むように求めた。その中で操作線測定位置や錯視方法，単眼両眼は，被験者ごとに無作為に行うことで，それぞれ均衡を保つように行った。また実験中の視覚への他の刺激をなるべく排除するため，室内を暗室にし，パソコン画面も黒色の板を基線の中心に丸く繰り抜いたもので覆った。

(4) **試技数および実験時間**：被験者に対して，単眼(左右とも)と両眼の3条件，基線長を25(㎜)・50(㎜)・75(㎜)の3条件，そして操作線測定位置(上 or 左：-3，上寄りの上中心 or 左寄りの左中心：-2, 中心よりの上中心 or 中心よりの左中心：-1, 中心：0，中心よりの下中心 or 中心よりの右中心：1，下寄りの下中心 or 右寄りの右中心：2，下 or 右：3)を7条件として，錯視方向を⊥型・T型および⊢ 型・⊣ 型の各2方向の垂直-水平錯視図について各1試技を2度(3×3×7×2×2＝計252試技)行い，評定を求める。実験時間は，約60分(休憩時間10分含む，1試技10秒程度)であった。

【結果および考察】①各条件における錯視量の対称性について検討したところ，単眼両眼ともに対称性はみられなかった。次に②直線性については，図3・図4をみても明らかなようにないことがわかった。③単眼両眼差は，各錯視方向と各位置について多重比較すると，⊥型の基線長25(㎜)と75(㎜)の右眼実験時，T型の基線長75(㎜)の両眼実験時，そして⊢ 型の基線長25(㎜)の左眼実験において-3と3の間の平均値の差が5%水準で有意であった。④一致性については，操作線測定位置と錯視方向および利き目ついて，三元配置分散分析を行ったところ，モデル全体では有意差がみられ(F(55, 2968)=23.01, p<.001)，錯視方向・操作線測定位置，利き目において，主効果が有意であった(F(3, 2968) =266.25, F(6, 2968)=26.73, F(1, 2968)=80.33, ps<.001)。以上のことから，垂直-水平錯視は実際に起こるが，V字型(Künnapas, 1957)にはならず，M字型になることが新たにわかった。その理由として1つ考えられるのは，実験環境が暗室であったため，眼の機能の1つである虹彩の影響が実験結果に大きく関わったことが考えられる。そこで，通常の明度下での錯視実験により仮説を検討する必要がある。

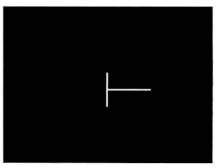


図1. 開発プログラムの実行画面

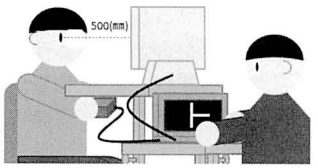


図2. 実験イメージの一例単眼(右)実験時

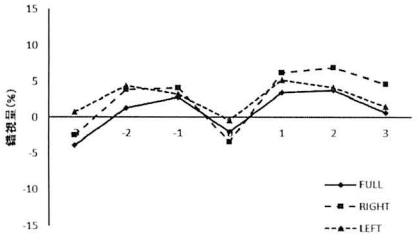


図3. 基線25(㎜)で⊥型の単眼両眼差による錯視量比較

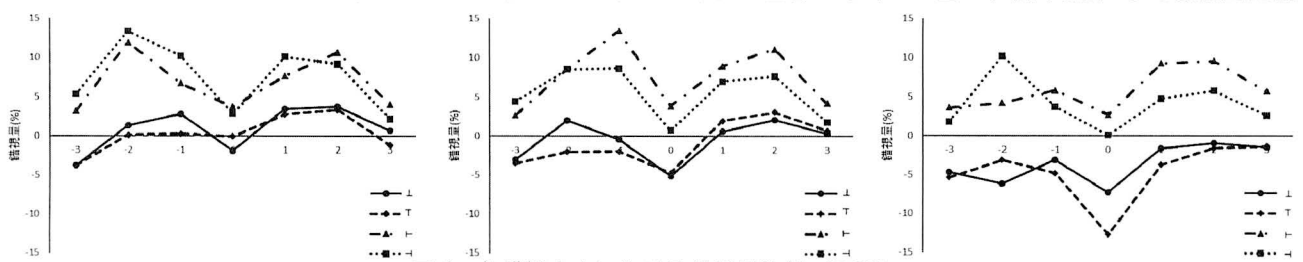


図4. 各錯視方向における錯視量比較（両眼）

(おはら　ひろき・わたなべ　たくと・かわい　さとる)

リスクコミュニケーション場面における信頼の規定因に見透かされ感が与える影響

○静間　健人[1)]　土田昭司[2)]
([1)]関西大学大学院社会安全研究科　[2)]関西大学社会安全学部)
キーワード：リスクコミュニケーション，見透かされ感，信頼

【研究の目的】

近年,リスクコミュニケーション（以下,RC）の成功には,信頼が重要であることが指摘されている。RC 研究では,信頼の規定因として,相手の役割遂行能力である「能力への期待」と誠実さや公正さなど「意図への期待」があることが明らかとされてきた（吉川,1999；中谷内,2012)。RC 場面では,リスクを管理する者とリスク管理を任せる者に立場を分けることができる。本研究では後者に焦点を当てる。現実の RC 場面で後者の者である市民は,不安などの感情をリスク管理者に伝達するであろう。しかし先行研究の多くは,市民がリスク管理者や組織をどのようにとらえているかというものが大半を占める。そこで本研究では,市民を情報を伝える側であるという視点に立ち,情報を伝えた後の市民がリスク管理者に対して抱く信頼について検討する。なお,上記で示した信頼の規定因のほかに親近感もあわせて検討する。

市民が情報伝達者となる場合,その伝達内容が自身の価値観や態度に関するものであれば自己開示研究を援用できると考える。安藤（1980）の研究では,親しくない相手に自己開示をした場合，認知的不協和により相手を肯定的に評価することが明らかにされている。このような結果は,はっきりと伝えていない自身の内面が相手に見透かされている場合（Gilovich et al., 1998）にも表れると考えられる。

以上より,本研究はRC場面での情報伝達者としての市民に注目し,さらにその情報（態度）が不明確に伝達された場合のリスク管理者に対する信頼評価を検討する。また,自己開示が自発的に行われるものであることから,情報が不明確であるが伝えようとする意志があるかで,態度の見透かされ感が信頼評価へ与える影響が異なると考えられる。そのため,伝達しようとする心がけも検討する。

【方法】

実験参加者　大学生 185 名に質問紙を配布し,質問紙実験を行った。回答が得られた調査票の中で,不備があったものを除き 163 名（男性 95 名，女性 68 名，平均年齢 19.8 歳，SD=1.2）を分析に用いた。なお参加者は，想定場面の内容によって次の 3 条件に割り当てられた。自身の態度を伝達しようとする意思がある「心がけ条件」と伝達しようとしない「非心がけ条件」とそのどちらでもない「教示なし条件」を設定した。

想定場面　（1）前提場面：ある地域の行政が市民と議論する機会を設けていることことを示す場面。（2）議論場面：市民から行政へ意見を伝達する場面。

分析に用いた尺度　①態度の見透かされ感，②信頼評価項目（公正さ,誠実さ,親しみやすさ,問題解決能力,相手の意図を読み取る能力,行政からの好意度)。

手続き　授業中に質問紙を配布し,文章を読んでもらうことと注意事項の説明を行った。その後,質問紙実験を開始した。参加者は前提場面を読んだ後に,行政に対する信頼評価を行った。評価後,放置自転車対策場面,エネルギー問題場面,津波対策場面,地震対策場面の順で提示された。なお,各場面で参加者は,場面ごとで対応した態度を持っているが,それを直接行政に伝えることができないと教示された。しかし,各場面で参加者は態度と直接関連しない発言を行っていることが文章内で示されていた。各場面の文章の提示後,発言した内容から行政は参加者の態度を予測できるかを評価させた（見透かされ感)。最後に行政に対する信頼評価項目を測定した。なお,議論場面の文章表現により心がけ条件の操作が行われた。

【結果】

前提場面の提示後に測定した信頼評価項目と議論場面提示後に測定した同項目の差分を算出した。信頼評価項目は 4 つの場面を提示した後で測定されたものであるため,全場面において自身の態度が見透かされていると評価した参加者を「見透かされ群」とし,全場面で見透かされていないと評価した参加者を「非見透かされ群」として群分けを行った。同様の操作を各信頼評価項目に行い,例えば誠実さが最初より最後の方が高い者を「誠実群」とし,低い者を「不誠実群」とした。これらの操作を 3 条件すべてに行った。

見透かされ感と信頼評価項目を各伝達条件でフィッシャーの直接法を用いて分析を行った。その結果，心がけ条件において,態度を見透されていると感じていた人（見透かされ群）は,そうでない人（非見透かされ群）より行政を公正であると評価する割合が有意に高かった（p<.01)。また,非見透かされ群より,見透かされ群において,行政を誠実であると評価する人の割合が有意傾向で高かった（p<.10)。一方,教示なし条件では,能力があると評価している割合が見透かされ群において有意傾向で高かった（p<.10)。しかし,非心がけ条件では,全信頼評価項目で有意な関連が見られなかった（$n.s.$)。

【考察】

本研究では,RC 場面の情報受信者に対する信頼を,自己開示研究の枠組から捉えることができることを明らかにした。

一方,心がけ条件でのみ,見透かされ感と公正さに有意な関連が見られ,それ以外の条件では有意な関連が見られなかった。提示した場面が行政が市民に内緒で問題を解決したり対処したりするのではなく,市民とともに解決しようと議論する場を設けているものであったため,公正さに効果が表れたと考えられる。つまり,認知的不協和により相手を肯定的に評価はするが,それは場面に対応した相手の属性を肯定的に評価していることが示唆された。このことは心がけ条件において,行政の問題解決能力と見透かされ感に関連がなかったことからも上記の説明が妥当であると考えられる。

しかしながら,本研究では，見透かされたかどうかを実験参加者の評価に基づいて分けたため,分析に用いたサンプル数が少なかった。そのため,実験条件によって見透かされ感を操作し十分なサンプル数を確保し,見透かされ感と信頼評価の関連を詳細に検討していく必要がある。

（しずま たけと・つちだ しょうじ）

コートサイエンス　お辞儀の量刑への影響について

― お辞儀の判決への心理的影響 ―

○岩崎章浩[1)]　来田宣幸[2)]　太田智子[3)]

([1)] HERO 法律事務所 [2)] 京都工芸繊維大学 [3)]株式会社中央ビジネスグループ)

キーワード：裁判，量刑，心理，お辞儀

【研究の目的】

裁判における量刑は、主として、犯行態様・被害の大きさ・処罰感情（宥恕の有無）・犯行動機・前科・反省の有無から判断される。上記考慮要素の内、前５者は客観的要素である。

他方、反省の有無の判断は、主観的要素であり専ら裁判官の裁量的判断に委ねられる。本研究は、被告人の法廷における態度（礼儀正しさ）がいかに量刑（反省していると評価されるか）に与えるか（与えないか）を科学的に明らかにすることを目的とするものである。

【方法】

覚醒剤取締法違反事件を対象に、裁判の各場面において、被告人のお辞儀の実施の有無、起立の有無、深さ、角度、回数を観察・記録する。

２段階に分け分析整理する。

第１段階：上記観察・記録を基に、各場面を類型化し、モデルを使用しアンケートを実施し印象評価・感性評価を行う。

第２段階：実際の量刑判断への影響を考察する。特に被告人の態度が反省していると評価されているか着目した。

・対象事件：覚醒剤取締法違反事件

覚醒剤取締法違反事件については、量刑の相場が安定している（初犯：懲役１年６月前後・執行猶予３年～４年に収まることが多い）ことから、お辞儀の量刑の有無を比較的判断しやすいのではないかと考えた。

なお、同種事件の前科が１犯存在する毎に６月ずつ刑が増し、一定数を超えたところで実刑判決が下されることになる。直近３年度のデータ判決の分布は以下の通りである。分布割合はほぼ同値である。

（参考）[1) 2) 3)]

年度	7 年～	5～7年	3～5年	2～3年	1～2年	1年未満	総数
H27	120	78	512	3,972 (1,156)	5,456 (2,970)	509 (437)	10,647
H26	107	99	538	3,806 (1,046)	5,542 (3,051)	441 (366)	10,533
H25	116	94	564	4,000 (1,132)	6,177 (3,395)	458 (387)	11,415

１　薬物犯罪の統計であり、薬物犯罪とは、大麻取締法、麻薬取締法、アヘン法及び麻薬特例法の各違反をいう。

２（　）内は執行猶予数

・観察した場面

① 裁判官入室時（被告人は着席している。）
② 人定質問時（生年月日等を裁判官から尋ねられる場面。座位・起立の２パターンがある。）
③ 罪状認否時（公訴事実の認否を問われる時点。被告人は着席している。）
④ 被告人質問時（弁護人・検察官・裁判官から犯行について尋ねられる場面。証言台で実施される。尋問開始前は起立・尋問中は着席することが多い。）
⑤ 最終陳述時（事件についての意見を述べる場面。証言台の前に立つことが多い。）

・観察方法

傍聴席から、被告人のお辞儀の実施の有無、起立の有無、深さ、角度、回数に分けて考察し記録した。

（参考ケース）

ケース１
前科：無、監督者：無、使用量：0,03g、自白
（お辞儀の有無）
・裁判官入室時（無）
・人定質問時　（無）
・罪状認否時　（着席・小さく）
・被告人質問時（着席・小さく）
・最終陳述時　（無）

ケース２
前科：２犯、監督者：無、使用量：0,15g、自白
（お辞儀の有無）
・裁判官入室時（無）
・人定質問時　（着席・小さく２回）
・罪状認否時　（着席・小さく２回）
・被告人質問時（着席・小さく１回）
・最終陳述時　（起立・大きく１回）

ケース３
前科：７犯、監督者：無、使用量：0,03g、自白
（お辞儀の有無）
・裁判官入室時（無）
・人定質問時　（無）
・罪状認否時　（着席・小さく）
・被告人質問時（着席・小さく）
・最終陳述時　（無）

【結果】

収集対象データの数が集まり次第、印象評価・感性評価を行う。収集対象データの裁判結果を待って、報告を行う。

【考察】

判決文の中で被告人の反省の態度がいかに評価されているかをみる。

【引用文献】

[1)] 法務省法務総合研究所　犯罪白書　平成２７年度版
[2)] 法務省法務総合研究所　犯罪白書　平成２６年度版
[3)] 法務省法務総合研究所　犯罪白書　平成２５年度版

左利きに関する心理的負荷の研究

— POMS-VAS, 唾液アミラーゼ, 描画法による比較検討 —

○佐藤 茜[1)] 安藤昌也[2)]
([1)] 千葉工業大学大学院工学研究科 [2)] 千葉工業大学先進工学部)
キーワード：左利き,POMS-VAS,唾液アミラーゼ,描画法

【問題・目的】

我々が日常生活を送るうえで、使い方がわからないモノや不便さを感じるモノや場所がある。特に、左利きの人は日常場面で苦労する機会が多々あると考えられる。

この問題を受け、著者らは左利きの人を対象に、日常生活上で不便だと感じるモノに関する調査を行った結果、スープレードルが多く挙がった。また、スープレードルをお店で使用する場合、後ろに並ばれると焦ってしまい余計に使いにくく感じるといった声が挙げられた[1]。

そこで前研究[1]では、左利きの人に実際にスープレードルを用いた作業を時間制限あり・なし条件の下でしてもらい、心理的負荷を POMS-VAS[2], 唾液アミラーゼ, 描画法を用いて測定した。この結果を踏まえ、本研究では描画法とPOMS-VAS・唾液アミラーゼの検査結果の比較検討をすることを目的とする。

【方法】

前研究で行った実験の概要を以下に記す。

参加者：左利きの大学生 7 名。なお、参加者は右利きへの矯正を受けていないことを条件とした。

手続き：まず始めに、参加者に①唾液アミラーゼ活性 (sAA)、②POMS-VAS、③描画法の順に検査を行った。描画法では、24 色の色鉛筆を用いて、自分の今の気持ちを自由に表すようを教示した。描画法終了後、参加者に描いた絵の解釈を行ってもらった。次にこれらの検査終了後、右利き用スープレードルを使用した 1 分間の時間制限あり条件の下で作業課題を行った。作業課題は具入りスープの入った鍋を模擬したバケツを用いて、紙コップにバケツの中身を注いでもらうものである。作業終了後、再び①～③の順に検査をした。これを 1 試行目とし、2 試行目は時間制限なしの条件で作業課題を行い、1 試行目同様①～③の順に検査をした。以上で 1 回目の実験を終了とした。2 回目の実験を行う際は、1 回目の実験と手順は同じだが、作業課題で使用するスープレードルを左利き用のものを使用させた。

【結果】

それぞれの検査の測定結果を以下に示す。

唾液アミラーゼ活性の結果

条件ごとに唾液アミラーゼ活性 (sAA) の平均値を算出し、対応のある二要因分散分析を行った。結果、右利き用と左利き用の違いに 10%の有意傾向があった ($F(1,6)=4.61$, $p=.075$)。さらに、時間制限の有無に、5%水準で有意差が認められた ($F(1,6)=7.00$, $p<.05$)。

POMS-VAS の結果

次に、POMS-VAS の全体傾向を調べるため、項目ごとの全体平均値を算出し検定を行った。その結果、2 つの項目に有意傾向が見られた。1 つ目は、「緊張」である。時間制限の有無で 10%の有意傾向があった ($F(1,6)=5.0$, $p=.067$)。次に、「疲労」である。こちらは利き手用の違いでのみ 10%の有意傾向があった ($F(1,6)=4.3$, $p=.084$)。

描画法結果

最後に、参加者 7 名の描画法で描かれた心情を、POMS-VAS、唾液アミラーゼ活性の結果と比較しグループ分けした結果を、そのグループの代表の絵とともに表 1 に示す。

表 1 分類結果

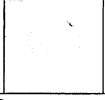
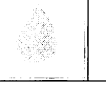
①		描画結果が POMS-VAS・アミラーゼ結果ともに同じ傾向	6個	⑤		描画結果にPOMS-VASで答えた心情とは反する感情も描かれている	3個
②		描画結果とアミラーゼ結果は同じ傾向だが、POMS-VASの結果は異なる	2個	⑥		描画結果にPOMS-VASで答えた心情の裏付けが描かれている	4個
③		描画結果とPOMS-VAS結果は同じ傾向だが、アミラーゼ結果は異なる	6個	⑦		描画結果にPOMS-VASの項目にはない心情が描かれている	3個
④		描画結果とPOMS-VAS・アミラーゼ結果が異なる傾向	4個				

表 1 に示すように全部で 7 つのグループに分類できた。描画結果と POMS-VAS・アミラーゼの結果が同じ傾向にあるものを①、POMS-VAS 以外は同じ傾向であるものを②、アミラーゼの結果のみが異なるものを③、POMS-VAS とアミラーゼの結果は同じ傾向だが、描画結果のみが異なるものを④、描画結果に POMS-VAS で答えた心情と反する感情も描かれていたものを⑤、描画結果が POMS-VAS で答えた心情の裏付けになっているものを⑥、描画結果に POMS-VAS の項目にはない心情が描かれているものを⑦に分類した。

【考察】

分類した結果、①に分けられたものも多くあった。しかし、②や③に分けられたものもある。この結果、生理的にはストレスを感じていても本人は自覚がなかったり、自分ではストレスを感じていても実は生理的にはストレスはかかってなかったりといった、心と身体での感覚の不一致が見られることがわかった。また、描画法を用いた結果ならではの特徴としては、⑤～⑦のようなグループもあった。例えば⑤では、抑うつ傾向のあった参加者が「明るさ」や「活発さ」といった心情も絵で表現したことが挙げられる。加えて⑥では、POMS-VAS の項目の数値がなぜこのような結果になったのかが推測できる具体的な表現がされていた。そして⑦では、POMS-VAS の項目にはない表現、例えば「感動」、「安心感」のような表現が参加者から挙げられた。

以上の結果から、心と身体では異なる感じ方をしている場合や、描画法を用いることで質問紙では測れない部分が見えてくる場合があることが考えられる。そのため、人の心情に焦点を当てた検査をする場合は、1 つのみで検査を行うのではなく、質問紙＋描画法といったように複数を組み合わせた検査が有効だと言えるだろう。

【引用文献】

[1] 佐藤茜,伊東昌子,安藤昌也 2016 左利きにかかる心理的負荷の研究 2016 年度春季 HCD 研究発表会 38-43
[2] 大杉紘徳,田中芳幸,兒玉隆之,村田伸 2015 気分・感情状態評価としてのPOMS-VASの妥当性の検討 健康支援第17号 9-14

(さとう あかね・あんどう まさや)

注視点解析を用いた筆跡分類課題方略の分析

関　陽子
（科学警察研究所）
キーワード：注視点解析，先行知識，類似

【目的】

筆跡から，その書き手が誰かを推定することは，日常生活でよく経験する。一方，筆跡鑑定を業務として行う専門家も存在する。筆跡鑑定の専門家は一般人とは異なる特別な手法を用いているのだろうか。本報告では，筆跡とそれ以外の類似画像を用いて被験者に類似画像を分類する課題を行わせ，課題実行中の注視点計測の結果をもとに，類似画像分類方略と先行知識の関係を考察した。

【方法】

科学警察研究所において倫理審査を受けたのちに，実験を実施した。被験者は，実験への参加の同意が得られた，文書鑑定実務を４年から７年担当している６名であった。

実験では，複数の類似画像から共通の特徴を持つ画像どうしにグループ分けを行う，もしくは類似画像から相違を見つける課題を行わせ，課題試行中の被験者の視線の動きをアイトラッキング装置により計測した。

呈示刺激は二部構成となっており，前半は，類似した花や動物を識別する課題，後半は，同じ字種の筆跡を類似したものどうしに分類する課題であった。

筆跡の分類では，ディスプレーに６個の筆跡（同一字種の一文字）が呈示され，６個の筆跡を同じ人が書いたと思われるものどうしにグループ分けをさせた。被験者には，あらかじめ，６個の筆跡は２人ないし４人の筆者が書いた筆跡であること，６個の筆跡を同じ筆者が書いたと思われるほど書き方が似ている筆跡どうしに分類してほしいこと（＝したがって，同じ筆者の筆跡がひとまとまりにまとまるのであれば，グループの数は２ないし４になる），わからないものは，わからないと回答してよいことを教示した。

実験では，花や動物を分類する課題を４試行，筆跡の分類は16試行（使用した文字種は10個。したがって，１文字種につき１試行もしくは２試行を行った）で行った。花や動物を分類する課題のうち１種類は，３種類の花の写真を呈示して相違する箇所を指摘させた後，その３種類を区別するための特徴を描いた図を見せ，その図を手掛かりに３種類の花を区別する課題（区別には，最初の試行に用いた花の写真とは異なる写真を使用した）を行った。

被験者には，本試行の前に練習用の試行（３種類の画像の区別１試行と，本試行とは異なる６個の筆跡の分類１試行）を行った。

視線の計測には，計測装置にEyetech TM3（Eyetech Digital System製），解析ソフトウェアにQG Plus（DITECT製）を使用した。

いずれの試行においても，被験者に分類結果（類似画像の類似点や相違点，同一グループに属する筆跡であると分類した結果）とその根拠を回答させた。

【結果】

被験者６名のうち２名は視線計測ができなかったため，計測が可能であった４名のデータについて分析した。

〔注視時間〕

筆跡分類課題では１試行あたりの平均注視時間は85.61秒（SD=33.34）であった。

類似画像分類課題では，情報提供なしの課題では平均値は44.68秒，最小値は12.00秒，最大値は66.50秒であった。同じ課題で情報提供ありの場合は，平均値は51.88秒，最小値は31.60秒，最大値は75.60秒であった。その他の類似画像の分類は，課題の難易度により注視時間が異なり，難易度が低い課題で注視時間が短かった（注視時間の平均は40.00秒～65.85秒）。

刺激が筆跡の場合は，文字の形態が複雑な文字で注視時間が長い傾向があった。また，「わからない」との回答が多い刺激で注視時間が長い傾向があった。

〔注視箇所〕

筆跡分類課題では，同一文字種であっても比較対照する筆跡によって注視箇所が異なっていた。判断根拠の回答をもとに注視箇所を比較したところ，文字の大きさや色材の濃さなど，文字全体に関する情報は，文字の部分特徴（転折の状態，点画の大きさや位置関係など）と比較すると注視度が低かったが，分類方針決定に利用されていた。

一方，類似画像分類課題では，注視箇所が分類の根拠となっていた。分類情報提供の有無を比較した画像では，情報提供ありの画像では，情報提供された箇所が注視されていた。

【考察】

類似画像分類の結果より，先行知識の有無と内容が，類似情報の分類結果と関連があることがわかった。筆跡分類においては，文字全体の特徴が分類方針決定に重要であることが示唆された。今後は，一般人に同様の実験を行い，文字全体の情報を利用することが，専門家の持つ先行知識であるかどうかを明らかにしたい。

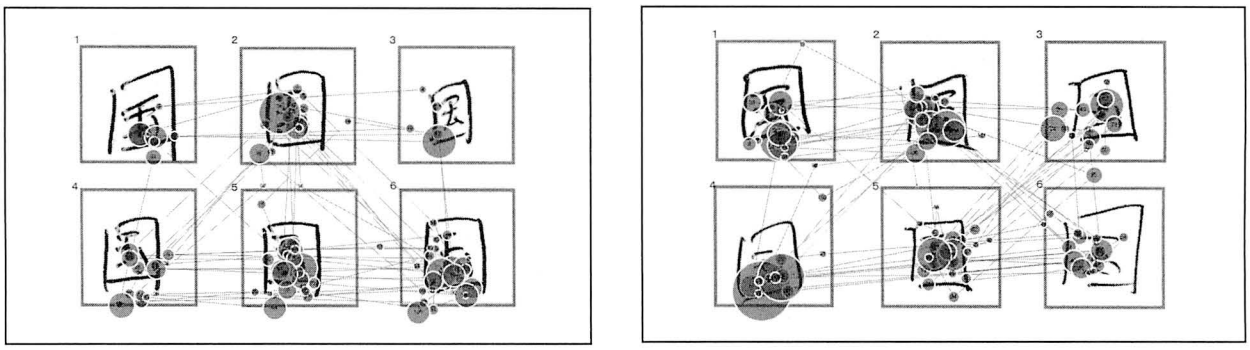


Fig.1 同一字種で異なる筆跡に対する同一被験者の視線計測結果

（せき　ようこ）

ユーモアの種類と笑い声に関する量的分析

― コントと落語における観客の反応の比較―

○高山　藍[1)]　藤澤伸介[2)]
([1)]東京大学医学部附属病院　[2)]跡見学園女子大学)
キーワード：演芸，観客の笑い，ユーモア類型

【研究の目的】笑いに関するこれまでの研究は質的調査が主流であり、量的な研究は極めて少ない。そこで本研究では、笑い声が生じている時間を笑いの持続時間とし、量的調査を行う。これにより、客観的な笑いの創出量を求め、今後の偶発的な笑いの研究の一助となることを目指す。

また、増山(1996)は、個々人のユーモアを鑑賞するセンスを図るには落語を聞かせるのが最も相応しいとしており、本研究では、落語とコントの演目について、比較し検討を行う。

笑い声の長さ(持続時間)と笑いが生じるまでの時間(潜時)が、笑いを発生させる刺激の種類にどのように影響されるかを、明らかにすることを目的とする。

【方法】落語とコントに対する観客の笑いの音声を分析する。音声は、市販のCD及びDVDに収録されたものを利用した。これは、笑いの原因となる刺激が、明瞭に把握できるためである。落語は春風亭柳昇の DVD(KVD-3901, KVD-3904)、CD(COCJ-38018, COCJ-38019, COCJ-38020)より6作品計111分、コントはコントユニットラーメンズのDVD(PCBP-11812, PCBP-11814, PCBP-11874, PCBE-12080)より7作品計112分を分析対象とした。

分析手順は、まずパソコンソフト"Sound Engine"（(株)コードリウム）に音声を入力して波形化し、発生した各笑いの潜時と持続時間を測定し、次にその結果を笑いの発生要因別に分類し、相互の関係を見るものとする。笑いの始点終点は、演目全体の最大音量が0dBになるよう正規化した上で、-24dB以上の点と定義した。潜時は、笑いの要因となるキーワードが発せられた直後から笑いの始点までとした。

更に笑いの原因となった刺激を井山(2007)に基づいて分類する。但し、項目が不十分であったため、*の項目を筆者が新たに追加した。Table 1は刺激の分類と内容である。

Table 1. 刺激の分類

類型	内容
理解・納得*	意味が分かると面白い話
シュール・逸脱	論理的にずれた発言や行為
言葉遊び	同音異義語のダジャレなど
組合わせ違和感*	修飾・被修飾の食い違い
アドリブ*	唐突に現実的な話をする、台詞の言い間違え
口調*	聞きなれない発音や方言など
共感	よくある話、ツッコミなど
繰り返し	同じ言葉や会話の繰り返し
第三者的視点	登場人物同士が勘違いし、すれ違ったまま進む状況

【結果】Table 2は、刺激の類型ごとの笑いの発生回数(n)及び平均時間を示した表である。笑いの多くは0.0秒から2.0秒の間で収まっている。nは、降順に並べたときに上位の3項目が共通し、笑いの生じやすい傾向があった。持続時間では上位4位中3項目が日本語の特性を活かした刺激であり、潜時では最も長い類型が共通して「理解・納得」であった。持続時間では、コントにおけるアドリブが落語に比べ有意に長く、潜時では落語における口調が、コントと比較して短いという差が観察された。

Fig. 1,2は持続時間、潜時における類型の散布図である。

Table 2. 落語とコントにおける類型ごとの回数(n)、笑いの持続時間及び潜時の平均(秒)

	落語			コント		
	発生回数	持続時間	潜時	発生回数	持続時間	潜時
理解・納得	37	1.64	0.54	46	1.48	0.63
シュール・逸脱	92	1.43	0.26	59	1.26	0.49
言葉遊び	22	1.72	0.35	7	1.87	0.34
組合わせ違和感	74	1.58	0.29	50	1.57	0.35
アドリブ	15	1.55	0.40	16	3.06	0.21
口調	3	0.88	0.11	49	1.23	0.36
共感	84	1.18	0.17	85	1.38	0.27
繰り返し	7	0.95	0.21	21	0.91	0.20
第三者的視点	2	3.46	0.00	11	1.04	0.17

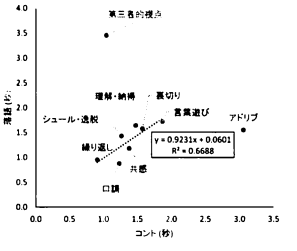


Fig.1. 笑いの持続時間における類型の分布

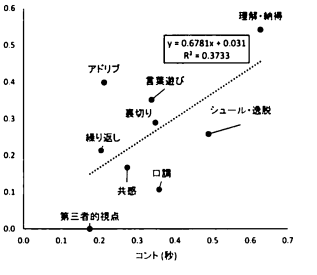


Fig.2. 潜時における類型の分布

持続時間においては、外れ値の類型を除いた類型において落語とコントに正の相関がみられ、潜時においては両者間に相関関係は見られなかった。

【考察】本研究で測定した笑いの持続時間は、可笑しさの程度の指標であり、潜時は笑いを発生させるまでに必要な情報処理時間と考えられる。どんな情報処理かを以下で考察する。

持続時間からみた可笑しさの順位は、第三者的視点を除けば落語もコントもほぼ同一で、情的刺激より知的刺激の方が、可笑しさの程度が甚だしい。潜時についても、口調、共感、繰り返しのような比較的単純な情的刺激では素早く笑いが起き、理解・納得や言葉遊びのような高次の情報処理を必要とする複雑な知的刺激は、笑いを引き起こすまでに時間がかかる。可笑しさの要因刺激はいずれも二者の齟齬を含むことから、潜時は二者のスキーマ形成と照合の時間と考えられる。こうしてずれを認識すると笑いが起きるのだ。

落語とコントで最も傾向が異なるのは、複数の登場人物による理解の不一致が拡大していく「第三者的視点」である。そもそもコントは複数名が演じているので、食い違いの発生は不自然ではない。これに対し、落語は一人が何役も演じるから不一致が発生することはありえないはずだ。その予想を裏切っているから、可笑しさが倍加しているのであろう。「第三者的視点」は、落語に有利なネタということができるであろう。

【引用文献】

井山弘幸　2007　笑いの方程式―なぜあのネタは受けるのか　化学同人
増山英太郎　1996　オカシサの計量心理学的研究　風間書房

（たかやま　あい・ふじさわ　しんすけ）

特別支援教育における被虐待児への対応に関する研究（１０）

緊急調査の報告－地域別の調査対象の概要と特別支援教育の実態などについて－

○林　幸範[1)]　　石橋　裕子[2)]

(1)池坊短期大学　(2)帝京科学大学

キーワード：被虐待児童、特別支援教育、養護教諭

【研究の目的】石橋・林らは、「特別支援教育における養護教諭とそれ以外の連携の阻害要因に関する研究」を中心として、調査研究・ヒアリング調査・モデル研究・実践研究などを実施してきたが、それらの研究から、被虐待児への支援、特に特別支援教育としての支援がなされていないことが明確となった。文部科学省は、平成18(2006)年公表の『学校等における児童虐待防止に向けた取組について(報告書)』において被虐児と特別支援教育との関係を述べ、研修用資料も公表しているが、教育現場では、先述したような状況にある。そこで、特別支援教育における被虐待児への対応等についての全国規模の緊急調査を実施した。本稿は、その調査の対象の概要と特別支援教育の実態等について地域別に報告する。

【方法】(1)調査時期…平成25年7-8月　(2)調査対象…全国公立学校を層化法で抽出した小学校1,952校・中学校1,007校・計2,959校の養護教諭1名　(3)調査方法…質問紙法・郵送法。調査は研究の主旨及びデータの使用について同意した上で実施　(4)回収・回収率…回答した養護教諭は621名(小学校413名(66.5%)、中学校204名(32.9%)、小中一貫校・無回答各2名(各0.3%))、回収率は21.0%(小学校21.2%、中学校20.3%)　(5)分析…地域(【結果】(1)①参照)別　(6)凡例…囲込み数字は50.0%以上、反転数字は90.0%以上。>は10.0%以上、≒は10.0%未満、=は1.0%未満の差。被虐待児とは、虐待を受けている又はその疑いのある児童生徒のこと。

【結果】(1)基本的属性…①勤務校の地域：北海道東北(112名:18.0%)・関東(147名:22.9%)・中部(99名:15.9%)・近畿(93名:15.0%)、・中国四国(93名:15.0%)・九州沖縄(77名:12.4%)。②勤務校の規模：北海道東北は小規模校(72.3%)・中規模校(23.2%)・大規模校(1.8%)、平均児童生徒数297.3名・平均10.7学級。関東は、小規模校(43.5%)・中規模校(40.8%)・大規模校(10.9%)、平均児童生徒数443.5名・平均14.2学級。中部は、小規模校(48.5%)・中規模校(38.4%)・大規模校(10.1%)、平均児童生徒数409.1名・平均13.6学級。近畿は、小規模校(50.5%)・中規模校(38.7%)・大規模校(8.6%)、平均児童生徒数408.3名・平均13.4学級。中国四国は、小規模校(65.6%)・中規模校(29.0%)・大規模校(3.2%)、平均児童生徒数327.3名・平均11.8学級。九州沖縄は、小規模校(57.1%)・中規模校(24.7%)・大規模校(10.4%)、平均児童生徒数357.2名・平均12.4学級。③年齢・性別：北海道東北は平均47.7歳の女性98.2%、男性1.8%。中部は平均歳の女性98.0%、男性1.0%。関東は平均41.7歳、近畿は平均42.9歳、中国四国は平均45.6歳、九州沖縄は平均42.1歳の女性のみ。④教員としての経験年数：北海道東北は、平均47.7年、新人(10.7%)・中堅(17.9%)・ベテラン(69.6%)で、勤務校は平均2.6年。関東は、平均41.7年、新人(23.8%)・中堅(32.0%)・ベテラン(42.9%)で、勤務校は平均3.0年。中部は、平均43.5年、新人(18.2%)・中堅(28.3%)・ベテラン(52.5%)で、勤務校は平均2.6年。近畿は、平均42.9年、新人(22.6%)・中堅(22.6%)・ベテラン(50.5%)で、勤務校は平均3.5年。中国四国は、平均45.6年、新人(15.1%)・中堅(20.4%)・ベテラン(62.4%)で、勤務校は平均2.7年。九州沖縄は、平均42.1年、新人(27.3%)・中堅(19.5%)・ベテラン(50.6%)で、勤務校は平均2.3年。　(2)勤務校での特別支援教育(文部科学省調査項目のみ)…①特別支援教育ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰの指名：関東(91.8%)≒北海道東北(90.2%)≒九州沖縄(88.3%)≒中国四国(86.0%)≒中部(84.8%)≒近畿(79.6%)。②校内委員会の設置：中部(91.9%)=関東(91.2%)=北海道東北(91.1%)≒中国四国(88.2%)≒近畿(87.1%)≒九州沖縄(85.7%)。③発達障害の実態把握の実施：中国四国(74.2%)≒中部(68.7%)≒近畿(65.6%)≒関東(63.3%)≒北海道東北(59.8%)=九州沖縄(59.7%)。④個別の指導計画の作成：中国四国(91.4%)≒関東(83.7%)=近畿(82.8%)≒九州沖縄(80.5%)=中部(79.8%)>北海道東北(67.9%)。⑤個別の教育支援計画の策定：中国四国(73.1%)≒九州沖縄(68.8%)≒近畿(66.7%)≒中部(63.6%)=関東(63.3%)≒北海道東北(60.7%)。⑥巡回相談員の活用：中国四国(54.8%)≒九州沖縄(53.2%)≒関東(51.0%)≒北海道東北(45.5%)≒中部(42.4%)≒近畿(40.9%)。⑦専門家ﾁｰﾑの活用：中国四国(41.9%)≒九州沖縄(36.4%)≒関東(34.7%)≒近畿(32.3%)=北海道東北(32.1%)≒中部(30.3%)。⑧特別支援教育に関する教員研修の実施及び受講：中国四国(76.3%)≒九州沖縄(75.3%)≒関東(69.4%)≒近畿(66.7%)≒北海道東北(65.2%)≒中部(62.6%)。　(3)本務校で担っている役割…①特別支援教育ｺｰﾃﾞｨﾈｰﾀｰのみ：関東(8.8%)≒中国四国(7.5%)≒北海道東北(4.5%)≒九州沖縄(2.6%)=近畿(2.2%)≒中部(0.0%)。②校内委員会委員のみ：北海道東北(71.4%)≒中部(69.7%)≒近畿(62.4%)≒九州沖縄(61.0%)≒関東(58.5%)≒中国四国(57.0%)。③①と②の両方：関東(12.2%)≒中部(5.1%)=中国四国(4.3%)≒近畿(1.1%)=北海道東北(0.9%)=九州沖縄(0.0%)。④担ってない：九州沖縄(36.4%)≒近畿(32.3%)≒中国四国(30.1%)≒中部(23.2%)≒北海道東北(21.4%)≒関東(20.4%)。　(4)主な特別支援教育の対象の児童生徒(□は被虐児、□は発達障害関係)…①LDの傾向がある：近畿(93.5%)=関東(93.2%)≒中国四国(89.2%)≒北海道東北(86.6%)≒中部(84.8%)=九州沖縄(84.4%)。②AD/HDの傾向がある：関東(92.5%)≒中国四国(91.4%)≒近畿(87.1%)≒中部(85.9%)≒九州沖縄(84.4%)=北海道東北(83.9%)。③高機能自閉症の傾向がある：近畿(91.4%)=関東(91.2%)=中国四国(90.3%)≒中部(87.9%)=九州沖縄(87.0%)≒北海道東北(83.0%)。④ｱｽﾍﾟﾙｶﾞｰ症候群の傾向がある：近畿(91.4%)=関東(90.5%)≒中国四国(88.2%)≒九州沖縄(84.4%)≒中部(82.8%)≒北海道東北(80.4%)。⑤④以外の自閉的傾向のある：中国四国(88.2%)=関東(87.8%)≒九州沖縄(83.1%)=近畿(82.8%)≒中部(77.8%)=北海道東北(77.7%)。⑥運動面での不器用さが著しく認められる：近畿(44.1%)≒関東(41.5%)≒中国四国(39.8%)≒北海道東北(33.9%)=九州沖縄(33.8%)≒中部(25.3%)。⑦情緒障害の傾向がある：中国四国(93.5%)≒近畿(90.3%)≒北海道東北(89.3%)≒九州沖縄(88.3%)≒関東(86.4%)≒中部(85.9%)。⑧虐待の疑いがある：関東(44.2%)≒九州沖縄(37.7%)≒北海道東北(33.9%)=近畿(33.3%)≒中国四国(29.0%)≒中部(22.2%)。⑨家庭環境に問題がある：九州沖縄(27.3%)=関東(26.5%)≒近畿(22.6%)≒中国四国(20.4%)≒北海道東北(17.0%)≒中部(14.1%)。⑩保護者が子どもに無関心：九州沖縄(23.4%)≒中国四国(20.4%)≒関東(19.0%)≒近畿(15.1%)≒中部(11.1%)≒北海道東北(8.9%)。⑪保護者が問題を抱えている：九州沖縄(22.1%)≒関東(21.1%)≒中国四国(15.1%)≒近畿(14.0%)≒北海道東北(12.5%)≒中部(10.1%)。

【考察とまとめ】養護教諭が考える特別支援教育の対象は、情緒障害や発達障害の傾向がある児童生徒が主で、虐待の疑いがある児童生徒を特別支援教育の対象と考えている養護教諭は発達障害傾向の児童生徒等よりは少ない。この傾向は、地域による差は少ないが、第１位の地域と最下位の地域では、10%程度の差はある。さらに、子どもの困り感で決めるという養護教諭が３人に１人いることなどからも、特別支援教育の対象は、限定して考える傾向があるといえよう。また、養護教諭は、特別支援教育の役割としてはほぼ校内委員会に所属する者が多く、学校の中で一線を画しているともいえよう。

謝辞：全国の養護教諭の皆様には、2011年以来調査・研究に多大なご協力をいただきありがとうございました。紙面を借りてお礼を申し上げます。

(はやしゆきのり・いしばしゆうこ)

特別支援教育における被虐待児への対応に関する研究（１１）

緊急調査の報告－地域別の虐待に対する対応などの実態などについて－

○石橋　裕子[1)]　　林　幸範[2)]

(1)帝京科学大学　(2)池坊短期大学

キーワード：被虐待児童、特別支援教育、養護教諭

【研究の目的】特別支援教育における被虐待児の対応についての緊急調査を実施した。本稿では、地域別に虐待への対応等について報告する。被虐待児とは、虐待を受けている又はその疑いのある児童生徒のこと。

【方法】(1)調査時期…平成25年7-8月　(2)調査対象…全国公立小中学校2,959校の養護教諭1名（層化法）　(3)調査方法…質問紙法・郵送法。調査は研究の主旨及びデータの使用について同意した上で実施　(4)回収（回収率）…回答養護教諭は621名（21.0%）　(5)分析…北海道東北（112名：18.0%）・関東（147名：22.9%）・中部（99名：15.9%）・近畿（93名：15.0%）・中国四国（93名：15.0%）・九州沖縄（77名：12.4%）の地区別　(6)凡例…囲込み数字は50.0%以上・反転数字は90.0%以上、>は10.0%以上・≒は10.0%未満・=は1.0%未満の差

【結果】(1)勤務校での被虐待児の有無…『現在いる』では、中部（49.5%：平均2.4人）≒近畿（49.5%：平均3.8人）=関東（47.6%：平均2.8人）=中国四国（46.2%：平均2.9人）>北海道東北（33.0%：平均1.9人）≒九州沖縄（26.0%：平均2.5人）の順、児童生徒総数に対する割合の平均は、北海道東北（0.67%）・関東（0.70%）・中部（0.67%）・近畿（0.97%）・中国四国（1.01%）・九州沖縄（0.71%）。『現在はいない』では、北海道東北（39.3%）≒九州沖縄（36.4%）≒中国四国（33.3%）≒関東（25.9%）≒中部（22.2%）≒近畿（19.4%）、『現在はいないが過去にいた』では、近畿（22.6%）≒九州沖縄（20.8%）=関東（20.4%）=中部（17.2%）=北海道東北（17.0%）≒中国四国（12.9%）、『わからない』では、九州沖縄（16.9%）≒中部（10.1%）=北海道東北（9.8%）≒近畿（8.6%）≒中国四国（7.5%）≒関東（4.8%）の順。　(2)被虐待児のうち特別支援教育を受けている児童生徒の有無…『現在いる』では、中部（44.9%：平均1.2人）≒近畿（41.3%：平均2.3人）≒九州沖縄（40.0%：平均1.8人）=中国四国（39.5%：平均3.1人）=関東（38.6%：平均1.5人）≒北海道東北（35.1%：平均1.5人）の順、児童生徒総数に対する割合の平均は、北海道東北（0.70%）・関東（0.62%）・中部（0.62%）・近畿（0.71%）・中国四国（0.62%）・九州沖縄（0.44%）、特別支援教育対象児に対する割合の平均は、北海道東北（38.3%）・関東（11.5%）・中部（21.9%）・近畿（17.0%）・中国四国（10.6%）・九州沖縄（25.9%）。『現在はいない』では、北海道東北（62.2%）≒関東（60.0%）≒中国四国（58.1%）≒近畿（56.5%）≒中部（55.1%）=九州沖縄（55.0%）、『現在はいないが過去にいた』では、九州沖縄（5.0%）≒近畿（2.2%）≒北海道東北・関東・中部・中国四国（各0.0%）の順、『わからない』はいない。　(3)被虐待児を発見した時の対応法（7項目：複数回答）…①管理職に報告しその指示を待つ：北海道東北（99.1%）≒中部（96.0%）≒九州沖縄（93.5%）≒関東・近畿（各92.5%）≒中国四国（91.4%）。②担任に報告をする：北海道東北（88.4%）=中国四国（88.2%）=中部（87.9%）=九州沖縄（87.0%）≒近畿（86.0%）≒関東（85.7%）。③学年主任に報告しその指示を待つ：中部（43.4%）≒北海道東北（41.1%）≒関東（39.5%）≒九州沖縄（35.1%）≒近畿（33.3%）≒中国四国（32.3%）。④児童相談所に連絡をする：関東（31.3%）≒中国四国（30.1%）≒九州沖縄（28.6%）≒北海道東北（20.5%）=近畿（20.4%）≒中部（17.2%）。⑤マニュアルがあるのでそれに従う：中国四国（24.7%）≒九州沖縄（20.8%）≒中部（19.2%）=関東（19.0%）≒近畿（15.1%）≒北海道東北（12.5%）。⑥その都度決定する：近畿（21.5%）≒九州沖縄（15.6%）≒中国四国（14.0%）≒関東（12.2%）=中部（12.1%）≒北海道東北（9.8%）。⑦わからない：いない。　(4)被虐待児への対応策（22項目）…①管理職との連携：関東（88.4%）≒中国四国（86.0%）≒近畿（81.7%）≒北海道東北（77.7%）=中部（76.8%）≒九州沖縄（75.3%）。②教員間の連携：中国四国（81.7%）≒関東（79.6%）≒近畿（75.3%）≒中部（73.7%）=北海道東北（73.2%）=九州沖縄（66.2%）。③養護教諭との連携：関東（72.8%）≒中国四国（63.4%）≒中部（61.6%）≒北海道東北（59.8%）≒近畿（58.1%）≒九州沖縄（57.1%）。④児童相談所との連携：中国四国（71.0%）≒関東（62.6%）≒近畿（60.2%）≒中部（54.5%）≒九州沖縄（53.2%）≒北海道東北（50.9%）。⑤児童相談所への通報：近畿（62.4%）≒中国四国（54.8%）=関東（54.4%）≒中部（50.5%）>九州沖縄（40.3%）≒北海道東北（35.7%）。⑥教育委員会との連携：中国四国（58.1%）≒中部（54.5%）≒近畿（53.8%）>関東（40.8%）=北海道東北（40.2%）≒九州沖縄（37.7%）。⑦スクールカウンセラーとの連携：関東（56.5%）≒中国四国（54.8%）>中部（45.5%）≒近畿（44.1%）≒九州沖縄（41.6%）≒北海道東北（38.4%）。⑧校内委員会との連携：中国四国（52.7%）≒中部（49.5%）=関東（49.0%）≒九州沖縄（42.9%）≒北海道東北（41.1%）≒近畿（39.8%）。⑨教育委員会への通報：中部（48.5%）≒中国四国（47.3%）≒近畿（41.9%）≒北海道東北（37.5%）≒九州沖縄（35.1%）≒関東（34.0%）。⑩市・区役所との連携：近畿（35.5%）≒中国四国（30.1%）≒関東（27.9%）=中部（27.3%）≒九州沖縄（26.0%）≒北海道東北（22.3%）。⑪スクールソーシャルワーカーとの連携：九州沖縄（32.5%）≒中国四国（25.8%）≒近畿（16.1%）=中部（15.2%）≒関東（9.5%）=北海道東北（8.9%）。⑫市・区役所への通報：中部・近畿（各32.3%）≒中国四国（29.0%）≒関東（26.5%）=九州沖縄（26.0%）≒北海道東北（18.8%）。⑬対応会議の設置：中国四国（31.2%）≒中部（29.3%）≒九州沖縄（27.3%）=北海道東北（26.8%）≒近畿（23.7%）=関東（23.1%）。⑭マニュアルがある：中国四国（22.6%）=九州沖縄（22.1%）≒中部（15.2%）=関東（15.0%）≒近畿（12.9%）≒北海道東北（7.1%）。⑮警察との連携：中国四国（16.1%）≒近畿（14.0%）≒九州沖縄（13.0%）≒中部（11.1%）≒北海道東北（8.9%）=関東（8.8%）。⑯その都度決める：中部（14.1%）≒近畿・中国四国（各12.9%）≒関東（11.6%）=北海道東北（10.7%）=九州沖縄（10.4%）。⑰病院との連携：中国四国（14.0%）≒九州沖縄（10.4%）≒北海道東北（8.0%）=関東（7.5%）≒近畿（5.4%）=中部（5.1%）。⑱警察への通報：中国四国（10.8%）≒九州沖縄（9.1%）=関東（8.8%）=中部（8.1%）≒近畿（6.5%）≒北海道東北（5.4%）。⑲対応策はない：北海道東北（9.8%）≒九州沖縄（5.2%）≒中国四国（3.2%）≒近畿（2.2%）=中部（2.0%）=関東（1.4%）。⑳病院への通報：中国四国（6.5%）=中部（6.1%）≒関東（4.1%）≒北海道東北（2.7%）=近畿（2.2%）=九州沖縄（1.3%）。㉑授業の方法：北海道東北（5.4%）≒近畿・中国四国（4.3%）≒中部（3.0%）≒関東（1.4%）=九州沖縄（1.3%）。㉒わからない：北海道東北（4.5%）=中国四国（4.3%）=関東（4.1%）=近畿（3.2%）=中部（3.0%）=九州沖縄（2.6%）。　(5)被虐待児に対して必要だと思う対応法（9項目）…①児童相談所との連携：関東（87.1%）≒中国四国（83.9%）=北海道東北（83.0%）≒九州沖縄（77.9%）≒中部（75.8%）≒近畿（66.7%）。②教員間の連携：中国四国（83.9%）≒北海道東北（80.4%）≒中部（78.8%）≒関東（74.8%）=九州沖縄（74.0%）≒近畿（65.6%）。③児童相談所への通告：中国四国（71.0%）≒関東（66.7%）≒中部（57.6%）≒北海道東北（56.3%）=九州沖縄（55.8%）≒近畿（50.5%）。④市役所や区役所との連携：九州沖縄（58.4%）＝中部（57.6%）≒関東（55.8%）≒北海道東北（54.5%）≒中国四国（52.7%）≒近畿（50.5%）。⑤虐待に関する研修：中国四国（54.8%）≒九州沖縄（51.9%）≒近畿（49.5%）≒中部（48.5%）≒北海道東北（47.3%）≒関東（46.3%）。⑥市・区役所への通告：中部（43.4%）=九州沖縄（42.9%）≒関東（40.1%）≒北海道東北（35.7%）≒中国四国（33.3%）≒近畿（30.1%）。⑦被虐待児への授業方法の確立：近畿（20.4%）≒中国四国（17.2%）=関東（17.0%）≒九州沖縄（15.6%）=中部（15.2%）≒北海道東北（13.4%）。⑧別にない：近畿（2.2%）=九州沖縄（1.3%）=中部（1.0%）≒北海道東北・関東・中国四国（各0.0%）。⑨わからない：近畿（4.3%）≒九州沖縄（2.6%）≒関東（1.4%）=中国四国（1.1%）=中部（1.0%）≒北海道東北（0.0%）。

【考察とまとめ】勤務校の約4割に被虐待児がいるが地域差があり、その中で特別支援教育の対象なのは2割ほどで地域差は少ない。被虐待児への対応のなかで、緊急対策は、概ね実施しているが、被虐待児の学習への対応は1割にも満たず、また被虐待児に対しての授業方法の確立が必要と考えているのは2割弱で地域差が少なく、被虐待児に対する学習への対応をあまり考えていないことが明確となった。　平成18年、文部科学省の研究会（玉井邦夫ら）の報告書で、特別支援教育においての被虐待児の対応の重要さが示唆しているが、学習指導の詳細は提言されておらず、緊急性のみが強調されている。そのため、地域にやや差があるが、学校現場では緊急対応ばかりが実施され、そのことがこの緊急調査の結果にも明確に現れている。施設に入所する被虐待児は極一部で、大部分は家庭に帰され学校で学習をしており、特別支援教育でも情緒障害児として指導されることが多い。ところが、杉山登志夫が指摘しているように被虐待児を『第四の発達障害』と考え一般の情緒障害とは異なった対応を考慮すべきである。そのため、学校での学習法について、新たな方法を構築することが重要となる。　今後の予定として、①全国の学校での被虐待児の実態及び対応策の実態等の把握、②虐待及びその疑いのある児童生徒への学習の対応法の構築等を実施する予定であったが、本年度科研費の申請が却下されたため、現在モデル校１校のみで②について実施している。

（いしばしゆうこ・はやしゆきのり）

大学生を対象とした部活動における集団への適応感の研究

―横断的データを用いた検討―

○来田宣幸[1)]　吉田浩之[2)]
([1)]京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科　[2)]群馬大学教育学部)

キーワード：体育会，不安感，存在感

【研究の目的】 近年では，社会が大きく変化し，複雑化したことによって，青少年の社会への不適応や問題行動が多発し，若者の人格形成教育が問われるようになってきた．日本では，教育の一環としてスポーツが長年にわたって採用されており，スポーツ選手には社会のロールモデルとしての役割が期待されていたが，大学生を中心として数多くの不祥事が発生し社会問題となってきた．一般に大学における競技スポーツは課外活動として実施されており，学生の自由意思による参加が原則となっていることが多いものの，推薦入学やそのほかの要因等の影響によって，その競技への取り組みにおいて様々な問題等が発生する要因となっている．特に，集団における不適応が発生することで，暴力事件や社会的・法的問題事案の発生が危惧される．学校教育における心理教育的援助サービスには 3 段階に整理されている．「すべての学生」がもつ援助ニーズに対応する「一次的援助サービス」，特別の配慮を必要とする「一部の学生」に対応する「二次的援助サービス」，いじめ等，特別な援助が個別になされる「特定の学生」に対応する「三次的援助サービス」の 3 段階がある．大学の部活動については，課外活動と位置づけられているため，特別な配慮が必要な学生を積極的にスクリーニングすることはみられなかったが，大学や部活動チームの危機管理の観点からもスクリーニングの必要性が高まってきた．学校における心理教育的援助サービスのニーズを評価するための方法には，多くの尺度が開発されており，これらの尺度を参照して部活動における援助ニーズを評価する「部活動のいごこち尺度」が開発された（吉田・来田 2013）．この尺度は部活動におけるいごこちを存在感と不安感の両面から評価し，生徒指導上の注意が必要となる生徒への早期対応を目指すものとして作成されている．そこで，本研究では「部活動いごこち尺度」を用いて大学生を対象として横断的にその特徴を明らかにすることを目的とした．

【方法】 横断的調査としてある私立大学 1 校の学生 1,434 名（男子 997 名，女子 437 名）を対象とした．調査内容は，「部活動のいごこち尺度」2 因子（存在感得点，不安感得点）8 項目であり，「1. 全くない」「2. あまりない」「3. どちらともいえない」「4. ときどきある」「5. よくある」の 5 件法で回答を求めた．存在感得点と不安感得点の値から満足群，存在感支援群，不安感支援群，危機群の 4 群に学生を評価分類した．

【結果と考察】 表 1 に学年および性別の平均値を示した．学年と性を被験者間因子とする 2 要因分散分析をおこなった結果，存在感得点では有意な交互作用がみられたため単純主効果を検討した．その結果，男子は 2 年生及び 3 年生と比較して 1 年生で有意に低い値であった．一方，女子は 3 年生と比較して 1 年生及び 2 年生で有意に高い値であった．また，2 年生では男女に差はみられなかったが，1 年生及び 3 年生では男子と比較して女子で有意に高い値であった．不安感得点については，有意な交互作用はみられず，学年にも有意な主効果はみられなかった．性別に有意な主効果があり，男子と比較して女子で有意に低い値であった．

図 1 は競技成績別に 4 類型別の人数割合を示したものである．男子では競技成績による違いはみられなかったが，女子では，競技成績が高いほど，満足群の人数割合が低い値となった．図 2 は各チームについて満足群及び危機群の人数割合をチーム単位で評価して示した散布図である．多くのチームは危機群と評価される割合は 10%以上となるチームもみられ，そのようなチームであったとしても満足群の選手が他のチームと比較して低いとは限らない結果であった．このことは，チームにおいて問題行動が発生する可能性はどのようなチームにも潜在的に有しており，適切なスクリーニングや指導が必要であることを示唆するものである．

表 1：部活動いごこち尺度

	存在感得点			不安感得点			危機群	存在感支援群	不安感支援群	満足群
	n	*M*	*SD*	*n*	*M*	*SD*				
男子										
1年生	402	3.62	0.76	399	2.17	0.93	38	2	301	58
2年生	289	3.82	0.77	289	2.11	1.06	21	2	192	74
3年生	310	3.83	0.84	309	2.21	1.09	23	3	218	65
女子										
1年生	155	3.94	0.71	154	1.74	0.78	6	1	96	51
2年生	153	3.88	0.66	153	1.76	0.69	6	0	106	41
3年生	131	4.18	0.68	130	1.69	0.78	1	0	85	44

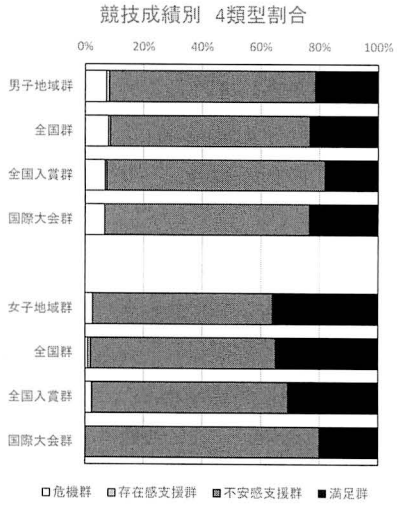


図 1：競技成績別　4 類型割合

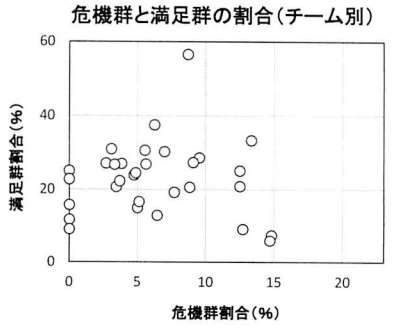


図 2：危機群と満足群の割合

【引用文献】

吉田浩之・来田宣幸 2013 部活動における生徒の援助ニーズを把握するための尺度の作成，琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 20，43-54

（きだ のりゆき・よしだ ひろゆき）

中学生を対象とした部活動における集団への適応感の研究

—縦断的データを用いた検討—

○吉田浩之[1)]　来田宣幸[2)]

([1)]群馬大学教育学部　[2)]京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科)

キーワード：学校教育，生徒指導，いごこち

【研究の目的】 部活動は中学生にとって学業と並ぶ重要な活動の１つであり，学校教育の一環として長く存在してきたにも関わらず，教育課程の中に明確には位置づけられておらず，制度的基準や教育的意義の規定がなかった．生徒指導の観点から考えると，いじめなど生徒指導に関する問題については，学級内だけでなく部活動においても多く発生しているにもかかわらず，部活動と教育活動との関連が不明確であるため，これまで踏み込んだ対策や指導が実施されにくい現状にあった．生徒指導上，学校教育における心理教育的援助サービスには 3 段階に整理されている．「すべての生徒」がもつ援助ニーズに対応する「一次的援助サービス」，登校をしぶる，学習意欲が低下してきた等，特別の配慮を必要とする「一部の生徒」に対応する「二次的援助サービス」，長期欠席，いじめ等，特別な援助が個別になされる「特定の生徒」に対応する「三次的援助サービス」の３段階がある．学級における心理教育的援助サービスのニーズを評価するための方法には，学級満足度尺度など多くの尺度が開発されており，これらの尺度を参照して部活動における援助ニーズを評価する「部活動のいごこち尺度」が開発された（吉田・来田 2013）．この尺度は部活動におけるいごこちを存在感と不安感の両面から評価し，生徒指導上の注意が必要となる生徒への早期対応を目指すものとして作成されている．そこで，本研究では「部活動いごこち尺度」を用いて生徒指導の観点から生徒を評価するものとして縦断的調査によってその特徴および学校生活満足度との関係を明らかにすることを目的とした．

【方法】 縦断的調査としてある公立中学校 1 校の生徒 209 名（男子 125 名，女子 84 名）を対象とした．調査時期は 2015 年 9 月，10 月，12 月，2016 年 1 月，2 月，3 月，4 月の 7 回であった．調査内容は，①「部活動のいごこち尺度」2 因子 8 項目，②「Q-U アンケート」（河村，1999）であった．それぞれ「1. 全くない」「2. あまりない」「3. どちらともいえない」「4. ときどきある」「5. よくある」の 5 件法で回答を求めた．部活動いごこち尺度については，存在感得点と不安感得点の値から満足群，存在感支援群，不安感支援群，危機群の 4 群に生徒を評価分類した．また，Q-U アンケートについては，承認得点と被侵害得点の値から，生徒個人を満足群，非承認群，侵害行為認知群，不満足群の 4 群に評価した．

【結果と考察】 部活動いごこち尺度について，7 回の調査にすべて回答した 125 名を対象として，学年および性別の平均値を表 1 に示した．学年と性を被験者間因子，時期を被験者内因子とする 3 要因分散分析をおこなった結果，存在感得点および不安感得点ともに，性が関係する有意な交互作用および有意な主効果はみられなかった．また，時期×学年に有意な交互作用がみられたため，単純主効果を検討したところ，9 月，10 月および 2 月に学年間の差がみられた．次に，部活動いごこち尺度を用いて，満足群，存在感支援群，不安感支援群，危機群の 4 群別に評価し，その人数割合の推移を図 1 示した．50%前後の生徒は満足群と評価され，40%程度の生徒が不安感支援群と評価された．存在感支援群については，ほぼ認められず，危機群については，毎月，2～5%程度であった．

12 月の調査内容に基づいて，Q-U の学校生活満足度評価の 4 群評価（満足群，侵害行為認知群，非承認群，不満足群）との間でクロス集計をおこなったところ，部活動危機群と評価された 5 名のうち，2 名は学校生活不満足群であり，2 名が非承認群，1 名は満足群であった．また，部活動不安感支援群 63 名のうち，2 名は学校生活不満足群であり，9 名が非承認群，9 名が侵害行為認知群，43 名が満足群であった．

現在，生徒の援助ニーズを把握する目的として学校生活の満足度の観点から評価をおこなう手法等が用いられているが，今回，部活動での適応感を評価する目的でいごこち尺度を用いて調査した結果，個別指導が必要となる課題を有する生徒のうち，学級生活では大きな問題がみられないケースが存在した．従来型の生徒指導は，学級担任や学年教員集団を通した形で実施されることが多く，学級では問題がみつからなくても部活動内で課題がみられる生徒をスクリーニングすることが困難であった．また，部活動に関しては，顧問の指導が中心であり，複数の教員で丁寧に生徒を評価することが困難であった．したがって，本研究の結果より，部活動の適応感を評価する尺度を用いることで，学級担任をはじめとする複数の教員によって，個別的な援助が必要となる生徒を早期に発見することができる可能性が示唆された．

表 1：部活動いごこち尺度

		n	9月	10月	12月	1月	2月	3月	4月
存在感得点									
1年生	男子	34	4.41±0.54	4.59±0.44	4.31±0.60	4.36±0.49	4.41±0.56	4.38±0.76	4.35±0.54
	女子	23	4.42±0.39	4.45±0.73	4.34±0.60	4.18±0.58	4.31±0.57	4.41±0.42	4.34±0.57
2年生	男子	39	4.09±0.68	4.26±0.67	4.23±0.73	4.24±0.68	4.11±0.68	4.21±0.70	4.31±0.63
	女子	19	4.20±0.52	4.01±0.76	4.25±0.72	4.22±0.71	4.14±0.51	4.18±0.66	4.36±0.64
不安感得点									
1年生	男子	34	1.38±0.58	1.37±0.61	1.40±0.58	1.38±0.59	1.42±0.72	1.46±0.89	1.22±0.42
	女子	23	1.28±0.36	1.14±0.26	1.23±0.46	1.14±0.25	1.14±0.30	1.16±0.32	1.17±0.36
2年生	男子	39	1.71±0.78	1.39±0.60	1.46±0.65	1.34±0.50	1.65±0.90	1.28±0.42	1.28±0.42
	女子	19	1.63±0.80	1.33±0.55	1.51±0.69	1.36±0.50	1.54±0.76	1.34±0.64	1.38±0.61

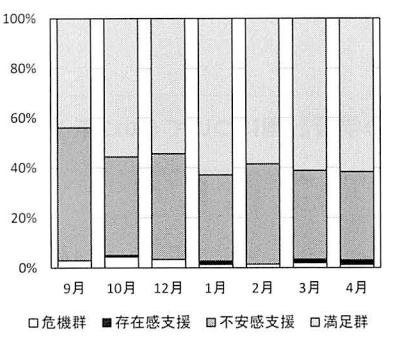


図 1：学習目標到達度尺度との相関

【引用文献】

河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発，カウンセリング研究 32，274－282

吉田浩之・来田宣幸 2013 部活動における生徒の援助ニーズを把握するための尺度の作成，琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要 20，43-54

（よしだ ひろゆき・きだ のりゆき）

小学校から中学校への進学による環境変化に伴う学習習慣の変化

― 私立中学校における事例検討 ―

○大門　耕平[1)]　来田　宣幸[2)]
([1)]近江兄弟社中学校　[2)]京都工芸繊維大学　大学院工芸科学研究科　)
キーワード：学習習慣，学力，家庭学習，学級担任制，教科担任制

【研究の目的】

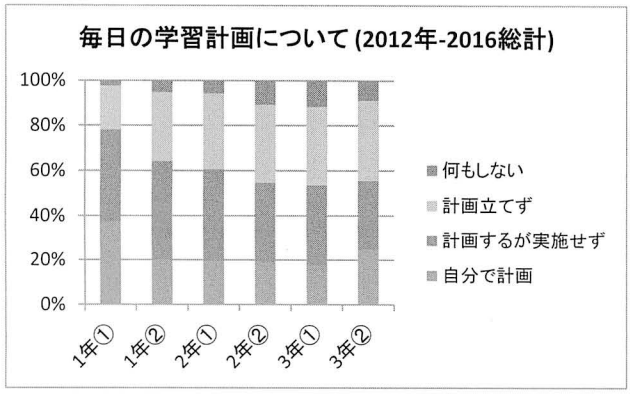
学習活動において、日々の学習習慣が重要であることは自明のことである。しかし、中学校教師として、中学生と接する中で見えてくるものは、この学習習慣を身につけることができていない生徒の多さである。特に強く感じることは、定期考査前だけに学習を集中させる生徒、中学3年での受験を目標とした学習に限られてしまう生徒が多いということである。文部科学省は2010年（平成18年）に教育基本法を改正し、2011年（平成19年）に学校教育法を一部改正した。これに従い作成された学習指導要領について文部科学省は、中央教育審議会初等中等教育分科会、教育課程部会（第4期19回）の中で、「今回の学習指導要領改訂での強化点について、「基礎的・基本的な知識、技術の習得」を基盤とした「思考力、判断力、表現力等の育成」、「学習意欲や学習習慣の確立」及び豊かな心や穏やかな体の育成のための指導の充実」が重要と考えた。」と提言している。学習習慣の確立の重要性が含まれていることに注目したい。継続した学習習慣が広い意味での学力に大きな影響を与えると理解できる。

そこでこの研究では、2012年から2016に渡って実施した中学生三学年の学習習慣についてのアンケートを用い、中学入学から三年間の学習習慣の変化の実態について分析する。これにより小学校と中学校での学習習慣の変化の実態を把握したい。

【方法】

中学生三学年を対象として、マークシート形式で学習習慣についての17項目の質問を行った。調査時期は、4月、11月の二度であり、2012年から2016年まで行った。質問内容は、「毎日の学習計画について」、「宿題の取り組みについて」、「定期考査に向けた学習計画について」などとし、それぞれに四つの回答を設定した。これを約五百名の中学生に2012年から2016年の間実施し、経年変化、学年差を調査した。

【結果】



中学校への進学によって、学習についての意識、取り組み方に大きな変化があることが明らかになった。

まず、「毎日の学習計画について」の質問について、中学1年4月の調査では、「自分で計画を立てて実施」の項目に39%(2014)、40.9%(2015)、32.7%(2016)という結果が得られた。しかし、同じ質問に対し、中学2年4月の調査では、22.4%(2013)、22.5%(2014)、13.6%(2015)、中学3年4月の調査では、18.9%(2012)、20.8%(2013)、12.9%(2014)という結果であった。学習計画を立てて実施することが、中学校に入学後、著しく減少していることが読み取れる。

また、「宿題の取り組みについて」の質問について、中学1年生4月の調査では、「いつもやっている」の項目に、79.7%(2014)、85.5%(2015)、78.3%(2016)という結果が得られた。しかし、同じ質問に対し、中学2年4月の調査では、45.1%(2013)、47.7%(2014)、49.7%(2015)、中学3年4月の調査では、42.3%(2012)、50.3%(2013)、42%(2014)という結果であった。学習計画についての質問と同様、著しい減少が読み取れる。

これら二つの調査項目からは、小学校での学習が日々の学習の積み重ねの傾向が強いことが見て取れる。それに対して、中学校での学習は、計画性や学習習慣、毎日の宿題への取り組みを必要としないものとなっていると読み取ることができる。

【考察】

小学校から中学校への進学により、生徒の学習習慣には変化があることが明らかになった。それは、小学校から中学校への進学の過程で学習習慣が低下するという変化であった。毎日の学習、毎日の宿題という日々の学習習慣について、中学校という環境の中で生徒は、それを失っていく傾向が強いことが分かった。

しかし、定期考査という中学校から始まる試験に向けての学習については、向上することも分かった。

このような小学校と中学校での変化の原因には、それらの学校のあり方、学習のスタイルの違いが要因としてあることが推測できる。学級担任制と教科担当制、定期考査という試験制度など、構造的な違いが小学校と中学校では生まれてしまう。

この構造の違いを明確に定義すること、そしてそれらの構造的な違いの中でも継続して学習習慣を維持していくこと、そのことの策を教科としてだけではなく、中学校として打ち出すことが重要な教育課題と言える。

また、小学校からの学習習慣の継続とともに、中学校で新たに生まれる定期考査に向けての学習習慣を継続すること、高校進学、大学進学に向けての学習習慣を身につけていく方策を見出し、提示していくことも重要であろう。

この調査が、小学校から中学校への進学による環境変化に伴う学習習慣の変化についての提言となり、中学校教育に学習習慣の重要性とそれを実現するための方策の研究への提言となることを強く望む。

大学生の希死念慮とレジリエンスに関する調査

○才野雄大[1)]　神澤創[2)]
([1)] 帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2)] 帝塚山大学心理学部)
キーワード：希死念慮、レジリエンス、自殺予防

【研究の目的】近年、10 代～20 代の若年層の自殺者は増加傾向にあり、この年代に対する自殺対策は、ますます重要である。自殺の危険因子として特に注意しなければいけない要因の一つに希死念慮が挙げられる。希死念慮とは「自殺をしようとする意志」のことである。20 代の 28.4% が希死念慮を持っていることや、男性よりも女性にその傾向が強くみられることが示されている(内閣府, 2012)。自殺予防対策では、希死念慮に対する対応の重要性が考えられるが、希死念慮を持つ者すべてが自殺にいたるわけではない。自ら死を選ぶかどうかを左右する要因の一つにレジリエンスがあると考えられる。平野 (2012) はレジリエンスを「逆境に晒されたり、ストレスフルな出来事によって精神的に傷つきを受けても、そこから立ち直り、適応していくことができる個人特性」と定義している。レジリエンスの特徴として、レジリエンスが高い人ほど精神的に健康であること (長内・古川, 2004)、獲得的レジリエンス要因の「自己理解」と「他者理解」を高めることにより希死念慮を低下させる可能性が示唆されている (佐々木・備前, 2014)。そこで本研究では、大学生を対象にレジリエンスと希死念慮の関係について調査を行った。

【方法】調査対象者　関西圏の大学で心理学を専攻している 1 回～4 回生 118 名を対象に下記の質問紙調査を行った。有効回答数は、112 名 (男性 45 名、女性 67 名、平均年齢 19.5 ±3.42) だった。

質問紙　本調査にあたり、内閣府の自殺対策に関する意識調査をもとに質問紙を作成した。「今までに本気で死にたいと思ったことはありますか」、「過去一年間に本気で死にたいと思ったことはありますか」という質問に対し、「①はい」「②いいえ」、の 2 件法で回答を求めた。また、「過去一年間に本気で死にたいと思ったことはありますか」で「はい」と回答した者に対し、具体的な方法まで考えたかどうかを「①はい」「②いいえ」の 2 件法で求めた。

尺度　①二次元レジリエンス要因尺度 (Bidimansional Resilience Scale：BRS) (平野, 2011) は 2 つの下位尺度 (資質的要因・獲得的要因) からなる 21 項目 5 件法尺度である。②K6 (Kessler et. Al., 2002) 過去一カ月間における精神状態を 6 つの質問に対し、5 件法で回答を求めた。合計点が高いほど精神的な問題がより重い可能性があるとされ、カットオフポイントは 9 点である。

手続き　本調査は、大学の講義時間の一部を利用し、回答に要した時間は 10 分程度であった。調査を実施する際、各個人のデータは外部に漏れることはないこと、気分が悪くなった場合は回答を中止するよう教示をした。

【結果】

1. 希死念慮について

「今までに本気で死にたいと思ったことはありますか？」という質問に対し、全体の 38% (43 名中、男性 13 名、女性 30 名) が「はい」と答えた。また、その内の 30% (13 名中、男性 3 名、女性 10 名) が「過去一年間」に本気で死にたいと思ったことがあり、さらにその内、9 名は具体的な方法まで考えたことがあると回答した。

2. 希死念慮とレジリエンス

次に希死念慮とレジリエンスの関係をみるために、各レジリエンス得点の平均点を算出し、t 検定を行った (Table 1)。その結果、今までにおいて「希死念慮あり群」と「希死念慮なし群」を比較したところ、「希死念慮なし群」の方が資質的レジリエンス要因得点が低いことが分かった (t(-2.621)=110, p<.05)。さらに、資質的レジリエンス要因の中で、「希死念慮あり群」は「希死念慮なし群」よりも統御力が有意に低く (t (-2.13) =110, p<.05)、楽観性でも「希死念慮あり群」の方が低い傾向が見られた (t (-1.984) =69.10, p<.10)。一方、獲得的レジリエンス要因得点については有意な差が見られなかったが (t (-1.598) =110, $n.s$)、獲得的レジリエンス要因の中の自己理解では「希死念慮あり群」が「希死念慮なし群」よりも低い傾向が見られた (t (-1.84) =110,p<.10)。また過去一年間において、「希死念慮あり群」と「希死念慮なし群」を比較したところ、各レジリエンス要因に有意な差は見られなかった。

3. レジリエンスと精神的健康との関連

各レジリエンス要因得点を高群 (平均点以上)、低群 (平均点以下) に分け、各レジリエンス要因・高群、低群の K6 得点を比較したところ、「資質的レジリエンス要因低群」の得点 (M=14.98) が「資質的レジリエンス要因高群」の得点 (M=12.08) より有意に高く (t (2.73) =102.9, p<.05)、また獲得的レジリエンス要因においても「希死念慮あり群」の方が高い傾向が見られた (t (1.67) =110, p<.10)。

Table1. 希死念慮の有無における各レジリエンスの平均点

	希死念慮あり (N=43)		希死念慮なし (N=69)		
	平均値	SD	平均値	SD	t値
資質的レジリエンス	35.1	7.4	38.8	7.32	-2.62 **
楽観性	9.5	3.2	10.7	2.31	-1.98 *
統御力	8.7	2.26	9.7	2.3	-2.14 **
社交性	7.5	2.84	8.4	3.19	-1.54
行動力	9.3	2.56	10.1	2.31	-1.62
獲得的レジリエンス	29.7	5.97	31.3	4.66	-1.60
問題解決思考	9.7	2.8	10.7	1.99	-1.00
自己理解	9.5	2.65	10.3	1.96	-1.72 *
他者心理の理解	10.4	2.51	10.7	1.93	-0.76

*p<.10 **p<.05

【考察】 本調査の結果、大学生の希死念慮とレジリエンスの関係が明らかになった。希死念慮を有する者は資質的レジリエンス要因が低く、その中でも楽観性、統御力 (もともと不安が少なく、ネガティブな感情や生理的な体調に振り回されずにコントロールできる力) が深く関係していることが示された。このことから、希死念慮はレジリエンスの中でも資質的な要因が強く影響していることが示唆され、特に統御力が関係しており、これを高めることができれば、希死念慮を抑制させることに繋がると考えられる。さらに、レジリエンスが高い人は精神的に健康である傾向が強かったことから、WHO が示しているようにレジリエンスを高めることが自殺予防につながると考えられる。今後の課題として、レジリエンスを高めることで希死念慮を抑制させる可能性が示唆されたが、気質的な部分が強い資質的レジリエンス要因を高めるためにはどのような方法を行うのが有効であるのか考えていく必要がある。

【引用文献】

平野真理　(2012)　生得性・後天性からみたレジリエンスの展望. 東京大学大学院教育学研究紀要第, 52, 411-417.

(さいの ゆうた・かみざわ つくる)

「医療安全の意識」に関する因子構造

— 新たな尺度編成を巡って —

○兵藤　好美[1)]　田中　共子[2)]

([1)] 岡山大学大学院保健学研究科　[2)] 岡山大学大学院社会文化科学研究科)

キーワード：医療安全、意識変容、ゲーミングシミュレーション、因子分析

【目的】

我々はゲーミングシミュレーションに注目し、医療安全教育の新たな手法としていくつかのゲームを開発してきた。その結果、単なる講義ではなく模擬体験を行うシミュレーション教育によって、実施後、医療安全の意識変容が見られることが明らかになった（2008.－2015.）。

これまでゲーム開発を多数行ってきたが、ゲームの内容が変わる度に測定項目を、内容に合わせて作成する必要があった。そこで毎回修正を行い、測定を続けてきたが、特に下位尺度に関して継続した比較を行うことが困難となっていた。またゲーム実施では、20 人前後の少数で行うことが多く、多人数を必要とする因子分析が行えない問題を抱えていた。

我々はこの度、比較的どのゲームにも共通し実施内容に大きく影響を受けない共通項目とゲーム内容に合わせた個別項目を分離させ、共通項目に関して比較・継続した測定が可能となるよう、新たな尺度編成に向けた取り組みを行った。

【方法】

調査協力者　A大学の看護学科の学生 50 名。**手続き**「多重課題ゲーム」はナースステーションを想定し、他の作業の依頼によってナース役の学生の作業が中断されるという設定で行われ、フラストレーションとエラー発生の危険を体験するものである。授業の１コマを使って、ゲームを実施した。実施後に、医療安全の意識について尋ねた。**評定用紙**　フェイスシートの他、医療安全の意識を尋ねる 25 項目、ゲームの感触を役割別に尋ねる 15 項目からなる。**分析**　医療安全の意識評定項目について、主因子法－プロマックス回転による因子分析を行った。

倫理的配慮　調査を開始するに当たり、事前に倫理的配慮について説明し、質問紙の提出は任意とした。

【結果】

医療安全への意識 25 項目に対して主因子法による因子分析を行った結果、3 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 3 因子を仮定して主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった　2 項目を分析から除外し、再度主因子法・Promax 回転による因子分析を行った。 Promax 回転後の最終的な因子パターンと因子間相関を Table 1 に示す。なお, 回転前の 3 因子で 23 項目の全分散を説明する割合は、53.51％であった。

第一因子は 9 項目で構成されており、「医療事故防止のために環境整備は大切だと思う」，「薬品の表示の仕方を工夫することは医療事故防止に繋がると思う」，「情報共有は医療事故防止に繋がると思う」など、臨床現場における医療事故防止に向けての対策項目が高い負荷量を示していた。 そこで「医療事故防止対策」因子と命名した。

第二因子も 9 項目で構成されており、「どうすればエラーを防止できるか、行動上の工夫を知っている」，「どうすれば正確に行動することができかを知っている」，「どんな時にどんな風に記憶が歪むのかを理解できている」など、エラー防止に関する方法の知識項目が高い負荷量を示していた。そこで「エラー防止に関する知識」因子と命名した。

第 3 因子は 5 項目で構成されており、「自分は医療事故を起こす可能性があると思う」，「自分では気づかないうちに色々な間違いをしている」，「時間の余裕がないと間違いをしてしまうと思う」など自分のエラーを犯す可能性に関する項目が負荷量を示していた。そこで「エラーを犯す可能性」因子と命名した。

信頼性の検討として、内的整合性の指標であるクロンバックの α を用いた。第一因子（α =.89）、第二因子（α =.88）、第三因子（α =.85）ともに十分に高い値が得られた。因子間の相関は、それぞれ第一因子と第二因子の間で r=.24，第一因子と第三因子の間で r=.41，第二因子と第三因子の間で r=.30 であった。

【考察】

「医療事故防止対策」，「エラー防止に関する知識」，「エラーを犯す可能性」の因子が抽出された。これらの結果は、これまでの分析結果を支持するものであった。

医療安全に関するゲーミングシミュレーションの実施は、医療事故対策への気づきを高めること、エラー防止に関する知識を獲得に繋がること、エラー発生の可能性が自分にもあり得るというリアリティの獲得、といった意識変容に繋がる模擬体験であることが、示唆されたと言えよう。

今回はサンプル数が少なく、安定した結果が得られたとは言いがたい。今後はさらに対象者に加えて実施例も増やし、より精密な検討を行なっていきたい。

Table1　「医療安全の意識」に関する因子分析

No	項目	1	2	3
20	医療事故防止のために環境整備は大切だと思う	0.89	0.22	0.15
22	薬品の表示の仕方を工夫することは医療事故防止に繋がると思う	0.86	0.29	0.38
18	情報共有は医療事故防止に繋がると思う	0.84	0.23	0.33
24	就職したら細心の注意や工夫をして医療事故防止に努めたい	0.82	0.20	0.41
21	記憶は曖昧になりやすいと思う	0.73	0.11	0.49
11	複数の業務を同時にすると間違いが生じやすいと思う	0.71	0.13	0.21
1	医療事故はよく注意しておかなければならないと思う	0.56	0.21	0.38
3	優先順位を考えて行動することは、事故防止のためにも	0.56	0.00	0.48
19	自分の間違いには自分で気づかないと思う	0.51	0.28	0.29
13	どうすればエラーを防止できるか、行動上の工夫を知っている	0.27	0.90	0.19
17	どうすれば正確に行動することができかを知っている	0.20	0.85	0.32
16	どんな時にどんな風に記憶が歪むのかを理解できている	0.16	0.77	0.25
12	優先しなければならないものは何かを、知っている	0.27	0.68	0.28
14	一度に色んなことをするとどう混乱するか知っている	0.08	0.68	0.44
15	緊張や焦りが自分の作業にどう影響するのか知っている	0.10	0.67	0.47
7	どんな時に情報が歪むのか知っている	0.14	0.66	0.05
6	急いだときに自分がどんな反応をするのか知っている	0.34	0.65	0.38
25	自分は注意深い方である	0.13	0.43	−0.19
2	自分は医療事故を起こす可能性があると思う	0.59	0.22	0.75
23	医療事故を防ぐには、学生時代からの教育が大事だと思う	0.54	0.38	0.74
8	自分では気づかないうちに色々な間違いをしている	0.16	0.28	0.73
9	時間の余裕がないと間違いをしてしまうと思う	0.53	0.24	0.69
4	医療事故のことを考えると怖くなる	0.59	0.21	0.64

因子間相関	I	II	III
I	−	0.24	0.41
II	0.24	−	0.30
III	0.41	0.30	−

謝辞　本研究は、平成 24-26 年度　科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究「プロセスモデルに基づく医療安全教育のためのゲーミングシミュレーション法の開発」の補助を受けて実施した。（ひょうどう よしみ・たなか ともこ）

食物アレルギーと対人関係不安のPAC分析

○杉山沙羅　　杉山大成　　内藤哲雄
（福島学院大学大学院）（中島村教育委員会）（福島学院大学福祉学部）
キーワード：食物アレルギー、対人関係、会食

【目的】本研究ではアレルギー症状をもつ人が、対人関係での受容や拒否についてどのように感じているのかを診断的に検討することを目的とした。

【方法】＜被検者＞食物アレルギーを5年前に発症した20代前半の青年女子A。

＜手続＞連想刺激は、「あなたに食物アレルギーがあることで、他人との交流でどんなことを感じたり、イメージしたりしますか。違和感や不安を感じたり、拒否される恐怖を感じたりすることがありますか。それはどんな人達とのどんな交流でですか。交流に不安を感じた時に、どんなことをしたいと思いますか。また実際にはどんなことをしてしまいがちですか。」と口頭で教示し、文章も提示した。次に連想反応項目を重要順に並べ換えさせた後、各項目の直感的類似度を7段階で評定させた。ついで、ウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での連想イメージと＋－0イメージを質問した。

【結果】各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は、Fig.1のようになった。

＜被検者による解釈：抜粋＞クラスター1は、「死」～「友達」の13項目：死や恐怖、何も気にせず会食等で食べたい、食べたい気持との葛藤がつながっているような気がします。
また、理解者が欲しいけど、まわりに迷惑をかけるし大変だし、辛いし、なぜ私だけなんだろうと思うことが多いです。理解者としか食事ができなくて、だから理解者がもっと欲しいと思う。親しい友達、恋人、友達はつながっているような気がします。親しい友達や恋人には、もっと私のことを知って欲しい。しっかりとした、理解者になって欲しい。理解者が欲しいという気持ちが強く出ている。

クラスター2は、「引かれたときのショック」～「悲しみ」の6項目：全体的に、悲しみがすべてに共通しているのではないかと思います。そして、一番辛いことがまとまっているグループだと思います。食物アレルギーを持っていなかったら、考える必要性のないことだと思います。でも強がっている感じがします。

クラスター3は、「まわりが理解してくれない」～「付き合いが悪い人だと思われる」の11項目：初対面の人がなかなか理解してくれない。初対面の人たちや、初めての場所では全てに時間がかかる。これは理解も含めた時間です。うまくいかないことをまとめたグループだと思います。そして、本当は嫌なことをまとめたグループでもあるような気がします。唯一、希望だとすれば同じような仲間を探すというのをしたいのかな。もしかしたら知り合いや初対面のひとに食物アレルギーを持つ人がいるかもしれない、同じような人や思いを持った人がいるかもしれないという希望を持っているのかもしれません。全体的には苦労する、疲れる、というのが伝わってきます。特に初対面の人や知り合いには苦労する、疲労するという感じがします。

【考察】クラスター1は、食事に制限があること、死や恐怖も気にせず食べたいとの葛藤を理解してくれる恋人、親しい友達、友達がまとまっている。自身の恐怖、不安、葛藤を受容してくれる人々の必要性を感じていることを示唆する。そこで、**＜食物アレルギーへの恐怖、葛藤、辛さを受容してくれる友達の存在必要性＞**のクラスターであるといえよう。

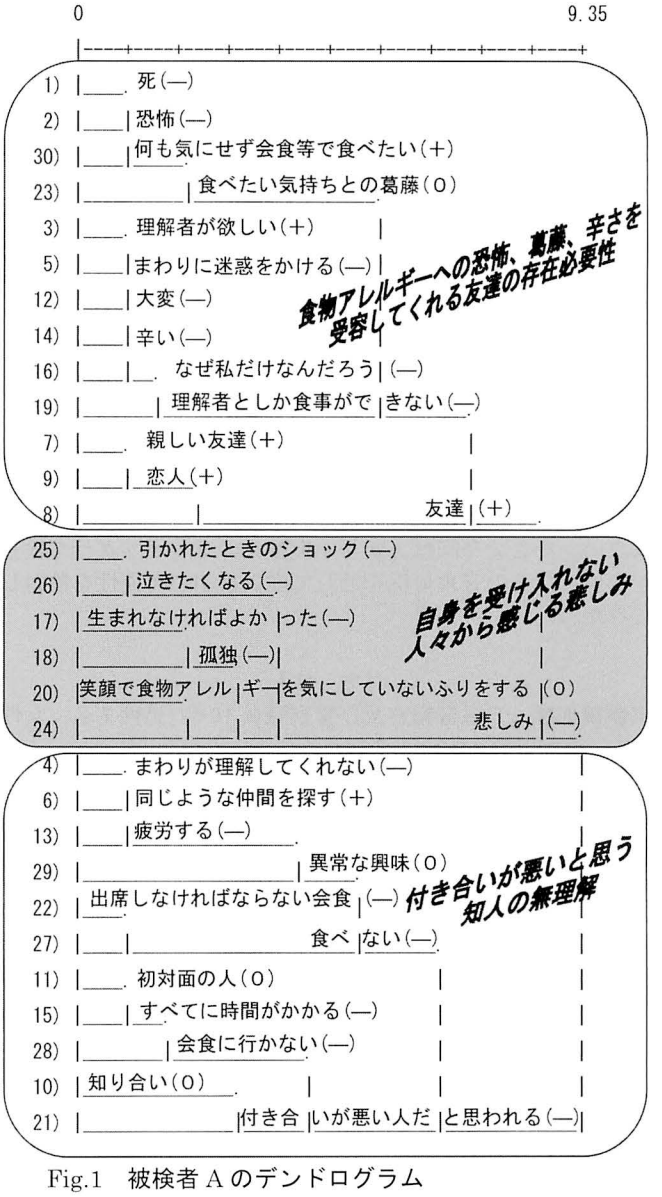


Fig.1　被検者Aのデンドログラム
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの（　）内の＋－0は単独でのイメージ

クラスター2は、引かれたときのショックが、自己の存在を否定され、泣きたくなり、孤独を感じるがそのことを気にしないふりをすることの悲しみを示している。**＜自身を受け入れない人々から感じる悲しみ＞**といえるであろう。

クラスター3は、自分と同じ悩みを持ち受け容れてくれる仲間を探すことに時間がかかり疲労し、知人からはつきあいが悪いと思われる。**＜付き合いが悪いと思う知人の無理解＞**と解釈できよう。

以上は、本被検者がもつ食物アレルギーと対人関係での受容・拒否イメージについての診断的構造を示唆するものであろう。

（すぎやまさら・すぎやまたいせい・ないとうてつお）

Polygraph 検査における返答の音声分析

○安木　博臣
（福岡県警察科学捜査研究所）
キーワード：ポリグラフ　犯罪　音声

【目　的】

日本警察の犯罪捜査において，Polygraph（ポリグラフ）検査が利用され始めてから半世紀以上が経った。ポリグラフ検査の名称もGKT(Guilty Knowledge Test：虚偽検出検査)に始まり，現在はCIT（Conceald Information Test：隠匿情報検査）と表現されることが多くなった。ポリグラフ機器はアメリカ製のアナログ式から，近年は国内で開発された，性能の良いデジタル式のポリグラフに移行し，使用されるようになった。ポリグラフ検査では現在も呼吸，皮膚電気反応，及び心臓血管系の生理指標を測定している。

これまで，ポリグラフ検査中の被検査者の音声に着目し，実験や実務のポリグラフ検査を通して得た音声と虚偽との関係について研究報告をしてきているところである(安木 1995, 安木・岩宮 2001, 2002, 2003 等)。しかし，人の話声等から虚偽か否かを判定できる可能性については，厳しい指摘や評価はあってもその信頼性が示唆された研究報告はほとんど見られない。そこで今回は，新しい実験条件下でポリグラフ検査を実施し，その音声分析を通して虚偽検出の可能性を検討してみた。

【方　法】

実験参加者　F県警察官及び警察職員10名(男性7名，女性3名，平均年齢34.8±4.7歳)

刺激　Multi Trigger System を使用し，CRT モニター(三菱製RDF171S)画面上に「あなたの名字は○○さんですか？」と呈示した。CRT モニターは実験椅子に座った参加者の眼前80cm の位置に設置し，参加者の音声は小型ステレオマイクロフォンを通してリニアPCM レコーダー（SONY 製PCM-D50）に録音・記録した。○○に該当する名前は，参加者本人の名字(ひらがな)を裁決項目とし，「せき」・「こばやし」・「にしえ」・「やまね」の4つを非裁決項目として呈示した。また，モニター画面上での呈示時間は 5000msec で，各々の名字の呈示間隔は 15 秒とした。裁決項目を含む5項目構成を1セットとし，呈示順序を変えながら4セット実施した。

手続き　参加者が検査室に入室後、実験要領を書面と口頭で以下のように教示し理解させた。

> モニター画面上に「あなたの名字は○○さんですか？」と順次呈示されていきますが、どの名字が表示されても，全て「○○ではありません」と返答してください。つまり，自分の名字が呈示された時にウソをついてもらうことになる訳です。あなたの返答で，自分の名字が検査者に見破られないようにできる限りの努力をしていただくのが実験の目的です

実験終了後には書面による内省報告を得て終了とした。なお，今回は音声のみを録音・記録し，通常の呼吸等の生理指標は測定しないこととした。

分析　録音・記録した参加者が「○○ではありません」と返答した際の音声を分析ソフトPraat を使って分析した。返答開始から終了までの音声Pitch の最高値と最低値を選出した。そして，最高値－最低値を算出し，平均値と分散について裁決項目と非裁決項目間で比較検討した。

【結　果】

裁決項目と非裁決項目間のPitch の平均値に有意な差は認められなかった。また，F 検定により両項目間のPitch の分散を比較した結果，全体的には有意差は認められなかった。しかし，個人内で見てみると１０名中６名に有意差が認められ，非裁決項目より裁決項目の方の分散が小さくなった者が５名で，逆に裁決項目の方が大きくなった者が１名であった（$p < 0.05$）。各個人の両項目間のPitch の分散をFig.1に示す。

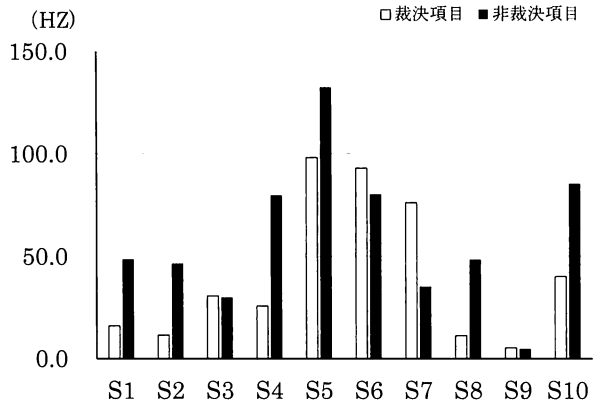


Fig. 1　裁決・非裁決項目のPitch

【考　察】

今回の結果から，返答する際の裁決項目に対しては，音声の高低に変化をつけないように特に意識を集中させたものと思われる。また，非裁決項目に対しては，それ程意識を集中させる必要がなかったため分散が大きくなったと考えられる。内省報告から，「見破られないように努力しましたか」の質問に対する５段階評定（「１できる限り努力した」～「５全くしなかった」）で，「１できる限り努力した」と回答した者６名，「２ある程度努力した」者４名という結果からも全員が裁決項目に意識を集中していたことが推測される。また，自由表記による回答では，「発音にむらが出ないように気をつけた」「声のトーンを同じにした」「声の調子が変わらないように心がけた」「声の高低を変えないようにした」など，具体的な工夫が報告された。これらのことから，裁決項目に対して意図的に音声をコントロールすることはある程度可能であると思われる。しかし，実務場面においては実験場面よりも心理的ストレスがかなり高まると思われ，裁決項目に対する音声コントロールが困難になると考えられる。今回の裁決項目に対する分散が有意に大きくなった１名については，実験ではあっても裁決項目に対する心理的ストレスが高かったのではないかと推測される。今後は，音声分析における虚偽検出の可能性について，実験に加え実務との比較検討が必要であると思われる。　（やすき　ひろおみ）

自動車に対する悪戯傷の検討３

― チェックシートによる加害行動の分析―

○阿部光弘[1)]　染矢瑞枝[1)]　桐生正幸[2)]
([1)]三井住友海上火災保険株式会社　[2)]東洋大学)
キーワード：悪戯傷、自動車、加害者の動機

【目　的】

自動車に対する傷付け行為が発生した場合、損害保険会社は保険事故に該当するか否か、つまり「損傷が保険金請求者以外の第三者によって行われているか」を調査することになる。しかし、第三者による犯行なのか、保険金請求者による犯行（保険金詐欺）なのかを判別することは難しく、自動車工学の視点から発生傷を分析（凶器の特定、傷の生成順序等）すると共に、被害現場の環境調査を基に最終的には担当者らの経験則から判断してきているが、訴訟に持ち込まれた際に裁判官を納得させることが可能な客観的なデータや根拠を提示するまでには至っていない。

そこで前報では、悪戯傷の実験を行ったところ、傷付け範囲・部位から推察される犯行計画と犯人属性、犯行現場の監視性といった要素が「保険金詐欺」の有無の推測指標となることが示唆された。今回、実験結果を踏まえた「チェックシート」を試作し調査実務に取り入れたことから、加害者動機の推定効果について検討してみたい。

【方　法】

保険金目的詐欺の判別行うためチェックシートを作成した。チェック項目は先ず２つの評価にて分かれる。第１の評価は「面談中の被害者」項目であり、車両被害を申告している被害者の「説明の内容」、「説明時の言動・態度」、申告内容に関する「説明の詳細」の３つの下位項目にて構成する。「説明の内容」では、被害者の説明内容の合理性や矛盾などを評価する。「説明時の言動・態度」では、攻撃的か、興奮しているかなどを評価する。これらの合計得点を「A」とする。「説明の詳細」では、被害時間や被害場所などの具体的内容に関する不審点を評価する。この合計得点を「B」とする。そして、得点「A」と得点「B」を加算し、それを被害者情報得点「Ⅰ」とする。

第２の評価は、「被害現場の情報」項目であり、「車両の傷の状態」と「傷の状態と被害現場の関連」の２つの下位項目にて構成する。「車両の傷の状態」では、傷の数、傷付け部位、傷の全長などを評価する。この合計得点を「C」とする。「傷の状態と被害現場の関連」では、被害現場の実際の明るさや人通りなどが、被害者が申告している内容、もしくはその申告内容から十分想定される内容と、妥当性が高いか低いかを評価する。この合計得点を「D」とする。そして、得点「C」と得点「D」を加算し、それを被害現場得点「Ⅱ」とする。

次に、図-1 を用いて、被害者情報得点Ⅰを縦軸に、被害者現場得点Ⅱを横軸に、それぞれ記して、それら両得点の交わる点が布置された領域から保険金詐欺目的の可能性を検討する。双方の得点が高いほど保険金詐欺目的の可能性が高いと推定される。また、被害者に説明を求めるにあたっては、担当者によって質問内容（情報の獲得方法、矛盾の確認方法）が異なる可能性が高いことから、質問内容を 11 項目設定したうえでフロー化を図った。特に、被害現場で実際に被害を認知した時の真正の記憶と、作られた記憶（イメージ）を比較した場合では、被害状況に関する説明の再生率（精度）が異なると推察されるため、類似した質問を複数用意し、間隔を空けて質問を行い説明内容に一貫性があるかどうか、「言動・態度」に変化が生じるかの確認を行った。

【結果と考察】

図１は保険金の請求事案３０件を対象にチェックシートを使用し、全ての得点データを布置したものである。保険金詐欺目的の可能性が高いと推定された事案（得点Ⅰまたは得点Ⅱが 20 点以上）は１５件で、そのうち１３件（86.7%）が支払謝絶対応になっていた（図１に■で表記）。

一方、最終的に保険金支払に転化した２件（13.3%）の事案（図１に□で表記）は、被害者情報得点Ⅰが 10 点未満であった。「説明の詳細」の得点が低い事案は、支払謝絶が難しいことが示唆された。

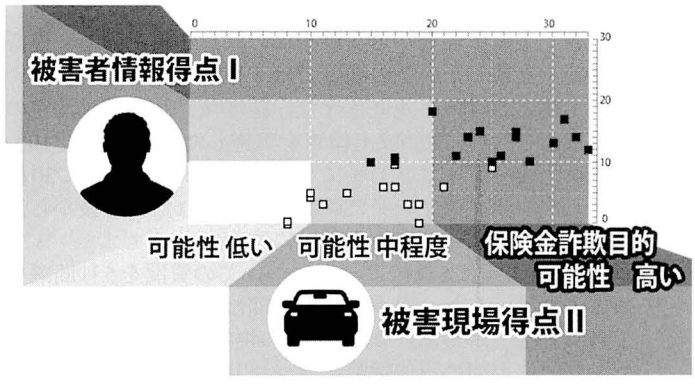


図１　被害者及び被害現場の得点布置図

また、保険金詐欺と怨恨は傷付け範囲が広いという共通の特徴がみられ、傷の工学的分析のみでは判別信頼性が低かったが、保険金詐欺目的の可能性が中程度得点データを相関分析した結果、被害者情報得点Ⅰが３点以下と低レベル、且つ被害現場得点Ⅱが 20 点前後の事案は怨恨の可能性が高いことが確認された。怨恨による被害者は想定外の実体験（情動・行動の変化）を伴っていることから、獲得情報が立体的であり、担当者の質問に対する回答が合理的であり違和感がない傾向にある。また、実体験に関係する質問であるため、被害者の回答も協力的で冷静な態度になる傾向が強い。

一方、保険金詐欺の場合、実体験を伴わない作られた情報・シナリオ（架空の加害者）であるとともに、情報が平面的であるため、質問に対する回答は曖昧さが目立つ傾向にある。また、嘘がばれるかもしれないという緊張感・嫌悪感から心理的ストレスが長期化すると、担当者に対して興奮した言動、攻撃的な態度となる傾向が見られた。

以上、被害者の説明内容や態度に着目した動機判定は、有効な方法であることが示唆された。今後は、新たな評価項目（被害者の協力姿勢、事故経験等）や得点配分の妥当性を検証し、チェックシートの精度を高めていきたい。

（あべみつひろ・そめやみずえ・きりうまさゆき）

眼球運動指標を用いた虚偽検出

— 非接触的測定における刺激呈示法の検討（2）—

○小野洋平　石岡綾香　軽部幸浩　谷口泰富
（ 駒澤大学文学部 ）

キーワード：虚偽検出検査，眼球運動，一覧呈示，音声質問

目　的

近年の虚偽検出検査研究において，新たな検出指標として眼球運動が注目されている。一方，眼球運動の検査指標としての有効性は自律神経系指標との同時測定が可能な手続きによって検討されなければならない。そこで前報では他指標との同時測定が可能な刺激間間隔で実験を行った。その結果，ISI を延長した場合においても指標の有効性が示された。一方，検査での刺激呈示は音声で行われることが多く，また刺激のモダリティが検出結果に影響を及ぼすことも示唆されている。そこで本研究では視覚刺激と聴覚刺激を併用した刺激呈示方法を採用し，改めて眼球運動指標の有効性について検討した。

方　法

実験参加者　23 名（男 8 名，女 15 名，年齢 20.1 ±0.63 歳）

実験器材　竹井機器工業製 TalkEye Ⅱ カバー型トラッキング検出器（T.K.K.2940g）および制御プログラム(ver.1.1.8)

実験刺激　2，3，4，5，6 の数字カード

手続き　実験参加者から実験参加の同意を得たのち，模擬窃盗課題を実施した。この課題では 5 種類の数字カードのいずれか 1 枚と 500 円を隠匿させた。隠匿後，眼球運動測定のための校正を行い，虚偽検出検査を実施した。検査では，100 cm の観察距離でディスプレイに 5 枚のカードを横一列に 30 秒間呈示した。ディスプレイに刺激が呈示された 5 秒後から，実験参加者が隠匿しているカードについて，”2 ですか” ”3 ですか”というように 5 枚のカードについての質問を 5 秒間隔で音声により呈示した。音声による質問はあらかじめ作成した人工合成音を使用した。なお，1 回の視覚刺激呈示時間は 30 秒であり，その間の眼球運動をサンプリング周波数 60 Hz，分解能 0.1°で測定した。また，実験は 5 質問を 1 系列として計 5 系列実施し，系列間に 3 秒間のブランク画像を表示した。画面に呈示する数字カードの並びは系列ごとにランダムとしたが，画面の 5 か所に呈示される数字の出現率がいずれも同一になるように操作した。同様に音声質問の呈示順序もランダムとした。実験参加者には音声質問に対して否定の返答を行わせるとともに，隠匿した数字カードが検査者にばれないようできる限り努力するよう求めた。さらに，実験参加者の動機づけを高める目的で，隠匿したカードの検出を回避できた場合には報酬として 500 円を進呈すると教示した。検査終了後，検査者は隠匿された数字カードが何であったかを実験参加者に告げ，内省の報告をさせたのち実験を終了した。

結果の処理　本研究では，各画像刺激が呈示されている領域内に視線が 166 ms 以上とどまっている場合を 1 回の停留と定義した。そこから，1 試行で生起した刺激への停留を加算し，これを停留回数とした。同様に，1 試行で生起した各刺激への停留持続時間の総和を総停留時間と定義し，裁決刺激と非裁決刺激に対する停留回数と総停留時間を分析した。また，視覚刺激呈示期を 5 秒ごとに分け，刺激呈示から 5 秒までの無音期とその後の裁決・非裁決質問期の眼球運動を比較した。

結　果

図 1 は，1 つの裁決画像と 4 つの非裁決画像に対する停留回数を質問期ごとに示したものである。

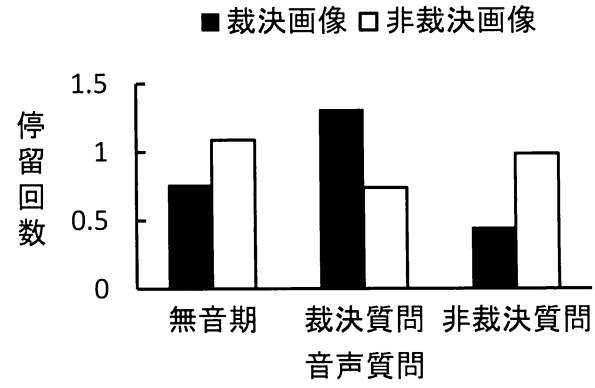


図 1　停留回数

分散分析の結果，交互作用が有意であったため単純主効果検定を行った。その結果，いずれの質問期においても裁決画像と非裁決画像の停留回数は有意であった（*ps* <.01）。

図 2 は，1 つの裁決画像と 4 つの非裁決画像に対する総停留時間を質問期ごとに示したものである。

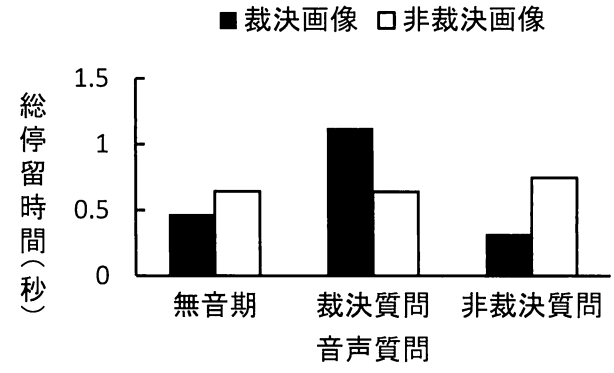


図 2　総停留時間

分散分析の結果，交互作用が有意であったため単純主効果検定を行った。その結果，いずれの質問期においても裁決画像と非裁決画像の総停留時間は有意であった（*ps* <.01）。

各質問呈示期には音声質問で読み上げられた数字画像への停留偏向が認められたため，音声質問の数字と合致する数字画像（例：音声—2 と画像—2）への停留データを再算出し，これを質問間で比較した。その結果，裁決質問呈示期の裁決画像への停留回数と総停留時間は非裁決質問呈示期の非裁決画像に比べて有意に減少・短縮を示していた(*ps* < .01)。

考　察

刺激呈示後の無音期においては先行研究の結果と同様に裁決画像への停留抑制が確認された。一方，音声質問呈示期においても，裁決画像への停留抑制が認められた。これは，音声を伴った刺激呈示法においても裁決・非裁決画像に対する眼球運動の差異は明確であり，眼球運動が検査指標として有効であること示している。なお，音声質問呈示期では，裁決刺激・非裁決刺激とは独立的に，読み上げられた数字に対して一過性の眼球運動停留が認められたが，これは被検査者が音声刺激に対して反射的に視覚刺激との対応・確認を行っていた結果であると考えられる。

虚偽検出検査における質問と刺激価の影響

○石岡綾香　小野洋平　軽部幸浩　谷口泰富　（ 駒澤大学文学部 ）

キーワード：虚偽検出，質問，末梢皮膚血流

目　的

石岡他（2015）は，虚偽検出検査において２つの異なる質問形式に対して同じ返答をさせた場合の血流量および心拍数の変動について検討を行なっている。その結果，同じ質問形式を連続的に呈示した場合，両質問形式ともに裁決刺激と非裁決刺激に対する血流量に有意な違いが確認されているものの，心拍数では否定形式質問の場合において認めることができなかった。これは，実験的虚偽検出場面における実験参加者の動機づけ等に起因するものと考えられる。そこで，本研究では，刺激の価値（以下，刺激価）を操作し，上記の検討を行なった。

一方，石岡他（2015）では刺激の反復呈示に伴う予期反応が認められたことから，刺激価の違いがこれらの特異な反応に影響を及ぼすのかについても検討した。

方　法

実験参加者　健常な男女 30 名(男 12 名，女 18 名，平均年齢 19.4±0.96 歳)

測定指標　末梢皮膚血流および瞬時心拍数（beat per minute：以下心拍数）を用いた。血流量はレーザードップラー血流計（ALF21D；アドバンス）を使用し，非利き手第２指末節にテープにて固定した測定用ディスク型プローブからサンプリング周波数 400Hz で連続記録を行なった。心拍数は非利き手第４指末節に装着された脈波センサーにより誘導記録した。

刺激（音声）　①質問刺激：裁決刺激･･･「腕時計」；非裁決刺激および前刺激（裁決刺激の直前に呈示される非裁決刺激）･･･「指輪」「ネックレス」「ブレスレット」「ブローチ」②質問形式：肯定形式質問･･･「…をとったのですか」；否定形式質問･･･「…はとらなかったのですか」

質問呈示法　裁決刺激である「腕時計」が系列内第２，３，４番目のいずれかとなるように，５つの質問刺激をランダムに配置した系列を作成した。この系列を計６回反復呈示し，前半３回と後半３回で質問形式を変更した。

手続き　まず，実験参加者に模擬窃盗を行なわせ，その後，測定器具を装着し，模擬窃盗に関する質問刺激を呈示した。実験参加者には「自分は何も盗っていない無実の人間である」という意図をもって，いずれの質問に対しても「とっていません」と返答するように教示した。実験はベースライン（１分）を測定した後，各刺激を 20 秒間隔で呈示した。なお，第３系列と第４系列間に１分間の休憩時間を設けた。

分析データ　血流量は１秒ごとの平均値として，心拍数は瞬時心拍数として出力し，これらを系列内で標準化した。なお，分析には，平均値が 5ml/min/100g 以下の項目の血流量，ノイズ混入が疑われる項目の心拍数を除いたものを使用した。

結　果

図１は,第１，第４系列の反応を除いた刺激種類（裁決刺激・前刺激・非裁決刺激）および質問形式（肯定形式質問・否定形式質問）別の血流量の標準得点である。分散分析の結果，刺激種類のみ有意であった（$F(2, 563) = 49.39$, $p<.01$）ため，多重比較を行なったところ，裁決刺激と前刺激（$p<.01$），非裁決刺激と前刺激（$p<.01$），裁決刺激と非裁決刺激（$p<.01$）に対する血流量に違いが認められた。

一方，図２は第１，第４系列の結果を除いた条件別の心拍数の標準得点である。分散分析の結果，刺激種類のみ有意であった（$F(2, 579) = 10.92$, $p<.01$）ため，多重比較を行なったところ，裁決刺激と前刺激（$p<.01$），裁決刺激と非裁決刺激（$p<.01$）に対する血流量に違いが認められた。

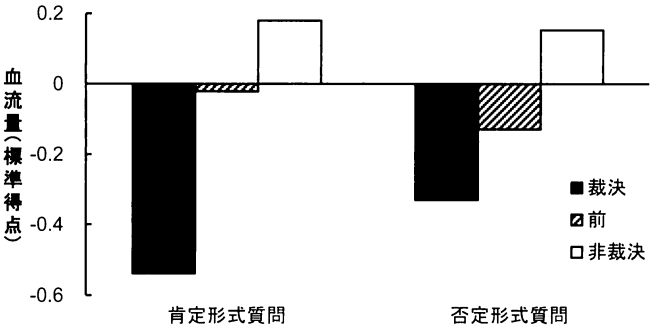


図１　各質問形式における血流量

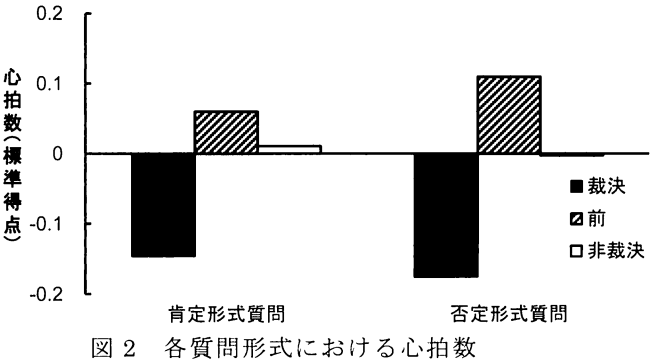


図２　各質問形式における心拍数

考　察

本研究の結果，全ての条件で裁決刺激と非裁決刺激に対する血流量および心拍数に有意な違いが確認された。しかし，裁決刺激と非裁決刺激に対する心拍数の違いは石岡他（2015）では確認されていない。このことは，刺激価を操作したことにより実験参加者の検査に対する動機づけが変化したことが原因であると推測される。さらに，本研究では質問の反復呈示に伴う実験参加者の予期を，裁決刺激の直前に呈示される非裁決刺激（前刺激）に対する反応から検討した。その結果，質問形式とは独立的に，前刺激呈示後の血流量は他の非裁決刺激呈示後の血流量よりも明らかに減少していた。すなわち，前刺激が非裁決刺激であるにも拘らず，実験参加者はそれを他の非裁決刺激とは異なる刺激と認識していたものと考えられる。これは，刺激予期を虚偽検出検査における判定の一視座とすることの有効性を血流量指標からも支持する結果である。一方，この前刺激に対する特異な反応傾向は心拍数指標上では必ずしも顕著ではなく，しかも，その変動の方向性は血流量指標の場合とは逆であった。この違いについては，現在追実験を行い検討中である。

体育・スポーツ系学生の健康観に関する研究（Ⅰ）

○大関貴久[1)]　田崎元久[2)]　福場久美子[3)]　森脇保彦[4)]　岡田龍司[5)]　岡崎祐史[6)]　藤田主一[3)]
([1)]東日本国際大学経済経営学部　[2)]道都大学経営学部　[3)]日本体育大学体育学部　[4)]国士舘大学体育学部
[5)]近畿大学経営学部　[6)]武庫川女子大学健康スポーツ科学部)
キーワード：大学生，健康観，スポーツ

【研究の目的】 世界保健機関（WHO）は，「健康とは，病気でないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあることをいいます。」（日本WHO協会訳）と定義している。現在，われわれを取り巻く社会情勢や生活環境が大きく変化し，健康に対するさらなる志向性が求められていると言ってよい。昨年度，われわれは東日本大震災を経験した大学生と東京在住の大学生との健康観の相違を調査し，有意義な結果を得ることができた。本研究は，健康志向が強いと思われる体育・スポーツ系学生に調査を行い，彼らが捉えている健康観の構造を明らかにすることを目的にする。加えて体育・スポーツ系学生の健康観の構造と自己肯定意識尺度とどの様な関係をにあるかを検討する。

【方法】 森脇他（2011）は「健康とは…」という刺激語を与えた20答法による予備調査を実施し，学生180名から約1800語の回答を得て，これを基礎に「健康はどの様な状態を指すのか」について質問紙を作成している。この質問紙はフェイスシートに続いて，40項目で構成されており，5件法で回答するものであった。本研究では，森脇他（2011）の質問紙を，体育・スポーツ系学生を調査対象者として実施した。

調査期間は2016年4月中旬から下旬であった。調査対象者は全国4大学の体育・スポーツ系の大学生で合計902名であり，調査目的や内容説明の後，承認を得て，集合調査法にて実施し回収した。

健康観についての40項目の質問について，天井効果・フロア効果の検証を行い，フロア効果が認められた9項目を削除した。天井効果・フロア効果が認められなかった31項目について，最尤法のバリマックス回転による因子分析を行った。解析にはspss statistics 22を用いた。

【結果】 因子数の決定には，固有値1.0以上を基準とし，3因子とした。因子負荷量の絶対値0.4を基準に項目の取捨を行い，項目数の低減を図った。因子負荷量の絶対値が0.4に満たなかった1項目を削除した。信頼性の検討にはCronbachのα係数を用い，因子の内的整合性を検討した。

体育・スポーツ系学生の健康観における因子分析結果を表1に示した。第1因子は，「(33) 健康とは，三食をしっかり食べること」「(22) 健康とは，心身の調和が取れた状態のことである」「(6) 健康とは，気持ちの良い汗をかくことである」等の15項目において高い因子負荷量を示し「生活習慣的健康」因子と解釈した。なお，α=0.97と高い内的整合性を示した。第2因子は，「(15) 健康とは，豊かな人間関係を築くことである」「(24) 健康とは，人生に目標を持つことである」「(20) 健康とは，信頼できる仲間を持つことである」等の8項目において高い因子負荷量を示し「社会的健康」因子と解釈した。なお，α=0.90と高い内的整合性を示した。第3因子は，「(21) 健康とは，自分で歩けることである」「(26) 健康とは，腰痛や関節痛などの障害がないことである」「(16) 健康とは，五体満足のことである」等の7項目において高い因子負荷量を示し「肉体的健康」因子と解釈した。なお，α=0.89と高い内的整合性を示した。

表1　体育・スポーツ系学生の健康観における因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	共通性
生活習慣的健康　α=.97				
(33)健康とは、三食をしっかり食べることである	.770	.233	.335	.759
(22)健康とは、心身の調和が取れた状態のことである	.732	.329	.316	.744
(6)健康とは、気持ちの良い汗をかくことである	.728	.440	.188	.759
(18)健康とは、早寝早起きを心がけることである	.710	.282	.332	.693
(28)健康とは、元気に働けることである	.703	.204	.480	.766
(13)健康とは、酒を飲み過ぎないことである	.701	.287	.305	.666
(30)健康とは、自己管理することである	.699	.348	.321	.713
(38)健康とは、楽しい生活ができることである	.691	.439	.319	.772
(17)健康とは、適度に運動できることである	.689	.283	.386	.704
(40)健康とは、人生に生きがいを持つことである	.680	.536	.189	.785
(34)健康とは、人間が一番求めていることである	.633	.345	.257	.586
(39)健康とは、暴飲暴食をしないことである	.624	.320	.355	.618
(14)健康とは、心がポジティブなことである	.621	.511	.255	.712
(25)健康とは、笑顔でいることである	.613	.528	.251	.718
(37)健康とは、ストレスがないことである	.514	.330	.490	.613
社会的健康　α=.90				
(15)健康とは、豊かな人間関係を築くことである	.423	.711	.271	.758
(24)健康とは、人生に目標を持つことである	.482	.672	.222	.734
(20)健康とは、信頼できる仲間を持つことである	.294	.671	.376	.678
(7)健康とは、社会を広く見聞することである	.116	.613	.174	.420
(5)健康とは、いろいろな欲求を持つことである	.397	.555	.134	.484
(4)健康とは、仕事や勉強に意欲を持つことである	.190	.544	.109	.344
(2)健康とは、スポーツを楽しむことである	.501	.515	.175	.547
(36)健康とは、自分の体力に自信を持つことである	.372	.459	.448	.549
身体的健康　α=.89				
(21)健康とは、自分で歩けることである	.237	.179	.708	.589
(26)健康とは、腰痛や関節痛などの障害がないことである	.475	.084	.654	.661
(16)健康とは、五体満足のことである	.209	.189	.651	.504
(31)健康とは、身体に悪いところがないことである	.611	.083	.617	.760
(29)健康とは、衣食住に不自由がないことである	.340	.322	.605	.585
(32)健康とは、丈夫でキレのある肉体を持つことである	.443	.289	.565	.599
(19)健康とは、悩みがないことである	.077	.440	.552	.504
因子寄与	8.98	5.44	4.91	19.32
寄与率	29.92	18.13	16.37	64.42

【考察】 目的の項で述べたように，世界保健機関（WHO）による健康の定義は，「健康とは，病気でないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあること」であり，それは「肉体的」「精神的」「社会的」な3要素でまとめられるものである。

本研究において，体育・スポーツ系学生についてもその定義に沿った健康観を示すかを分析したところ，「肉体的（身体的）」「社会的」の2種類の健康観は一致したのであるが，「精神的」な健康観（因子構造）の中に「生活習慣的」な要因が含まれることが分かった。WHOの定義は一般的な健康観を提唱しているものと思われるが，特に体育・スポーツ系学生の健康観は，その捉え方と同一ではないことが明らかである。彼らが体育・スポーツを日常とするとき，精神的な健康を基本にするには「衣食住」の生活をきちんと送り，前向きな姿勢を保持することを前提にしていることを伺わせるものである。これはスポーツ選手の特徴として新しい知見になるものと思われる。

【引用文献】 森脇保彦・徳安秀正・中島たけし・藤田主一 2011 現在学生の健康観に対する心理学的一考察 日本応用心理学会第78回大会発表論文集

（おおぜきたかひさ・たざきもとひさ・ふくばくみこ・もりわきやすひこ・おかだりゅうじ・おかざきゆうじ・ふじたしゅいち）

体育・スポーツ系学生の健康観に関する研究（Ⅱ）

○田崎元久[1)]　大関貴久[2)]　福場久美子[3)]　森脇保彦[4)]　岡田龍司[5)]　岡崎祐史[6)]　藤田主一[3)]
([1)]道都大学経営学部　[2)]東日本国際大学経営情報学部　[3)]日本体育大学体育学部　[4)]国士舘大学体育学部
[5)]近畿大学経営学部　[6)]武庫川女子大学スポーツ科学部)
キーワード：大学生，健康観，スポーツ

【研究の目的】 世界保健機関（WHO）は，「健康とは，病気でないとか，弱っていないということではなく，肉体的にも，精神的にも，そして社会的にも，すべてが満たされた状態にあることをいいます。」（日本WHO協会訳）と定義している。現在，我々を取り巻く社会情勢や生活環境が大きく変化し，健康に対するさらなる志向性が求められていると言ってよい。昨年度，我々は東日本大震災を経験した大学生と東京在住の大学生との健康観の相違を調査し，有意義な結果を得ることができた。本研究は，健康志向が強いと思われる体育・スポーツ系学生に調査を行い，彼らが捉えている健康観の構造を明らかにすることを目的にする。加えて，体育・スポーツ系学生の健康観の構造と自己肯定意識尺度がどのような関係にあるかを検討する。

【方法】 森脇他（2011）は「健康とは…」という刺激語を与えた20答法による予備調査を実施し，学生180名から約1800語の回答を得て，これを基礎に「健康はどの様な状態を指すのか」について質問紙を作成している。この質問紙はフェイスシートに続いて，40項目で構成されており，5件法で回答するものであった。本研究では，森脇他（2011）の質問紙を，体育・スポーツ系学生を調査対象者として実施した。調査期間は2016年4月中旬から下旬であった。調査対象者は全国4大学の体育・スポーツ系の大学生で合計902名であり，調査目的や内容説明の後，承認を得て，集合調査法にて実施し回収した。同タイトル（Ⅰ）では，体育・スポーツ系学生の健康観について，フロア効果が確認された項目を除く31項目について，最尤法のバリマックス回転による因子分析を行い，3因子を抽出した。本研究では，平石（1993）の自己肯定意識尺度の調査(41項目)を実施し，低群(平均－1SD)，高群（平均＋1SD）とに群分けを行い，体育・スポーツ系学生の健康観に関する各因子得点について比較を行った。自己肯定意識尺度は，対自己領域と対他者領域に大きく二分され，それぞれが3つの下位成分から成立している。解析にはspss statistics 22を用いた。

【結果】 自己肯定意識尺度の低群と高群の，体育・スポーツ系学生の健康観に関する因子1から因子3の各因子得点についてt検定を行った。その結果，自己受容において，低群は高群より因子1得点が低く（t（277）＝14.77，$p<0.001$），因子2得点が低く（t（279）=11.62，$p<0.001$），因子3得点が低かった（t（286）=11.44，$p<0.001$）。自己実現的態度において低群は高群より因子1得点が低く（$t(232)=13.49$，$p<0.001$），因子2得点が低く（$t(255)=12.18$，$p<0.001$），因子3得点が低かった（t（258）=7.40，$p<0.001$）。充実感において，低群は高群より因子1得点が低く（$t(224)=13.55$，$p<0.001$），因子2得点が低く（$t(200)=10.39$，$p<0.001$），因子3得点が低かった（t（238）=7.71，$p<0.001$）。自己閉鎖性・人間不信において低群は高群より因子1得点が高く（$t(252)=5.10$，$p<0.001$），因子2得点が高く（$t(261)=3.09$，$p<0.01$），因子3得点については有意な差が認められなかった（t（267）=1.59，n.s.）。自己表明・対人的積極性において低群は高群より，因子1得点が低く（t（190）=7.80，$p<0.001$），因子2得点が低く（t（193）=7.54，$p<0.001$），因子3得点が低かった（t（200）=6.39，$p<0.001$）。被評価意識・対人緊張において低群は高群より，因子2得点が低く（$t(212)=2.20$，$p<0.05$），因子3得点が低く（$t(218)=3.32$，$p<0.01$），因子1得点においては有意な差は認められなかった（t（213）=1.49，n.s.）。

【考察】 自己受容・自己実現的態度・充実感を包含した「対自己領域」の高群が低群より「因子1：生活習慣的健康」の因子得点が有意に高いのは，体育・スポーツ系学生が自身の日常生活を振り返り，真摯な生活が競技力や自身の将来像にとって必要な資質だと考えているからではないかと考察される。

【引用文献】 森脇保彦・徳安秀正・中島たけし・藤田主一 2011 現在学生の健康観に対する心理学的一考察 日本応用心理学会第78回大会発表論文集

平石憲二 1993 –青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)- 重要な他者からの評価との関連 名古屋大学教育学部紀要－教育心理学科 40 99-125

（たざきもとひさ・おおぜきたかひさ・ふくばくみこ・もりわきやすひこ・おかだりゅうじ・おかざきゆうじ・ふじたしゅいち）

表1　健康観の各因子得点における自己肯定意識尺度の低群，高群の比較

			因子1　生活習慣的健康			因子2　社会的健康			因子3　身体的健康		
			n	平均(SD)	t値	n	平均(SD)	t値	n	平均(SD)	t値
対自己領域	自己受容	低群	168	33.36(15.70)	14.77***	170	19.85(7.79)	11.62***	173	17.35(6.82)	11.44***
		高群	111	61.84(15.86)		111	30.89(7.78)		115	27.3(7.34)	
	自己実現的態度	低群	113	34.65(15.79)	13.49***	118	19.08(7.04)	12.18***	119	18.03(6.77)	7.40***
		高群	142	60.91(14.86)		139	30.00(7.26)		141	24.66(7.54)	
	充実感	低群	122	35.50(17.51)	13.55***	108	19.67(8.80)	10.39***	126	18.25(7.50)	7.71***
		高群	114	62.70(13.14)		114	30.64(6.74)		114	25.58(7.17)	
対他者領域	自己閉鎖性 人間不信	低群	126	59.03(16.22)	5.10***	128	28.68(8.18)	3.09**	130	24.66(7.79)	1.59
		高群	136	47.24(21.06)		136	25.35(9.36)		139	23.10(8.28)	
	自己表明 対人的積極性	低群	103	42.95(19.80)	7.80***	105	22.90(9.03)	7.54***	107	20.24(7.80)	6.39***
		高群	92	62.66(15.41)		92	31.61(7.17)		95	26.96(7.05)	
	被評価意識 対人緊張	低群	105	53.14(19.20)	1.49	105	26.29(8.76)	2.20*	108	21.85(8.50)	3.32**
		高群	110	56.95(18.37)		109	28.86(8.41)		112	25.46(7.64)	

*$p<0.05$，**$p<0.01$，***$p<0.001$

セルフコントロールと先延ばし行動の関係

―日中比較を通して ―

○向佳怡 [1)]　神澤創 [1,2)]
([1)] 帝塚山大学心理科学研究科　[2)] 帝塚山大学心理学部心理学科)

キーワード：日中比較，セルフコントロール，先延ばし

【目的】日常生活においてやらなければならない課題や仕事に対し、何らかの理由でなかなか取りかからず、行動を先延ばすことがある。このような事象は「先延ばし行動」と呼ばれる。その定義は、自分のコントロール下での活動を一時的または完全に回避あるいは延期する傾向である（Tuckman & Secton, 1989）。セルフコントロールは自身の行動（顕在、潜在、情動、身体機能）を思い通りにしたり自身の衝動を抑制・抑止したりする能力である。セルフコントロールについて杉若（1995）は、「改良型セルフコントロール（以下，改良型SC)」、「調整型セルフコントロール（以下、調整型SC)」、「外的要因によるセルフコントロール（以下、外的要因によるSC)」に分類し、それぞれの特性について検討している。藤田（2012）は、先延ばし行動とセルフコントロールの関係を検討した。改良型SCの実行が調整型SCに比べ、学習課題の先延ばし行動を抑制することに強く影響していると明らかになった。本研究では、セルフコントロールの実行が先延ばし行動にどのような影響を与えるかについて日中比較をすることを目的とし、先延ばし行動において日中の学生が行うセルフコントロールには差異があるという仮説を検討する。

【方法】

調査対象

日本：私立大学に在籍する学部生208名（男性79名、女性129名)、平均年齢19.47歳（SD=1.30)。

中国：中国の大学に在籍する176名（男性62名、女性114名)、平均年齢20.00歳(SD=1.10)。

調査時期

日本では2014年5月に、中国では2014年5月と9月に実施した。

調査尺度

・「General Procrastination Scale日本語版」: Lay (1986) により開発された先延ばしを測定する尺度を林（2007）が日本語に訳したものを用いた（13項目5件法)。

・「日常的なセルフコントロールの個人差を評価する尺度(以下，RRS)」：杉若（1995）が作成したセルフコントロールを測定する尺度を用いた。本尺度は日常生活で観察されるセルフコントロールの個人差を3因子で評価する尺度である(20項目6件法)。

【結果】日中の学生における先延ばし行動とセルフコントロールの差を検討するために、先延ばし得点、改良型SC得点、調整型SC得点、外的要因によるSC得点の平均の差をt検定で比較した結果、いずれにおいても有意な差が認められた。

日中の学生それぞれについて、先延ばし行動とセルフコントロールの関係をみるために、先延ばし行動得点を目的変数、改良型SC、調整型SC、外的要因によるSCを説明変数として重回帰分析を行った結果、「外的要因によるSC（$\beta_{日}$=.38, p<.05; $\beta_{中}$=.40, p<.05)」、「調整型SC（$\beta_{日}$=.19, p<.05; $\beta_{中}$=.17, p<.05)」が有意な正の影響を与えていることが示された。一方、「改良型SC」は有意な負の影響を与えている（$\beta_{日}$=-.48, p<.05; $\beta_{中}$=-.41, p<.05）ことがわかった。なお、重相関係数（$R_{日}$=.56; $R_{中}$=.52）有意であった(p<.01)。

	日本		中国		
	M	SD	M	SD	t
先延ばし	43.67	8.41	34.44	7.20	$t(381.94)=11.59$ **
改良型SC	28.53	5.96	31.52	5.29	$t(382)=5.17$ **
調整型SC	19.80	4.01	20.64	4.00	$t(382)=2.04$ *
外的要因によるSC	26.60	5.53	24.30	4.64	$t(381.98)=4.43$ **

**p<.01 *p<.05

Table. 1. 日中における先延ばし得点とセルフコントロール得点の平均値およびt値

【考察】日中の学生の間で、先延ばし得点、改良型SC、調整型SC、外的要因によるSCの得点に有意な差が見られたが、重回帰分析の結果、改良型SC、調整型SC、外的要因によるSCが「先延ばし」に与える影響には文化差が見られなかった。

藤田（2012）は、自発的に目標を設定し、行動をより良いものへと変容させていく改良型SCが獲得されていない場合、課題の先延ばし傾向が高まることを指摘しており、中国の学生の改良型SCの得点が日本の学生より高かったという結果から、改良型SCは先延ばし行動を抑制するうえで有力な要因と考えられる。さらに、杉若（1995）はセルフコントロールをより有効に適用するためには、改良型SCと調整型SCの組み合わせが重要であり、改良型SCを成功させるためには、調整型SCは欠くことができないことを指摘した。本研究の結果において、セルフコントロールに関して、日本の学生は「外的要因によるSC」を比較的多く行っていた。外的要因によるSCの下位項目は「物事を自分から進んで行うことに対する消極性」や、「他者依存への傾向」を示すものである。RRS尺度の3因子でみると、日本の学生は外的要因によるSCを、中国の学生は改良型SCと調整型SCをよりも多く感じる。そのため、日本の学生は課題や仕事が行動に移すまでの動機を、自分以外の人や物事に引き出されることを期待する傾向が強いと考えられる。その結果、本研究で日本の学生は中国の学生より先延ばしの傾向が高かったと思われる。

【引用文献】

藤田正 2012 学習課題先延ばし行動に及ぼす自己調整要因の検討 奈良教育大学紀要 61, 1, 43-51.

Lay, C. H. 1986 At last, my research article on procrastination. Journal of research in Personality, 20, 474-495.

林潤一郎 2007 General Procrastination Scale日本語版の作成の試み――先延ばしを測定するために パーソナリティ研究，15, 246-248.

杉若弘子 1995 日常的なセルフコントロールの個人評価に関する研究 心理学研究 66, 169-175.

Tuckman, B. W. & Sexton,T.L. 1989 The relation between self-beliefs and self-regulated performance. Journal of Social Behavior and Personality, 5, 465-472.

（こう かい・かみざわ つくる）

恋愛関係崩壊後の関わりと愛着スタイルとの関連について

○山口　司
（北星学園大学大学院　社会福祉学研究科）
キーワード：恋愛関係崩壊後の関わり、別れの主導権、愛着スタイル

【研究の目的】

本報告の目的は、恋愛関係崩壊後の関わりと愛着スタイルとの関連について検討することである。増田(2001)は、恋愛関係終結後に同一パートナー同士で継続された対人関係、特に結婚前の元恋人同士による友人関係を PDR としている。PDR は、恋人や異性友人と異なる性質を帯びた関係であることを示唆している(山口,2011)。

また、山口・今川(2008)は、恋愛関係崩壊後に PDR との関わりの有無に影響を与える要因として、偶然会う頻度、共通の友人の有無、未練の有無などを挙げているが、個人の特性については検討していない。そこで本報告では、PDR の形成には、もともと個人が持っている関係形成のタイプが影響しているのではないかと考え、対人関係のあり方に影響を与えている要因として、愛着の視点から PDR の有無への影響について検討する。愛着を測定するために中尾・加藤(2004)の ECR-GO を用いる。ECR-GO は、見捨てられ不安と親密性回避の二次元構造である事が示されている。見捨てられ不安とは、他者に見捨てられることへの不安、関係継続への不安である。一方、親密性回避とは、他者との親密になることの回避である。

また、関係崩壊の状況として、別れの主導権がいずれにあるかも重要であると思われる。別れの主導権が自分にある場合、自分の意思で関係を終結しているので、愛着の要因の影響は少ないと考えられる。一方で、別れの主導権が相手にあった場合や、互いであるとした場合は、見捨てられ不安が高い場合、PDR を形成しそうであり、見捨てられ不安が低い場合は、PDR を形成しなさそうである。また、親密性回避が高い場合、PDR を形成しにくく、親密性回避が低い場合、PDR を形成しそうである。

【方法】

質問紙調査を行った。交際経験の有無、年齢、性別、PDR との関わりの有無、別れの主導権、ECR-GO（中尾・加藤, 2004）、その他にもデータを取ったが本報告では割愛する。調査協力者：失恋経験のある 149 名（男性 58 名、女性 91 名）平均年齢 19.6 歳。

【結果・考察】

ECR-GO の因子分析（最尤法,バリマックス回転）
因子分析の結果、2 因子が抽出された。第一因子が、見捨てられ不安、第二因子が、親密性回避であった。
関わりの有無を目的変数、因子分析で得られた愛着の 2 因子を説明変数として数量化Ⅱ類を行った。数量化Ⅱ類にあたり、愛着の 2 因子を低・中・高の 3 群に分けた(Table1)。

別れの主導権（あなた）の場合

自分の意思で関係の終結を望んでいると思われるので PDR を形成しようという意思がそもそもなく、個人内要因である愛着の機能は影響しないと思われる。各要因とも偏相関は有意ではなかった。

別れの主導権（相手）の場合

予測通り、見捨てられ不安が高いことは PDR との関わりの有無に正の影響を与えて、見捨てられ不安が低いことは、負の影響を与えていた。一方、親密性回避では予測とは逆に、親密性回避の高いことは、PDR との関わりの有無に正の影響を与えていた。これは、親密性回避が高いということは、関係終結後、新しい愛着対象へ移行することが困難なため、PDR に固執しようとするのではないかと考えられる。

別れの主導権（互い）

予測に反して、見捨てられ不安が高いことは、PDR との関わりの有無に負の影響を与え、見捨てられ不安が低いことは、PDR との関わりに正の影響を与えていた。親密性回避が低いことは、PDR との関わりの有無に負の影響を与えていた。互いに別れの主導権があると認知した場合、互いに自分の意思で関係を終結したと考え、ある程度の同意があったと考えられる。その結果、愛着の要因がより複雑になったのではないかと考えられる。例えば、見捨てられ不安が低い場合、PDR との関わりがあるのは、すでに関係は終結しておりこれ以上関係に対する不安を抱く必要がなく、新たな友人として認識したからかもしれない。一方で、見捨てられ不安が高い場合は、また、見捨てられるのではないかという不安から、PDR としての関わりも断ってしまうのかもしれない。親密性回避が低いと PDR との関わりをもたないのは、他者との関係を回避しないことは、関係崩壊後、スムーズに対象の移行ができ、愛着が別の対象に移行するため PDR との関わりを持たないのではないかと考えらえる。

本研究の問題点として、全体的な判別的中率が低かったことや、調査協力者数の問題が挙げられる。また、PDR との関わりの有無は個人的な要因だけではなく様々な個人外要因も関連しており、本報告の結果は今後他の要因と合わせて検討する必要がある。

Table1 数量化Ⅱ類の結果

		あなた(N=62)	相手(N=63)	互い(N=24)
		偏相関	偏相関	偏相関
見捨てられ不安		0.1755	0.2182*	0.5327***
	低	1.030	-1.107	0.902
	中	-0.498	0.092	0.245
	高	-0.239	0.824	-0.993
親密性回避		0.2032	0.2367*	0.5199***
	低	-1.314	0.478	-1.010
	中	0.484	-0.639	0.648
	高	0.402	1.084	0.490
判別的中率		61.29%	63.49%	75.00%
		p<0.10*	p<0.05**	p<0.01***

【引用文献】

増田匡裕　2001　以前の恋人との友人関係(PDR)と新しい恋愛関係の交渉と葛藤についての探索的研究－対人関係の正当性に関するフォーク・サイコロジー－　日本社会心理学会第 42 回大会発表論文集　250-251

中尾達馬・加藤和生　2004　“一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究 5　19-27

山口司・今川民雄　2008　恋愛関係崩壊後の関係形成に影響に及ぼす要因について(2)　日本社会心理学会第 49 回大会発表論文集 582-583

山口司　2011　恋愛関係崩壊後の関係における交際内容に関する研究　北星学園大学大学院論文集　14　47-60

（やまぐち　つかさ）

平和構築・紛争予防プログラムの評価

― プロセス評価の試み ―

○池田　満[1)]　福田　彩[2)]　宮城　徹[3)]
([1)]南山大学人文学部　[2)]東京外国語大学総合国際学研究院　[3)]東京外国語大学国際日本学研究院)
キーワード：平和教育，プログラム評価，紛争

【研究の目的】

本研究では，東京外国語大学を中心にアジアの紛争経験国をインターネット回線で結んで行われている平和構築・紛争予防教育プログラムの評価を行う。グローバルキャンパスプログラム（GCP）と呼ばれるこのプログラムでは，各国の政治学，平和学，国際関係論などの専門家が紛争の解決と予防に関わる実践的な知識やスキルを教授し，世界の平和構築に貢献する人材の育成を目的としている。また民族，歴史，文化，宗教，イデオロギーが異なる学生，現在，対立関係にある地域の学生がオンラインで討議やや協働的学習を行うことで，対人葛藤の低減や文化的コンピテンスの向上，多様な道徳規範の獲得なども目指している。これまでに行われた教育効果の測定，すなわちアウトカムの評価の結果から，全体として上記の教育目標はおおむね達成に向かっていることが示されている（池田・福田・宮城，2015 など）。

ところでGCPの評価では効果の測定に加えて，教育内容，方法の改善や発展に寄与する情報を集めることも目的となっている。さらにアクションリサーチとして，プログラム開発の際に基礎とした諸理論（教育内容に関わる社会科学理論や教育方法に関わる心理学理論）の妥当性や課題を見出すことも重要な目的の一つである。これらの目的を達成するためにはプログラムのプロセスすなわち教育内容や方法に対する学生の認知や教育効果への影響について精査する必要がある。

そこで本研究では GCP のプロセス評価の一つとして，各授業に対する学生の認知について検討をする。GCP の参加国（地域）の中には，すでに紛争事態は終結し復興に進んでいる国（地域）と，現在，紛争の中にある国（地域），そして対立関係なる地域が含まれており，これらの違いが，授業に対する認知に影響を及ぼす可能性が考えられる。そのため本発表では特にこの点について検討を行う。

【方法】

回答者・調査方法 GCP を受講している 5 か国の大学生を対象に，全 5 回の授業直後にオンラインで調査を実施した。授業開始前の調査に基づく各大学の学生割合を表 1 に示す。なお，日本の大学については受講生に日本人がほとんどおらず回答が日本の歴史や文化，紛争経験等を反映していないと考えられるため，分析から除外した。

調査内容 「授業全体の質」「授業構成」「内容への関心」「授業担当者の質」「授業内の議論への満足度」「自身の関心との関連性」「自己の学びの程度」「有用性」の 8 項目について，学生の認知を 5 件法で回答を求めた。

表 1 事前調査結果に基づく各大学の学生数

大学所在地		人数	比率
インド（カシミール地方）	紛争中	4 名	8.3%
インド（ムンバイ）	紛争中	—	—
パキスタン（カシミール地方）	紛争中	20 名	41.7%
パキスタン（イスラマバード）	紛争中	—	—
スリランカ	終結	6 名	12.5%
カンボジア	終結	10 名	20.8%
日本	—	8 名	16.7%

【結果】

大学（所在地別）を独立変数，学生の認知（全 5 回の調査各 8 項目）を従属変数とする 1 要因分散分析を行ったところ，第 1 回調査の「内容への関心」「授業担当者の質」「自己の関心との関連」「有用性」，第 2 回調査の「授業内の議論の満足度」について，大学要因の影響が有意（p=.009 - .025）であった。これらの項目のうち，第 1 回調査についてはパキスタン（カシミール地方）に比べカンボジアのほうがポジティブな評価をしていた。また第 2 回調査の「議論の満足度」については，インド（カシミール地方），カンボジアに比べ，パキスタン（カシミール），スリランカの回答者のほうがポジティブに評価をしていた（図 1）。

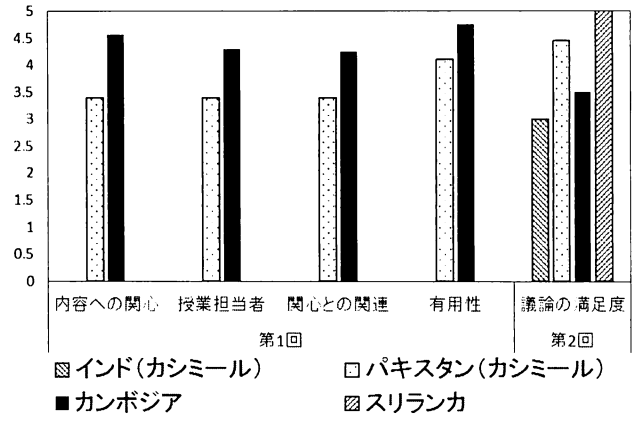


図 1. 分散分析が有意だった項目の国別平均値

【考察】

第 1 回の授業については，全体的にカンボジアの学生のほうが，パキスタン（カシミール）の学生よりも授業に対して好印象を抱いていた。カンボジアは内戦終結を経験しているのに対して，カシミール地方は複数国家間の紛争が続いている。紛争の最中にある（紛争解決を目指しつつ実現できていない）学生にとっては，紛争解決へ向けた知識や終結後の学生との討議が，特に初回授業では自分たちに適応できるものと認知しにくかった可能性がある。一方，第 2 回の認知の差については，授業担当者の話が学生の自由記述を見ると，教授言語である英語の運用能力の差や，通信回線の安定性が影響している可能性が考えられるが，明確な因果は不明である。

こうした因果推論は現時点では推測の域を出ていないが，今後，国家による受け止め方の違いがある可能性を前提に，これらの要因を明らかにする情報収集を行うことが求められるだろう。

【引用文献】（氏名 年 題 出典の順で記入してください。）
池田 満・福田 彩・宮城 徹（2015）．紛争当事国の学生が抱く紛争認識―原因，解決における主愛的関与の意識― 応用心理学研究，41，98-99.

本研究は JSPS 科研費 15KT0042，16K03514，2015 年度南山大学パッヘ研究奨励金 1-A-2 の助成を受けたものです。

（いけだ みつる・ふくだ あや・みやぎ とおる）

在仏日本人留学生のソーシャルサポートネットワーク

○鉄川　大健[1)]　　田中　共子[1)]
([1)] 岡山大学大学院社会文化科学研究科)
キーワード：在仏日本人留学生，ソーシャルサポートネットワーク，対人関係形成

【 目 的 】

留学生にとって，滞在国でいかに異文化適応を果たすのかは大きな問題だが，それには現地での対人関係形成が大きく関わっている。田中(1998)は，ホスト（受け入れ側）との対人関係形成が留学生の適応課題の１つであると同時に，関係形成自体が適応の有効な手がかりにもなると述べている。Ward & Kennedy(1994)は，ホストとの対人関係形成が日々の課題の達成を促し，社会文化的適応の困難を少なくすると述べている。Takahama, et al.(2008)は，留学中のソーシャルネットワークの拡大による，異文化適応への肯定的な影響を示唆している。これらのことから，留学中のソーシャルサポートネットワークの形成と拡大が，異文化適応を促進させる可能性を考えることができよう。

本研究では，世界第３位の留学生受け入れ国であり，2012年の日本人の留学先として７番目に多い（文部科学省, 2015）フランスに注目する。渡辺ら(1984)は，在仏日本人の面接調査を行い，語学力や援助の欠損，帰国後の不安定な進路への悩み，精神医学的問題などを抱えていることを示した。しかし，フランスに留学する日本人留学生の適応やその支援については研究蓄積が少ない。本研究では，在フランス日本人留学生を対象に，フランスでのソーシャルサポートネットワークのあり方と，その拡がりを把握することを目的とした。

【 方 法 】

研究協力者　在仏日本人留学生４名（男性２名，女性２名）であり，年齢は21歳から23歳であった。

調査時期　第１回調査（以下，T1）は，X年10～11月に実施した。第２回調査（以下，T2）は，X+1年１月に３人，３月に１人実施した。

質問紙　田中(2000)のソーシャルサポートネットワークに関する質問項目に基づき，ネットワーク構成員について最大10人を挙げてもらったうえで，国籍，関係満足度，接触頻度等の８項目について尋ねた。加えて，言語，文化，勉強，相談，楽しみ等の７種類のサポート期待についても評価してもらった。

半構造化面接　①ホストとの出会い，②日仏の行動の差違，③ホストに理解されなかった自分の行動，④ホストとの交流時の困難，⑤(④の)困難への対処，⑥ホストとの交流の心がけや工夫。以上について，まずは自由記述を求め，続いて面接で詳細を尋ねた。

手続き　縁故法により在仏日本人留学生に調査依頼し，研究目的の説明後，研究協力への承諾を得た。その際，自由記述式の質問紙を渡し，記入の上，面接時に持参してもらった。T1のおよそ3～5か月後に，T2を行った。

【 結 果 と 考 察 】

A氏は，日本人留学生，他国人留学生，ホストの全体にネットワークが拡大していた。しかし，日本人留学生や他国人留学生に比べ，ホストとの接触頻度は少なく，月１回程度であった。しかし，国籍に関係なく，様々なサポートが期待できた。フランス特有の，友人に友人を紹介するという関係の作り方に苦手意識があり，それを克服すべく「一歩踏み出して声をかけることを目標」にしていた。T1時には，ホストから期待できるサポートは比較的少なかったが，T2時にはより増えていた。

B氏は，日本人留学生およびホストから成るネットワークを形成していた。その構成は，T1とT2で大きな変化はなく，ネットワークは安定的に維持されていた。しかし，構成員との接触機会は減っていた。一方で，ホストから期待できる文化サポートは増えており，相談や楽しみのサポートは国籍を問わず増えていた。B氏は，T2時には，「フランスの文化に合わせよう」と思っていることと，「自分はため込むタイプだけど，言うようにした」ことを述べており，積極的な文化受容の姿勢がうかがえる。こうした文化受容に伴い，相談など情緒的サポートが得られる関係がホストともできていった。

C氏では，ホストとの間で，ネットワークの拡大と接触頻度の増加がみられた。SNSによる接触が減る一方で，対面による接触が増加した。情緒的および道具的サポートはホストよりも日本人，文化・慣習サポートはホストから，より期待できるとしていた。C氏はホームステイをしており，学校に限らず，ホームステイ先でもホストとの関わりの経験をつんでいた。

D氏は，T1時には，日本人留学生，他国人留学生，ホストが同程度の割合になるネットワークを持っていた。T2時には，ネットワーク内のホストの数と割合が増加していた。T2では，言語や文化のサポートが，ホストから期待できると答えているが，一方で，日本人からのサポート期待は減少していた。相談のサポートは，T1時には他国人留学生からは期待できなかったが，T2時にはできるようになっていた。T2時ではさらに，ホストからの楽しむサポートも増加していた。D氏は，教員からの紹介やSNSを使い，徐々にホストとの輪を拡げ，「友達の友達に会うことは，新たなつながりを増やす良い機会だ」ととらえ，自分もその真似をする，という工夫をしていた。「日本人らしさ」は大事だと語り，日本人らしさと外国人らしさの「どちらが欠けるのではなく，両方あるのが良い」と語っていた。フランスでは，日本とは異なる文化やそれに基づく行動を積極的に取り入れようとしていた。

【 総 合 考 察 】

現地の社会文化的文脈に即した関わり方を理解し，現地で必要なソーシャルスキルを観察しながら学び，関係作りへと向かう目標を設定して実行の努力をすることで，現地でのソーシャルサポートネットワークの形成が促進されたと解釈できよう。文化の違いを認識したうえで，文化受容と文化行動の積極的取り入れを行うことで，ネットワークの質と量の拡充が促されると考えられる。

謝辞

1. 本研究では，平成27年度岡山大学文学部卒業生の細羽菜奈美さんの卒業研究を再構成いたしました。発表のご快諾とご協力に感謝いたします。

2. 本研究の一部は，科学研究費補助金（15H0345617，研究代表者：田中共子）の助成を受けました。

（てつかわ ひろかつ・たなか ともこ）

座位お辞儀の印象評価

○武田知也[1, 2]　来田宣幸[1]　太田智子[3]
([1]株式会社テイスト，[2]京都工芸繊維大学，[3]株式会社中央ビジネスグループ)
キーワード：お辞儀，印象，座位

【研究の目的】

「おもてなし」は「お客様や住民などの目線を大切にし，心のこもったこだわりのサービスを提供していく営み」であるが，商業的に一般に言われるサービスとしての「おもてなし」を超えて他者と円滑に社会的共存するためのコミュニケーションとしても捉えられているのが実情である．

コミュニケーションには言語要素と非言語要素がある．姿勢や動作などの非言語要素として日本人が頻繁に行っているものにお辞儀がある．お辞儀は挨拶に限定されず，謝罪や感謝など日常の中で広く見られる動作であり，立礼と座礼がある．お辞儀を研究した事例として，森下・岩下（1985）や田中（1989）がある．これらは実験を通じて立礼動作を研究している．また，柴田他（2015）は立礼の印象評価について報告している．本研究では座礼を取り上げ，柴田他（2014）に準じ座礼における屈体の角度が座礼の印象に与える影響を明らかにすることを目的とした．

【方法】

Google 社が提供する Google Form を用いて Web 上で座位お辞儀の動画を見て印象を回答するアンケートを実施した．調査フォームでは動画を視聴させたあと，12 項目の形容詞対について 5 段階尺度で回答させた．回答者は大学生及び社会人 35 名であり（男性 22 人，女性 13 人），座位礼の動画モデルは業務として接遇の指導をおこなっている女性 1 名とした．動画モデルはサービス業等での接客指導で 8 年間の経歴を有し，本調査の動画モデルとしての技量は十分であると判断した．ビデオカメラを動画モデルの側方に配置し，動作開始前 1 秒から動作終了後 1 秒までを使用した．座礼の種類として，頭を下げる屈体角度を操作して 4 種類の動画を作成した．屈体の角度 15 度を会釈礼，30 度を浅礼，50 度を普通礼，70 度を最敬礼とした．本研究では角度によらず屈体および伸展する速度は一定とした．12 項目の形容詞対は柴田他（2015）の研究で使用された形容詞対のうち 12 項目を使用した．

【結果と考察】

各座位礼動作映像に対する SD 法による評価値を用いて因子分析（最尤法・プロマックス回転）をおこなった．固有値の変化は 6.15，2.52，0.77，0.53 と続き，第 3 因子からは 1 を下回り低い値となったため因子数は 2 とした．表 1 に回転後の因子パターンを示した．第 1 因子は，丁寧さや礼儀正しさ，真面目さなどの類似の概念を示す形容詞対であったため，最も因子負荷量の高い形容詞対から「礼儀正しさ」と命名した．第 2 因子は自然な，親しみやすいなどに関係する項目から構成されており「自然さ」と命名した．

動画間の違いを検討するため，各因子得点の平均値を図 1 に示した．因子得点について 1 要因分散分析をおこなった結果，礼儀正しさについては有意な主効果がみられた（$F3,136=8.15$, $p<0.01$）．多重比較の結果，普通および深いお辞儀は会釈と比較して有意に高い値であった．

立礼では深く屈対するお辞儀が丁寧な印象と関連している可能性が指摘されている柴田他（2015）が，丁寧さは本研究の礼儀正しさに相当すると考えられる．したがって，座礼の結果もこの結果に一致していると考えられ．立礼と座礼で共通する要素と言える．

一方，先行研究で屈体後の静止時間が長くなると滑らかさが低下すると報告されているため，本研究の自然さは滑らかさに相当すると考えら得る．したがって，本研究では静止時間を固定したため，滑らかさの評価が座礼種類の影響を受けなかったのであろう．

本研究では，実際の動画を使用しておりコンピュータグラフィックスなどではないため，屈体角度以外の要素も影響を与えている可能性も否定できない．また，静止時間，屈体速度を一定にしたため，それらが座礼の印象に与える影響は不明であり，さらに背筋のまっすぐさ，首の折れ具合など，他の要素についても影響は不明である．また謝罪や挨拶，感謝など座礼の場面を考慮していないので，何に対する適切さかがは未だ不明であり，今後研究を深めていきたい．

表 1　因子分析

	F1	F2
第1因子		
無礼な_礼儀正しい	.948	-.060
ぞんざいな_丁寧な	.944	-.170
不真面目な_真面目な	.929	-.069
下品な-上品な	.840	.077
みにくい-美しい	.831	.120
第2因子		
不自然な-自然な	.143	.769
親しみにくい-親しみやすい	-.035	.751
堅苦しい-気楽な	-.501	.698
違和感のある-違和感のない	.231	.692
かたい-やわらかい	-.158	.675
スムーズでない-スムーズな	.339	.564
不健康な-健康的な	.313	.564

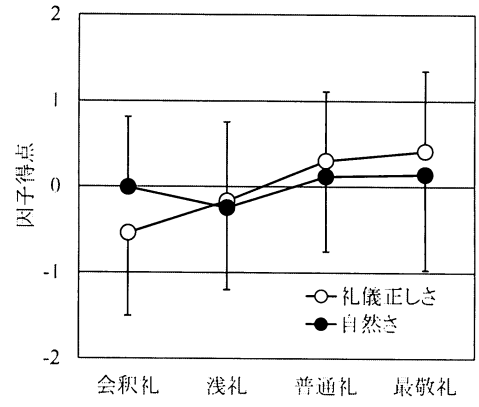


図 1. 座礼の種類による比較

【引用文献】

森下はるみ，岩下宣子 1985 身ぶり・しぐさの型－おじぎ・あいさつ考－体育の科学，823－826
柴田寛・髙橋純一・行場次朗 2015 お辞儀の主観的印象と社会的文脈に対する適切さ，心理学研究，85（6）：571－578

（たけだ ともやきだ のりゆき・おおた ともこ）

男女共同参画社会における地方自治体職員の職業性ストレスに関する研究

○徐　贇君[1)]　森下　高治[2)]
([1)2)] 帝塚山大学大学院心理科学研究科)
キーワード：男女共同参画社会，職業性ストレス，ワーク・ファミリー・コンフリクト

【研究の目的】女性の活躍推進による共働き世帯の増加に伴い，仕事と家庭を両立する必要に迫られる人たちが増加している(鈴木, 2014)。このように，2つ以上の役割が両立しがたい状況に陥った場合，その個人の中で心理的葛藤状況が生じると考えられ，家庭と仕事の両立に悩むことに関する葛藤を，ワーク・ファミリー・コンフリクト(work-family conflict，以下WFCと略す)という（金井, 2002，富田, 2014)。本研究では，NIOSH(National Institute for Occupational Safety and Health)の職業性ストレスモデル(Hurrell & Mclaney, 1988)と金井(2002)の WFC に関するモデルを参考としてモデルを作成し，既婚の地方自治体職員を対象として WFC が職業ストレスにどのような影響を及ぼすかを明らかにすることを目的とする。

【方法】調査協力者　関西圏にある A 地方自治体の職員(非正規職員も含む)を対象に，有効回答数 690 名(有効回答率87.1%)の内 378 名が分析対象者数である。

調査票の構成　①フェイスシート:性別，年齢，婚姻状況など。②職業性ストレス尺度:職業性ストレス簡易調査票(厚労省，2015)の仕事のストレス要因(17 項目)と修飾要因(11 項目)を使用。③ストレス反応尺度：心理的ストレス反応尺度(SRS-18：鈴木伸一他，1997)を使用。④ワーク・ファミリー・コンフリクト尺度:金井(2002)の WFC 尺度 18 項目に加藤(2010)の 1 項目を加えた 19 項目を使用。

【結果】個人属性の性別、婚姻状況と配偶者仕事の有無に基づいて 3 つの群に分けて共分散構造分析でモデルを検討した。有効回答者のうち，女性で配偶者も仕事あり(非正規も含む)の 197 名は，「**女性共働き**」群とした(Fig.1)。比較対象として，男性で配偶者が専業主婦の 71 名は，「**男性妻専業主婦**」群とした(Fig.2)。また，男性で配偶者も仕事あり(非正規も含む)の 110 名は，「**男性共働き**」群とした。この群におけるモデルの適合度指数は，*GFI*=.917，*AGFI*=.839，*CFI*=.974，*RMSEA*=.062 であった。共働きの男性では，仕事の負担のストレッサーから WFC に対する正のパスと，仕事の他のストレッサーから「仕事満足度」に対する負のパスが有意であり，続いてストレス反応に悪影響を与えた。しかし、「家族・友人からのサポート」から WFC に対する負のパスと，「家庭満足度」に対する正のパスが有意であり、続いて心理状態に良好な影響を与えたため，家族・友人からのサポートが心理的な葛藤の減少と家庭への満足度を高めることが示唆された。

【考察】共働きの女性では，家庭と仕事の両領域からの要因がストレス反応に影響を及ぼす。モデルの分析結果は、家族・友人からの情緒的なサポートよりも、家族から家事などのサポートを得ることが、家庭か仕事かの選択の葛藤を減少させることが考えられる。そのため，職場での人間関係の改善および家族・友人のサポートが上手く機能すれば、仕事と家庭へのポジティブな影響を及ぼすことになり，共働きの女性の心理的な健康を維持するのに有効であると考えられる。

一方，配偶者が専業主婦の男性では，WFC に影響をもたらす最大要因が心理的な仕事の負担であった。また，仕事満足度から健康への影響が一切みられなかった。心理的な健康に影響を与える要因からみると，仕事が自分に合わないような本質的な問題でない限り，家族・友人からの情緒的なサポートがあり，家庭生活が順調であるなら，健康を維持することが可能と思われる。そして，仕事の適性度について，家族や友人に話すことができれば，健康に対してポジティブな影響を及ぼすであろう。

共働きの男性では，職場でのストレッサーから WFC に影響を及ぼした要因が，共働きの女性と同じ傾向がみられた。また，仕事満足度が高いとストレス反応への影響がなく健康であることは，共働きの女性と同じであるが，家庭満足度が高いと無気力にはならなかった。さらに，WFC に影響をもたらす最大要因は心理的な仕事の負担であった。この結果は，配偶者が専業主婦の男性と同じ傾向であった。また，家族・友人からの情緒的なサポートにより，WFC の葛藤が少なくなると健康であり，家庭への満足度が高いと，無気力も改善していくことが示唆された。そのため，共働きの男性にとって，家族・友人からの肯定的な情緒的なサポートがあれば，心理的な健康を維持することが可能であると考えられる。

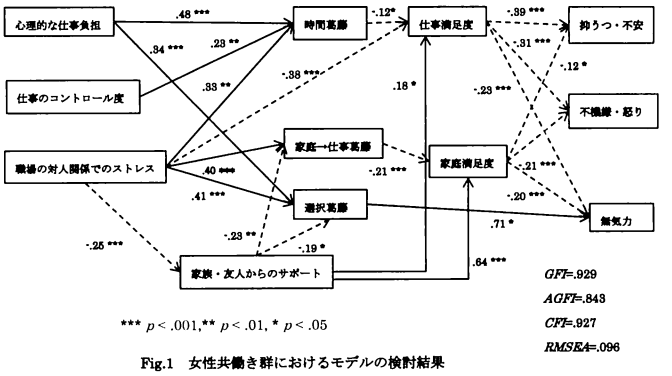


Fig.1　女性共働き群におけるモデルの検討結果

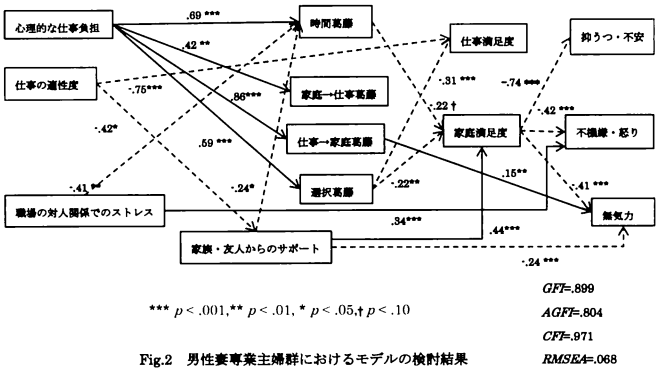


Fig.2　男性妻専業主婦群におけるモデルの検討結果

【引用文献】
金井　篤子 (2002). ワーク・ファミリー・コンフリクトの規定因とメンタルヘルスへの影響に関する心理的プロセスの検討　産業・組織心理学研究, 15(2) , 107-122.

（じょ いんくん・もりした たかはる）

ワーク・エンゲイジメントを高める心理的・組織的要因

天池雅彦
(名古屋市立大学大学院人間文化研究科)
キーワード：ワーク・エンゲイジメント，自己の成長，職場の人間関係

【研究の目的】 日本では,「仕事に強い不安やストレスを感じる労働者は6割を超え」(厚生労働省,2006)誰もが生き生きと充実して働いているとは言い難い。仕事の充実に関して，ポジティブ心理学を背景に提唱された概念にワーク・エンゲイジメント(以下，WEとする)がある。WEは「活力，熱意，没頭によって特徴づけられるポジティブで充実した仕事関連の心理状態」(Schaufeli, Salavona, González-Romá,& Bakker, 2002)と定義される。これまでの実証研究からWEは，仕事の資源（社会的支援，仕事の裁量権等）や個人の資源（自己効力感等）によって高められ，その結果，心身の健康，仕事のパフォーマンスにつながることが示されている(島津, 2014)ことから，労働者が健康で生き生きと充実して働くために，WEを高める要因を検討することは重要である。

WEの向上には仕事のポジティブ経験が関連すると考えられるが，すべてのポジティブ経験がWEを高めるとは限らないし，同じポジティブ経験であってもそれを認知的にどう解釈するかによってもWEへの影響は異なるであろう。天池(2016)は，愛知県内の2つの企業の社員6人への半構造化面接で「仕事が楽しい」と感じたり，「仕事に夢中になり集中して取り組んだ」などの仕事でのポジティブ経験を尋ねた。面接の音声記録を文書化し，KJ法(川喜田, 1967)を援用した分析からWEに関する仮説を考察した。加えて日本人労働者を対象とした実証研究 Shimazu & Schaufeli(2009)の結果—WEはパフォーマンスに正の影響を，ストレス反応に負の影響を与える—を踏まえ次の2つの仮説を設定した。

仮説1 「職場の人間関係」はそれ自身，および「自己の成長」を通じてWEを促進する。

仮説2 WEは仕事のパフォーマンスに正の影響を与え，ストレス反応に負の影響を与える。

本研究は，上記2つの仮説を検証することを目的とする。

【方法】 **調査対象者・時期** 民間企業3社の従業員と2つの地方自治体職員の計356人に質問紙を配布し297人から回答を得た(回収率 83.4%)。1つ以上の欠損値のあるものと虚偽回答と思われるものを除いた 254 人を対象とした。(有効回答率71.3%)。2015年2月－3月に実施。

質問項目 (1)日本語版WE尺度短縮版(Shimazu et al., 2008)の「活力」「熱意」「没頭」各3項目,計9項目をそのまま使用した。(2)自己の成長 ①能力的成長 榊原(2004)の能力向上尺度15項目から4項目と面接調査で得られた成長項目1項目を加えた5項目。②精神的成長 中野(2011)の社会的影響尺度3項目から貢献に関する2項目に藤田(2000)と濃沼他(2012)の仕事への誇り尺度を参考にした3項目と面接調査で得られた1項目を加えた計6項目 (3) 職場の人間関係尺度 ①職場サポート 小杉(2000)のサポート尺度5項目の各文頭に「職場のメンバーは」を追加して使用 ②上司への信頼 藤原(2014)の上司に対する信頼尺度5項目に面接調査で得られた1項目を加えた計6項目 ③オープンコミュニケーション 山口他(2002)の看護師の職場での良好なコミュニケーション尺度5項目から一般の会社で使用可能な3項目と面接調査で得られた2項目の計5項目。(4)ストレス反応尺度 小杉他(2004)の28項目から「憂うつ感」「イライラ感」「身体不調感」「疲労感」「緊張感」各3項目の計15項目 (5)パフォーマンス尺度 最近1ヶ月の仕事の質と量の水準を問う2項目。

手続き 調査票は職場を通じて調査対象者に配布。無記名で回答され密封のうえ職場にて取り纏め,調査者に返送された。

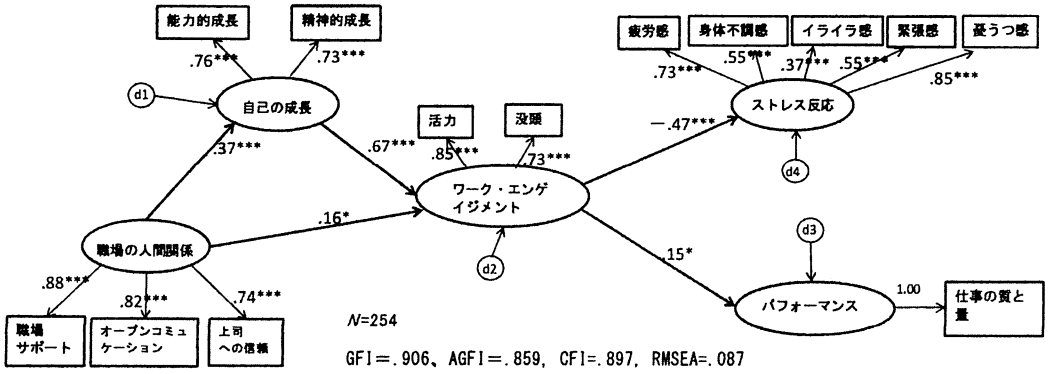
【結果と考察】 仮説モデルに基づき，観測変数による共分散構造分析を行なった(Figure1)。その結果,ほぼ満足できる適合度が得られた(GFI=.906,RMSEA＝.087)。以下，各仮説について検討した。

第1に,「職場の人間関係」,「自己の成長」とWEとの関連を仮説化した仮説1では，職場の人間関係は直接，および自己の成長を媒介してWEに有意な正の影響をおよぼすことが示された。従って仮説1は支持された。

第2に，WEとWEの結果事象との関連を仮説化した仮説2では，WEはパフォーマンスに有意な正の影響をおよぼしストレス反応に有意な負の影響を及ぼすことが示された。従って，仮説2も支持された。

以上から職場の人間関係（組織的要因）と主観的自己の成長感（心理的要因）がWEを高める要因であることが示唆された。また本研究は,WEは心身の健康，パフォーマンスに正の関連があるという先行研究の結果を支持するものだった。

(あまいけ まさひこ)



*p<.05, :***p<.001

Figure1. 共分散構造分析による分析結果(観測変数の誤差は省略してある。誤差間の相関は設定していない。)

公的自己意識と他者意識が演技行動に及ぼす影響

○芳賀千夏子[1)]　松本友一郎[2)]
([1)]中京大学大学院心理学研究科　[2)]中京大学心理学部)
キーワード：公的自己意識，他者意識，演技行動

【目的】多くの人がその場の状況に合わせた演技行動をとることが必要だと考え，実際に行なっている(定廣，2007)。演技は意図的に自分をある役やキャラクターのように見せようとする自己呈示の一つであると考えられている。ここでは演技行動を，「素の自分とは異なる姿を演じているという認識を伴う対人行動」と定義した。

演技行動は他者意識に関連している(定廣・望月 2009)。辻(1993)によれば，他者意識は，内的他者意識，外的他者意識，空想的他者意識の3つに分けられており，内的他者意識は他者の感情や言動など，内的側面に意識を向ける傾向を指し，外的他者意識は他者の服装やスタイルなど，外的側面を意識することを示す。空想的他者意識は，他者についての空想的イメージに注意を向ける傾向である。定廣・望月(2009)によれば，特に内的他者意識が演技行動に影響する。

また，演技行動の一つとして，作り笑いが挙げられる。押見(2002)によれば，公的自己意識の高い者ほど親密ではない相手に対して，自分の本当の感情を隠すために作り笑いを表出しやすい。したがって，相手によって演技行動に差があることが考えられる。

本研究では，①演技行動について，相手による生起頻度の差の探索的調査，②公的自己意識及び他者意識が演技行動に及ぼす影響の検討を目的とする。押見(2002)では，親密でない他者に対して作り笑いが起こりやすいことが示されているが，同程度に親密さが低くても，フォーマルな場合とインフォーマルな場合によって演技行動の生起に差があることが考えられる。したがって，今回はフォーマルな相手として客，インフォーマルな相手として知人を演技対象として設定した。接客業においては，状況や顧客の要望に応じて適切な行動をとる能力である，自己呈示の修正能力が重要であり(山口・小口 ,2000)，自己呈示の修正能力と公的自己意識の間には正の相関がある (山口 ,2002)。以上より，次の仮説を立てた。

仮説1:知人条件に比べ，客条件の方が演技行動が多い。
仮説2：内的他者意識が高い程，演技行動が多い。
仮説3:客条件では，公的自己意識が高い程演技行動が多い。

【方法】調査対象者　接客業経験のある大学生87名(男性:21名，女性:65名，不明:1名)に対して質問紙調査を行った。有効回答数は83部であった(平均年齢19.56歳，SD=1.25)。

質問紙の内容　対人場面を参加者間要因として，演技行動場面を「アルバイト中，客に対して」(N=44)「知人に偶然会ったとき」(N=39)の二種類を設定した。

演技行動頻度：定廣・望月 (2011)の「日常生活演技尺度」より，「その場で自分に求められていると思った役割に合わせた演技をする」など，「演技行動尺度」の17項目で構成した。質問項目に対し，「1.まったくしない～5.よくする」の5件法で評定を求めた。

公的自己意識：菅原(1984)の「自意識尺度日本語版」より，「自分についての噂に関心がある」など，「公的自己意識」の11項目を抜粋して構成した。

他者意識：「人の考えを絶えず読み取ろうとしている」などの他者意識尺度(辻，1993)15項目を使用した。公的自己意識と他者意識については，質問項目に対して「1.あてはまらない～5.よくあてはまる」の5件法で評定を求めた。

【結果】対象ごとに演技行動の差があるかを検討するため，演技対象を独立変数，演技行動を従属変数として対応のないt検定を行ったところ，有意差がみとめられた(t(81)=3.77 ,p <.001)。知人相手(M =3.60 ,SD =.41)に比べ，客相手(M =4.05,SD=.64)の場合が有意に高いことが示された。さらに，演技対象ごとに公的自己意識，他者意識の下位尺度3つを独立変数，演技行動を従属変数とした重回帰分析をステップワイズ法で行った (Table1)。その結果，客条件と($AdjR^2$=.10, p <.05)，知人条件での説明率が有意であった($AdjR^2$ =.14, p <.01)。客条件では公的自己意識が(β=.34 ,p <.05)，知人条件では外的他者意識が(β =.41 ,p <.01)演技行動に有意に正の影響を及ぼすことが示された。

Table1, 公的自己意識と他者意識を独立変数とした演技行動の重回帰分析

	客	知人
公的自己意識	.34*	—
外的他者意識	—	.41**
F	5.54	7.37
$AdjR^2$	.10*	.14*

*p <.05, **p <.01

【考察】結果より，知人条件に比べ客条件の方が演技行動が多いことが明らかとなり，仮説1は支持された。しかし，客条件では公的自己意識にのみ関連がみられ，知人条件では外的他者意識との関連が示されたため，仮説2は支持されなかった。外的他者意識が高い者は知人に対して演技をしやすい傾向にあることが示された。定廣・望月(2009)では，演技行動と内的他者意識にのみ相関が見らたが，本研究では異なる結果が得られた。定廣・望月(2009)の研究では，調査時に特定の演技対象を設定しておらず，おそらく調査参加者は近しい相手を想定して回答したと考えられる。一方で今回はあまり親密ではない相手を演技対象として設定していた。知人条件については，他者の外見に敏感な者は，相手の見た目によって対応を変えることが考えられる。ただし，客条件の場合は事務的対応を想定するため，相手への興味の強さと行動は関連しないと考えられる。また，客条件では公的自己意識との関連が認められ，公的自己意識が高いほど客に対して演技行動を行いやすいという仮説3も支持された。

【主な引用文献】

押見輝男 2002 公的自己意識が作り笑いに及ぼす効果 心理学研究 **73**, 251-257.
定廣英典・望月聡 2009 日常生活の演技動機に他者意識，信頼感が及ぼす影響について 日本パーソナリティ心理学会第18回大会発表論文集, 72-173.
定廣英典・望月聡 2011 演技パターンに影響を与える諸要因の検討:―日常生活演技尺度の作成および賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連 パーソナリティ研究, **20**, 84-97.

(はが　ちかこ・まつもと　ともいちろう)

看護師の初期キャリア発達に関する研究

○竹内　久美子[1)]　松下　由美子[2)]
([1)]千葉県立保健医療大学　健康科学部　[2)]佐久大学　看護学部)
キーワード：キャリア発達，看護，人的資源管理

【研究の目的】

近年、入職数年内に離職する新卒看護師が注目されており、新卒看護師の組織への適応を促進することが課題となっている。新卒看護師は、組織の文化や風土を受け入れ、組織の一員としての認識を自ら持ち、円滑に組織への適応を果たすことがキャリア発達上重要な課題として位置づけられている。専門職である看護師は、特に初期キャリア段階で離職せずに一定期間経験を積むことが、その後のキャリア形成に重要であると指摘されており（水野ら，2000)、初期キャリア段階において入職した組織へコミット（以下 SC）することを支援することは、看護師の長期就労を促進しひいては看護師の量的な確保のみならず質的な向上にもつながると考えられる。

これまでの研究では、新卒看護師が組織を辞めたいと思う気持ちには、個人の自己効力感（以下 SE）が影響することが確認されており、新卒看護師の認知傾向や心理状況を把握し支援することが組織への残留に対して影響することが示唆されている（竹内，2015)。

そこで本研究は、入職後２年間の組織コミットメントと個人の心理状況の関連を明らかにすること目的とした。

【方法】

(1)調査対象・時期

関東甲信越地方８病院に勤務する新卒看護師 329 名を対象として以下の時期に質問紙調査を実施し郵送法にて回収した。

第１回：2014 年 12 月（入職１年目）

第２回：2015 年 12 月（入職２年目）

(2)調査内容

個人的属性：年齢、性別、基礎看護学歴、所属施設規模、所属病棟、人員配置、教育体制、プリセプターシップの有無の８項目を設定した。SE 尺度：坂野により開発された一般的自己効力感尺度 16 項目を設定した。高値であるほど SE が高いことを示す。ローカスオブ・コントロール（以下 LOC）尺度：鎌原らにより開発された 18 項目を設定した。高値であるほど内的統制傾向が強いことを示す。組織コミットメント尺度：関本らが作成した４次元８項目の尺度を設定した。各次元の下位尺度のα係数は.08 以上を示した。

(3)分析方法

SE 得点、LOC 得点、SC 得点の合計点の相関係数を算出した。また SE 得点、LOC 得点、SC 下位尺度得点（目的、意欲、残留、功利）の経年的変化を確認するために、t 検定を実施した。さらに各年の SE 得点の高低による LOC 得点、SC 下位尺度得点の差を検定するために t 検定を実施した。

(4)倫理的配慮

協力病院の看護部長に研究目的、プライバシーの保護について口頭および文章で説明し了承を得た。対象者には調査票に協力依頼の文章を添付し、回答・返送を持って同意を得られたと判断した。尚千葉県立保健医療大学研究等倫理委員会の承認を得て実施した。（承認番号 2014－039）

【結果】

回収数（率）は、第１回調査 95 部(28.9%)、第２回調査 99 部(30.1%)であった。1 年目では SE 得点と SC 得点（γ＝.31，p<.01）LOC 得点と SC 得点に正の相関（γ＝.28，p<.01）が認められた。2 年目では、SE 得点と LOC 得点（γ＝.293, p<.01）SC 得点（γ＝.242, p<.05）に正の相関が認められた。

各得点の経年的変化を表１に示した。LOC 得点は１年目より２年目が有意に低く、SC のうち目的および功利においては２年目のほうが有意に低い結果であった。

表1　入職１年目と２年目の平均値の比較

		1年目	2年目	有意確立
SE得点		5.3	5.8	
LOC得点		48.4	47.4	p<.01
SC得点	目的	6.6	6.1	p<.01
	意欲	5.0	4.9	
	残留	5.0	5.5	
	功利	6.2	5.8	p<.01

各年において SE 得点の高低により５点を分析点として２群に分類し、LOC 得点と SC 得点（目的、意欲、残留、功利）の平均値の差を表２に示した。その結果、１年目に SE 得点の高い群は、SC 得点（目的、意欲、残留、功利）が有意に高かった。２年目には、SE 得点の高い群は、LOC 得点、SC 得点（目的、意欲、功利）が有意に高かった。

表2　SE得点の高低によるLOC･SC得点の比較

			SE高群(50)	SE低群(45)	有意差
1年目	LOC		49.0	47.8	
	SC	目的	7.0	6.2	p<.01
		意欲	5.4	4.6	p<.01
		残留	5.4	4.6	p<.01
		功利	6.6	5.8	p<.01
			SE高群(58)	SE低群(37)	有意差
2年目	LOC		48.5	45.5	p<.01
	SC	目的	6.3	5.7	p<.01
		意欲	5.4	4.3	p<.01
		残留	5.7	5.2	
		功利	6	5.5	p<.01

【考察】

SE 得点は、１年目から２年目に変化はないものの、各年の SE と SC には正の相関があり、SE の高い群は、１・２年目ともに SC が高い傾向にあった。このことは初期キャリア形成の段階で SE へ支援することの重要性を示唆している。

１年目から２年目にかけて SE は変化しないものの、LOC は有意に低下していた。SE と LOC には正の相関が認められており、自信や確信の高まりが内的統制を強めていると考えられる。２年目の段階では LOC が直接 SC へ影響することは確認できなかった。しかし、看護師としての経験を積み重ねると共に自律した判断などが求められるようになるにつれて、SE と LOC を媒介するもしくは間接的に SC へ影響を及ぼして行くのではないかと考えられる。これらの媒介変数を明確にしていくことで、組織への傾倒を高めるための方策を探ることにつながると考える。

【引用文献】

・水野暢子・三上れつ，2000. 臨床看護婦のキャリア発達過程に関する研究，日本看護管理学会誌 4(1)，p13~22.

・竹内久美子，2016. 新卒看護師の「やめたい気持ち」と自己効力感の変化，千葉県立保健医療大学紀要７（1)，p3～7.

（たけうち　くみこ・まつした　ゆみこ）

統合失調症当事者の服薬体験に関する予備的考察

○佐々木晶子[1)]　山本勝則[2)]　守村洋[2)]
([1)] 札幌市立大学大学院看護学研究科　[2)] 札幌市立大学看護学部)
キーワード：服薬体験，統合失調症当事者，語り

【はじめに】

統合失調症当事者の服薬体験を知るために、文献を調査した。その結果、文献における既存データと、日常の臨床実践で耳にする統合失調症当事者の体験に一部不一致があった。そこで、文献に見られる既存データと実践から抽出したナラティヴデータを比較検討し、服薬体験の明確化を試みることとした。

本研究の目的は、統合失調症当事者の服薬体験と服薬による影響を知ることである。

なお、本研究で言う服薬体験とは、統合失調症当事者が薬物を服用して感じた出来事である。

【研究方法】

統合失調症当事者の服薬体験について、医学中央雑誌 web 版を用いて文献検索を行った。「統合失調症」「服薬」「体験」をキーワードとして検索を行い、113 件抽出された。統合失調症当事者の語りを既存データとし、検索した文献から既存データを検討した。また、既存データと、研究者が実践から抽出したナラティヴデータを比較検討するため、既存データとナラティヴデータの類似する部分を検討した。比較検討に使用できる文献を 1 件確認できた。

再度、「統合失調症」「服薬」「心理教育」をキーワードとして医学中央雑誌 web 版を用いて文献検索を行い、154 件抽出された。既存データとナラティヴデータの比較検討に使用できる文献を、1 件確認できた。

データベース以外に、統合失調症当事者の服薬体験について当事者の語りが記載された手記本や、雑誌・書籍についても、既存データ抽出の対象とした。

ナラティヴデータに類似する既存データを、医学中央雑誌 web 版から抽出した 2 件の文献と、雑誌 1 件書籍 2 件から抽出した。既存データとナラティヴデータについて、一致部分と不一致部分の比較検討を行った。

ナラティヴデータについては、統合失調症当事者が服薬体験について語った内容を、研究者が想起して内容をまとめたものとする。

以下、既存データを E (Existing data)、ナラティヴデータを N (Narrative data) とする。

【結果】

1．服薬の必要性

E－1：クスリはやっぱりつかいたくない。でも、いまのわたしはクスリをつかわなくては生きてゆけない[1)]。

E－2：○○は（というか、どの薬も）自己判断ではやめないほうがいいのではないでしょうか。経験談ですが、5 ヵ月前に勝手に○○をやめました。すると 2 ヵ月前、無力感に襲われ、今また再開しています[2)]。

N：*調子が良いからといって、飲み続けていた薬をやめてしまうのはやっぱり良くないと気がついた。*

2．医師の判断/当事者の判断

E－1：先生が飲んどきなさいと言うもんで、しょうがないから飲んでるってことですよ[3)]。

E－2：前には薬を飲んだらどんなふうになるのか、わからないための恐怖感がありました。いまでは先生がくれたから信用して風邪薬と一緒と思えばいいんだなと思います[5)]。

N：*先生が処方した白い大きな玉の薬は、うまく説明できないけど飲みたくないから飲まない。*

3．当事者に適した服薬

E－1：たいていみな試行錯誤しながら自分なりのやりかたを見つけています[1)]。

E－2：例えば、△△錠が 1 日 3 錠出てると、“ああ、△△錠 3 錠も飲むとうつになっちゃうかな”とか、“ちょっと 2 錠ぐらいにしとこう”とかなんか…[3)]。

N：*これだけ長く病気とつきあっていると、自分に効く薬がだいたいわかる。*

4．薬について知る/薬について知りすぎる弊害

E－1：僕は薬のことは先生にお任せでした。それでやりたい放題やられたわけです。ですから身を守るために薬の勉強は必要です[4)]。

E－2：クスリをのみつづけるには、このクスリはどのような効用があるのかを知ることが重要です[1)]。

N：*服薬中の薬について、飲み続けていいのか、頓服として時々飲む方がいいのかを調べている。調べすぎて詳しくなることで、医師の意見が聞けなくなっている。良くないと思う。*

5．脳への効果/お腹への効果

E－1：薬はちょっとの量でも脳とかに効くんじゃないかな、すごく強いんじゃないかな、など不安です。風邪薬では、別に強いかどうか気にしないです。効けばいいと思っています。脳の薬は効きすぎると怖いです[5)]。

N：*飲んだ薬は全部胃に溜まる。薬も消化するのはわかるが、胃に溜まっていく。頭に効く薬だと言うけどお腹に効いている。風邪薬等は胃に溜まらなかった。*

【考察】

以上の結果から、統合失調症当事者は、以下のような服薬体験をしていると考えられる。

E と N の一致（結果１．３.）：服薬継続の必要性と、自己に適した服薬について、体験を通して理解している。

E と N の不一致（結果２．４．５.）：服薬について、医師の判断や自己の判断を優先している。薬について知ることは必要だが、知り過ぎることでの弊害を考えている。薬が身体のどこに効くかを体感している。

【引用文献】

1) 川村実・佐野卓志・中内堅・名月かな 2005 統合失調症とわたしとクスリ ぶどう社
2) 熊木徹夫 2007 精神科のくすりを語ろう―患者からみた官能的評価ハンドブック 日本評論社
3) 松田光信 2008 心理教育を受けた統合失調症患者の「服薬の受け止め」 日本看護研究学会雑誌 31(4)
4) 森美智代(編) 2014 統合失調症のひろば No3 日本評論社
5) 野口正行 2009 抗精神病薬を服用する統合失調症者の語り－精神病者の「喪失」と「回復」－ こころと文化 8(1)

（ささき あきこ・やまもと かつのり・もりむら ひろし）

服薬の問題へのかかわりについて（３）

○荒木晴海　　林　　潔
（欣助会吉祥寺病院）　　（白梅学園短期大学）

キーワード：看護　服薬指導　服薬中断

目的

看護の領域において服薬の問題のどのような点が，現在の課題として報告されているのであろうか。このことについて明らかにすることが本報告の目的である。

服薬支援の課題としては以下の点をあげることができる。

1.通院患者の問題

1)服薬の状態の把握の困難　「服薬している」といっても、どのような仕方なのか。カプセルを開けた服薬，水分摂取量が少なく口中に戻し再び飲み込むなどの例がある。

2)主治医が別個の病院の場合　患者が報告の必要を感じないと他の服薬内容が伝達されない場合がある。相互に影響する薬であっても,その調整を患者がする場合がある。「双方の主治医がプライドを持っているので，話し合ってくれず困る。どこに相談すればよいか」という訴えもある。,

3)医師とのコミュニケーション　特に大規模病院の場合，多数の患者が待っている。主治医の診察時間を過度に占有することを危惧して,患者は医師への質問をためらう。

2.入院患者の場合

1)医療関係者への直接的，間接的な抵抗

2)服薬拒否　目前であるいは隠れて

また.双方に共通することとして，患者の症状の説明が分かりにくいこと，および病状と薬剤の説明が患者の理解力に合わないことがあげられる。

方法

日本看護学会の７領域および聖路加看護大学の中山の運営する閲覧サイト看護系学会研究会一覧（2015 年 9 月 24 日現在）に掲載されている学会，研究会の年次学術大海発表論文，抄録であって，同年 12 月に国会図書館で閲覧可能な資料を対象とした。

結果

１．服薬についての報告　聖路加看護学会，日本看護学教育学会，日本看護研究学会，日本災害看護学会，日本医療情報学会看護部会，日本クリティカルケア看護学会，日本家族看護学会，日本看護科学学会各 1，日本がん看護学会 18，日本看護学会：急性期看護 6，ヘルスプロモーション 4，看護管理 6，慢性期看護 5，精神看護 6，在宅看護 2。

２．報告の内容例

１．患者の背景・生活の把握　漢方医学の習得（竹森，他,2015），体験学習の効果（中村，他,2015）

２.患者に合う支援　高血圧患者の指導(坪田，2013)，服薬に伴う苦痛の緩和（増本，他 ,2015）

３.投与ミス防止　内服管理マニュアル化(若杉, 2015)，配薬業務カレンダー（福田,2015），タスキ導入の効果(辻,2015)，中断の要因:ナースコール(川崎,2015)

４．抗がん剤　看護師の訓練（福留,2015），マニュアルの導入（福留,2015；松山,2015），正しい知識の伝達の必要性（松本，他,2015），患者の希望の取り入れ（髭内、2015），医師の治療説明後に看護師が内服の方法,副作用,対処法の説明をする(小島, 2015)，患者の不安傾向:再発と経済的不安(渡辺,他 2015)，家族の副作用の認識の必要性（清水,2015），電話，訪問等の指導（仲戸,2015），薬の保管場所食卓の上にしている人はアドヒアランスが高い（花田,2015）

５．自己管理への指導　内服自己管理の判断基準（小松，他,2015），内服自己管理アセスメントシートの利用（北爪,2015；高階,2015），面接による看護介入（藤本，他,2015），内服自己管理を妨げる要因（東 , 2015），飲み忘れの条件（藤原,2015），他職種の連携（塚原，他,2015），退院後の医療者，家族の交流（能勢，他,2015）

６．小児への内服指導　看護師管理，自己管理の条件（氏側，他,2015），内服困難の要因（増田,2015），保護者への内服指導（徳永,2015）

７．心理教育　心理教育（飯田，他,2015；飯沼，他 ,2015；浦崎，他,2015）

８．緊急時薬剤不足への対応策　地区の病院への連絡（鈴木,2015）

なお副作用の相談の対象は全員が医師で看護師には相談していない。デイケアの看護介入の必要性が強調される(若井，他,2015)。なお小児では患児の嗜好に合わせた選択肢も有効であったことが指摘されている（徳永,2015)。

考察

報告内容の症状別では，慢性疾患，特にがん関連が多数である。精神科，小児科がこれに続く。これらについては，特に副作用へのかかわりの問題が影響している。　服薬指導で強調されているのが，説明の仕方と心理教育の役割である。薬剤を投与する側の基本的な姿勢については，中井(2004)は薬でも「効きますように」と念じる気持で出す。筆者は神秘主義者ではないが，こころの中で語ると顔に現れるのであると述べている。 服薬行動の基本的な問題は，非慢性疾患の服薬の習慣が，慢性疾患の場合にも汎化していることと副作用への支援の問題であるといえる。

.看護師対象の課題では，1)薬剤についての知識の訓練（薬の専門家との共同作業（坂本,2015））と 2)患者とのかかわり場面の構成（例　タスキ）とかかわり方である。患者対象では，1)説明・情報提供の方法，2)心理教育の構成，3)職種間の連携（特に，管理薬剤師，精神科専門薬剤師など）が課題としてあげられているが，このシステムの構成についてはまた途上にあるといえよう。

服薬指導については試行錯誤的な手続きが進められている。

松村（1962）は看護師を医師・患者間に介在し，この二者関係を発展させる存在として位置づけている。　服薬指導の特色のあるプログラムや方法が開発されている。　それぞれの手続きについての情報の交換の機会が望まれる。

参考文献

松村康平　1962　看護の心理学　大日本図書

中井久夫・山口直彦 2004　看護のための精神医学第 2 版医学書院。

坂本すが　2015　看薬連携，病棟薬剤師，次は地域へ日本薬剤師会雑誌,**67**,1.

服薬の問題へのかかわりについて（4）

○林　　潔　　荒木晴海
（白梅学園短期大学）　　（斤助会吉祥寺病院）

キーワード：看護　服薬指導　服薬中断

目的

服薬について看護師の課題としては，薬の専門家との共同作業が指摘されている（坂本,2015）。それでは，薬剤師の分野では，服薬の問題についてどのような報告がなされているのであろうか。このことを検討することが本報告の目的である。

方法

日本薬剤師会発行による日本薬剤師会雑誌の2007年1月から2016年3月までに掲載された論文および報告の内容についてKJ法で検討をした。

結果

この期間の掲載論文および報告は1,129であるが，服薬に関するものは51であった（CiNiiによる）。

1)飲みやすさの工夫　カプセル化（田中，他,2016）

2)副作用対策　生活指導（長久保,2013）

3)患者・家族への指導　**A)患者指導**　患者指導（「医師の指示」と言っても納得しない）（竹内,2011），やる気を起こさせる会話（岡田，他,2011），適正指導の啓発（今月の情報,2012），患者への声かけ（日薬情報,2010）

B)小児の指導　小児患者・家族への指導（石川,2009；徳永,2012；山藤，他,2008），乳幼児の誤飲（石川,2012）

C)高齢者，介護者　訪問薬剤管理（加治，他,2007），訪問薬剤指導の効果（村川，他,2015），患者に薬配送時の医師の知らない情報のフィードバック（松尾,2012），生活指導・家族介護者の支援（恩田，他,2012），在宅医療支援（川越,2010；宮崎,2009），在宅高齢者支援（倉田,2009），在宅褥瘡指導（水野,2009），在宅栄養管理（八野,2009），認知症高齢者へのかかわり（谷，他,2008），緩和ケアのコミュニケーション(高瀬,2012),在宅緩和ケア(萩田,2009),緩和ケア協力（赤平，他,2007；松岡,2011），地域包括ケア（瀬戸,2011）

D)在宅移行　在宅移行の支援（大井，他,2009），精神科早期退院患者支援（広岡，他,2009）

E)特定の問題　統合失調症患者への心理教育（菅原，他,2007），患者の自殺予防（吉村,2008），不登校者へのかかわり(梶平,2007),朝食欠者への対応(西山,他,2009),禁煙支援（日薬情報,2010；田口,2009）

4)他職種連携　チーム医療（今月の情報,2013），プライマリケアにおける連携（鈴木，他,2015），訪問看護師支援（古田,2009），認知症ケアスタッフへの介入（永嶋,2015；大野,2013），生活習慣病患者の医師との情報の共有（宮川,2012），患者と医師をつなぐ，時間外電話相談（今月の情報,2016），お薬手帳利用のチーム医療の有効性（間瀬,2015），精神科チーム医療，薬剤師に対する精神看護学テキストの利用（桑原,2013）

5)病院・薬局薬剤師の連携　患者研究・どういうタイミングで服薬を忘れるのか（宮崎，他,2012）

6)薬学生の指導

薬学生実習（上井,2009),服薬体験実習（長南,他,2015),ロールプレイによる服薬指導（飛鷹，他,2014）

7)事例分析　ヒヤリハット事例分析（日本薬剤師会DI委員会,2013）

8)その他　患者からのフィードバック（大西,2010）

健康食品の問題（梅垣,2008），製薬会社の相談窓口（服薬への」不安の反映）（苅谷,2010），使用者の意識（今井，他,2007）

直接の服薬指導について,様々な試みが報告されている。例えば，岡田と坂根（2011）はJung心理学を背景として患者を外向・論理型，外向・感情型，内向・論理型，内向・感情型に分類して待つ時の姿勢の特徴をあげて，薬剤師に期待する対応について分析をしている。

また徳永ら（2012）は小児に対する服薬指導の実際として，1.話すときは物語仕立てで，2.クイズを出して誉めちぎる，3.興味をひく時には手書き，4.泣いてしまった患児には保護者とともに指導，5.受け身の治療から前向きの治療へ，6.小児の治療は誉めて伸ばすという方法をあげている。確かに安易な共感的表現は避け，それだったらできるかも！」という感覚を提供する（高瀬,2012）ことが基本である。

考察

服薬指導についての論文・報告は，4.5%と少数であり，薬剤師の分野でも今後の課題であることが理解できる。

かかわりの場合に，症状と合わせ発達段階の理解，特に小児，高齢者の認知・運動機能の理解は必要になる。成人の場合と異なるところがある。また，職種間および患者，家族へのコミュニケーションスキルの訓練が求められる。

特に患者への対応については，受容を基本として，問題や課題の具体的な把握の方法と，段階的接近法の手続きとが評価されている。すなわち，認知行動的かかわりの寄与するところが大きい。

院内のみならず，在宅医療重視の中で医療関係者の直接目に見えないところにいる患者と家族の服薬指導と生活指導とは課題となる。服薬指導については関係の専門領域で様々な工夫や試みが行われている。これらが専門領域の枠を越えてさらに交流が進められることが望まれる。

引用・参考文献.

岡田浩・坂根直樹　2011　患者をやる気にさせる会話術　日本薬剤師会雑誌、**63**,703-706.

坂本すず　2015　看薬連携，病棟薬剤師，次は地域へ　日本薬剤師会雑誌,67,1.

高瀬久光　2012　緩和医療における食事とコミュニケーション　日本薬剤師協会雑誌,**64**,439-443.

徳永秀夫・石川洋一・小高賢一　2012　小児患者本人に向けての服薬指導　日本薬剤師会雑誌,64,1137-1140.

職場における障害者雇用が従業員の否定的ステレオタイプ形成・軽減におよぼす影響

○蒲倉　聡[1,2]
([1] 日本大学大学院総合社会情報研究科　[2] 東京都肢体不自由児者父母の会連合会)
キーワード：ステレオタイプ　集団間葛藤　社会的距離　接触経験　障害者雇用　カミングアウト

【研究の目的】

2016年4月に障害者雇用促進法が改正施行され、新たに精神障害者も法定雇用率カウント対象者として加えられるようになり、障害者等を雇い入れる法整備が整いつつある。しかし、当事者側で特に障害の程度が軽度であったり可視化できない障害疾病等をもつ者にとっては、職場にカミングアウトをした際の職場からの偏見や差別を懸念し、あえて隠し通す（クローズド）ことにより、通院等の機会を逸し、結果として労務不能となる事案が報告されている（相沢, 2007）。一方、国内の過去の研究では、当事者の支援や援助法、当事者の心をテーマにした研究が盛んであるが、当事者ではない者の心の反応や印象形成に焦点を当てた研究は少ない。社会心理学領域でステレオタイプや印象形成をテーマにした研究は散見（栗田・楠見, 2014）されるが、社会人経験がない学生を主とした研究が多い。

そこで、本研究では、社会人を回答対象とし、実験操作として架空の調査者が精神障害者である旨をカミングアウト（顕現性のある自己呈示条件）を行う条件を用いた後、質問紙に回答することによって、回答対象者の障害当事者への各接触経験と各呈示条件が、否定的ステレオタイプ形成・低減にどのような影響をもたらすのかについて検証した。

【方法】

調査期間は2015年9月~10月であった。調査対象は、日本国内在住で、いままで企業等で勤務経験が1年以上の30歳以上の男女（11500名）に対してweb調査を用いて回答をおこなった。予備調査では回答者の属性情報と接触経験についての質問を行い、予備調査から抽出された2195名に本調査を実施した。本調査では、実験群と統制群、質的接触が高い群、低い群に分けた。実験群のそれぞれの調査対象者には、無作為に障害者手帳を呈示（P-Hi群）、一方には学生手帳を呈示（P-Lo群）させた。統制群（Control群）にはなにも呈示させなかった。各情報呈示をおこなった後、Linkスティグマ尺度日本語版(下津・坂本・堀川・坂野, 2006）に回答させた。最後にディブリーフィングを行い、呈示実験についてのマニピュレーションチェックを行った。本調査から得られた1390名を分析対象者とした。本調査の各群調査結果と、Linkスティグマ尺度日本語版（4件法、12項目）の過去の合計得点の平均値を比較・分析し結果を検証することとした。

【結果】

否定的ステレオタイプの有無・程度の検討　上記尺度の平均点（患者群・健常群）と、本調査で得られた回答結果（実験群、ならびに統制群）を、各々2群間の母平均の差の検定（Welchの方法）をおこなった。外来患者群に対しては両者とも1%の有意差が検出された（$t(1090)=-17.157$, $p<.001$; $t(300)=-7.910$, $p<.001$)。次に、尺度の健常群（大学生）に対しては、実験群については1%有意差が現れたが、統制群との間には有意差が認められなかった($t(1090)=-3.920$, $p<.001$; $t(300)=-0.386$, *n.s.*)。なお、実験群・統制群との間には有意差はみられなかった（$t(1388)=1.602$, *n.s.*)。

接触経験別の軽減効果の検討　各接触経験(N=903)（質的接触経験（Q)・単純接触経験（S)・直接接触経験（D））が尺度得点にどのような差があるのか、各下位水準を高（Hi)・低（Lo)に分けたうえで2×2×2の分散分析で分析をおこなった。結果、質的接触（Q)の主効果が認められた（$F(1,895)=7.4370$, $p<.01$）が、単純接触（S)、直接接触（D）の主効果は認められなかった（$F(1,895)=3.7452$, n.s.; $F(1,895)=0.5334$, n.s.)。Tukey法による多重比較検定をおこなったところ、質的接触の水準間（Q-HiとQ-Lo)においてのみ、5%の有意差がみられた。交互作用については、質的接触・単純接触間のみ有意差が認められた($F(1,895)=8.9633$, $p<.01$)。

呈示効果の検討　尺度得点について、自己呈示を明示させた群（P-Hi (N=337))、曖昧に呈示した群(P-Lo (N=346))、なにもしない群(Control (N=220))に分けて、比較分析した結果、呈示(P)の主効果が認められた($F(2,900)=4.078$, $p<.05$)。

呈示タイミングの検討　呈示と各接触経験に着目し、2×2×2×2の分散分析を行った。分析の結果、呈示（P)の主効果は認められなかった（$F(1,667)=0.0004$, n.s.)。交互作用については、呈示（P)と単純接触（S)間、に有意差が認められた（$F(1,667)=3.9849$, $p<.05$.)。呈示（P)と単純接触（S)間においてTukey法による多重比較検定では、P-Loにおいては有意差なしだが、P-Hiにおいては1%の有意差が確認できた（$F(1,667)=0.0051$, n.s.; $F(1,667)=8.0998$, $p<.01$)。

【考察】

以上、分析結果から、①社会人においても障害者への偏見が存在している。②質的接触経験が高い人の方がとくに偏見が強い。③顕現性の高い自己呈示は否定的ステレオタイプを全般的に強化させる。④顕現性の高い自己呈示は、顕現性の低い自己呈示に比べ、単純接触が高い群、質的接触が低い群に対しては、否定的ステレオタイプを低減する上で有効であるが、劇的に低減するほどではなく、効果は限定的。⑤顕現性の高い自己呈示は、単純接触が低い群、質的接触が高い群に対しては、否定的ステレオタイプをさらに強化してしまう。

結果から、「第三者から容易に確認することができない障害や疾病,特性等抱えている者」は、よほどの状況ではない限り、自己の病状を隠し通してしまう方が、自己や社会からのスティグマにさらされない上では得策であると判断し、つい、隠し通してしまうことが、分析結果からも浮き彫りとなった。

今後は、準実験や実験室実験を用いた、呈示実験の検証も必要と考える。

【引用文献】

相沢欽一（2007）．現場で使える精神障害者雇用支援ハンドブック．金剛出版
栗田季佳・楠見 孝（2014）．障害者に対する潜在的態度の研究動向と展望．教育心理学研究, **62**, 64-80.
下津咲絵・坂本真士・堀川直史・坂野雄二（2006）．Linkスティグマ尺度日本語版の信頼性・妥当性の検討．精神科治療学, **21**, 521-528.

（かまくらさとし）

スクール・ソーシャルワーカーからみた重要業務のＰＡＣ分析

○杉山大成　　杉山沙羅　　内藤哲雄
（中島村教育委員会）（福島学院大学大学院）（福島学院大学福祉学部）
キーワード：スクール・ソーシャルワーカー（ＳＳＷ）、コーディネート、啓発活動

【目的】スクール・ソーシャルワーカー(SSW)は業務の中で、多岐にわたる役割を期待される。本研究では、組織の役割分担に縛られず柔軟に対処することが可能な小規模な自治体で活動するＳＳＷを対象とし、重要業務の関係構造をＰＡＣ分析により検討することを目的とした。

【方法】＜被検者＞人口 5,000 人の小規模自治体で活動するＳＳＷで、20 歳代前半。男性。

＜手続＞連想刺激は、「あなたは、スクール・ソーシャルワーカーとして活動する中で、教育事務所、教育委員会、学校などの学校関係、役所の福祉課、社会福祉協議会、児童相談所などの行政・福祉、家庭裁判所、警察署少年課などの司法・警察など多様な機関と関わることになりますが、活動を進める上で、どのようなことが重要だと感じていますか。個々のケースの問題を解決するにあたって重要なことは何であると感じていますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」と口頭で教示し、文章も提示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ換えさせた後、各項目の直感的類似度を７段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での連想イメージと＋－0 イメージを質問した。

【結果】各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は、Fig.1 のようになった。

＜被検者による解釈：抜粋＞クラスター1 は、「信頼関係」～「コーディネート」の 11 項目。…コーディネートしてつなぐ。ニーズに合ったつなぎ…クライアントの味方。それぞれのニーズに合ったコーディネート。つながることの重要性、ソーシャルワークの基盤。ネットワークのコーディネート、ネットワーク作り、つながるということでまとまっている。

クラスター2 は、「様々な支援策の模索」～「予測」の 12 項目。しっかりとしたアセスメント、多岐にわたる知識と情報収集。多面的な視点で、過去、現在、未来を見通す力。情報収集が基盤にあり、関係者がチームとなって支援できるよう、共通理解を図る。どれだけ臨機応変に動けるか。クライエントの、支援者側の、また地域のストレングスを生かした支援。

クラスター3 は、「自立支援」～「啓発活動」の９項目。視点ということでまとまっている。支援の具体的な方法。個々人と世の中全体を見る視点、問題解決、幅広い活動、必要だがあまりなされていないこと。出来たら理想的。

【考察】クラスター1 は、ニーズを把握し、実際に関係調整を行うために必要な、ネットワークづくりや横のつながりを日頃から行っていれば、問題解決のコーディネートが可能。**＜個別のニーズに沿った支援を可能にする基盤的ネットワークづくり＞**と解釈できよう。

クラスター2 は、メゾ・マクロの視点を含む統合された視点である。**＜質の高い支援活動をするために必要な情報収集と共通理解＞**と命名できよう。

クラスター3 は、多面的・多段的かつ啓発的・統合的な視点が必要であると感じている。資源開発には、今ある資源の有効な活用方法を模索する、また、いかに組み合わせ活用するかという視点も含まれており、啓発活動やストレングスへ

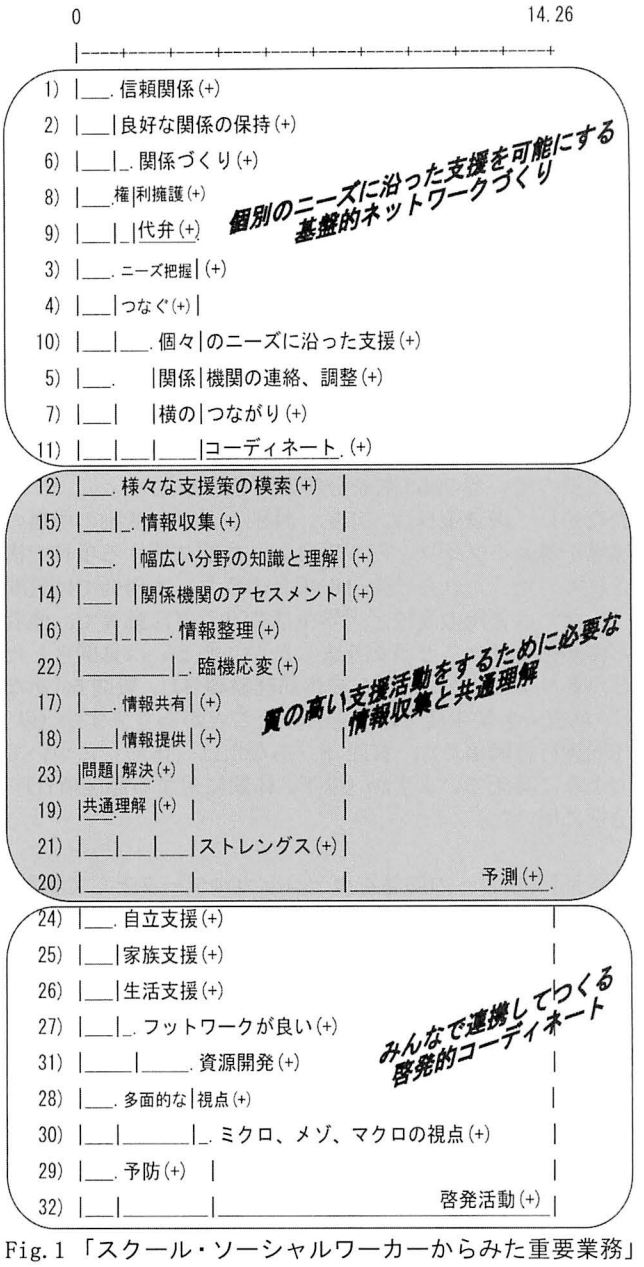


Fig.1「スクール・ソーシャルワーカーからみた重要業務」のデンドログラム
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの（ ）内の＋－0 は単独でのイメージ

とつながる。支援関係者が連携できるようつなぐのは、フットワークであるといえる。これはまさしくソーシャルワークである。**＜みんなで連携してつくる啓発的コーディネート＞**と命名できよう。

本研究の対象者が上記のようなスキーマを持つに至ったのには、小規模な自治体であるがゆえに、組織の役割分担に縛られず柔軟に対処する活動が可能であったことの影響が推測される。大規模な自治体においても、活用すべき視点であるといえよう。

（すぎやまたいせい・すぎやまさら・ないとうてつお）

体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（６）

― 体罰容認態度へ影響する要因の分析 ―

○市川　優一郎[1)]　福場　久美子[2)]　宇部　弘子[2)]　鈴木　悠介[3)]　深見　将志[4)]
小川　拓郎[5)]　軽部　幸浩[6)]　藤田　主一[2)]
([1)]日本大学文理学部　[2)]日本体育大学　[3)]東京都立板橋特別支援学校　[4)]日本大学商学部　[5)]埼玉県体育協会　[6)]駒澤大学)
キーワード：体罰，体罰容認態度，体育専攻学生

【研究の目的】学校教育現場における体罰・暴力は，近年の重要な社会問題となっている。市川・福場・宇部・鈴木・本間・小川・深見・藤本・藤田(2015)は，体罰に対する態度を質的変数と捉え，被体罰経験や体罰遂行経験とどのように関連するのかについて検討した。本研究では，体罰に対す態度を体罰容認態度として量的変数と捉え，体罰容認態度に影響を及ぼす諸要因について検討することを目的とした。

【方法】調査・分析対象者： 2015 年 4 月，都内の体育大学において体育学を専攻する大学 1～3 年生 4136 名（男性 2580 名（平均年齢 19.0±0.98 歳），女性 1556 名(平均年齢 18.9±0.92 歳))を対象に調査を行なった。そのうち，データに欠損の無い者 3953 名を分析の対象とした。
調査項目：調査項目は，年齢，性別，クラブ活動の所属の有無等を尋ねるプロフィール項目と，体罰に関する項目で構成されていた。これらの全 16 項目のうち，本研究では質問 3「あなたは普段の高校／大学生活やクラブ活動等で，他者から体罰を受けたことがありましたか。あるいは見聞きしたことがありましたか（以下，被体罰経験項目)」，質問 5「あなたは，高校／大学生活で体罰を行ったことがありますか（以下，体罰遂行経験項目)」，質問 8「あなたは「体罰」についてどのように考えていますか（以下，体罰に対する態度項目)」を分析に用いた。

【結果】各項目への回答をカテゴリカルデータとして集計し，各項目間の関係性について χ^2 検定を用いて分析を行なった。体罰に対する態度項目について，「①容認している」または「②どちらかというと容認している」と回答した場合を容認的態度とし，「③どちらかというと容認していない」または「④容認していない」に回答した場合を否認的態度として集計した。体罰に対する態度と学年（1 年生・2 年生・3 年生）との関係を検討するため，χ^2 検定を行ったところ，有意であった（χ^2=23.31, df=2, p<.01）。次に，被体罰経験項目への回答について，「①自分が体罰や暴力を受けたことがあった」に回答した者を被体罰経験有とし，回答していない者を被体罰経験無として集計した。加えて，体罰遂行経験項目に対して「①ある」と回答した者を体罰遂行経験有とし，回答していない者を体罰遂行経験無として集計した。分析の結果，被体罰経験と体罰遂行経験の関係は有意であった（χ^2=68.44, df=1, p<.01)。次に，体罰遂行経験と体罰への態度との関係を検討したところ，有意であった（χ^2=17.19, df=1, p<.01)。また，被体罰経験の有無と体罰への態度の関係は有意であった（χ^2=60.11, df=1, p<.01)。被体罰経験項目の「②他者が体罰や暴力を受けているところを見たことがあった」に回答した者を体罰目撃有とし，「③実際に見たことはないが，体罰や暴力があるという噂を聞いたことがあった」と回答した者を体罰伝聞有として集計した。分析の結果，体罰目撃と体罰に対する態度との関係が有意であり（χ^2=21.77, df=1, p<.01)，体罰伝聞と体罰への態度の関係は有意ではなかった（χ^2=0.006, df=1, $n.s.$)。

次に，体罰に対する態度を 4 段階の量的変数として，体罰容認態度を算出した。被体罰経験・体罰目撃経験・体罰伝聞経験・体罰遂行経験の有無で調査参加者を群分けし，体罰容認態度の平均値について t 検定を行なった（Fig.1.)。その結果，体罰伝聞経験の有無以外の独立変数で，有意な差が認められた（被体罰経験：t(3951)=8.30, p<.001；体罰目撃経験：t(3951)=4.90, p<.001；体罰伝聞経験：t(3951)=0.98, $n.s.$；体罰遂行経験 t(3951)=4.83, p<.001)。

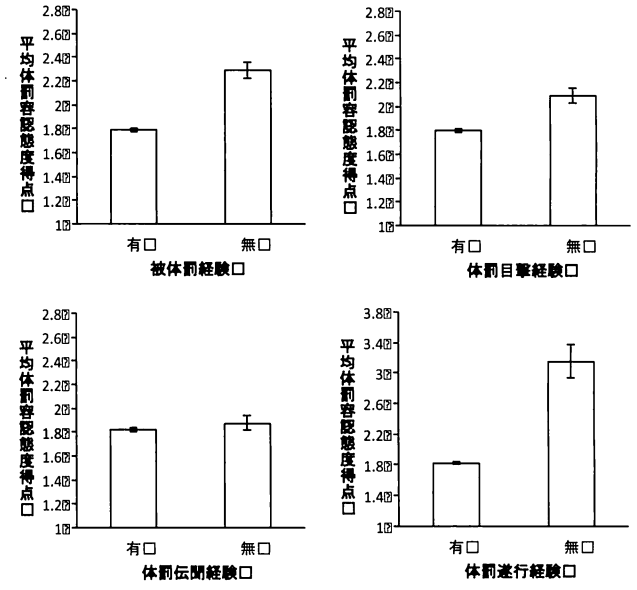


Fig. 1. 各経験の有無による体罰容認態度（エラーバーは標準誤差）

さらに，被体罰経験（有・無）と体罰遂行経験（有・無）を説明変数，体罰容認態度を目的変数としたモデルを設定し，数量化 I 類を行った。その結果，カテゴリースコアは被体罰経験有で 0.44，体罰遂行経験有で 1.04 となり，体罰遂行経験の方が高いことが示された。

【考察】分析結果，被体罰経験，体罰目撃経験，体罰遂行経験は，それぞれ体罰容認態度に影響を及ぼしている可能性が示唆された。またそれらの要因の中でも，特に被体罰経験と体罰遂行経験は体罰容認態度を高める可能性が示唆され，その傾向は体罰遂行経験の方がより顕著であることが示された。

【引用文献】市川優一郎・福場久美子・宇部弘子・鈴木悠介・本間悠也・小川拓郎・深見将志・藤本太陽・藤田主一（2015). 体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（4）―体罰の経験と態度との関連― 日本応用心理学会第 82 回大会発表論文集, 51.
（いちかわ　ゆういちろう・ふくば　くみこ・うべ　ひろこ・すずき　ゆうすけ・ふかみ　まさし・おがわ　たくろう・かるべ　ゆきひろ・ふじた　しゅいち）

体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（7）

― 自由記述からの検討 ―

○福場久美子[1)]　市川優一郎[2)]　宇部弘子[3)]　鈴木悠介[4)]　深見将志[5)]　小川拓郎[6)]　軽部幸浩[7)]　藤田主一[1)]
([1)]日本体育大学体育学部　[2)]日本大学文理学部　[3)]日本体育大学児童スポーツ教育学部　[4)]東京都立板橋特別支援学校
[5)]日本大学商学部　[6)]埼玉県体育協会　[7)]駒澤大学文学部)

キーワード：体罰，体育専攻学生，自由記述

【研究の目的】 体罰行使の禁止について，学校教育法第 11 条が制定されて 69 年経ったが，昨今，体罰問題は大きな社会問題となっている。文部科学省の「平成 26 年度における体罰の状況（国公私立合計）」における，体罰時の状況について，中学校では授業中 174 件，部活動 115 件であり，高等学校では部活動 123 件，授業中 101 件を報告をしている。このことから，部活動時に体罰の行使がなされていることが予想される。福場他（2015）の「体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（5）」においては，高校生活と大学生活において，体罰の実行者，体罰の種類，体罰への認識の相違についての報告をしている。そこで本研究では，体罰が行使されやすい状況にいたと考えられる体育専攻学生を対象に，体罰に対する意識，学校現場の体罰がなくなるためには何が必要かについて調査することにより，体育専攻学生の体罰に対する意識と実態を把握し，体罰を未然に防ぐための効果的な方法を検討することを目的とした。

【方法】調査対象者：A 大学体育専攻学生 1069 名（男性 643 名，女性 421 名，未記入 5 名：平均年齢 20.11 歳，SD=0.50）であった。

調査手続き：調査は平成 27 年 4 月中旬～下旬に集合調査法にて実施された。調査実施の前に調査の目的や，内容説明を行い，承認を得られた者にのみ回収をした。

調査内容：学校における体罰をどのように考えているか，学校現場における体罰をなくすために何が必要かについて，自由記述にて回答を求めた。

分析方法： IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0 を使用した。自由記述の分析は，感性分析を用い言語学的手法に基づくカテゴリ化を行った。

【結果および考察】 Fig. 1 は，「学校における体罰をどのように考えているか」について，Fig. 2 は，「学校現場における体罰をなくすために何が必要か」についてのカテゴリ間 の共通性を図示したものである。Fig. 1 については，抽出されたカテゴリのうち出現率が高かった 5 つは，「いけないこと」(出現率：21.05%)，「体罰」（出現率：18.52%)，「あってはならない」（出現率：16.93%)，「良くない」（出現率：14.78%)，「ダメ」（出現率：6.83%）であった。体罰に対する意識として，これら 5 つのカテゴリが高出現率で含まれており，その中の自由記述には「体罰はどんな理由があってもしてはいけないと思う」「体罰というものはどういう状況であれ，あってはいけないものなので，いくら指導といってもおかし いと思う」という意見があった。このことから，調査を実施した体育専攻学生は，体罰に対して否定的な認識を示していることが示唆された。学校現場における体罰をなくすために何が必要かについて抽出されたカテゴリの出現率が高かった 5 つは，「意識」（出現率：17.49%)，「指導」（出現 率：12.54%)，「生徒」（出現率：9.07%)，「教師」（出現率：5.71 %)，「信頼」（出現率：5.43 %）であった。学校現場における体罰をなくすために何が必要かについては，これら 5 つのカテゴリが高

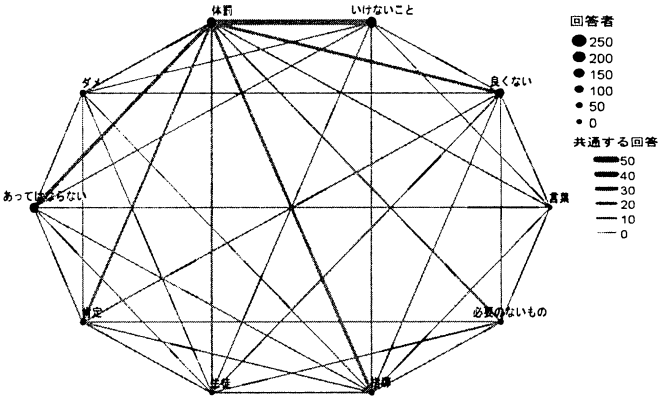


Fig.1. 体罰に対する意識についてのカテゴリ間の共通性（全体）

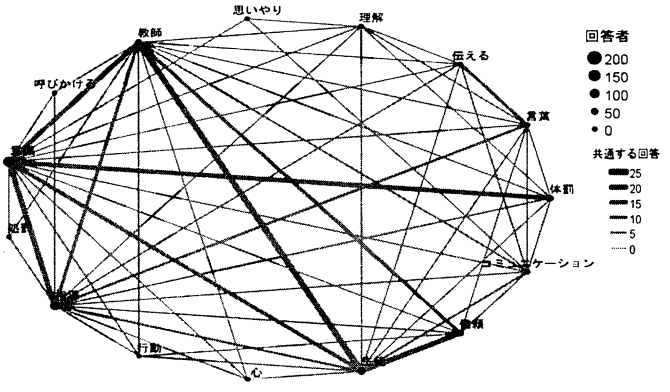


Fig.2. 体罰をなくすために何が必要かのカテゴリ間の共通性（全体）

出現率であり，その中の自由記述には「一人ひとりが体罰の危険さなどを意識的に考えていくことが必要だと考えています」「先生や生徒の意識を変える必要があると思う」「先生が生徒と信頼関係を築き，お互いを認め合うこと」という意見があった。最上（1996）は体罰根絶について，児童生徒と十分に付き合う余裕がなければならないこと，教職員には法律を遵守する義務があること，自らの立場を再認識する必要があることを述べている。これらのことから，体罰を未然に防ぐ方法として，体罰を行使してはならないという「意識」を持ち，教員と生徒の相互の信頼関係を築くという心理的な側面からの方法が効果的ではないかと示唆された。

【引用文献】福場久美子・市川優一郎・宇部弘子・鈴木悠介・本間悠也・小川拓郎・深見将志・藤本太陽・藤田主一 2015 体罰・暴力における体育専攻学生の意識と実態（5）－新入生と 2 年生からの検討－ 日本応用心理学会第 82 回大会発表論文集 p.52.

最上嘉個子 1996 教育心理学と実践活動　学校現場における体罰をめぐって 教育心理学年報，35，147－156.

（ふくば くみこ・いちかわ ゆういちろう・うべ ひろこ・すずき ゆうすけ・ふかみ まさし・おがわ たくろう・かるべ ゆきひろ・ふじた しゅいち）

異文化圏の日本人サッカー選手・指導者が求める心理支援のあり方

高井　秀明
（日本体育大学体育学部）
キーワード：異文化適応，遠隔心理支援，サッカー

【研究の目的】

近年，我が国においては国際的な競技力の向上を目指し，強化拠点を海外のスポーツ先進国に移して専門とする競技水準の向上を図る選手や指導者が増加している。その一方で，海外の生活環境の変化に馴染めず，心理支援を必要とする日本人選手や指導者が跡を絶たない。

これには「ある文化において歴史的に共有されている自己についての前提」である文化的自己観（高田，2000）が影響するものと考えられる。個人は他者から別離し，他者から独立して独自性を主張することを必要と考える「相互独立的自己観（independent construal of self）」が欧米文化には一般的であるのに対して，個人は互いに結びついており，様々な人間関係の一部になりきることが大切と考える「相互協調的自己観（interdependent construal of self）」は日本をはじめとするアジア文化で優勢であるといわれている（北山，1995）。

このように，人間や個人というものの考え方が基本的に異なるために，欧米の心理学の枠組みに沿った理論や知見は，日本文化に必ずしも妥当しないことを北山（1995）は指摘しており，実際それを確認する知見も徐々に集積されつつある（北山・高木・松本，1995）。もちろん，その反対に日本では当たり前のことが，欧米文化では適応されないこともありえる。これはスポーツの世界も例外ではない。

これらを考慮した言動や行動をとることが，異なる文化をもつ選手と指導者の相互理解に繋がるものと考えられる。ただし，このように対処することは，互いの自己観の特徴をみると当然のことながら容易でない。そのため，異文化に対する不適応経験が積み重なり，競技に専念することができず，悩み苦しみ，最終的にはドロップアウトしてしまう日本人選手や指導者は少なくない。

本研究では，欧米文化の相互独立的自己観と日本文化の相互協調的自己観の特徴を示すことが予想される集団競技のサッカーを対象競技とし，サッカー先進国であるドイツ・オランダに在留する日本人選手と指導者が求める心理支援のあり方について検討することとした。

【方法】

日本人選手・指導者に対する心理支援

心理支援を希望する異文化圏のドイツ・オランダに在留するサッカーの日本人選手と指導者の7名には，継続的に約2週間に1回の頻度で，1回あたり約50分間にわたって情報通信技術（information and communication technology）を活用して遠隔心理支援を実施した。

今回は，日本人選手と指導者の要望を考慮し，Skypeもしくは FaceTime を利用して対応した。なお，遠隔心理支援の実施者は，日本スポーツ心理学会認定スポーツメンタルトレーニング上級指導士の資格を有していた。

日本人選手と指導者に対して遠隔心理支援を実施する前には，ドイツ・オランダで直接対面し，インテーク面接を実施することとした。それを踏まえ，日本人選手と指導者の個々に必要な遠隔心理支援のあり方を検討した。また，遠隔心理支援を継続的に実施し，半年に1回はドイツ・オランダを訪れて日本人選手と指導者の状況を把握するとともに，継続的に実施した遠隔心理支援について評価した。

日本人選手・指導者のためのガイドライン

日本人選手と指導者に対して継続的に遠隔心理支援を実施し，これまでに蓄積した事例をもとに，異文化圏における日本人選手と指導者に必要なガイドラインを総括的に作成することとした。

ガイドラインを総括的に作成するためには，他の研究者による研究結果や対象に対する解釈の受容・納得が必要であるため（渡邊，2004），本研究では異なる研究者間の解釈が収束する点を探索するトライアンギュレーションを利用した。なお，今回はスポーツ心理学を専門とする研究代表者1名とブンデスリーガのサッカー指導者1名，臨床心理学を専門とする心理療法士1名の合計3名により，トライアンギュレーションを行なった。研究代表者の分析をもとに，意味単位と記述的ラベルの整合性やカテゴリーの内容について3名の解釈が一致するまで議論した。

最終的には，日本人選手と指導者のそれぞれがもちあわせる長所を活かし，世界をフィールドに活躍するためのガイドラインを作成した。

【結果及び考察】

ドイツ・オランダに在留する日本人選手と指導者の7名に対して継続的に遠隔心理支援を実施した。なお，日本人選手と指導者には，認知行動療法を中心に実施し，問題・課題に対応した。その結果，ビザをはじめとした「生活環境の整備」やチームメイトとの「良好な人間関係の構築」，パフォーマンスに関係する「競技成績の評価」など，問題・課題は個々に応じて様々であった。しかしながら，在留期間と問題・課題には，関係性がみられた。

具体的にみると，日本人選手と指導者のドイツ・オランダでの在留当初は，「言語習得」が最も重要であった。それと同時に，日本人選手・指導者として異文化適応するには，「異文化の理解と受容」が必要条件であった。その後，ドイツ・オランダでの在留期間が長期化すると「日本文化の理解と受容」が重要視されることが明らかとなった。また，「日本人の勤勉さ」，「細やかな気遣い」，チームのために自分を捧げることができる「献身性」といった相互協力的自己観は，日本人選手と指導者が世界を舞台に活躍するための特長であることが示された。

つまり，まずは「語学の習得」が必要であり，その後に「異文化の理解と受容」がうまれることが明らかになった。それと同時に「自己の特性に関する興味・関心」を高め，「日本人や日本文化の再認識」に繋がることが示された。また，異文化圏であっても選手もしくは指導者として，「サッカーに関する研究」は継続しなければならない。そして，日本人選手と指導者は，自分が日本人であるということを前提とし，その特長を把握して活かすための対応が望まれる。

以上の異文化適応のプロセスを考慮した上で，今後は日本人選手と指導者の問題・課題に対処するための心理支援が必要ではないだろうか。

（たかい　ひであき）

行動特性と職種適性

職種に必須なコンピテンシーとその測定

星　洋
（社団法人　行動特性研究所）

キーワード：心理テスト　行動特性　職種に必須なコンピテンシー

1. 問題意識及び調査方法

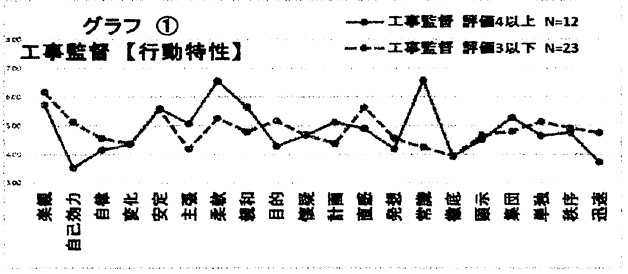
採用における職種マッチング及び入社後の育成効果の向上のために、職種に必要とされる能力と行動特性の抽出を試みた。

建設施工会社（A社）の工事監督及び技能職人（基礎や木工等の現場施工を行う技能工）を対象に行動特性診断テストで行動特性を測定し、行動特性の組合せにより能力（コンピテンシー）を測定した。その後、測定結果と人事評価との相関を求め職種に必要なコンピテンシーを抽出した。

行動特性と能力の測定には行動特性研究所の『行動特性診断テスト』を使用し、人事評価はA社経営者による5段階評価を使用した。行動特性研究所では「能力は一連の行動の組合せによって発揮される」という仮説に基づき行動特性に一連のアルゴリズムを施して能力測定を行っておりその実用例も多い。

2. 優秀者の行動特性

工事監督35名と技能職人42名を人事評価4.0以上（以下、「優秀者」と呼ぶ）と人事評価4.0未満（以下、「標準以下者」と呼ぶ）のグループに分けて統計処理を行った。優秀者は『柔軟性・常識性・親和性・主張性・計画性』の項目が標準以下者を上回り、『自己効力・迅速性』が下回っていた。（グラフ①参照）これらの行動特性から、優秀者は「ものごとに柔軟に対応し常識に基づいた行動が多く、人に対して親身に関わり、積極的に発言し、計画を立てて実行する」という行動プロフィールと「品質に対して常に気を使い、慌てずゆっくり取組む」という行動プロフィールが見られた。



一方、技能職人の優秀者においては『自律性・自己効力・集団性・顕示性』の項目が標準以下者を上回っており「仕事のやり方や段取りを自ら決定し、自信を持って行動し、共同作業を大切にしながら自己をアピールする」という行動プロフィールが見られた。

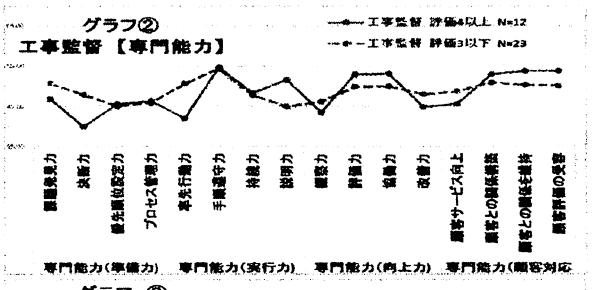
施工者として同じ技術職ではありながら、優秀な工事監督と技能職人では行動特性が異なることが判明した。職種別に行動特性を考慮し、採用時の職種マッチングを向上させる必要性が認識された。

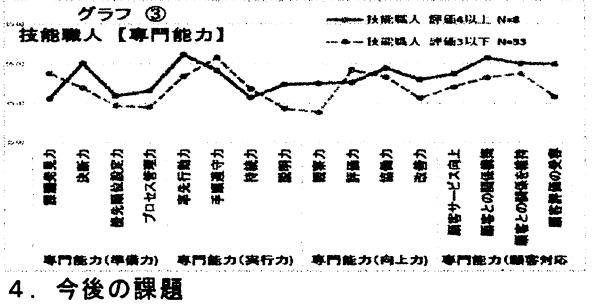
3. 能力と行動特性

能力測定の結果、工事監督の優秀者は『顧客志向に関する諸能力・協働力・説明力・評価力』が標準以下者を上回っていた。これらの項目を工事監督のコンピテンシーとして採用や育成の指標として用いることが出来ると思われる。

また、優秀な工事監督においては20項目に対して15項目（全体の68.75%）が標準以下者を上回っており、技能職人においては75%の項目が上回っていた。（グラフ②、③参照）

行動特性をベースにした能力の測定結果と人事評価との相関の高さから「能力は行動の組合せによって発揮される」という仮説が成立すると考えられる。





4. 今後の課題

本研究で測定対象とした項目は、諸文献で技術職に必要とされている能力と長年に亘りA社の技術職者に求めている能力とを基に抽出した。今後、同業他社の調査を行い抽出した指標の信頼性や妥当性を確認することが必要である。また、他の職種における行動特性とコンピテンシーの相関研究の継続も重要となる。

（ほし　ひろし）

着装基準尺度の作成の試み（2）

― 50代を対象とした場合 ―

○松原　詩緒[1)]
([1)]文化学園大学現代文化学部応用健康心理学科）

キーワード：着装基準，規範，尺度作成

【研究の目的】本研究は，着装基準尺度（松原，2015）のさらなる検討を目的としたものである。松原（2015）により作成された24項目6因子構造の着装基準尺度は，確認的因子分析により良いモデルのあてはまりが確認されている。しかし松原（2015）では20代の男女のみを対象としており，他の年齢層における着装基準の構造は検討されていなかった。そこで本研究では同じ尺度を用いて50代を対象に調査を行い，幅広い年代を対象とした尺度の適用について検討した。

【方法】1.調査対象　50代90（男45，女45）名であった。平均年齢は53.61（SD2.80）歳だった。　2.調査日　2014年10月　3.手続き　リサーチ会社への委託によるインターネット調査を行った。調査協力者にはランダムに提示された2つの場面に対する着装基準についてそれぞれ回答するよう求めた。　4.質問紙　①着装場面：内藤・小林（2001）より日常生活場面，非日常場面，レジャーなどの余暇活動場面を平均的に包括した10場面を用いた。②着装基準：松原（2015）で作成された着装基準尺度を用いた。尺度は社会的規範因子，社会的調和因子，流行因子，個人的嗜好因子，印象管理因子，実用性因子の6因子構造であった。回答は5件法で求めた。　5.分析　因子分析（最尤法，promax回転）と確認的因子分析（最尤法）により，尺度の構造について検討した。また着装場面別の着装基準の差について，分散分析により検討した。

【結果】1.尺度の検討　えられた回答について因子分析を行い，固有値の減衰状況を確認したところ，第1因子から第6因子まで順に6.21，4.97，2.46，1.81，0.85，0.76の値がえられた。第5因子以降は1未満の値であったが，20代の結果と同様に因子数を6に指定し抽出を試みた。その結果，各因子に対して想定された質問項目がすべて正しく該当し，因子負荷量が.40に満たない項目や複数の因子で.40以上の値となる項目はみられなかった。信頼性分析の結果は第1因子から順に.86，.82，.84，.83，.87，.86であった。さらにモデルのあてはまりを確認するため，確認的因子分析を行った。その結果GFI=.900，AGFI=.873，NFI=.904，RFI=.888，RMSEA=.066の値がえられ，50代においても本モデルがある程度良いあてはまりであることが確認された。　2.着装基準の差　着装場面ごとに，着装基準における差について検討した。分散分析を行ったところ，すべての場面で有意差がみられた。そのためBonferroniによる多重比較を行った。その結果，ほとんどの因子間において有意な差が確認された（Table1）。10ある着装場面のうち9つの場面で，個人的嗜好因子が高い値となった。具体的には，百貨店やデパート，大学，結婚式，入学式や卒業式，職場，パーティー会場，山や海，公園，自宅を場面としたときであった。また，実用性因子や社会的規範因子でも，個人的嗜好因子と有意差なく高い値がえられた着装場面があった。実用性因子が高い値となったのは，学校，職場，山や海，公園，自宅であった。社会的規範が高い値だったのは，結婚式，葬式や通夜，入学式や卒業式であった。一方で，すべての着装場面において低い値となったのは流行因子であった。また社会的調和因子も，百貨店やデパート，学校，結婚式，山や海，公園，自宅においては流行因子と有意差無く低い値がえられた。

【考察】20代のデータを基に作成された着装基準尺度は，50代を対象にしても同様の因子構造がえられ，適用可能であることが確認された。50代の特徴について検討するため因子間の差を分析したところ，着装場面にとらわれず個人の嗜好を重視し，流行を軽視する傾向がみられた。また，日常場面といえる職場や公園，自宅などでは実用性が重視された。結婚式や入学式，葬式などのフォーマル場面においては社会的規範が重視されていた。社会的調和因子が低い場面も多くみられており，身近である職場やフォーマル場面といえる葬式，入学式，パーティー会場を除き軽視される傾向がみられた。

以上のように50代における着装基準には一定の傾向がみられることが確認された。しかし，本研究では性差を検討しておらず，各着装場面において男女の違いがみられることが考えられる。この点については今後の検討課題としたい。また他の年代あるいは社会的立場における着装基準についても検討することで，より正確に着装に関する意識を浮き彫りにすることが可能となるだろう。

Table1　各場面における着装基準の差

百貨店やデパート

			社会的規範	社会的調和	流行	個人的嗜好	印象管理	実用性
			3.30	2.61	2.49	3.95	3.22	3.63
			(.66)	(.66)	(.79)	(.62)	(.80)	(.58)
学校	社会的規範	3.36	(.69)		***	***	***	n.s.	***
	社会的調和	2.74	(.76)	***		n.s.	***	***	***
	流行	2.79	(.81)	***	n.s.		***	***	***
	個人的嗜好	4.07	(.62)	***	***	***		***	***
	印象管理	3.53	(.83)	n.s.	***	***	***		***
	実用性	3.93	(.53)	***	***	***	n.s.	***	

結婚式

			社会的規範	社会的調和	流行	個人的嗜好	印象管理	実用性
			3.81	2.91	2.57	3.74	3.32	3.44
			(.71)	(.82)	(.81)	(.83)	(.86)	(.66)
葬式や通夜	社会的規範	4.14	(.62)		***	n.s.	***	**
	社会的調和	3.48	(.77)	***		n.s.	***	n.s.	***
	流行	1.97	(.69)	***	***		***	***	***
	個人的嗜好	2.71	(1.11)	***	***	***		***	*
	印象管理	2.55	(.84)	***	***	***	n.s.		n.s.
	実用性	3.26	(.74)	***	n.s.	***	***	***	

入学式や卒業式

			社会的規範	社会的調和	流行	個人的嗜好	印象管理	実用性
			3.71	2.78	2.30	3.77	3.20	3.50
			(.61)	(.66)	(.70)	(.67)	(.71)	(.61)
職場	社会的規範	3.54	(.66)		***	***	n.s.	***	n.s.
	社会的調和	2.80	(.74)	***		***	***	**	***
	流行	2.51	(.73)	***	*		***	***	***
	個人的嗜好	3.70	(.60)	n.s.	***	***		***	**
	印象管理	3.29	(.78)	n.s.	***	***	***		*
	実用性	3.77	(.51)	*	***	***	n.s.	***	

パーティー会場

			社会的規範	社会的調和	流行	個人的嗜好	印象管理	実用性
			3.51	2.72	2.46	3.86	3.31	3.46
			(.62)	(.71)	(.71)	(.63)	(.76)	(.53)
山や海	社会的規範	3.09	(.60)		***	***	***	n.s.	n.s.
	社会的調和	2.68	(.62)	***		*	***	***	***
	流行	2.56	(.70)	***	n.s.		***	***	***
	個人的嗜好	3.97	(.61)	***	***	***		***	***
	印象管理	3.14	(.66)	n.s.	***	***	***		n.s.
	実用性	4.02	(.61)	***	***	***	n.s.	***	

公園

			社会的規範	社会的調和	流行	個人的嗜好	印象管理	実用性
			2.97	2.49	2.42	3.88	3.02	3.89
			(.71)	(.74)	(.74)	(.62)	(.75)	(.49)
自宅	社会的規範	2.87	(.81)		***	***	***	n.s.	***
	社会的調和	2.48	(.73)	***		n.s.	***	****	***
	流行	2.28	(.72)	***	n.s.		***	***	***
	個人的嗜好	3.89	(.88)	***	***	***		***	n.s.
	印象管理	2.91	(.84)	n.s.	***	***	***		***
	実用性	4.04	(.57)	***	***	***	n.s.	***	

値は平均値，（ ）は標準偏差。各場面の検定結果を矢印の方向に記す。
*・・・p<.05, **・・・p<.01, ***・・・p<.001

【引用文献】内藤章江・小林茂雄 2001 着装規範に対する着装行動要因の影響，繊維製品消費科学会，42(11)，43-41.
松原詩緒 2015 着装基準尺度作成の試み，日本応用心理学会第82回大会発表論文集，58.

（まつばら　しお）

花および写真の鑑賞による心身の癒し

癒しの嗜好と心理生理学パラメータとの比較

○内田誠也[1)]　木村友昭[1)]　山岡淳[1)]　松本洸[2)]
([1)]一般財団法人 MOA 健康科学センター　[2)]日本大学芸術学部)
キーワード：花の鑑賞，癒し，筋硬度、自律神経

【研究の目的】ストレス社会において癒しの一つの方法として花や植物がある環境の効果が注目されてきている。先行研究では、花によって表情筋や感情の変化（山根他、2002）やリウマチ患者のコルチゾールの低下（大塚他、2009）、認知機能向上等（望月他、2015）が報告されている。

我々は花による癒しの効果を研究しており、自ら花を生けて鑑賞することが、心理的な癒しや副交感神経活動を増加させ、肩の筋硬度を低下させることを報告した（内田他、2014）。この研究では写真を鑑賞する実験と他人が生けた花を鑑賞する実験、自分で花を生けそれを鑑賞する実験の比較を行った。ほとんどの被験者は自分で生けた花を鑑賞することがもっとも癒される回答したが、中には写真鑑賞や他人の花の鑑賞がもっとも癒されると答える人もいた。

本研究では、被験者の癒しに対する好みが心理生理的に影響すると仮定し、3 種類の実験の嗜好と心理生理的なパラメータとの違いを調べることを目的とする。

【方法】写真を 5 分間鑑賞する実験（写真実験）、他人が生けた花を 5 分間鑑賞する実験（他人花実験）、自ら気に入った花を選び、花瓶に生け、5 分間鑑賞する実験（自己花実験）を行った。また、3 つの実験は言語想起テスト（5 分間）を行った後に実施し、順序はランダムであった。

計測項目は肩の筋硬度（TDM-na1）、心拍間隔、HF、LF/HF、日藝版癒し評価スケール(松本洸他, 2005)であった。3 種類の実験の嗜好を調べるために、3 つの実験で「もっとも癒されたのはどれか？」というアンケートで癒しの嗜好を計測した。

【対象】健康成人 49 名(男性:18、女性:31 名)を対象とし、平均年齢は 53.0 歳(SD17.1)であった。

【解析】癒しの嗜好ごとに 3 つのグループに分けて解析を行った。データは各々の被験者ごとに 3 つの実験の平均値を算出し、平均値からの差分データを用いた。3 つの実験の違いを Wilcoxon 検定で比較した。

【結果】3 つの実験間を比較したところ、自己花実験の癒し評価スケールが有意に高く(写真実験：-4.0、他人花実験 0.0、自己花実験：4.0)、左右肩の筋硬度が有意に低下し（写真実験：左肩 0.5/　右肩　-0.3、自己花実験：0.5/0.7、他人花実験：-1.0/-0.5)、HF も有意に高くなった(写真実験：-0.3、他人花実験-0.1、自己花実験：0.4)。

次に、癒しの嗜好で、もっと癒された実験が写真実験と答えた人数は 6 名（写真群）、他人花実験と答えた人数が 5 名（他人花群）、自己花実験と答えた人数が 38 名（自己花群）であった。3 つの群ごとに、3 つ実験の癒し評価スケール、肩の筋硬度、心拍変動の違いを調べた。

癒し評価スケールについて（Fig. 1）、写真群では 3 つの実験間の癒し度に有意な違いはなかった。他人花群では他人花実験の癒し度が有意に高かった(写真実験：-4.5、他人花実験 4.5、自己花実験：-0.1)。自己花群では、自己花実験の癒し度が有意に高かった（写真実験：-4.6、他人花実験：-0.5、自己花実験：5.1)。肩の筋硬度について、写真群および他人花群と共に、有意な違いが見られなかった。自己花群では、自己花実験の方の筋硬度が有意に低下した（写真実験　左肩/右肩：0.6/-0.2、自己花実験：0.5/0.8、他人花実験：-1.2/-0.6)。心拍変動について写真群では有意に違いは見られなかった。他人花群では、他人花実験の心拍間隔が有意に高くなった(写真実験：-26.6、他人花実験：17.7、自己花実験：8.9)。他人花実験では HF が高くなる傾向であったが、有意ではなかった（写真実験：-0.3、他人花実験：-0.2、自己花実験：0.5)。

【考察】写真実験、他人花実験、自己花実験を比較した結果、自己花実験の癒し度が高く、肩の筋硬度が柔らかく、HF が高くなった。つまり、自分で花を生けて鑑賞することが、心理的に癒され、副交感神経活動が高まり、肩の緊張が和らぐことが明らかになった。

また、癒しの嗜好との関連を調べたところ、写真群では心理生理的に有意な違いは見られなかった。他人花群では癒しスケールの総合得点が高く、心拍間隔が高くなった。自己花群では、全他の結果と同じく、癒し度が高く、肩の筋硬度が柔らかく、HF が高くなった。癒しの嗜好と癒しが関連するのなら、癒しスケールの総合得点も高くなり、副交感神経活動の上昇が起こるべきであるが、写真群のみ一致しなかった。写真群は積極的に嗜好を選択した被験者と消去法的に嗜好を選択した人が混在し、それによってばらつきを大きくさせたと考える。つまり、被験者が花を生けて鑑賞するという行為をしたとき、被験者が本当に満足し、癒される状態にならなければ、効果が低くなると考えられる。

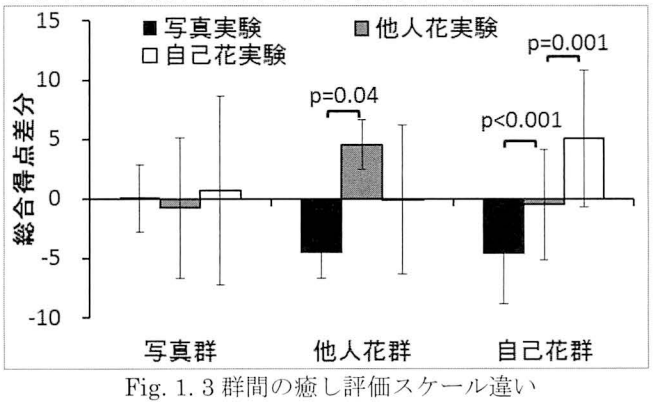


Fig. 1. 3 群間の癒し評価スケール違い

【引用文献】

大塚実他　2010　花とお茶を用いた健康プログラムが関節リウマチ患者における疾患活動性、サイトカインに及ぼす影響. MOA 健科報

山根健治他 2002 鉢苗の移植作業が脳波、筋電図、瞬き率、感情に及ぼす影響 人間・植物関係学会誌

Mochizuki-Kawai H et al 2010 Structured floral arrangement programme for improving visuospatial working memory in schizophrenia Neuropsychol Rehabili

内田誠也他　2014 花を用いた自己表現およびその鑑賞が人の心理生理に及ぼす影響 生理心理学と精神生理学

松本洸他　2005　日芸版「癒し」評価スケールの完成　芸術と癒しの調査研究報告書

（うちだ　せいや・きむら　ともあき・やまおか　きよし・まつもと　こう）

大学生向け留学準備教育スケールの開発の試みⅡ

－新柔軟性尺度の作成－

○橋上愛子[1)]　廣山祐仁[1)]　髙橋千佳[1)]　竹内康子[1)]　岡部忠司[1)]　村上裕子[1)]　長船直子[1)]　井上孝代[2)]　外島裕[3)]
([1)]東京海上日動メディカルサービス㈱　[2)]明治学院大学　[3)]日本大学)

キーワード：留学 適応 柔軟性

【調査の目的】

これまで様々な調査・研究において「ｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ人材」とはどのような人材を指すのかについて述べられてきた。こういった知見を元に,本調査においては, ①気質的側面と仮定する基本的な性格を「病前性格」と「基本的性格」とし,更に②社会生活の中で身に着ける社会的な能力を「社会的能力」と「異文化適応力」とした。これら2つの軸から海外留学の適応力を捉え,尺度を構成している。この「基本的性格」の中の1つとして「柔軟性尺度」を作成した。柔軟性尺度は当初,完璧主義(Perfectionism)の精神的健康への影響に関する研究を軸にして「曖昧さ耐性尺度」を元に設問の構成を考案していた。しかしながら,X大学における2年間(2014年～2015年)にわたるﾃﾞｰﾀ調査の結果からは,因子構造の内容的妥当性とα係数が低く,尺度の内容を再検討する必要があった。この「柔軟性」については,政府がまとめた文献(首相官邸編,2011)の中のｸﾞﾛｰﾊﾞﾙ人材像でも提示されている要素であり,本尺度は海外留学の適応力を測る尺度であることから,個人が持ち合わせる臨機応変さやしなやかさに関わる「柔軟性」の尺度を扱わずして留学準備教育ｽｹｰﾙとしての内容的妥当性を提言することは出来ないと考えた。そこで,都内私立大学（Y）でのﾃﾞｰﾀ収集協力を得て,新たに「新柔軟性尺度」の作成を試みることとした。

【方法】

(1)尺度の再構成

はじめに,本尺度における「柔軟性」の定義を再度検討する必要があった。Harris(2009)によれば,心理的柔軟性は,「生きていくために立ちはだかる問題や課題に対し,そこから回避することなくより効果的に反応する力である」という。また2013年と2014年度にX大学にて実施したｸﾞﾙｰﾌﾟｲﾝﾀﾋﾞｭｰの内容からも,「同じ寮に住んでいた留学生のだらしなさに苦慮した」という体験や「ﾊﾞｽや電車といった公共交通機関は時間通りに来ないのが当たり前といった環境」に適応の難しさを感じるｹｰｽも報告されている。先行研究やこのようなｲﾝﾀﾋﾞｭｰ結果を踏まえ,本尺度においては,変化の多い環境に対しても状況に応じて機転を利かせ柔軟に対応できるといった臨機応変さや人との関係性においても自分の理想と反する行動も受け入れられる傾向を測るものを本ｽｹｰﾙにおける「柔軟性」と定義した。続いて, 関連する心理測定尺度研究を参考に新たな設問文について検討し,全部で21問のｵﾘｼﾞﾅﾙ「新柔軟性尺度(案)」を完成した（Table1)。

(2)都内私立大学（Y）でのデータ収集

2015年12月,上記の都内私立大学(Y)の学生に対して「新柔軟性尺度」のｱﾝｹｰﾄを実施した。ｱﾝｹｰﾄは,再検査信頼性を確認するため2回実施しており,第1回目の有効回答者数は168名(内男性114名,女性52名),平均年齢20.68歳であった。第2回目の有効回答者数は173名(男性116名,女性57名)となり,平均年齢は20.67歳となった。このｱﾝｹｰﾄに関しても,4件法(「あてはまる(4点)」「ややあてはまる(3点)」「あまりあてはまらない(2点)」「あてはまらない(1点)」)で回答を求めた。

【結果】

第1回目の回答ﾃﾞｰﾀを基に因子分析(主因子法,ﾌﾟﾛﾏｯｸｽ回転)を行った結果,固有値の減衰状況および解釈可能性から最終的に「新柔軟性尺度」は「状況への柔軟性」と「対人関係への柔軟性」の2つの尺度を作成するのが妥当であると考えた（Table2,3)。「状況への柔軟性」については,α係数が=.87となり,高い内的整合性が確認された。一方,「対人関係への柔軟性」については,二因子構造が確認されかつα係数が=.53となったが,本ｽｹｰﾙでは人との関係性においても柔軟に対処できる力は海外留学には欠かせないと考えるため,柔軟性尺度の1つとして残した。また,各尺度の第1回目と第2回目のﾃﾞｰﾀにて相関係数を算出したところ「状況への柔軟性」がr=.86,「対人関係への柔軟性」がr=.71と高い結果となり,再検査信頼性も確認できた。

Table1　新柔軟性尺度の設問（案）一覧

1	どんなことでも、その場に応じてやっていく方が得意だ
2	ルーズな性格だ
3	部屋が散らかっていても気にしない
4	曖昧な状態を維持するのは難しい（*）
5	決まりごとは守りたい（*）
6	ものを出したら元の場所にしまわないと気がすまない（*）
7	規則に沿った行動をしたい（*）
8	ベストを尽くすのは当然だ（*）
9	常に高い理想を抱いている（*）
10	周りの人にも、秩序を守ってほしい（*）
11	ルーズな人は許せない（*）
12	規則を守らない人は嫌いだ（*）
13	完璧でありたい（*）
14	臨機応変に対応する方が向いている
15	変化の多い環境の中でもやり過ごせる
16	良い意味で適当な人間だ
17	誰しも約束は守るべきだ（*）
18	どんな状況でも何とかなると思っている
19	白黒はっきりさせたいタイプだ（*）
20	あいまいな状況を受け入れられない（*）
21	その場その場で状況に合わせて対応できる

（*）は反転項目

Table2　新柔軟性尺度　状況への柔軟性（主因子法/プロマックス回転）（N=168）

	Ⅰ	共通性
その場その場で状況に合わせて対応できる	.854	.730
臨機応変に対応する方が向いている	.840	.705
どんなことでも、その場に応じてやっていく方が得意だ	.787	.620
変化の多い環境の中でもやり過ごせる	.696	.485
(α=.87)		

Table3　新柔軟性尺度　対人関係への柔軟性（主因子法/プロマックス回転）（N=168）

	Ⅰ	Ⅱ	共通性
誰しも約束は守るべきだ（*）	**.747**	-.227	.519
周りの人にも、秩序を守ってほしい（*）	**.472**	.185	.303
ルーズな人は許せない（*）	-.142	**.730**	.498
規則を守らない人は嫌いだ（*）	.395	**.469**	.474
(α=.53)			

（*）は反転項目

【今後の課題】

今回は都内私立大学（Y）一校での回答ﾃﾞｰﾀを基に作成しているため,2016年度に実施するX大学のﾃﾞｰﾀにおいても再度検討を行いたいと考えている。それらの結果を基に,本ｽｹｰﾙにおける「新柔軟性尺度」の完成を目指したい。

【引用文献】

Harris,R.2009 ACT made simple.New Harbinger.
首相官邸編 2011「グローバル人材育成推進会議中間まとめ」
（はしがみあいこ,ひろやまゆうじ,たかはしちか,たけうちやすこ,おかべただし,むらかみゆうこ,おさふねなおこ,いのうえたかよ,としまゆたか）

注視回数の多さが双方向的関係志向に及ぼす影響

○加藤信子　　佐藤大輔　　内藤哲雄
（福島学院大学大学院心理学研究科）（福島学院大学福祉学部）
キーワード：注視回数の多さ、被受容感、双方向的関係志向

【目的】社会心理学の実験研究によって、一方的に注視する回数の多さが、注目相手への熟知性や対人魅力を増加させることが知られている。本研究では、熟知度や魅力度だけでなく、相互関係への指向性や相手からの受容を期待することにまで影響する可能性について検討することを目的とした。

【方法】＜被検者＞保育士の経験2年30代半ばの大学院生男子。**＜手続き＞**無自覚な意識下での感覚的変化を測定することが必要となることから、個人の連想反応の構造を分析することができるPAC分析を利用することとした。刺激人物(SP)は小学3年男児とし、無表情の写真をスライドにして、1回5秒間、間隔5秒で35回提示した。ついで、「写真を見てからの印象についてお聞きします。あなたは写真の子に対して、どのような感じがわいてきますか。この子にどんなことをしてあげたいと感じますか。どんなことがしやすいと感じるでしょうか。そして、どのように関わりたいと感じてきますか。頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」と口頭で教示し、文章も提示して、連想反応を得た。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目の直感的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での＋－0イメージを質問した。

【結果】連想項目の＋－イメージは、プラス項目3、マイナス項目2、0項目10であった(Fig. 1参照)。0項目が連想項目数の2/3を占めていることから、感情の喚起は弱いといえよう。

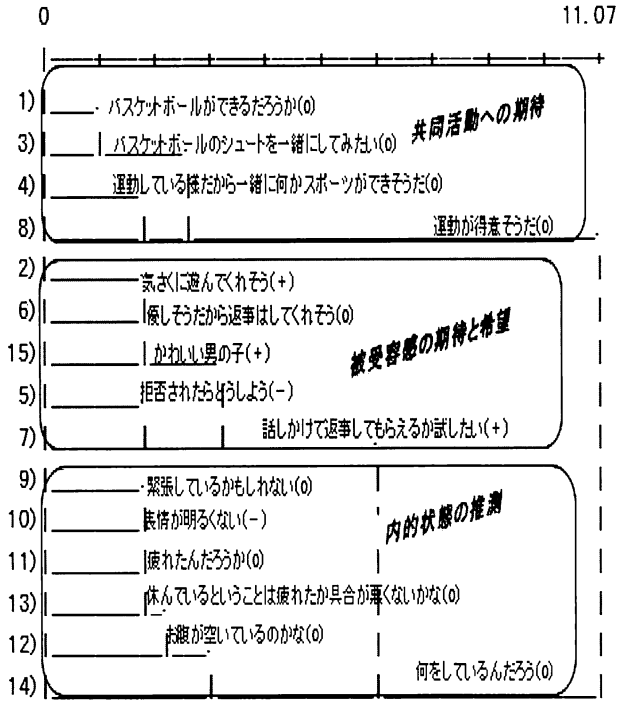


Fig. 1　被検者Aの小学3年生男児へのイメージ
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの（ ）内の＋－0は単独でのイメージ

＜被検者の解釈：抜粋＞クラスター1は、「バスケットボールができるだろうか」～「運動が得意そうだ」の4項目：自分ではこれがしたいんだなと思いました。楽しいイメージ、わくわくする気持ちです。関わりが持てる期待や親近感を感じている気がする。

クラスター2は、「気さくに遊んでくれそう」～「話しかけて返事してもらえるか試したい」の5項目：印象を探っている気がします。不安と期待の両方が感じられます。表面的な感想も、内面の憶測をしている。子どもと関わりたい、遊びたいんですかね。相手に働きかけることが前提。

クラスター3は、「緊張しているかもしれない」～「何をしているんだろう」の6項目：相手への配慮が感じられます。相手の状態を考えているんですかね。相手を心配している気持ち、より深く知ろうとしている気がします。

≪クラスター1と2の比較≫両方とも写真の男の子を探っているんですけど、1番のグループがより自分の願望を表している気がします。第1のグループはまぁ外見的な解釈だけだと思うんですけど、第2のグループは外見と合わせ、内面にまで探っているという点で違っていると思います。

≪クラスター1と3の比較≫第3のグループは相手の置かれている状況なんかを推し量ろうとしています。推測しているんですかね。より深く写真の男の子を考えている気がします。一貫して相手のことを知ろうとしているかなというところは似ています。

≪クラスター2と3の比較≫似ているところは双方とも内面を推測している。グループ2の方が表面的でグループ3の方がより深い部分を測っているのかな。2には願望みたいなものが感じられます。グループ2は相手の配慮は全くなくて、グループ3は相手の配慮みたいなことが感じられる。

【考察】クラスター1は、相手に対して親近感を持ち始め、自分の得意な「バスケットボールができるだろうか」と推測して、一緒に活動したいと思う**＜共同活動への期待＞**の気持ちが喚起されていることがうかがえる。クラスター2は、受け入れられないかも知れないという不安を感じながらも、「気さくに遊んでくれそう」「返事はしてくれそう」と期待し、「話しかけて返事してもらえるか試したい」と相手に関わり受け入れてもらいたい希望を抱いており、**＜被受容感の期待と希望＞**と解釈できよう。クラスター3は、「緊張しているかもしれない」や「疲れたんだろうか」「お腹がすいているのかな」など、共感的配慮ともいえる相手を気づかっての**＜内的状態の推測＞**と命名することができよう。

本報告の結果は、探索的研究の1事例に過ぎないが、相手からの応答が全くなく、写真を一方的に注視する回数を多くすることだけで、強い感情が喚起するほどではないが、双方向的な関係を望み、被受容感への期待や共感的配慮までが生じることが示唆された。

好成績や好ましい言動を期待しにくい児童に対して、看過しないまでも注目しないことが少なくない。現実に関わっていく以前に、児童への注目回数を多くすることだけによっても、児童との双方向的で共感的な関わりの期待が生じるとの結果は、教育現場で活用できる実践的方略としての意味は大きい。今後は多標本での実験的検討によって、教育心理学的な関わりや臨床心理学的な関わりに及ぶ影響を、より詳細に検討することが要請される。

（かとうのぶこ・さとうだいすけ・ないとうてつお）

大学生のチームワーク訓練効果に見られる適性処遇交互作用について

古屋　健[1)]
([1)]立正大学心理学部対人・社会心理学科)
キーワード：大学生教育，体験学習，訓練効果，適性処遇交互作用

【研究の目的】　本研究の目的は，古屋・懸川・音山（2013）が開発した大学生向けリーダーシップ訓練プログラムの効果について，特に受講生の性格特性による訓練効果の違いを中心に検証することである。このプログラムは，大きく次の３つのパートから成る。パートⅠ：講義，３時間。パートⅡ：スキル訓練：チームや集団の中で自分の持つリソースを効果的に発揮するために必要な個別スキルを体験学習エクササイズの中で習得する８～９時間。パートⅢ：現実的な場面や課題で集団活動を経験する段階的セッション３～４時間。

本研究では，適性処遇交互作用の観点から，受講生のパーソナリティによって訓練効果に差が生じるかどうかを探索的に検討した。指導者としての経験から，体験学習場面においては，課題に対する取組が積極的・自発的である受講生ほど，学習機会が多く，経験から得られる洞察も豊富であろうと推測される。そのため，もともとの性格が外交的で，協調性が高いほど，訓練効果も高い可能性がある。

【方法】対象者：対象は立正大学心理学部の専門科目として開講された「リーダーシップ・トレーニング」受講生男子33人女子32人計65人である。

測定尺度：訓練前と訓練後に，次の４つの尺度を実施した。

A　ビッグ５性格特性尺度：和田（1996）の特性語各７項目全35項目を選択し，「１：まったくあてはまらない」から「５：非常によくあえはまる」までの５件法で回答を求めた。

B　エゴグラム：東大式エゴグラム（TEG-Ⅱ）を利用した。

C　コミュニケーション不安尺度：５段階評定 20 項目。友人・初対面・大集団・小集団・スピーチの５場面でのコミュニケーション苦手意識を測定するもので，各場面について４項目，計 20 項目から成る。回答は「１：あてはまらない」から「５：よくあてはまる」までの５件法である。

D　リーダーシップ効力感尺度：５段階評定20項目。リーダーの役割行動についてどの程度自信があるかを自己評定するものである。P 機能を持つリーダー行動（P 行動），M 機能を持つリーダー行動（M 行動）各 10 項目に対して，どれくらいうまくやる自信があるかを「１：まったく自信がない」から「５：非常に自信がある」までの５件法で回答を求めた。

【結果】　ビッグ５性格特性とエゴグラムについて，訓練前後での変化について，別（男女）×測定時（訓練前後，個人内繰り返し）の２要因分散分析を行った結果，ビッグ５性格特性尺度得点には訓練前後で有意な差は認められなかった。エゴグラム・プロフィールについてはNP 尺度と FC 尺度で意な訓練効果が認められた。いずれも訓練前より訓練後に得点が上昇し，AC 尺度は得点が低下した。

次に，ビッグ５性格特性とエゴグラムの全下位尺度得点から受講生を高・中・低水準群の３群に分類し，コミュニケーション不安・リーダーシップ効力感の訓練前・後の得点に有意な差があるかどうかを二要因分散分析により検定した。その結果，エゴグラムでは A 尺度水準で P 行動効力感（$F2/88=3.186$, $p<.05$）と M 行動効力感（$F2/89=4.095$, $p<.05$，図１）で有意な交互作用が認められた。いずれも A 得点水準が中程度の群で訓練効果が大きかった。また，AC 尺度水準とコミュニケーション不安の小集団内場面で有意な交互作用が認められた（$F2/90=3.403$, $p<.05$，図２）。AC 尺度得点高群では，訓練効果が認められなかったためである。

ビッグ５性格特性では，外向性尺度と M 行動効力感下位尺度で交互作用（$F2/56=2.598$, $p<.10$）が有意傾向にあった。これは，外向性得点の高い群で顕著な変化が認められたためである。

【考察】エゴグラム AC 得点が高い群では訓練によるコミュニケーション不安低減の効果が見られなかった。AC の高さは対人関係において受身的で人の顔色をうかがう傾向が強いことを意味しており，不安を低減するだけの十分な経験を積むことができなかった可能性がある。エゴグラム A 得点については中程度の群でリーダーシップ効力感が大きく向上した。A の持つ現実的な問題解決を図ろうとする態度の肯定的な面がより発揮されるようになったものと推測される。このように，一部の尺度では統計的に有意な適性処遇交互作用が認められたものの，その効果はきわめて限定的であった。参加者の事前の性格に係わりなく，一定の訓練効果を期待することができると考えることができる。

【引用文献】

古屋　健・懸川武史・音山若穂　2013　心理教育的リーダーシップ訓練の試み(３)―訓練プログラム試案―.　立正大学心理学研究所紀要，11，25-44.

（ふるや　たけし）

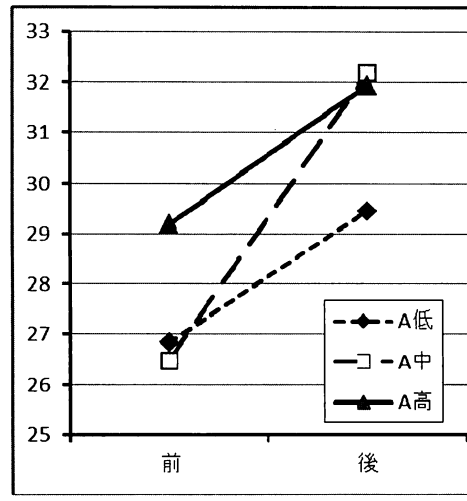


図1　M行動効力感尺度の訓練効果
A尺度水準との交互作用

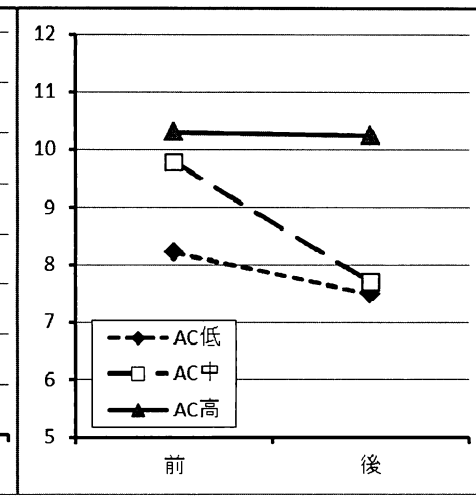


図2　ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ不安小集団場面不安尺度の訓練効果
AC尺度水準との交互作用

大学生女子のアイデンティティと父親・母親の養育，心理的結合性

―「家庭の雰囲気」に注目して ―

○平田裕美
（女子栄養大学）

キーワード：アイデンティティ，養育，心理的結合性，家庭の雰囲気

【研究の目的】

青年期後期は，将来に向けての社会的な自己を確立することが求められる時期である。そのため，この時期を対象とした，親の養育と子どもの人格形成に焦点をあてた研究が散見される。とくに，青年期の発達課題でもあるアイデンティティの確立には，親との関係性が大きく影響することが予測されているため，精神医学の視点からも注目されている。その親との関係性を測る一つの指標として，平井・岡本（2006）は，親と子どもの相互の愛情・理解・信頼の受け止めを示すものとして心理的結合性を定義し，過去の食事場面との関連から検討している。そこで，本研究では，青年期のアイデンティティ形成に影響を及ぼす要因として，この心理的結合性を取り上げ，さらに関わる要因として，父親，母親の養育行動，家庭の雰囲気を含めた因果関係を，青年期後期にあたる大学生女子を対象に検討した。

【方法】

調査協力者は，関東に所在する大学に通う女子学生237名（M＝19.8，SD＝1.31），調査時期は2012年2～3月である。

質問紙の項目　青年期のアイデンティティの形成を測る指標として，下山（1992）による，自己の主体性や信頼が形成されていることを意味する「アイデンティティの確立」と自己の安定が得られず，不安や孤独の感情を反映した「アイデンティティの基礎」からなる尺度を用いた。親と子どもの心理的結合性は，平井・岡本（2006）による，子どもと親の相互における愛情，理解，信頼の受けとめを測る項目を，父親，母親の養育行動については，平田（2005）による Baumrid（1967；1999）の養育スタイルを参照に作成されたコミュニケーションを担う行動を意味する会話／表現行動（以下、会話を主とした養育行動）と，子どもに社会のルールを教える行動を意味する管理／成熟への要求行動（以下、しつけを主とした養育行動）から成る項目を，父親，母親それぞれについて尋ねる形式で用いた。そして，家族の関係性を測る指標として，酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村（2002）による家族の雰囲気尺度を利用した。各尺度については，原著に基づいた回答法で尋ねた。次に，従属変数，独立変数，媒介変数のそれぞれの影響を考えながら，各要因間の分析を進めるために，共分散構造分析を用い，各要因の関連性とモデルの適合度を検討した。下記に予測モデルを示す（figure1）。

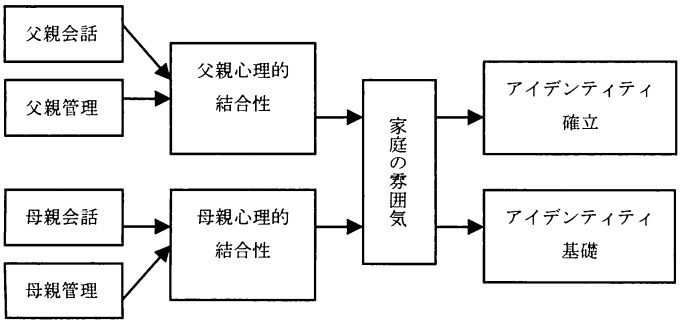
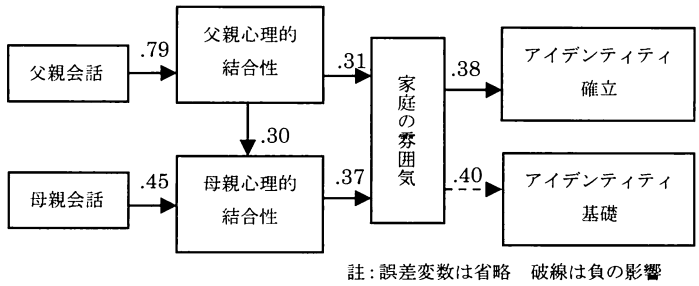


figure1 予測モデル

【結果】

各尺度について，因子分析（最尤法，*promax* 回転）を施し，原著と同じ因子構造であるかを検討した。各尺度とも同じ構造であった。相関係数を参考に，パス解析を試みた。有意でないパスを削除し，最も適合度の良いモデルを採用した（χ^2 (28)＝288.107，p<.01，GFI=.932，AGFI＝.910，CFI＝.978，RMSEA＝.024）。



註：誤差変数は省略　破線は負の影響

Figure2 大学生女子のアイデンティティ

父親，母親の会話を主とした養育行動が大学生女子の父親，母親それぞれの心理的結合性を高め，家庭の雰囲気を「安らぎを感じる」「楽しさを感じる」ものにしていることが認められた（β＝.79，β＝.45，β＝.31，β＝.37．p<.01）。また，その家庭の雰囲気は「私は，自分なりの生き方を主体的に選んでいる」などに示されるアイデンティティの確立に正の影響を及ぼし，「まわりの動きについていけず，自分だけ取り残されたと感じることがある」などに示されるアイデンティティの基礎に負の影響をもたらしていた（β＝.38，β＝－.40．p<.01）。さらに，父親との心理的結合性は母親との心理的結合性に正の影響を及ぼしていた（β＝.30．p<.01）。

【考察】

父親，母親の会話を主とした養育行動は，大学生女子の心理的結合性につながり，家庭の雰囲気に影響していた。また，肯定的な家庭の雰囲気は大学生女子のアイデンティティ確立を促すが，否定的な家庭の雰囲気は大学生女子のアイデンティティを不安にさせていた。さらに，父親への心理的結合性と母親への心理的結合性に影響していたことから，母親への信頼は父親への信頼により押し上げられることが認められた。

【引用文献】

酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則　2002　中学生の親および親友との信頼関係と学校適応　教育心理学研究 50 pp12－22.

下山晴彦 1992 大学生のモラトリアムの下位分類の研究　－アイデンティティの発達との関連で－ 教育心理学研究，40 pp121－129.

平井滋野・岡本祐子　2006　家庭における過去の食事場面と大学生の父親，および母親との心理的結合性の関連　日本家政学会誌 57（2）pp77－79.

平田裕美 2005 父親の養育行動と高校生の子どもの精神的健康：母親の養育行動との比較　お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム　平成15年度公募研究成果論文2 pp71-81.

（ひらたひろみ）

動詞の誕生

― 幼児期における主体と対象の動きをとらえた言語表現の生成過程 ―

○萩原 広道[1)]　田中 真介[2)]
([1)]京都大学大学院人間・環境学研究科　[2)]京都大学国際高等教育院)

キーワード：幼児期，言語発達，誤答分析，行為動詞，動画刺激

【研究の目的】 言語は，人類が時空間を超えて互いに交流することを可能にした。しかし，幼児がこの交流の手段を獲得する過程は長く複雑である。子どもが言語発達の初期に用いる語彙は名詞優位であり，動詞の学習は名詞に比べて困難であると考えられている。動詞の獲得や般用が難しい理由には，①指示対象の時間的恒常性の低さ（動きは変化しやがて消えてしまう），②指示対象の時間軸上での境界の不明瞭さ（どこまでが「投げる」？），③名詞によって指示されるもの（主体や対象）を「変数」として扱うことの分かりにくさ（動きだけを動詞の指示対象として切り離す必要がある）などが挙げられる（今井・針生，2014）。また，行為主体や対象（自分，相手，物など）の振る舞いやそれらの間にある関係を瞬時に読み取り，それらの情報を統合して語彙辞書を検索し，適切な動詞に対応づけて発話する必要がある。しかし，特に日本の幼児では，動詞表現が必要な場面でも，単なる事物呼称に終始することが頻回に起こる。表出された語が文法的に名詞である場合，児が表現したかった内容が動詞的意味を含むか否かを判断することは難しい。一方で，幼児期の子どもたちと接していると，その表現の豊かさに驚かされることも少なくない。本研究では，言語獲得の途上にある幼児期において，発語には現れない潜在的な表現の世界をとらえるために，他者の行為をあらわす動画刺激を独自に作成し，それを用いて幼児の発語に込められた表現内容の豊かさについて検討した。

【方法】〔対象〕 3～6歳の幼児119名（男児60名，女児59名。3歳児24名，4歳児33名，5歳児30名，6歳児32名）を対象とした。絵画語い発達検査（PVT-R）を実施したところ，平均評価点は9.6（SD = 2.7）であった。

〔手続き〕 21種類の行為を表した動画刺激課題を作成した（表1）。各課題は，幼児にとって日常的で具体的な動きに対応している。課題は1名ずつ個別に実施し，刺激から連想される動詞を回答するよう促した。対象児が1語の日本語動詞を答え，語幹が刺激動詞と一致する場合を正答とした。

〔分析〕 ①正答数を求めて月齢との相関を調べた。②誤答を文法的に名詞・動詞・その他に分類し，各年齢群内で比較した（Kruskal-Wallis検定，Steel-Dwass法）。③行為ではなく，対象事物の表現に留まった誤答をした対象児の割合を年齢群ごとに算出した。④同一対象を用いるが，動きが異なる2つの行為の組合せを4つ選出し（e.g.,「投げる」「転がす」：図2の下部），誤答の表現が同じか異なるかを判定し，表現し分けた児の割合を算出した。③④では，年齢に伴う人数割合の増減を検討した（Cochran-Armitageの傾向検定）。

【結果】 ①正答数の月齢変化：動画刺激課題の正答数と月齢は，有意な正の相関を示した（$rs = 0.59$，$p < .0001$）。

②誤答の文法的分類（図1）：3歳では名詞と動詞の誤答数に有意な差はなかった（$Z = 1.39$，$p = 0.35$）。4～6歳では名詞に比べて動詞の誤答数の方が有意に多かった（4歳 $Z = 4.27$，$p < .0001$；5歳 $Z = 3.78$，$p = .0005$；6歳 $Z = 5.33$，$p < .0001$）。3歳では回答として名詞と動詞のどちらを返すかがまだ一定ではなかったが，58%の児は動詞を多く返す傾向にあった。

③誤答の事物表現：事物表現が1回以上見られた対象児の割合は，年齢に伴って有意に減少した（$Z = -3.36$，$p = .0008$，3歳67%；4歳36%：5歳45%；6歳16%）。低年齢では対象の事物呼称が多かったが，高年齢になるにつれて行為に着目した表現が増えていった。

④同一対象の行為の言い分け（図2）：4つの組合せについて，すべて言い分けた対象児の割合は年齢に伴って有意に増加した（$Z = 4.00$，$p < .0001$，3歳25%；4歳70%；5歳73%；6歳81%）。3歳では行為の差異を表現に反映させることは難しかったが，92%の児は2組以上を言い分けていた。

表1　独自に作成した動画刺激（21項目）

歩く	押す	踊る	折る	書く	切る	着る	転がす	座る	立つ	食べる
積む	跳ぶ	投げる	並べる	脱ぐ	飲む	乗る	拾う	破る	笑う	

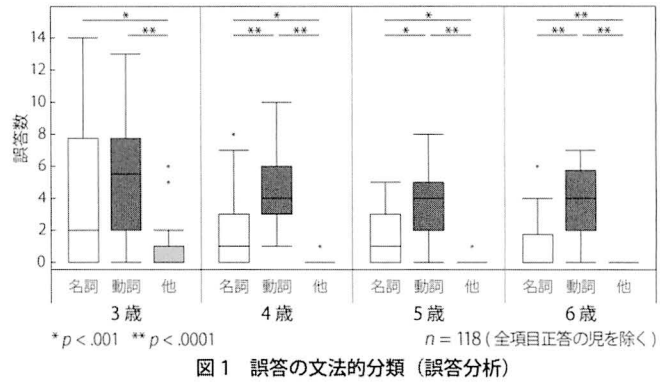


図1　誤答の文法的分類（誤答分析）

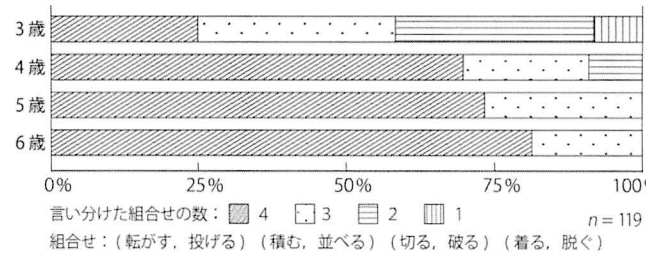


図2　同一対象を扱う行為の言い分け（誤答分析）

【考察】 主体と対象の動きを適切な動詞でとらえる表現は3歳台に芽生え，4～6歳にかけて精緻になっていく。3歳児は，動詞の適切な使用が難しく，名詞で回答したり，表現が事物呼称に留まったりする場合があった。しかし，適切ではないが動きを動詞で表現したり，同一事物を扱う行為の差異を言い分けようともした。一見すると単なる事物呼称であっても，名詞的意味でなく，他者の行為を何とか伝えようとしていたと推察される。4歳以降は，誤答であっても動詞優位となり，また，類似の行為の差異を明確に表現し分けていた。

3歳台では，伝えたくても語として十分に表出できなかったり，問われた内容を吟味せず咄嗟に発語してしまう場合が多く，動詞表現の力はまだ初期の段階といえる。しかし，内に秘められた表現の内容は豊かで，その後の正確な動詞表現の獲得の貴重な準備段階となっていることが明らかとなった。子どもの発話が拙く不十分であったとしても，潜在的な表現世界の豊かさをとらえて，言語発達の過程を支え導いていくことが重要であろう。（はぎはら ひろみち・たなか しんすけ）

叱っている子どもが反抗する時への対応

——教職経験者へのＰＡＣ分析——

○佐　藤　大　輔　　加　藤　信　子　　内　藤　哲　雄
（福島学院大学大学院心理学研究科）

キーワード：叱る、反抗的、ＰＡＣ分析

【目的】教育上必要と判断して子どもを叱責することは少なくない。しかし叱責に対して子どもが反抗するという場面に直面した時、教職経験者はそこから何を読み取り、どのように対処しようとするのであろうか。ここではPAC分析を用いて、叱責に対して子どもが反抗した場合への教職経験者がもつ対処行動のスキーマを探索することを目的とした。

【方法】＜被検者＞中学校の音楽教師を８年続け、養護学校で支援員として１年、小学校で５年の勤務経験があり、現在は大学院修士課程３年の女性Ａ。

＜手続き＞「あなたが子どもを叱っている時、子どもが反抗してきたら、どんなことを感じますか。どんなことをしてしまいがちですか。そして、どのようなことをしたいと感じますか。また、子どもが「素直に聞いている」が、反抗的な態度をとっているのを、どのように見分けますか。そんな時にどのように対処しますか。」と教示し文章を提示して、連想反応を得た。ついで連想項目を重要な順に並べ換えさせた。次に項目の類似度を直感的に、「非常に近い」から「非常に遠い」までの７段階で評価させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスター（以下Ｃ1～Ｃ3 と略記）のイメージやそれぞれの連想項目の単独イメージを聴取した。

【結果と考察】重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は 図１のようになった。

＜被検者Ａによる解釈：抜粋＞

《Ｃ１》「まず落ち着こう」～「何に反抗しているんだろう」：子どもに反抗されるという事を、たぶん予測しなかったのだと思います。子どもの表情とか、態度とかに対して敏感になっているように思います。最初は自分の方が正しいというのしか頭になかっただろうし、この反抗的な態度を見た時に、初めて子どもに注目したような気がします。だからとりあえず、自分が落ち着こうと自分に言っている感じがします。

《Ｃ２》「この子に必要なのは何なんだろう」～「解決するのに時間をかけよう」：素直に聞いていると思っている子どもでも、反抗的な態度をとっているのであれば、なおさらその理由について知りたいと思っているように感じる。初めてその子を見ている、見たっていう感じですかね。二人になったって感じです。私とこの子の。

《Ｃ３》「一緒に興奮するな」～「すぐに解決しようとする」：硬いグループっていうんですか。何か感じたくない感じがします。嫌な大人のタイプ…なんですけど、自分にも大いにある感じですね。

《Ｃ１とＣ２の比較》Ｃ１は自分のことだけで、第２クラスターは相手の子どもに対する気持ちが出ているとこが違うと思います。やっぱりまず１は出発点で、２はそこに繋がっているので、似ているというよりは繋がっている感じ。

《Ｃ１とＣ３の比較》１の部分で自分に言い聞かせている感じ。３のグループにならないようにしたいっていう。自分から子どもに視線が移る、３には理性があるような。禁止事項にいかないように踏みとどまっているような。

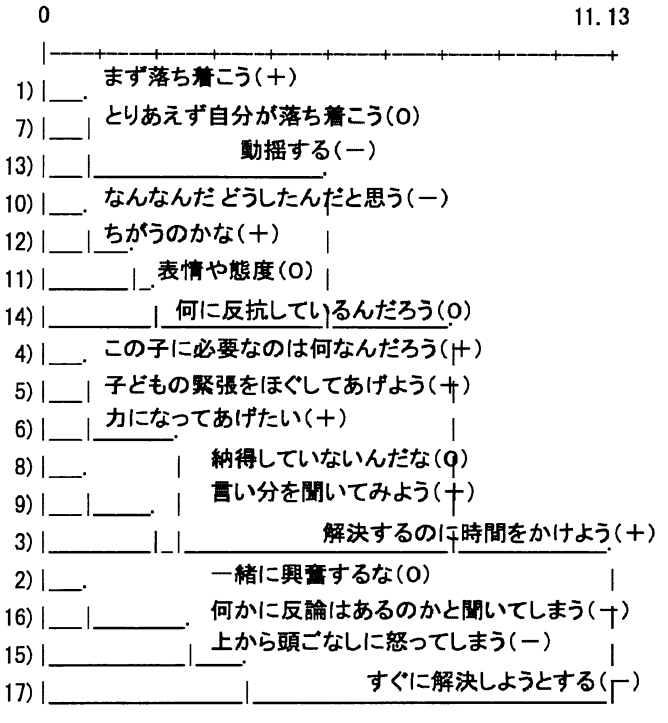


図１ 被検者Ａのデンドログラム（左の数値は重要順位）

《Ｃ２とＣ３の比較》これは全く違う気がします。解決方法というところは似ている気がしますが、やり方が違っている気がします。そんな感じです。

【結論】Ｃ１では、「まず落ち着こう」とあるように子どもへの怒りや興奮を静めて冷静さを取り戻すように、自身に言い聞かせ、「表情や態度」を観察し、「何に反抗しているんだろう」と内省している。続いてＣ２では、反抗する子どもに対して「解決するのに時間をかけよう」と態度を変え、受容しようとする姿勢が出現する。Ｃ３は反射的に無反省に行ってしまいがちな反応。

叱責中の反抗にも冷静さを取り戻し、子どもが納得していないことのサインと認め、心に寄り添おうとする姿勢がみられる。別言すれば、子どもの反抗的な行動を再評価の必要性を示唆する指標とポジティブに受けとめ、「結論と見なしていた叱るという解決方略」に至った前提や叱り方に疑義があり得ることを意識し、再検討しようとしている。意識下の潜在構造として存在し、PAC 分析により顕在化されたこうした対処行動が、意識化され、教育現場で意図的に活用されることが要請されよう。

叱っている時の子ども反抗を、より一般的な視点から見れば、「教師の判断や評価の適切さを確認するためのフィードバック情報の指標」の１つとして解釈できよう。他の有効な指標の探索も望まれる。

（さとうだいすけ、かとうのぶこ、ないとうてつお）

コーピング・スキルが精神的健康に与える影響

木島　恒一
（北陸学院大学人間総合学部）
キーワード：コーピング・スキル，精神的健康，GHQ 精神健康調査票

【目的】 近年，コーピングと精神的健康との関係が注目されてきている（平田，2010；加藤，2005）。平田（2010）はコーピングタイプによって精神的健康にどのような影響がもたらされるかについての諸研究を整理，検討して，対象者の属性，ストレッサーの内容によって結果に違いのあることを示唆している。この問題を扱った諸研究で用いられたコーピング尺度の多くは，個人のコーピング特徴の測定を目的とするものであり，適応という点からみたコーピングの適不適を考慮したものとはいえない。しかしながら，適応するためのストレス・マネジメントにとっては，個人がストレスに対して適切なコーピングをできるか否かということは，重要な問題であると考えられる。適応的なコーピングを行う能力とは，具体的にはストレス・コーピング・スキルである。木島（2008）はこのストレス・コーピング・スキルを「ストレスフルな状況に適切に対応するための学習可能な諸スキル（技能）」と定義し，これを測定するためのストレス・コーピング・スキル尺度（Stress Coping Skill Scales，以下 SCSS と略）を作成している。本研究では，コーピング・スキルが精神的健康に及ぼす影響について検討した。

【方法】 対象：研究への利用を承諾した私立 A 大学人間総合学部学生 41 名（男性 13 名，女性 28 名）。

調査時期：2014 年 6 月の心理学研究法 I および 2015 年 1 月の心理学概論 II の授業時に行った。

コーピング・スキルの測定：SCSS を用いた。SCSS は 11 尺度，47 項目から構成される。各項目への回答は，7 段階評定によって行った。

精神的健康度の測定：GHQ 精神健康調査票 60 項目版（以下，GHQ と略）を用いた。GHQ の回答は 4 件法によって行われるが，採点に当たっては，下位 2 段階を 0，上位 2 段階を 1 として得点化した（松原，1995）。

【結果】 SCSS の 11 尺度と GHQ の各尺度の相関は表 1 に示すようになった。GHQ 得点との間に有意な負の相関を示したのは，“情動的ストレス耐性”，“積極的対応”，“環境の変化への迅速な対応”の 3 つコーピング・スキルであった（各 r=-0.372；r=-0.504；r=-0.357）。GHQ の下位尺度についてみると，GHQ “身体症状” と “積極的対応” スキルとの間に有意な負の相関（r=-0.396）が認められた。GHQ “不安と不眠” は，“情動的ストレス耐性”，“積極的対応”，“環境の変化への迅速な適応”，“プラス思考” の 4 つのコーピング・スキルとの間に有意な負の相関を示した（各 r=-0.467；r=-0.370；r=-0.405；r=-0.384）。GHQ “社会的活動障害” は “積極的対応” スキルと間に有意な負の相関がみられた（r=-0.318）。GHQ “うつ傾向” は “情動的ストレス耐性”，“攻撃性の抑制”，“積極的対応” との間に有意な負の相関を示した（各 r=-0.443；r=-0.326；r=-0.358）。

GHQ による “健常者” と “神経症者” との弁別の臨界点は 16 点と 17 点である。この基準で調査参加者を判定すると，“健常者” は 19 名，“神経症者” は 22 名であった（以下，前者を GHQ 低得点群，後者を GHQ 高得点群とする）。SCSS 各尺度について両群間の差を検討したところ，“積極的対応” のスキルで有意な差が認められ（t(39)=3.852, p<0.001），GHQ 高得点群は “積極的対応” のコーピング・スキルが低いことが示唆された。また，“社会的サポートの所有” スキルで有意傾向の差がみられた（t (39)=1.937, p<0.10）。また，SCSS11 尺度を説明変数，GHQ 得点に基づく分類（低得点群・高得点群）を目的変数として判別分析を行った。ステップワイズ法で変数を選択したところ，採用されたのは “積極的対応” のみで，これによる正診率は 68.3%であった。

表1　SCSS の尺度と GHQ 精神健康調査票の相関係数

	GHQ 精神健康調査票				
SCSS 尺度	GHQ 得点	身体症状	不安と不眠	社会的活動障害	うつ傾向
情動的ストレス耐性	-0.372 *	-0.135	-0.467 **	-0.292 +	-0.443 **
悠然的対応	-0.029	-0.056	-0.054	0.168	-0.075
社会的サポートの所有	-0.237	-0.102	-0.137	0.001	-0.301 +
社会的サポートの活用	-0.016	-0.009	0.079	0.131	-0.068
対人コミュニケーションにおける適切な対応	-0.103	-0.066	0.061	0.022	-0.269 +
攻撃性の抑制	-0.059	0.115	-0.172	0.086	-0.326 *
自己主張	0.054	0.199	-0.015	-0.054	0.196
積極的対応	-0.504 **	-0.396 **	-0.370 *	-0.318 *	-0.358 *
環境の変化への迅速な適応	-0.357 *	-0.101	-0.405 **	-0.281 +	-0.226
プラス思考	-0.252	-0.139	-0.384 *	-0.004	-0.296 +
問題の洞察・把握	-0.069	-0.008	-0.086	-0.011	-0.103

(注)　+p<0.10　*p<0.05　**p<0.01

【考察】 木島（2008）は SCSS 作成に際して，精神的健康度の指標として UPI 学生健康調査（以下 UPI と略）を用いて，コーピング・スキルと精神健康度の関係について検討している。その報告によれば，UPI 得点と有意な負の相関を示したのは SCSS 全 11 尺度中 7 尺度（“情動的ストレス耐性”，“攻撃性の抑制”，“自己主張”，“積極的対応”，“環境の変化への迅速な適応”，“プラス思考”，“問題の洞察・把握”）であった。本研究では，精神的健康度の指標として広く利用されている GHQ を用いてコーピング・スキルとの関係を検討した。GHQ 得点との関係でみた場合には，UPI との関係でみられたのとほぼ同じ種類のコーピング・スキルが有意な相関を示した。判別分析の結果を考慮すると，精神的健康度に特に影響を及ぼすコーピング・スキル要因は “積極的対応” であることが示唆された。

【引用文献】

平田祐子　2010　コーピングタイプと精神的健康との関係に関する研究の動向—社会福祉実践への応用に向けて—　Human Welfare，2(1)，5-16.

加藤　司　2005　ストレスフルな状況に対するコーピングと精神的健康　東洋大学社会学部紀要，43(1)，5-21.

木島恒一　2008　ストレス・コーピング・スキル尺度の作成—その信頼性・妥当性の検討—　心身医学，48，8，731-740.

松原達哉（編）　1995　最新心理テスト法入門—基礎知識と技法習得のために—　日本文化科学社

（きじま　つねかず）

日本版 Shyness 尺度の意識度と自己統制感に関する検討

○松田浩平[1)]　佐藤惠美[1,2)]
([1)]東北文教大学　[2)]東京富士大学)
キーワード：日本版 Shyness 尺度，自己統制感，分散分析

シャイネスとは、他者が自分を評価しているという感情に起因している社会的な不安および行動の抑制により特徴づけられている感情、認識、および行動の構成要素として定義される(Buss,1955,Carducci,2000) 。日本におけるシャイネスというと対人恐怖における研究が多いが、人前で話すのが恥ずかしいかったり、内気で引っ込み思案である、といった日常生活にも及ぶ広い意味でのシャイネスが上記の定義には当てはまる。そこで、これを測定する the Cheek Buss Shyness Scale (Cheek& Melchior, 1985)を日本語に翻訳し、日本語版シャイネス尺度として大学生に質問紙調査を実施し、因子分析を行った。その結果、日本におけるシャイネス「緊張」「自己能力感」「社会的防衛」の 3 因子となり、アメリカ版とは異なるシャイネスの構造が得られた(Matsuda,Sato&Carducci,2016)。

さらに、シャイネスに関する理解には、他のパーソナリティ検査との関連性野検討も必要である。自己統制感とは，行動の結果について，なぜそのようになったのかと原因を考える時の統制の位置である(Rotter,1966)。自己統制感は物事の因果関係について推測するが、統制感の違いによってシャイネスの感じ方が異なることが予想される。そこで、日本版シャイネス 3 因子と自己統制感との関連性を検討する。

目的

日本版シャイネス尺度と他のパーソナリティ検査を比較するため、日本版シャイネス尺度 3 因子と自己統制感との関連性を検討する。

方法

【実施期間】 2015 年 8～12 月

【被験者】 関東、北陸、北海道の国立・私立大学の大学生 508 名（男性 230 名、女性 278 名）

【質問紙と結果の処理】日本版シャイネス尺度:the Cheek Buss Shyness Scale (Cheek& Melchior, 1985)を日本語に翻訳し、質問紙として2段階で評定してもらった。他に、主要5因子性格検査(村上・村上,1997)と自己統制感尺度(西野,1990, 松田,1993)を使用した。

結果

日本版シャイネス尺度の意識度による統制感の性差

日本版シャイネス尺度における自己統制感の性差を検討した。シャイネス尺度の統制感・性別による違いを図示した(Fig.1)。分散分析の結果、自己統制感による有意差が認められた($F(2,502)=32.88,p<.01$)。性差はあるが($F(1,502)=10.32,p<.01$)、交互作用はなかった ($F(2,502)=0.12,n.s$)。

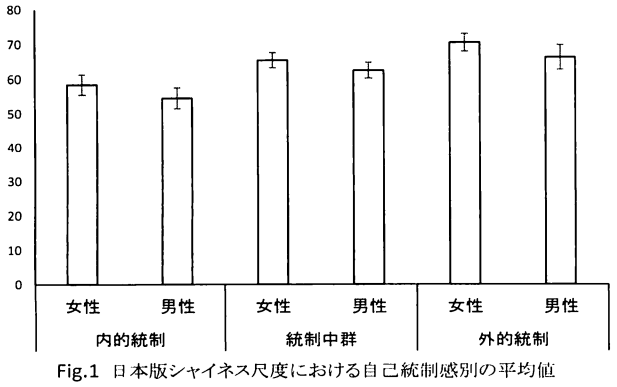


Fig.1 日本版シャイネス尺度における自己統制感別の平均値

次に、日本版シャイネス尺度の因子スコアを算出し、表に示した(Table.2)。分散分析の結果、シャイネス尺度の因子 1 の「緊張」では、自己統制感による有意差が認められた($F(2,495)=24.11,p<.01$)。性差はあるが($F(1,495)=8.73,p<.01$)が、交互作用は認められなかった($F(2,495)=0.02,n.s$)。

シャイネス因子 2 の自己効力感では、自己統制感による有意差が認められた($F(2,495)=37.15,p<.01$)。性差は認められたが($F(1,495)=10.06,p<.01$)、交互作用は認められなかった($F(2,495)=0.72,n.s$)。

シャイネス因子 3 の社会的防衛では自己統制感による有意差が認められた($F(2,495)=15.52,p<.01$)。性差は認められた($F(1,495)=11.38,p<.01$)が、交互作用は認められなかった($F(2,495)=0.23,n.s$)。

Table1.統制感による日本版Shyness因子

LOC	Shyness	Means	SD
内的統制	Factor1	-.39	.97
(N=154)	Factor2	-.44	.85
	Factor3	-.30	.89
統制中群	Factor1	.09	.86
(N=227)	Factor2	.05	.80
	Factor3	.07	.85
外的統制	Factor1	.32	.88
(N=134)	Factor2	.42	.87
	Factor3	.26	.83

考察

日本版シャイネス尺度における自己統制感の性差を検討し結果、すべてのシャイネス因子において自己統制感における有意差と性差が認められた。すべてにおいて交互作用がなかったことから、単純主効果による効果であると言える。

3 つの統制感では、全体的に男性よりも女性の方がシャイネス得点が高かったことから、女性の方が対人場面での緊張や社会的防衛といったシャイネスを感じやすいことが示唆された。特に、男性の内的統制は他と比較してシャイネス得点が低く、男性で自分自身に物事の結果を帰属できる男性は対人場面での緊張が少ないことが示唆された。

また、因子スコアによる検討でも、男女ともに自己統制感の持ち方にとってシャイネス得点の傾向が現れた。この結果から、性別に関係なく内的統制の方がシャイネス得点が低く、外的統制が得点が高かった。そして、全体的に女性の方がシャイネス得点が低井という傾向が得られた。

【引用文献】 Kouhei Matusda Emi Sato Bernardo J. Carducci 2016 A Factor Analytical Investigation of the Japanese Translation of the Cheek-Buss Shyness Scale in Support of the Three-Component Model of Shyness. 31th Inrterbnational Congress of Psychology.

（まつだ　こうへい・さとう　えみ）

日本版 Shyness 尺度の意識度と主要 5 因子に関する検討

○佐藤惠美 [1)]　松田浩平 [1,2)]
([1)]東京富士大学　[2)]東北文教大学)
キーワード：日本版 Shyness 尺度，主要 5 因子，分散分析

シャイネス(Shyness)とは、他者が自分を評価しているという感情に起因している社会的な不安および行動の抑制により特徴づけられている感情、認識、および行動の構成要素として定義される(Buss,1955,Carducci,2000) 。シャイネスは対人不安や神経症傾向、外向性とも関連があり、社会的な不適応行動に対処するために重要な概念である。本研究では、対人恐怖などの社会的不適応というよりも、もっと日常生活でも見られるシャイネス行動をより深く理解することを目的として他のパーソナリティ特性との関連性を検討する。日常生活にも観察されるシャイネス行動を表した尺度として the Cheek Buss Shyness Scale (Cheek& Melchior, 1985)を日本語に翻訳し、日本語版シャイネス尺度として大学生に実施、項目を整理し、因子分析を行った。この結果、日本におけるシャイネス因子は、「緊張」「自己能力感」「社会的防衛」の 3 因子であった(Matsuda,Sato&Carducci,2016)。

さらに、この翻訳版と他のパーソナリティ検査との関連を検討するため、BIS/BAS、主要 5 因子検査、自己統制感との相関係数を算出したところ、他のパーソナリティ検査とも高い相関が示された(Sato,Matsuda&Carducci,2016)。この結果からシャイネス因子は、さまざまなパーソナリティ特性によって、シャイネスの状態や意識度によって現れたかが異なることが予想される。そこで、本研究では、日本版シャイネス尺度による主要 5 因子特性の特徴を検討する。

目的

日本版シャイネス尺度と他のパーソナリティ特性を比較し、日本版シャイネス尺度の意識度による主要 5 因子特性の特徴について検討する。

方法

【実施期間】 2015 年 8～12 月

【被験者】 関東、北陸、北海道の国立・私立大学の大学生 508 名(男性 230 名、女性 278 名)

【質問紙と結果の処理】 日本版シャイネス尺度:the Cheek Buss Shyness Scale (Cheek& Melchior, 1985)を日本語に翻訳し、質問紙として2段階で評定してもらった。他に、主要5因子性格検査(村上・村上,1997)、自己統制感尺度(西野,1990, 松田,1993)を使用した。

結果

1．日本版シャイネス尺度における主要 5 因子の性差

日本版シャイネス尺度における主要 5 因子の特性別の性差を検討した。この結果、建前尺度(Att)において性差があった $t(1,436)=2.05(p<.05)$。女性(M=46.74,SD=9.39)よりも,男性(M=48.65,SD=10.15)が平均値が高かった。さらに、協調性にも性差があり($t(1,435)=2.07(p<.05)$、女性の方が高かった(M=49.07,SD=10.24)。また、開放性の性差($t(1,436)=4.63(p<.01)$では、男性の方が平均値が高かった(M=51.75,SD=47.21)。

2．日本版シャイネス尺度（高中低群）における主要 5 因子特性における平均値の差異

日本版シャイネス尺度の因子スコアの得点を高中低群に分け、主要 5 因子の特性別の平均値の差を検討した。この結果、主要 5 因子の受験態度を測定するための頻度（F）においてシャイネス尺度高中低群による平均値の差が認められた($F(2,444)=13.48,p<.01$)。建前尺度(Att)でもシャイネス尺度における有意差が認められた($F(2,444)=121.10,p<.01$)。

特性では、外向性尺度 ($F(2,442)=105.60,p<.01$)、協調性尺度 ($F(2,443)=10.79,p<.01$)、誠実性尺度 ($F(2,441)=7.60,p<.01$)、情緒安定性尺度 ($F(2,443)=38.50,p<.01$) 、開放性尺度 ($F(2,444)=31.77,p<.01$)の、すべての特性においてシャイネス尺度高中低群による平均値の差が認められた(Fig.1)。

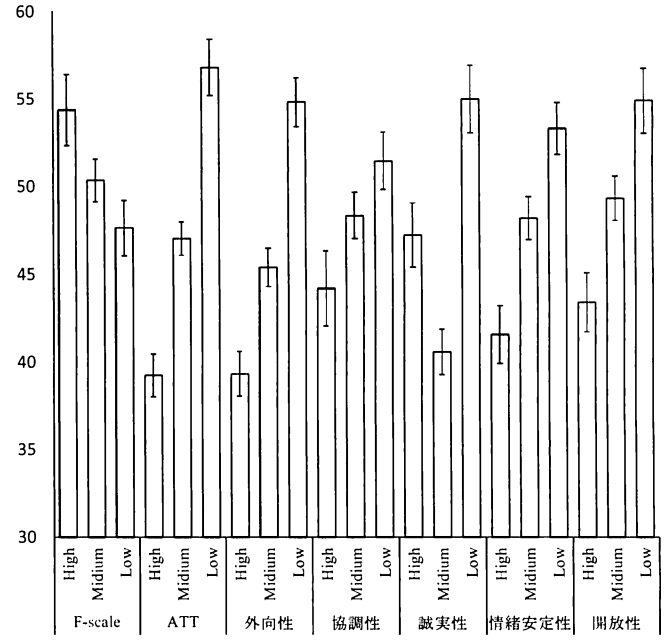


Fig. 1. 日本版 Shyness 尺度(高中低)による主要 5 因子特性

考察

日本版シャイネス尺度における主要 5 因子特性に関する検討を行った。性差では、建前尺度(Att)と開放性特性は男性の方が得点が高く、協調性特性では女性がシャイネスの平均値が高かった。これは、男性は建前や知性などの好奇心を出すのが恥ずかしいと感じていることが示唆された。

次に、日本版シャイネス尺度を高中低群に分け、主要 5 因子の特性別に差があるかを検討した。この結果、すべての特性に有意差が見られた。5 つの特性で顕著な差が見られたのは、外向性高群、誠実性中群、協調性高群、情緒安定性高群はシャイネス得点が他と比較して低かった。これに対し、外向性低群、誠実性低群、協調性低群などシャイネス尺度低群は、シャイネス尺度が比較して高かった。これは、内向的で誠実性や協調性が低い人は他者や社会的場面で緊張したり、社会的にうまく振る舞えないと考えていることが示唆された。

さらに、F 尺度は普通の回答パタンからの逸脱を測定するために「はい」「いいえ」の比率の高い項目で構成し、逆の低頻度の回答方向を採点したものである(村上、村上,2008)。F 頻度と、建前尺度(Att)で有意差が認められた。特に、建前尺度低群はシャイネス尺度が高いことから、建前的態度をあまり気にしない人はあまり緊張や恥ずかしさを気にしない傾向があることが示唆された。

【引用文献】 Emi Sato Kouhei Matsuda Bernardo J. Carducci 2016 Examining the Personality Correlates of a Japanese Translation of the Cheek-Buss Shyness Scale. 31th Inrterbnational Congress of Psychology.

（さとう えみ・まつだ こうへい）

大村政男と血液型心理学

― 日本応用心理学会における活動を振り返って ―

○藤田主一　　浮谷秀一
（日本体育大学）　（東京富士大学）

キーワード：大村政男、血液型心理学、日本応用心理学会

【研究の目的】

大村政男は、わが国を代表する性格心理学者である。もともと、大村は神経質 neuroticism の研究から不安 anxiety の研究へ進んでいき、米国での研究などを取り入れた成果は、日本応用心理学会をはじめ各種の学会での研究発表や論文公表へとつながった。また、その研究は学位論文『顕現性不安の構造に関する研究』（1982）にまとめられている。その後、大村はどちらかというと地道な神経質・不安研究から華々しい血液型心理学（血液型気質相関説または血液型性格学）の研究へと進んでいったが、ここに至る経緯には彼の研究者人生を変えるほどの劇的な出会いと、抑圧に近い過去の鮮烈な思い出があったという。



大村政男（1925－2015）

大村政男が志した血液型心理学の追究は、日本応用心理学会における大会発表に端を発している。彼の研究がわが国の社会を巻き込むようになったのは、ある意味で本学会が果たした役割の大きさを物語ると言ってよい。本研究は、大村が何を求めて血液型心理学の批判的研究に着手したのか、その先に見えたものは何かを振り返り、本学会における彼の研究活動を改めて問い直すことを目的にするものである。

【方法】

日本応用心理学会第 51 回大会（1984）～同学会第 81 回大会（2014）までの大会発表論文集、大会時の配布資料、研究論文、著書、雑誌記事、新聞記事ならびに筆者が保持している資料やメモなどをもとに、大村政男と血液型心理学との関係をたどり、回顧展望する方法を採用した。

【結果】

（1）エピソード：大村が血液型心理学の研究に突入するきっかけになったのは、1982 年の春に彼の研究室へある女子学生が転がり込んできたことによる。卒論で「血液型とパーソナリティ」を書こうとしたが、指導教授が許可してくれないことを切々と訴え、彼に救いを求めた。そのとき彼の無意識の層に埋もれていた記憶がよみがえったのである。彼がまだ若き心理学徒であった戦後間もないころ、古川竹二の「血液型による氣質の研究」（『心理学研究』第 2 巻第 4 輯、1927）という論文を手に取り、A 型者の項を見たところ、そこに記述されていた A 型者の特徴が自分（大村は A 型）にピッタリ当てはまっていたのである。彼には研究方向の転機とも思われたが、当時の心理学の方法論に血液型心理学はそぐわない風潮が存在していたので、彼はこの遭遇発見を図らずも抑圧してしまったのである。それだからこそ、1982 年の出来事は彼にとって大きな事件になったと言ってもよいだろう。ここに、静的 passive な研究スタイルから動的 active なスタイルへ飛躍した新しい大村政男が誕生したのである。

（2）大村が日本応用心理学会で衝撃的な研究発表に着手したのは、第 51 回大会（主催：富士短期大学）からであった。発表題目は『「血液型性格学」は信頼できるか』というもので、「できる」とも「できない」とも言っていないが、言外感情を読み取ると「本当に信頼できるのだろうか？」という批判的ニュアンスが込められていたようである。当時の研究発表は口頭発表だったこともあり、このショッキングなタイトルに魅了されたのか指定された教室は立ち見の姿も見られるほど満席で、さらにメディアからの取材もあった。彼の独特な語り口調は聴衆を引き付けるのに十分なほど魅力的だった。

（3）第 51 回大会発表論文（大村の自筆）は、ABO 式血液型と性格（または気質）との関連を歴史的に遡ることから始めている。古川竹二をはじめ、田中秀雄、浅田一、川上理一、古閑義之、佐藤幸治、矢田部達郎の論述を簡潔に紹介しながらも、否定的なニュアンスが込められた文脈である。続いてポピュラー・サイコロジスト（大村の命名だが名前を明かしていない）による実験例を取り上げ、その方法では心理学的に証明できないと述べている。さらに大村の指導による 2 研究を基に実験を行い、適合度の強さは「思い込み効果」ではないかと結論づけている。また、両者の関係は普通の性格検査では把握できないとまで断言している。

（4）大村は、発表当日に会場で配布された「補遺」の中で、次のような見解を公表している。

（1）血液型と性格との関連は、心理学的には確定できない。人間の性格とその生理的な機構とを結び付けようとする試みは魅力的であるが、4 つの血液型にマッチする性格類型、あるいは性格性格特性は見当たらない。

（2）「血液型性格学」では、4 つの血液型それぞれに適当な気質を与え、あたかもそれらが各血液型に特定なものとして表示しているが、それらの気質はフリーサイズの T シャツのようなもので、だれにでもある程度合致するものである。これを「フリーサイズ効果」という。

（3）それでは「血液型性格学」は無用の代物かというとそうではない。O 型の人の行動性はこうだとか、耐久力はこうだ―といわれると「信は力なり」が生じる。「鰯の頭も信心」である。一般に悪い日に結婚式を挙げない。それは迷信ではあるが科学ではどうしようもないことである。人間生活に「科学」では立証できない、非科学的で信仰的なものがあっても仕方がないのではないか。「いい日旅立ち」ということばがある。いい日とはいつか―と尋ねると、旅立つ日がいい日であるという。科学は、当分、このような非科学的なことと平行して生きていかなければならないのである。

大村によるこの見解の中で、（1）は彼の基本的な研究方向を示したものである。（2）は研究仮説である。（3）は科学とそうでないものとの平行論を示したものである。相手を徹底的にたたかないで、生きる道を与えようとするものである。

【考察】

本学会における第 1 回目の発表は、当時わが国大衆に浸透していた血液型と性格との常識論を科学的に撃破しようという試みであった。しかし大村は、科学では説明できない社会生活や風潮があること、科学的に真実と言えないものが流行することを認め、だからこそ科学的心理学と血液型心理学との平行的関係を容認していきたいという信念を持ち続けていることが理解できる。大村政男の彼らしいところである。

（ふじた しゅいち・うきや しゅういち）

大学生の臨床心理士に対するイメージおよびニーズに関する調査

岡田　和久
（日本大学文理学部）
キーワード：臨床心理士，イメージ，ニーズ，計量テキスト分析

【研究の目的】 近年，臨床心理士の活動は社会的に広く認知されるようになってきている。一方，臨床現場では，ただ話を共感的に聴くだけの臨床心理士の対応に対するクライエント（以下 Cl）の不満が指摘されることも少なくない（例えば，菅野，2006）。これは臨床心理士の対応の実態と Cl が一般的に抱く臨床心理士のイメージやニーズとの間に生じるズレが影響していると推察される。しかし，現場ではそのような指摘が存在するとしても，臨床心理士は一般的にどのようなイメージやニーズが持たれているのかといった調査研究は非常に乏しいのが実情である。そこで本研究では，臨床心理学に関する知識の少ない一般大学生を対象に臨床心理士に対するイメージとニーズについて調査することを目的とする。本研究結果により，Cl のニーズに応えるための有用な臨床心理士の対応を再検討するきっかけとなることが期待される。

【方法】 本研究では，一般教養科目の「臨床心理学」を履修していた心理学科に所属しない大学生 198 名を対象に，無記名式の自由記述式アンケート調査を実施した。調査時期は，2014 年 4 月，2015 年 4 月の初回授業の開始前に行われた。アンケート内容は，年齢，性別，3 つの質問（①臨床心理士についてどんなイメージを持ちますか，②臨床心理士による心理療法やカウンセリングではどんなことが行われていると思いますか，③もしあなたが心理療法やカウンセリングを受けるとしたら臨床心理士に対してどんな対応をしてもらいたいと期待しますか）で構成されていた。倫理的配慮として，アンケートの目的，成績評価には一切影響しないこと，参加は任意であること，回答内容による不利益は一切生じないこと，本調査結果は専門学会の学術発表や論文掲載に使用すること，等について文面と口頭にて事前に説明した。その後，同意を得た学生のみに記入してもらったところ，回収率は 95.5%（有効回答数：男子 56 名，女子 133 名）であった。分析方法は，すべての回答内容を逐語的にデータ化した後，KH coder による計量テキスト分析を用いた。抽出された全 150 語のうち，本研究テーマに関連する単語 72 語を研究対象として選出し，出現頻度が 6 回以上の 49 語を用いて意味的類似性のある単語同士をまとめてカテゴリーを生成した。次に，出現頻度が 5 回以下の 23 語については，意味的類似性を検討しながら該当する上述のカテゴリーに割り当てた。これらの手続きを通して，コーディングルールを作成した。

【結果と考察】 **1. カテゴリーの出現頻度の性差** コーディングルールに基づいた分析の結果，臨床心理士のイメージは 18 カテゴリー，臨床心理士へのニーズは 9 カテゴリーが生成された。男女間における各カテゴリーの出現頻度はいずれも有意差は見られなかった（$\chi^2_{(17)}=12.148$,ns, $\chi^2_{(8)}=6.253$,ns）。よって，臨床心理士に対するイメージやニーズについては性差がなかったと考えられる。 **2. 臨床心理士のイメージ** 臨床心理士に対するイメージを表す 18 カテゴリーについて階層的クラスター分析を行ったところ，6 クラスターに分類された。クラスター1〔「会話」「精神疾患患者」「温和な態度」〕は，精神疾患患者と優しく会話をしているイメージを表したもので，医療領域で多くの臨床心理士が働いている現状の反映と考えられる。クラスター2〔「悩み事」「個人カウンセリング」「よくわからない」「スクールカウンセラー」〕は，悩み事に対して個別でのカウンセリングをするスクールカウンセラーとしてとらえつつもその実態はよくわからないといったイメージを表したもので，全校配置によってスクールカウンセラーの存在は知られていても臨床心理士の実態については漠然としたイメージしかないことの反映と考えられる。クラスター3〔「カウンセラー」「心理テスト」「女性」「有資格者」〕は，資格を持った女性カウンセラーが心理テストを行うイメージを表したもので，女性の臨床心理士の割合が多い現状の反映と考えられる。クラスター4〔「心のケア」「質問」「安心感」〕は，臨床心理士が質問して語りかけながら心のケアや安心感を提供するイメージを表したものと考えられる。クラスター5〔「心の専門家」「心理療法」〕は，臨床心理士が心理療法を行う心の専門家であるというイメージを表したものと考えられる。クラスター6〔「まじめな態度」「丁寧な態度」〕は，臨床心理士がまじめで丁寧な態度で接するイメージを表したものと考えられる。 **3. 臨床心理士へのニーズ** 臨床心理士に対するニーズを表す 9 カテゴリーについて階層的クラスター分析を行ったところ，5 クラスターに分類された。クラスター1〔「傾聴」「問題の解決」「アドバイスの提案」〕は，傾聴とともに問題解決のためのアドバイスも同時に求めていると考えられる。従来，臨床心理学の教育ではアドバイスの提案についてはあまり重視されないが，本研究結果より，臨床心理士はただ話を聴くだけではなく，問題解決のための具体的なアドバイスを提案するスキルの必要性が示唆される（岡田・赤嶺，2015）。クラスター2〔「親しさ」「関わり」〕は，親しみのある関係性を求めていると考えられる。従来の教育では中立的な態度でいることが重視されているが，本研究結果より，臨床心理士は中立性よりも親しい関わりをより積極的に示すジョイニングやアクティブリスニング等のスキルの必要性が示唆される。クラスター3〔「受容的態度」「共感的理解」〕とクラスター4〔「肯定的態度」〕は，Rogers が提唱した治療者の条件の“共感的理解”と“無条件の肯定的尊重”に相当する態度が求められていると考えられる。これらは，いずれも従来の教育で重視されているスキルである。クラスター5〔「わかりやすい内容」〕は，具体的でわかりやすい内容の会話を求めていると考えられる。よって，臨床心理士は専門用語を不用意に使用するのではなく，Cl に伝わるわかりやすい言葉遣いへの鋭敏な感覚を磨く必要性が示唆される。

【総合考察と今後の課題】 本研究により，臨床心理士に対するイメージは現状が反映されていた一方，ニーズについては従来の臨床心理学の教育とは一部異なるスキルが求められていることが明らかとなった。今後は臨床心理士自身が持つ Cl への対応に関する認識との比較や，これらのニーズに応えるための有用な教育プログラムの検討が必要と考えられる。

【引用文献】

岡田和久・赤嶺直子 2015 臨床心理実習での面接中断に対するクライエントと大学院生の認識の比較．応用心理学研究，**41**（1），18-28.

菅野泰蔵 2006 カウンセリング方法序説 日本評論社

（おかだ かずひさ）

親密な人間関係を持つことへの不安のPAC分析

○鈴木　秋絵　　内藤　哲雄
（福島学院大学大学院臨床心理学専攻）　（福島学院大学福祉学部）
キーワード：対人恐怖、他者と親密になる恐怖、PAC分析

【目的】本研究では、一見すると親密な人間関係を持つことそのものに不安・恐怖を感じるように思われるが、クライアントの相手への関わり方に違和感を懐くケースについて、PAC分析により診断的に検討することを目的とした。

【方法】＜被検者＞ 親密な人間関係を持つことに不安を感じる20代前半の女性A。

＜連想刺激と手続き＞「あなたは、相手とどんなことでも話せる深いふれ合い関係になることについてどんなことがイメージされたり、頭に浮かびますか。恐怖や不安を感じることがありますか。深いふれ合いになることに関連して頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号を付けてカードに記入してください。」と口頭で教示し、連想刺激を提示した。次に重要順に並べ換えさせた後、各項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由について聴取した後、項目単独での＋－0イメージを質問した。

【結果】各項目の重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は、Fig.1のようになった。単独のイメージは、＋が0、－が9、0が4項目で、マイナスイメージが強い。

＜被検者による解釈：抜粋＞≪クラスター1≫「自分が失望されそう」～「自分以外の相手と仲の良い人に対して嫉妬してしまいそう」の4項目：相手を自分だけのものにしたい感じと言うか、囲ってしまいたいようなイメージを受けます。

≪クラスター2≫「心を許した相手に裏切られたら立ち直れなくなる」～「お金の無心をされそう」の6項目：一度自分の内側に入れた人から嫌われたりとかしてしまうと立ち直れなくなっちゃうかなという感じ。相手をとても信じたいという気持ちはあるのですが、信じきってしまって良いものか不安に感じているような。相手のことをとても大好きだけど、信じ切れて無いというところがあるのかなと感じました。他者の評価を得るのが怖いのかなとも思います。

≪クラスター3≫「自分の時間まで邪魔されそう」～「睡眠時間が相手に取られてしまいそう」3項目：自分にとって大事なものっていうのが、相手に邪魔されそうって感じがする。客観的に見た時に、自分のことしか考えていないって感じ。パーソナルスペースとか、その、空間だけでないにしても"自分のもの"っていう事に対する意識が凄く強いのかなと思います。縄張りみたいな感じ。一人の時間をとても大切にしているような感じがした。自分の時間っていうものをあまり大切にしすぎないことが、他の人と仲良くなるコツなのかなと思います。自分の、自分にとって大事なものを盗られてしまいそうな…友達とか、付き合う人とかを信じ切れていない部分があるのかな、と。

≪クラスター1と2の比較≫かなり対人面でのネガティブなことばかりをイメージしてしまったのですが、実際はそこまで悪いもんでもないよなって。皆さんかなり良い方ばかりなのでそこまで怖がらなくてもいいのかなって気づきました。

≪クラスター1と3の比較≫1つ目で相手に依存し過ぎてしまいそうってなってるんですけど、3つ目の方でも自分の時間というのは相手にとられてしまいそうって思っていることは、逆に言うとそれだけ相手と時間を過ごしている、過ごしたいなと思っていることの裏返しなのかなと思いました。

≪クラスター2と3の比較≫中学校の時の友人がとてもこういうような不安を持っていた子なのかなと振り返ると思うんです。友人同士なんだけど、あたかも恋人同士のように束縛が強かった子なので、それがいまだに残っていて、「ああはならないぞ」とブレーキをかけている部分があるんだなと、今気づきました。

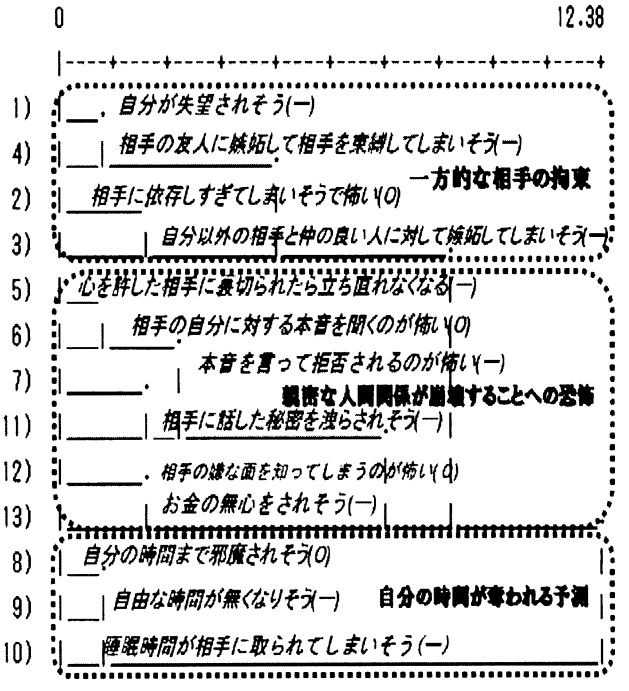


Fig.1　親密な人間関係になることによって生ずる不安のデンドログラム
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの(　)内の+－0は単独でのイメージ

【総合的解釈と考察】

クラスター1からは、一方に相手を拘束し、失望されそうであっても、＜一方的な相手の拘束＞をし依存してしまう恐怖を感じている。クラスター2では、深い付き合いをしている相手に拒否され裏切られ、相手の嫌な面を知ってしまうのを怖れる＜親密な人間関係が崩壊することへの恐怖＞を感じている。クラスター3では、「自分の時間まで邪魔されそう」など、自分の時間が奪われてしまいそうな感覚を持っていることから、＜自分の時間が奪われる予測＞と命名できる。

以上のように、本被検者では、対人関係そのものに不安や恐怖を感じるのではなく、親密な関係になったとき、自分自身の相手に対する一方的な思いや行動を抑制すること、相手への思いが拒否され裏切られることへの恐怖、相手のために努力しコストを払うことへの不満など自己都合的な思いを、抑制、コントロールすることの困難さに不安、恐怖を感じていることが読み取れる。PAC分析によって、こうした潜在的な構造が明らかにされたといえよう

（すずきあきえ　ないとうてつお）

メンタルヘルスにおける心理教育の役割

○宇部　弘子[1,2)]　木村　真依子[2)]
([1)]日本体育大学児童スポーツ教育学部　[2)]前橋赤十字病院)
キーワード：メンタルヘルス，心理教育，ストレスチェック

【研究の目的】職場でのストレスが非常に高い現状や，精神障害を原因とする労災給付の支給決定の件数の増加などをふまえて、労働者の安全と健康を確保するため平成25年12月よりストレスチェック制度が導入された。群馬労働局が平成24年9月に実施した企業の安全衛生担当者を対象としたアンケートにおいても，労働者の73.6%が何らかのストレスを感じている一方で，ストレスを感じていて身近に相談者がいる人は75.4%で，70.2%の人は事業場に何らかの対応を期待していることが明らかになった。しかしながら，実際にメンタルヘルスケアに取り組んでいる事業場は25.7%に過ぎず，また，アンケート結果からはメンタルヘルスケアに取り組んでいない理由として，取組方法が分からない(52.3%)，専門スタッフがいない(52.6%)などがあげられている。労働者のなかでも対人援助職はストレスが高く，医療従事者のメンタルヘルスは重要である。

筆者が所属する病院は，生死にかかわる緊急性を要する高度救命救急センターが設置され、1000名を超える職員が所属している。そのため，制度導入以前から職員のメンタルヘルスケアは行われており，衛生委員会を中心に休復職者の対応や月2回の職員用カウンセリングなどを実施してきた。しかし,それらがこれまでに十分活用されてきたとは言いがたく，その背景にはプロフェッショナルな仕事や有り様が求められる現場だからこそ，職員のメンタルヘルスについては個々人の責任に任される傾向が影響していたと思われる。しかし，メンタルヘルス不調を訴える職員数の増加などを受け，ストレスチェックが導入されたことを契機に，メンタルヘルスケアの推進のため院内での心理教育活動を本格的に始動することとなった。今回は，その取り組みについて報告したい。

【方法】主な取り組みとしては，①院内研修，②コンサルテーション，③職員用カウンセリングの導入・充実化である。

まず①院内研修については，年に2回，院内の職員を対象にしたストレス・マネジメント研修および，管理職を対象にしたラインケア研修を実施し，メンタルヘルスケアの重要性とストレスチェックへの積極的な取り組みについて講義を行なった。この研修では，ストレスチェックを実施する前にプレストレスチェックとしてアンケート調査を行った。配布したアンケート調査は，参加者に職業性ストレス簡易調査票とBuss-Perry攻撃性尺度への回答を求め,ストレス簡易調査票の評価を参加者自身がその場で行なった。現在，集計したデータは統計による分析を進めている。

次に，②コンサルテーションでは管理職に職員用カウンセリングを利用してもらうことで，各部署に対する院内のメンタルヘルスケア活動の宣伝・推進を図りつつ，部下の相談やラインケアについてコンサルテーションを行なっている。

③カウンセリングでは，枠組みの問題として職員用カウンセリングの予約方法を改善し，予約枠を増加した。具体的には，ホワイトボードにある予約時間のマグネットを職員自身が確保する予約方法から，変更後は一律メール予約とし臨床心理士のみがメールを閲覧でき，他の職員に知られずに職員用カウンセリングが利用できるようにした。その後，人事部門より，病院全体に予約方法の変更について周知した。

【結果】まず①院内研修において，これまでメンタルヘルス関連の研修は潜在的なニーズがありつつも，重要なテーマとして取り上げられることがなかった。しかし，研修場面における臨床心理士による心理教育は一度に多くの職員に働きかけることができ，効率よくメンタルヘルスケアについて啓発する機会となった。さらに，プレストレスチェックとして職業性ストレス簡易調査票を実施し採点したことで，各々が自分のストレスを目に見える形で理解することができ，自らを振り返るきっかけになったと思われる。ラインケアの研修においては，管理職が部下のメンタルヘルス不調への直接的な対処方法を学び，いざという場合には院内のメンタルヘルスケアスタッフとして臨床心理士を活用できるということも周知することができた。

②コンサルテーションにおいては，管理職の相談のニーズが高く，新人職員や職場でのトラブル，メンタルヘルス不調の職員への対処方法について管理職にアドバイスを行なった。また，職員の休復職に際しては産業医に代わって面談を行ない，主治医・人事課との連携を図ることでスムーズな経過をたどることができたケースもあった。

③職員用カウンセリングでは，時間の経過とともに利用率は増加しており,①での宣伝効果,②での管理職からの紹介,予約方法の改善などが功を奏していると思われる。

【考察】一連の取り組みの中で人事部門，管理職や各職員のニーズについてヒアリングを行いながら取り組んでいたものの、実施する中で以下の問題点が浮上した。

まず，研修に参加していない職員は臨床心理士の存在を知らなかったり，存在はわかっていても相談する方法がわからないなど，臨床心理士の役割や活用方法が周知徹底されていなかった点である。また，メンタルヘルスケアへの理解もまだまだ不十分であり，実際のストレスチェックを行ったところ，実施に抵抗を示す職員が確認された。

次に，職員用カウンセリングでは実施日が平日の午後に設定されているため，職員にとっては勤務中に時間を割かなければならない点である。そうであれば，上長がカウンセリングの利用について理解を示しているか，業務の調整が可能か否かなどの問題がある。しかし，そもそも管理職が職員用カウンセリングの存在を認知していなかったり，職員自身がカウンセリングの利用を同僚に知られたくない場合も考えられ，現状では職員のニーズに合った構造が整っているとは言いがたい。また，予約方法についてもメールが苦手な職員には利用しづらかったり，PCメールを受信拒否設定にしているアドレスには返信できないなどの問題が生じている。

以上のことから，今後はメンタルヘルスケアや臨床心理士の活動について，更なる周知徹底と病院全体に浸透させていけるような心理教育の継続が必須であり，周囲のニーズに合わせたメンタルヘルスケアの構築が課題と言える。

【引用文献】

厚生労働省群馬労働局 2013 –心の健康対策に関するアンケート調査結果報告–

（うべ ひろこ・きむら まいこ）

官民協働刑務所に関する態度と公正世界観の関連

—栃木県および島根県居住者に対する調査から —

○上瀬由美子
（立正大学 心理学部）

キーワード：刑務所，社会的包摂，信頼感，リスク認知

【研究の目的】

矯正施設に対するステレオタイプや偏見は、出所者の社会的包摂を妨げる要因のひとつとして指摘されている。

これまで行なわれた裁判過程研究では、公正世界観と厳罰化傾向の関連が指摘されている。その一方、社会制度に対する情報が提示され信頼性が高まると、公正世界観が高いものにおいても、加害者に対する排除的な態度傾向が低下することが示されている(深草・浦, 2009)。矯正施設および受刑者や出所者(以下(元)受刑者)に対する態度と公正世界観との関連についてはこれまで検討されていない。本研究は上記をふまえ、公正世界観が高い場合には(元)受刑者に対する態度は否定的であるが、施設に対し信頼感が高い場合には公正世界観が高い場合も(元)受刑者に対して受容的態度を示すと仮説しその検証を目的とする。また矯正施設に関する既存研究(上瀬, 2016 など)をふまえ、官民協働刑務所(以下 PFI 刑務所)に対する抵抗感やリスク認知との関連も併せて分析した。

【方法】

楽天リサーチモニターから栃木県(さくら市除く)および島根県(浜田市除く)および美祢市豊田前および大嶺町除く)に居住する20歳～69歳までの男女を対象とした(当該地区のモニター数 34,159 名)。調査依頼にあたっては地域・性・年代による割付を行い、計 15,049 名に調査依頼が発信された。回答完了数は 1261 名で、このうち回答に不備があったもの等を除く 979 名(男性 639 名、女性 717 名)を分析対象とした。

調査実施期間 2015 年 3 月 16 日～3 月 18 日。

分析項目 PFI 刑務所の認知度と抵抗感、矯正施設(4 種)に対するリスク認知、刑務所一般に対する信頼感(本研究で独自に作成 3 項目 $\alpha = .82$)、(元)受刑者への受容的態度(矢野ら, 2014 をもと作成 10 項目 $\alpha = .88$))、公正世界観(今野・堀, 1988 をもとに作成 5 項目 $\alpha = .75$)を分析対象とした。

回答者の属性 (1)性別：男性 51.1%、女性 48.9%。(2)年代：20 代 16.3%、30 代 24.5%、40 代 40.4%、50 代 20.4%、60 代 18.3%。(3)地域：栃木 51.1%、島根 48.9%。

【結果・考察】

PFI 刑務所認知度 認知度は、栃木(18.4%)、島根(27.1%)であった。PFI 刑務所に関する既存調査では、近隣住民では 9 割以上に施設が認知されていたが、同県内であっても、開設地域から離れると認知度は大幅に低下することが確認された。

PFI 刑務所への抵抗感 居住県に当該施設があることについて「強い抵抗を感じる」「やや抵抗を感じる」としたものは栃木 19.0%、島根 13.2%であった。この値は近隣住民調査の開設後抵抗感の値と近接している。

矯正施設に対するリスク認知 少年院、一般刑務所、PFI 刑務所、更生保護施設について、「1. ほとんど危険はない」～「4. 非常に危険」および「5. わからない」で回答をもとめた。「わからない」と回答したものを除き施設別に平均値を求めると、少年院(M=2.17 SD=0.99)、一般刑務所(M=2.30 SD=1.03)、PFI 刑務所(M=1.84 SD=0.87)、更生保護施設(M=1.92 SD=0.90))であった。施設による平均値には有意差がみられ($F(3, 2142)=141.32$ $p< .001$)、下位検定の結果、抵抗感の高さは、刑務所＞少年院＞更生保護施設＞社会復帰促進センターの順となった。

公正世界観および刑務所信頼感の影響

公正世界観および刑務所一般に対する信頼感、それぞれを尺度得点分布にもとづき高・中・低の 3 群に分けた。そして公正世界観高低(高群・低群)×刑務所一般に対する信頼感(高群・低群)の 2 要因の分散分析を、(元)受刑者への受容的態度、PFI 刑務所への抵抗感、矯正施設に対するリスク認知を従属変数として実施した(表 1)。

表1 公正世界観と刑務所信頼感が、(元)受刑者および矯正施設への態度に与える影響

		公正低・信頼低	公正低・信頼高	公正高・信頼低	公正高・信頼高	公正観主効果	信頼感主効果	交互作用
(元)受刑者への受容的態度	M	22.10	28.06	26.33	28.75	$F(1,459)$ =19.58 ***	$F(1,459)$ =56.96 ***	$F(1,459)=10.14$ **
	SD	6.07	4.74	5.53	4.09			
PFI刑務所抵抗感	M	1.98	1.85	1.75	1.76	$F(1,459)$ =3.63	$F(1,459)$ =0.54	$F(1,459)=0.65$
	SD	0.86	0.86	0.76	0.66			
少年院リスク	M	2.62	2.00	2.37	2.03	$F(1,335)$ =0.78	$F(1,335)$ =15.14 ***	$F(1,335)=1.31$
	SD	1.05	0.98	0.88	0.93			
一般刑務所リスク	M	2.69	2.12	2.51	2.11	$F(1,338)$ =0.50	$F(1,338)$ =14.34 ***	$F(1,338)=0.43$
	SD	1.04	1.09	0.95	0.99			
PFI刑務所リスク	M	2.37	1.65	1.72	1.58	$F(1,334)$ =10.88 **	$F(1,334)$ =15.91 ***	$F(1,334)=7.29$ **
	SD	0.97	0.89	0.78	0.74			
更生保護施設リスク	M	2.43	1.80	1.94	1.66	$F(1,336)$ =7.45 **	$F(1,336)$ =16.13 ***	$F(1,336)=2.28$
	SD	1.03	0.96	0.92	0.78			

* $p< .05$ ** $p< .01$ *** $p< .001$

(元)受刑者への受容的態度においては、公正世界観と信頼感の主効果、および両者の交互作用が有意であった。下位検定の結果、刑務所一般に対して信頼が低い場合は、公正世界観高群の方が低群よりも有意に受容的態度が高かった。刑務所一般に対して信頼が高い場合には公正世界観高群・低群とも低信頼の場合よりも受容的態度は高く、両群間に有意差はみられなかった。PFI 刑務所リスクにおいても、公正世界観と信頼感の有意な交互作用がみられ、下位検定の結果、低信頼の場合には公正世界観低群が高群よりリスクを高く認知するが、高信頼の場合には公正世界観による群差はみられなかった。本研究の仮説は支持されず、公正世界観の高いものの方が、刑務所への信頼感が低くても受刑者や出所者に対して受容的態度を示す結果となった。裁判に基づき刑が執行されているあるいは刑を終えた(元)受刑者に対しては、公正世界観の高いものはむしろ受容的であるとの結果から、裁判過程に対する態度と矯正過程に対する態度とでは、公正世界感観が与える影響の方向が異なると論考される。

【引用文献】 深草・浦 (2009). 日本社会心理学第 50 回大会・日本グループダイナミックス学会第 56 回大会合同大会発表論文集, 138-139. / 上瀬(2016). 立正大学心理学研究所紀要, **14**, 1-13. / 今野・堀(1998) 筑波大学心理学研究, **20**, 157-162.

（かみせ ゆみこ）

犯罪不安が犯罪認知件数の推定に与える影響

—調整要因としての集合的効力感—

○中川　知宏
（近畿大学総合社会学部）

キーワード：犯罪不安，集合的効力感，犯罪数推定

目　的

これまでの犯罪不安研究は，犯罪不安を引き起こす要因や犯罪不安が個人に及ぼすネガティブな心理的影響を検証してきた。しかし，具体的に犯罪不安がどのような問題を引き起こすかという事に関する検証は不十分であった。そこで本研究では，犯罪不安が引き起こす問題のひとつとして犯罪発生数の過大推定に焦点をあてた。

島田・鈴木・原田（2004）は犯罪不安が強くなると，犯罪リスク知覚（犯罪に巻き込まれるかもしれないという主観的リスク）が高まることを示している。これは，犯罪不安が強い個人は犯罪被害に遭う可能性を高く見積もることを示しており，これが犯罪数の過大推定に結び付くだろうと仮定した。

しかし，犯罪不安が犯罪推定数に及ぼす効果は集合的効力感によって調整されるだろう。集合的効力感とは，公共秩序の維持や犯罪統制のような集合的目標を達成するために，地域の居住者間での社会的紐帯の質を変容する，あるいは活性化する過程と定義される（Sampson, Raudenbush, & Earls, 1997）。多くの先行研究は，集合的効力感が強い地域は犯罪が抑制される傾向にあることを示しており，この知見は日本でも再現される（島田, 2010）。理論的前提に基づくと，集合的効力感が高い地域では，犯罪への直接的，あるいは間接的な接触機会が比較的少なくなると考えられるため，犯罪不安の影響が緩和され，犯罪発生数を少なく推定すると考えられる。

以上の議論から，本研究では次のように仮説を立てた。犯罪不安が強い者であっても，集合的効力感を強く知覚している者はそうでない者よりも犯罪数を少なく推定するだろう。一方，犯罪不安が弱い者は，集合的効力感と犯罪の推定認知件数には関連が見られないだろう。

方　法

実験参加者　大学生 147 名（男性 64 名，女性 83 名，平均年齢 20.3 歳）を対象とした。

実験操作　本研究では，実験参加者を犯罪不安喚起群・不安喚起群・統制群の 3 つの条件に無作為に割り当てた。犯罪不安喚起群と不安喚起群は類似した条件であるが，これらを設けることで得られた結果が犯罪不安に起因するものなのか，犯罪とは無関係な不安に起因するものなのかを区別することができる。犯罪不安喚起群は参加者自身が経験した犯罪に関連する出来事，不安喚起群は犯罪とは無関連な出来事で不安を感じた内容，統制群は大学生活の振り返りについて，過去 1 年以内の出来事を想起するよう求めた。

犯罪数推定　実験操作の後，実験参加者に平成 25 年度に東京都内で起きた身体犯罪（殺人，強姦，傷害），財産犯罪（自動車盗，ひったくり，振り込め詐欺，空き巣）の 7 罪種の認知件数を記述するよう求めた。

測定項目　実験参加者は集合的効力感尺度 10 項目（非公的社会統制 5 項目，凝集性・信頼性 5 項目；5 件法），犯罪不安 4 項目（身体不安 2 項目，財産不安 2 項目；5 件法）に回答した。

結　果

はじめに，操作チェックのため，分散分析を実施したが，実験操作の効果は有意でなかった（犯罪不安喚起群 $M = 3.51$, 不安喚起群 $M = 3.23$, 統制群 $M = 3.38$; $F(2, 145) = 1.76$, $p = .47$）。しかし，相対的には犯罪不安喚起群における犯罪不安が高いことが示唆される。次に，仮説を検討するため，集合的効力感の下位要素である非公的社会統制と不安操作を独立変数，身体犯罪と財産犯罪を従属変数として MANOVA を実施した。分析の結果，身体犯罪に対する交互作用効果が有意であったので（$F(2, 140) = 3.265$, $p = .041$），下位検定を実施したところ，犯罪不安喚起条件では，非公的社会統制を弱く知覚している者は，それを強く知覚している者よりも身体犯罪の推定認知件数が多かった（$M = 1525.22 / 5086.42$, $p = .049$）。さらに，集合的効力感のもうひとつの下位要素である凝集性・相互信頼を先の非公的社会統制と入れ替えて，同様の MANOVA を実施したが，いずれの効果も有意ではなかった。

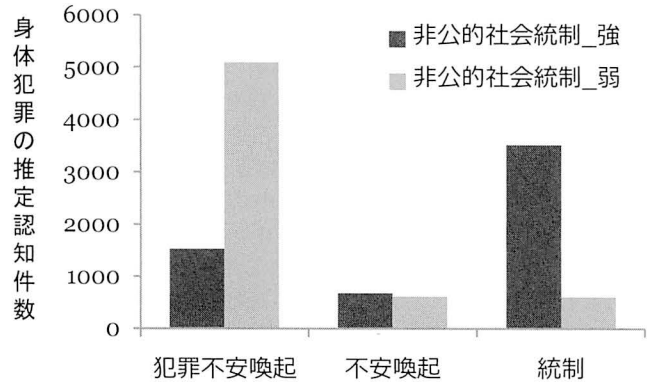


Figure1. 非公的社会統制と犯罪不安操作の交互作用効果

考　察

本研究では，集合的効力感と犯罪不安が犯罪の推定認知件数に及ぼす影響を検討した。分析の結果，犯罪不安喚起条件では，非公的社会統制を強く感じている参加者はそうでない参加者よりも身体犯罪に関する推定認知件数が少なかった。特に，本研究では犯罪不安の効果を検証するため，対比として不安条件を設けていたが，この条件では差が見られなかったことから，犯罪不安特有の効果が見られたと言えるだろう。

また，予測したような交互作用は集合的効力感の下位要素である非公的社会統制のみでみられたが，これが強いということは，居住地域において実際に生じた逸脱行為に住民が積極的に対応していたと考えられる。それゆえ，犯罪不安が強くとも，によって喚起される犯罪の推定認知件数が調整されたと考えることができる。

引用文献

Sampson, R. J., Raudenbush, S. W. & Earls, F. (1997). Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science*, **277**, 918-924.

島田貴仁・鈴木 護・原田 豊 (2004). 犯罪不安と被害リスク知覚—その構造と形成要因— 犯罪社会学研究, **29**, 51-64.

（なかがわ　ともひろ）

存在脅威管理理論における不謹慎、所属意識、他者関係希求への効果

大西　麻仁，土田　昭司
（関西大学大学院　社会安全研究科，関西大学　社会安全学部）
キーワード：存在脅威管理理論，親和動機，所属意識

【研究の目的】

自粛ムードに代表されるように東日本大震災に伴い、SNS上の発言において不謹慎だというような非難やイベント中止が全国各地で行われた。この現象は存在脅威管理理論(以下TMT(Becker, 1973)で説明できるだろう。TMTによれば、以下の仮説を挙げることができる。仮説①「死の恐怖を喚起された群はされなかった群よりも、喪に服すという伝統文化に反する人に対して攻撃行動が起きるだろう。」仮説②「死の恐怖を喚起された群はされなかった群よりも、伝統文化への帰属意識が高まるだろう。」仮説③「死の恐怖を喚起された群はされなかった群よりも、他者関係希求が起きるであろう。」

【方法】

被験者

実験期間は平成27年10月から平成27年12月、参加者は18歳から31歳(M=21.46 SD=1.466)までの大学生大学院生80人(男子50人、女子30人)であり、2(MS操作(死の恐怖を喚起する操作)・MS統制)×2(不謹慎・謹慎)の計4グループに分け実施。

手続き

①カバーストーリーとしての実験の目的を「災害時におけるコミュニケーションのあり方」と教示を受け、合意をしたうえで実験に参加した。
②MS群では死に対する態度尺度12項目(沖合・下仲・中里, 1996)、MS統制群では生に対する態度尺度12項目(死に対する態度尺度を生に関係するものに改変した)に回答した。
③MS群は東日本大震災の津波の映像、統制群は復興後の映像を見た。
④MS群に1分間黙とうをした。
⑤伝統的文化規範の測定として国民意識尺度13項目(唐沢, 1994)に回答した。
⑥不謹慎群の喪中はがきは赤文字で不謹慎な内容を記載、謹慎軍には青文字で喪に服すという内容を記載。
⑦攻撃尺度10項目に回答した。
⑧親和動機尺度17項目(杉浦, 2000を抜粋し改変したもの)に回答した。
⑨フェース項として年齢、性別に回答した。
⑩実験後にディブリーフィングとして実験の目的が「災害時における人々のコミュニケーション」ではないこと、実験の目的について解説された。
なお、上記の方法において社会安全学部研究倫理委員会の承認を得ている。

【結果】

尺度の検討

a) 死に対する態度尺度：死に対する態度尺度は3因子構造(固有値: 2.999, 2.380, 1.509, .980･･･)であり、それぞれ「死の恐怖(α=.757)」「天国へのあこがれ(α=.744)」「死の無意味観(α=.476)」と命名した。

b) 国民意識尺度：国民意識尺度は3因子構造(固有値3.582, 2.107, 1.411, 1.114･･･)であり、それぞれ「愛国心(α=.782)」「国家主義(α=.782)」「日本への住みたさ(α=.577)」と命名した。

c) 攻撃尺度：攻撃尺度は2因子構造(固有値: 4.977, 1.704, .791･･･)であり、それぞれ「敵意(α=.855)」「不謹慎さ(α=.858)」と命名した。

d) 親和動機尺度：親和動機尺度は4因子構造(固有値: 4.272, 2.396, 1.911, 1.448, .947･･･)であり、それぞれ「被好意(α=.749)」「親和動機(α=.755)」「援助(α=.733)」「サポート(α=.728)」と命名した。

仮説の検討

仮説1検討のため独立変数をMS・不謹慎、従属変数に敵意、不謹慎さとし分散分析を行った所、有意差がでなかったため仮説1は支持されなかった。仮説2検討のため独立変数をMS・不謹慎、従属変数を愛国心、国家主義、日本への住みたさとし2要因の分散分析を行った所、有意差がでなかったため仮説2も支持されなかった。仮説3検討のため独立変数をMS・不謹慎、従属変数を被好意、親和動機、援助、サポートとし2要因の分散分析を行った所、有意差がでなかったため仮説3も支持されなかった。

【考察】

今回の実験では3つの仮説において支持されなかった。その理由として、死の恐怖の操作がうまく機能しなかったためと考えられる。死の恐怖操作として使用した死に対する態度尺度の質問項目が死の恐怖を与えるのにはインパクトが少なかったことが考えられる。さらに、実験群では津波から逃げる人々の映像を見たが、生きる力強さを感じ、死の恐怖を感じなかった人もいるのではないかと考えられる。すなわち、実験群では死の恐怖を与える可能性が低いといえる。また、実験群では1分間黙とうの時間を設定したため、死の恐怖がさめてしまったのではないかとも考えられる。逆に統制群では「災害時における人々のコミュニケーション」という実験目的や、東日本大震災についての質問紙に答えてもらったため、東日本大震災から死を喚起しようとしなくても、死の恐怖を感じた人もいたのではないかと考えられる。今後死の恐怖操作を改良した実験をする予定である。

なお、本実験のデータを死の恐怖を感じたか否かでわけ、再分析をしたところ、仮説1仮説2仮説3に沿う結果が得られた。

【引用文献】

(1) Becker, E. 1997 –*The denial of death*- *New York: Free Press.*
(2) Rosenblatt, Greenberg 1989 -Evidence For Terror Management Theory: I. The Effects of Mortality Salience on Reactions to Those Who Violate or Uphold Cultural Values- *Journal of Personality and Social psychology*
(3) 脇本竜太郎 2012 –存在脅威管理理論へのいざない- サイエンス社

（おおにし　まみ）

対人場面における行動の適切さの判断に影響を与える要因

—専門性の違いによる影響—

○伊坂　裕子[1)]　和田　万紀[2)]
([1)]日本大学国際関係学部　[2]日本大学法学部)
キーワード：文化的自己観，道徳的直観，行動の適切性

【目的】　さまざまな場面で個人の行動の選択に影響を与える要因のひとつに、その場面における行動の適切さの判断がある。また、文化心理学では、文化的自己観による影響が指摘されている。

Iwao(1997)は、重要な他者との意見の違いがある場面で、好ましいと考える行動をアメリカと日本で比較した。たとえば、自分の娘が異なる人種の人と結婚するのは許せないと考えている親が、娘が婚約者として人種の異なる相手を連れてきた場面での行動について、複数の選択肢の好ましさの順番をつけさせた。この場合、内心は娘の結婚を認めないが、その場では結婚に賛成しているように言うという言動に不一致のある行動が日本ではもっとも好ましいとされたが、この行動は、アメリカではもっとも好ましくないとされたことを報告した。これは、相互独立的自己観を持ち、二律背反の絶対的な価値を持つアメリカ文化と、相互協調的自己観を持ち、個人がさまざまな役割に応じてふさわしい行動を演じ分けると考える日本文化の違いとして考えられている。

一方、道徳的直観についての近年の研究では、道徳的直観は試行錯誤を繰り返しながら、その社会の中で許されること、許されないことを学習する、すなわち、文化的文脈の中で発達するとしている。そのため、同一の文化でも所属する集団によって、どのような行動を適切と考えるかということが異なると考えられる(Haidt, 2001)。

そこで、本研究では日本文化の中で、個人の行動の選択に影響を与える要因を検討するとともに、行動の適切性の判断に影響を与える要因として、個人の持つ専門的知識をとりあげる。Iwao(1997)にならい、重要な他者との意見の違いがある場面での行動の適切性判断における専門的背景の影響を検討する。

【方法】

＜調査対象者＞

N大学国際関係学部学生、153名（男性82名、女性71名）、法学部学生、92名（男性62名、女性30名）、合計245名。

＜調査内容＞

Iwao(1997)で使用された場面・行動などを参考に、他者と意見の相違のある場面のシナリオを3場面作成した（場面A:死刑反対論者の前で、それを知らない同僚が死刑賛成の意見を表明する/場面B:自分でも克服できない人種偏見を持っている親の娘が婚約者として人種の異なる相手を連れてきた/場面C:ルール重視の人が同僚とハイキングにでかけ、その同僚が立ち入り禁止区域に入ろうとする)。各場面の登場人物が日本名である日本バージョンと英語名である北米バージョンを作成した。それぞれの場面において、とりうる行動の選択肢を5～8項目作成した。各行動について、次の5つについて、5段階で評定を求めた。1)自分が行う、2)典型的な日本人（または、アメリカ人）が行う、3)適切だと思う、4)社会的義務を果たしている、5)個人の自由を守る

【結果と考察】

各行動を自分が行う程度の評定に基づき、各場面の行動の因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った。その結果、場面Aは、相手の意見を優先する相手優先行動、自分の意見を優先する自分優先行動、相手の意見を聞かなかった振りをするなどの場優先行動の3因子を抽出した。他の2場面は、1因子で相手優先行動—自分優先行動の次元となった。

行動の選択に影響を与える判断を検討するために、日本人名のシナリオに基づき、場面ごとに各因子の5つの評価視点の相関を求めた。その結果、場面A、Cでは、自分が行う程度と行動の適切性の判断との間に正の相関がみられた(rs=.225～.452)。また、場面Cと場面Aの場優先行動では、自分が行う程度とその行動を義務であると思う程度に正の相関がみられた(rs=.304, .425)。場面Aの自分優先行動(r=.405)以外は、自分が行う程度と典型的な日本人が行う程度との間には、相関がなかった。この傾向は両学部に共通であった。行動の選択には、その行動を適切と考えたり、義務と考えることが影響を与える可能性が示された。

各場面における行動について、評価視点と学部による2要因の分散分析を行った。すべての行動で評価視点の主効果が有意であった。加えて、場面Cと場面Aの相手優先行動では交互作用と学部の主効果が有意であった。場面Aの相手優先行動を適切、また、義務と考える程度は、国際関係学部より法学部の方が高いが、自分が行う程度は両学部で同程度であった。場面Cでは、相手優先行動は、国際関係学部より法学部の方が義務でないと考え、自分が行う程度も低かった。「法律」という枠組みの中で善悪を判断すると考えられる法学部と、異文化における多様な価値観を受け入れるという姿勢で行動の適切性を判断すると考えられる国際関係学部の専門性による違いを反映していると考えらえる。

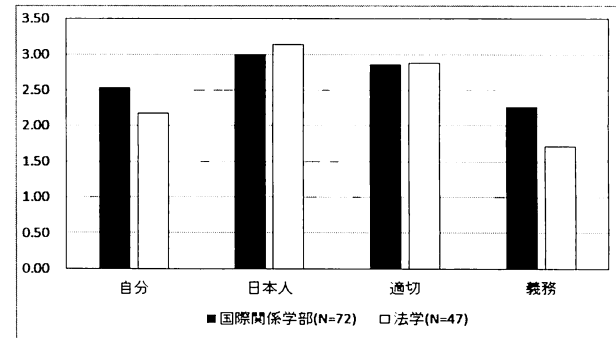


Fig1. 場面C　相手優先—自分優先

【引用文献】

Iwao, S. (1997). Consistency orientation and models of social behavior: Is it not time for West to meet East? *Journal of Japanese Psychological Research*, 39, 323-332.

Haidt, J.(2001). The emotional dog and its rational tail: A social intuitionist approach to moral judgment. *Psychological Review,* 108, 814-834.

※本研究は、平成26年度日本大学学術研究助成金（総合研究：課題番号　総14-001, 研究代表者　和田万紀）の補助を受けて行われた。

（いさか　ひろこ・わだ　まき）

スリランカ人の非言語コミュニケーションのPAC分析

内藤　哲雄
（福島学院大学福祉学部）
キーワード：非言語コミュニケーション、スリランカ人、PAC分析

【目的】外国に居住しその国の人々との対話を繰り返すと、母国との様式の違いに直面し、その国についてだけでなく、対比により母国の特徴についても意識化するようになる。本研究ではスリランカを母国とする留学生の非言語対人コミュニケーションのスキーマをPAC分析により検討した。

【方法】＜協力者＞日本の大学の留学生センターで日本語の授業を受けている20代前半のシンハリ人女子A。母国では日本語学部在学、日本語学習歴5年11カ月。

＜連想刺激と手続＞「あなたは、＜母国（出身国）の人がコミュニケーションするとき＞の、身ぶりやしぐさ、声の調子、表情、感情表現などの「言葉を用いない」あるいは「言葉に付随するものとしての」非言語コミュニケーションについて、どのようなイメージが浮かんできますか？＜母国の人の非言語コミュニケーション＞の特徴として思い浮かぶのはどのようなことでしょうか？　頭に浮かんできたイメージや言葉を、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」と教示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ換えさせ、項目間の直感的類似度を7段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージを聴取し、補足質問をして、最後に項目単独での＋－0イメージの回答を求めた。

【結果】結果は、Fig.1のようになった。単独イメージは、＋が8項目、－が3項目、感情が喚起されない0が6項目であり、全体としては＋イメージが強いことを示している。

＜被検者による解釈（抜粋）＞　クラスター1は、「目上の人の前、ゆびさしは絶対しない」～「大声で目上の人と話できない場合もある」の3項目：目上の人の前で指さしは絶対にしない。したら相手がすごく怒ると思います。大声で話すのはどこでも失礼。家族でも娘が父と大声で話したら失礼。文化的にも「(大声で)笑ったら、自分の家でしなさい」という言葉もあります。目上の前で(大声で話すなど)は、仲良くなる前はだめですが、仲良くなっても上司として持ち上げるところ、会議など(公的な場)ではだめ。

クラスター2は、「手をつないで話すのはだいたい多い」～「あまり話とかしない人だったら、みんながあまり仲良くしたくない」の11項目：スリランカでは、目上の人の前は友達同士で使う言葉が使えないということがある。スリランカでは書き言葉とか話し言葉があって、話言葉の中でも友達同士の言葉が使えない。友達同士だったら、手を繋いで話すとか、身ぶりとかも、もちろん顔の表情とかもあるんですね。返事の「はい」を繰り返してはいけないのは日本と同じ。声の調子や顔の表情でわかる(伝わる)。(交通事情が悪く)約束時間にルーズ。(遅れが）30分はよくあり、1時間もある。

クラスター3は、「車で男性が前のシート。女性だったらうしろ」～「目上の人にとっていいと言われる所がない→車の中にすわるところ、エレベータの中で立つところ」の3項目：男性優位の居場所。助手席が一番。家族の中では男性、目上でテリトリーなどの席が決まっている。男性優位にすると(扱うと)男性が喜ぶ。

クラスター1と2の比較：クラスター1は目上の人についてで、やってはいけないことでまとまっている。クラスター2は、親しい人や上の人。

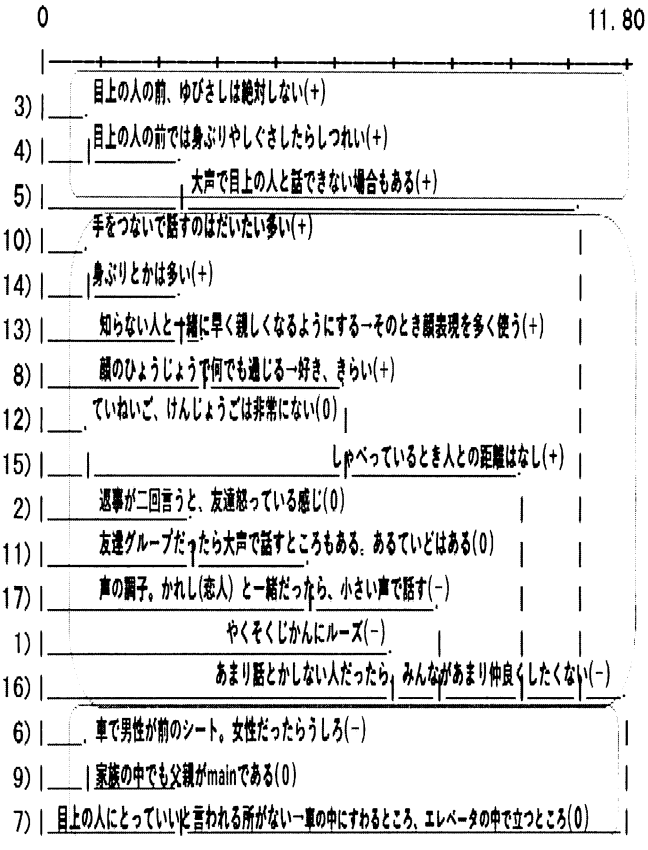


Fig.1 スリランカ人留学生Aの母国の非言語コミュニケーション
1)左の数値は重要順位
2)各項目後ろの(　)内の＋－0は単独でのイメージ

クラスター1と3の比較：クラスター1は目上、クラスター3は男性。共通点は、「配慮」する。

クラスター2と3の比較：2では顔の表情と、ボディランゲージ。知らない人であっても使う。3は、目上、男性に対してある程度配慮すること。

【考察】クラスター1は、目上の人の前では。指さしや大声で話すなどは禁止であるが、仲良くなると上司の役割へ応答や会議などの公的場面を除けば、身ぶりやしぐさを使える。**＜目上の人への公的場面での非言語行動の抑制＞**を示すといえよう。

クラスター2は、友人同士や同輩では、くだけた言葉遣いや身ぶり、顔の表情による伝達が用いられるが、目上の人にはそうしないだけでなく、使用する言葉遣いも異なる。**＜身ぶりやしぐさ、顔の表情を使い、くだけた会話を楽しむ対等関係＞**での非言語コミュニケーションの特徴を示している。

クラスター3は、車やエレベータの中での空間行動のポジショニングについての配慮に関するもので、男性優位、目上優位となっている。着席などの空間行動への配慮が非言語コミュニケーションを構成するものとして独立して存在していることは興味深い。**＜男性・目上優位のポジショニング配慮行動＞**と解釈することができよう

（ないとう　てつお）

組織における不正行為を暴くか

—中国企業従業員の内部告発に対する態度の調査—

王　晋民
（千葉科学大学危機管理学部）

キーワード：不正行為，内部告発，組織，態度

【研究の目的】日本では2006年4月に「公益通報者保護法」が施行され，内部告発が不正行為に対処する手段として考えられている。内部告発に関する実証研究が行われており（Miceli et al., 2008），日本人有職者を対象とした内部告発に関する心理学的研究も報告されている（王ほか,2004；王, 2009)。内部告発に関する心理学的な知見を統合するために，社会文化的に異なる国や地域のデータとの比較検討が必要でる。そこで，本研究は中国の企業従業員の内部告発に対する態度について調べることを目的とした。

【方法】対象者　中国重慶市に在住の20歳以上の企業に勤める中国人常勤従業員72人。**調査票の構成**　調査票は王ほか(2004)を参考にして内部告発に対する態度29項目,内部告発者に対する態度10項目，内部告発の理由に関する20項目（5件法，1：そう思う，5：そう思わない）および内部告発行動傾向等12項目が使用された。年齢層，性別，学歴などの人口統計学的特性に関する項目も設けた。調査票は中国語で書かれた。**手続き**　調査協力者が現地にて友人・知人を通して参加者を募集し，個別に依頼して調査票に記入させた。

【結果と考察】回答者の状況　有効回収数55人(男性34人，女性21人)であった。年齢層は20歳台30人,30歳台17人，40歳台7人，50歳以上1であった。学歴は中卒2人，高卒6人，大卒35人，大学院卒12人であった。雇用形態は正社員・正職員22人，契約・嘱託社員30人，派遣社員3人であった。職位は一般社員・職員34人，係長級13人，課長級5人，部長級以上3人であった。**因子分析について**　①内部告発に対する態度の29項目に対する因子分析（主因子法，バリマックス回転，固有値1以上基準，以下同様）の結果，以下の8因子が抽出された。つまり，「信頼の破壊」，「強行必要性」，「組織のダメージ」，「組織健全化」，「社会的正義」，「奨励の必要性」，「組織内での必要性」，「情報不確実性」であった。各因子での平均評定値と中性反応の値（5件法において「どちらとも言えない」に対応する評定値3）と比較した結果，信頼の破壊，組織のダメージ，組織健全化，情報の不確実性において統計学的に「そう思う」方向だと判定された（表1)。内部告発の良い効果と悪い効果の両面性を認識していることが示される。②同様に，内部告発者に対する態度の10項目に対する因子分析の結果，「心暗い」と「心広い」，「自己主張」の3因子が得られた。各因子での平均評定値と中性反応値と比較した結果，「自己主張」のみに対して「そう思う」方向だと判定で，内部告発者に対する認識が「自己主張」の強い人であることが確認された（表2)。③さらに，内部告発の理由に関する20項目に対する因子分析の結果，「自分の責任回避」，「社会公益」，「不平不満」，「組織の健全化」，「不正の制止」，「発言権の確保」の6因子が得られた。各因子での平均評定値と中性反応値と比較した結果，全ての因子において「そう思う」方向だと判定でき（表3)，内部告発の理由としてこれらのことが挙げられる可能性が示された。**内部告発行動傾向等について**　①所属組織に不正行為があった時に内部告発したいかの問いに対して，「ぜひ通報したい」が1.8%，「通報したい」が25.5%，「通報したくない」が23.6%，「絶対に通報したくない」が7.3%，「わからない」が41.8%であった。②自ら通報の可能性に対して，「可能」が12.7%，「可能でない」が29.1%，「わからない」が56.4%であった。③組織内での通報先に対して，「直属上司」が12.7%，「専門窓口」が30.9%，「業務統括者」が21.8%，「経営陣」が12.7%であった。④組織内の通報が効果ない場合，組織外部への通報に対して，「通報する」が12.7%，「通報しない」が45.5%，「わからない」が41.8%であった。以上の結果は，日本の有職者の結果（王ほか,2004）と類似する一方，内部告発や内部告発者に対する態度の因子構成や内部告発行動傾向において相違も見られた。今後，内部告発に対する社会文化的な影響について更に詳細な検討が必要である。

表1　内部告発に対する態度の各因子の平均得点

因子	得点
因子1：信頼の破壊	2.55***
因子2：強行必要性	2.95
因子3：組織のダメージ	2.68***
因子4：組織健全化	2.82*
因子5：社会的正義	2.90
因子6：奨励の必要性	2.92
因子7：組織内での必要性	3.02
因子8：情報不確実性	2.32***

表2　内部告発者に対する態度の各因子の平均得点

因子	得点
因子1：心暗い	2.92
因子2：心広い	3.09
因子3：自己主張	2.71***

表3　内部告発理由の各因子の平均得点

因子	得点
因子1：自分の責任回避	2.18***
因子2：社会の公益	2.31***
因子3：不平不満	2.61***
因子4：組織の健全化	2.78*
因子5：不正の制止	2.60*
因子6：発言権の確保	2.45*

注：得点と3との t 検定。***：$p<.001$；*：$p<.05$
得点の値が小さいほど，「そう思う」程度が大

【引用文献】

Miceli, M.P., Near, J.P., and Dworkin, T.M. (2008). *Whistle-blowing in organizations*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.

王晋民・宮本聡介・今野裕之・岡本浩一（2004）．内部告発者保護法に対する態度と個人特性，社会技術研究論文集，*2*, 343-352.

王　晋民(2009)．内部告発に対する有職者の態度：「公益通報者保護法」施行前後の比較，千葉科学大学紀要，*2*, 9-17.

【謝辞】本研究はJSPS科研費24530791の助成を受けたものです。調査の実施は駱心怡氏のご協力を頂きました。

（おう　しんみん）

大学生におけるテーマパーク体験の心理的要因を探る

― ポジティブ感情の役割 ―

雨宮　俊彦
(関西大学社会学部)
キーワード：娯楽，観光，ポジティブ感情

【研究の目的】 テーマパークは,映画やアニメなどのメディアにおける娯楽と結びついて,観光における集客の重要な要因となっており,経済的,社会的に注目をあつめている。しかし,テーマパーク体験に関する心理学的な研究はほとんどない。Bigné, Andreu & Gnoth (2005)は,テーマパーク訪問者を対象に,テーマパークの満足感と忠誠度を興奮や快,満足などの感情的要因から分析を行っている。本研究では,大学生を対象に,テーマパークへの好き嫌いをテーマパークにおけるポジティブ感情経験および関連する個人特性から分析を試みる。

【方法】調査は,関西大学社会学部で1年生の心理学の授業時間内に行った。まず,行ったことのあるテーマパークについて回答を求めた。選択肢は,1．ユニバーサル・スタジオ・ジャパン(USJ),2.東京ディズニーランド,3.東京ディズニーシー ,4.志摩スペイン村,5.ハウステンボス,6.ナガシマリゾート,7.ひらかたパーク,8.富士急ハイランド,9.その他である。 1名がいずれも選択しなかったので分析から除外した。分析対象の206名は,男子62名,女子142名で年齢は18才から21才の範囲で平均は18.23才だった。

テーマパーク感情経験質問紙：まず,全体としてテーマパークが好きか,4件法で回答を求めた。次に,自分にとってテーマパークとはどんな場所か,テーマパークにおける感情経験に関して,事前の調査に基づいて選定したポジティブ感情経験18項目とネガティブ感情経験10項目の質問項目に回答を4件法で回答を求めた。

個人特性：①成人遊戯性尺度(雨宮,2014)：成人における遊戯性を測定する5項目の尺度。(α=.838)。②青年用刺激希求尺度(柴田,2008):刺激希求傾向を測定する尺度で各5項目の4下位尺度からなる。スリルと冒険(α=.663),抑制の解放(α=.707), 内的刺激希求(α=.761), 日常的な新奇性希求(α=.580)。③空想傾向尺度(岡田・松岡・轟,2004)：空想傾向を測定する尺度で3下位尺度からなる。異常な体験(11項目：α=.750),空想の鮮やかさ(8項目：α=.715),子どもの頃の空想経験(6項目：α=.746)。④愛着スタイル尺度(加藤,1998)：各1項目で安全型,拒絶型,とらわれ型,恐れ型の4タイプの愛着スタイルを7段階で測定する。⑤Big Five尺度短縮版(並川・谷・脇田・熊谷・中根・野口,2012)：形容詞で外向性(5項目：α=.864),誠実性(7項目：α=.823),情緒不安定性(5項目：α=.831),開放性(6項目：α=.733),調和性(6項目：α=.720)のBig Five性格特性を測定する。以上,日常的な新奇性希求を除く16の個人特性を分析に用いた。

【結果】USJとディズニーに行ったことのある学生の頻度はかなり高い(Fig.1.)。全体としてテーマパークが好きかの問いには,好きが59.4%,やや好きが25.6%,やや好きでないが8.7%,好きでないが2.9%で,9割程度の大学生がテーマパークが好きと回答しており,好きでない学生は1割程度の少数派である。

テーマパークにおけるポジティブ感情経験：主因子法による18項目の因子分析の結果,固有値の推移(5.00,2.42,1.46,1.03,)と解釈可能性から3因子解が選択された。第1因子：ショー(「パレードやショーを観られる」など5項目,α=.851),第2因子:癒し(「嫌なことを忘れられる」など7項目,α=.764),第3因子:興奮(「思いっきりはしゃげる」など4項目,α=.725)。尺度間相関は,ショー・癒しが.418,ショー・興奮が.129,癒し・興奮が.404で,癒しがショー,興奮の双方と中程度の相関である。

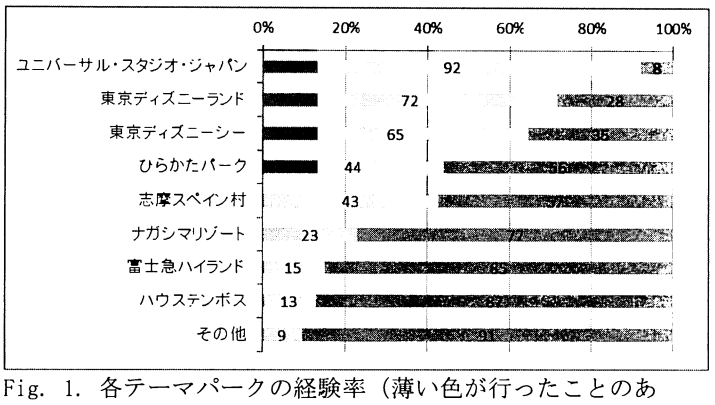


Fig. 1. 各テーマパークの経験率（薄い色が行ったことのある学生で黒い色が行ったことがない学生)

テーマパークにおけるネガティブ感情経験：主因子法による10項目の因子分析の結果,固有値の推移(2.72,2.42,1.11,)と解釈可能性から2因子解が選択された。第1因子：嘘くささ（「世界感が嘘くさい」など4項目,α=.787）,第2因子：面倒（「人ごみがうっとうしい」など4項目,α=.735)。尺度間相関は.027でほぼ無相関だった。

ポジティブ感情経験（ショー,癒し,興奮）を説明変数,テーマパークへの好悪を従属変数として重回帰分析をすると,R^2=.237で興奮（β=.344**）,癒し（β=.181*）でショーの回帰係数は有意ではなかった。ネガティブ感情経験（嘘くささ,面倒）を説明変数とすると,R^2=.137で嘘くさい（β=-0.368**）で面倒の回帰係数は有意ではなかった。

16の個人特性とテーマパークへの好悪の有意な相関係数は,遊戯性(.319**),外向性(.240**),スリルと冒険(.208**)が正で,拒絶型(-.256**)と恐れ型(-.166*)が負だった。

【考察】テーマパークを好きにする要因には,高覚醒の快（興奮）と低覚醒の快（癒し）が,個人特性としては遊戯性,外向性,スリルと冒険があることが分かった。一方,テーマパークを嫌いにする要因には,嘘くささと愛着スタイルにおける接近回避（拒絶型と恐れ型の共通成分）の存在が示された。テーマパークへの全般的好意度は高いので,今後,リピーターや忠実さなどを従属変数にした研究や,個人特性,経験,態度の間の関係の分析も必要である。

【引用文献】

Bigné, J. E., Andreu, L., & Gnoth, J. (2005). The theme park experience: An analysis of pleasure, arousal and satisfaction. Tourism management, 26, 833-844.

（あめみや としひこ）

本研究の遂行にあたっては,徐歓さんのご協力を得ました。

勤労者の転職経験と仕事への意欲、well-being

○大坊 郁夫[1)]　角山　剛[1)]
([1)]東京未来大学モチベーション行動科学部)
キーワード：well-being，意欲，転職

【研究の目的】雇用形態の多様化―非正規雇用の増加―など、勤労者を取り巻く労働環境は今もって厳しいままである。特に、非正規職に就けない若年層の増加、子どもを持つことを諦めざるを得ない女性など、未解決の問題は多く、ワーク・ライフ・バランスの実効化は難航しているなか、本稿では、勤労者が現実にどのような困難に直面しているのか、どのような困難をどのように解決しているのかを well-being 向上の重要な手がかりとして考える。この観点から、勤労者の仕事への意欲、普段抱えている困難事（職場、家庭、その他）、生きがい、希望について調査し、転職経験によって well-being がどう関連するのかについて検討する。

【方法】**対象者**：全国 47 都道府県在住者を対象とした web 調査を行った。なお、北海道、東北、関東、首都圏、中部、関西、中四国、九州沖縄地区について人口学的分布を勘案してサンプリングし、対象者は 900 名（男 542 名、女 358 名）。対象者の年齢は 21 歳から 69 歳（平均年齢 48.4 歳, *SD* 12.32）。学歴は、高等学校卒が 26.0%、高専・短大卒が 14.3%、大学卒が 49.4%、大学院（修士、博士）修了が 14.3%、その他が 3.4%（他に、NA が 1.0%）であった。回答者の主な職業は、会社勤務の一般社員 43.3%、管理職 9.9%、経営者・役員、3.9%、自営業 13.8%、公務員・非営利団体職員 10.1%、派遣・契約社員 10.9% である。

調査項目：調査に用いた尺度・項目は、1）回答者の抱えている困難事 14 項目（勤め先の安定した雇用、心身の健康状態、子育てなど）、2）well-being 尺度　①人生満足度（SWLS、Diener et al, 1985;大石訳, 2009）、②協調的幸福感尺度（HIS、Hitokoto & Uchida, 2015）、③日本版 GHQ12（中川、大坊、2013）、④仕事への意欲 32 項目（角山、大坊、磯（2015）に基づき作成された劣等感、ストレス、意欲因子をベースとする）、他に、人生の価値観、回答者の今抱えている困難事、最近乗り越えてきた困難事、自分にとって今必要と考えるスキル、楽観性・悲観性傾向を測定する項目を含んでいる。

実施時期：2014 年 12 月で、web 調査による。

【結果と考察】（1）転職の状況　転職有群については、未婚者は 146 名（32.4%）、既婚者は 304 名（67.6%）、転職経験無群では、未婚者は 142 名（31.6%）、既婚者が 308 名（68.4%）であった。全体の平均転職回数は 2.62 回（*SD* 2.02）。なお、調査時点においては全ての対象者は就労している。

現在の職の平均勤務年数は転職経験者群では、男性 3.28 年（*SD* 2.23）、女性 3.42 年（*SD* 2.10）、経験無群については、男性 5.66 年（*SD* 2.29）、女性 5.64 年（*SD* 2.35）で転職の有無条件は有意であった（F=245.69、df=1/896、p<.01）。

転職の有無と職位との関連では、無役職者では、転職有（321 名、57.6%）＞転職無（236 名、42.4%）であるが、主任（92 名；転職有 38.0% 、無 62.0%）、係長（60 名；有 21.7%、無 78.3%）、課長（79 名；有 36.7%、無 63.3%）についてはいずれも転職無＞転職有であった。部長（42 名；有 47.6%、無 52.4%）、取締役（70 名；有 45.7%、無 54.3%）では転職有無の割合に違いはない（職位カテゴリーと転職の有無、χ^2=43.69、df=5, p<.001）。一般職では、職業の移動可能性が大きいが、職位が上がるとその可能性が低くなる。さらに上位の部長、取締役では、転職割合が大きい。

（2）転職有無と回答者の属性との関係　転職の有無 2 群について回答者の基本属性（性別、未婚既婚の別、職業、学歴、雇用形態を説明変数とするロジスティク回帰分析を行った。その結果、職業、学歴、雇用形態が 1%で有意であった。項目内容からすると、転職有に大きく負荷したのは、職業では、公務員（負、p<.01）、一般社員（正、p<.03）、その他（負、p<.04）、学歴では、修士（負、p<.01）、雇用形態では、正規雇用（負、p<.01）であった。一般職の社員の転職率は大きいが、公務員、修士修了者、正規雇用者の転職はごく少ないと言える。

（3）転職の有無と well-being 心理的健康との関係　well-being 尺度得点について転職有無と性別の 2 要因の分散分析を行ったところ、SWLS については、性別主効果（F=7.27、df=1/896、p<.01）、転職有無の主効果（F=5.49、df=1/896、p<.05）が有意であった（Figure 1）。男性に比べて女性の人生満足度が高く、職業の移動のない者の満足度が高い。交互作用は有意ではないが、男性の転職経験者が最も満足度は低い。

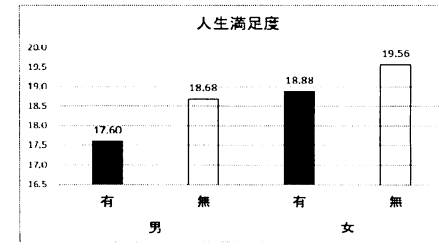


Figure 1. 人生満足度の男女、転職比較

IHS 得点については、2 要因の分散分析の結果、転職の有無による差はなく、性別主効果のみが有意であった（F=10.82、df=1/896、p<.01）。GHQ12（GHQ 採点法による）については、性別主効果のみが有意差の傾向を示した（F=3.52、df=1/896、p<.07）。なお、転職回数と well-being 尺度得点との関連では、男性では、SWLS（r=-.128、p<.04）、HIS（r=-.3157、p<.01）の有意な相関関係を示した（転職回数の平均は 2.56±2.04）。女性では有意ではない（転職平均回数は 2.72±1.99）。

（4）仕事への意欲と well-being 尺度との関連　因子分析結果で得られた、仕事への無気力、身体的不調、向上意欲、自己卑下因子得点を基にして、重回帰分析（一括投入）を行ったところ、GHQ12（Likert 法）に対する重回帰分析の結果，「仕事への無気力」，「身体的不調」，「自己卑下」が有意な正の影響を示した。現在の仕事への関与感が高く、意欲的であること、自分に満足し、自尊心が高いことは、人生への満足度、他者とも協調して幸福を求める指向性と強く関連している。

SWLS に対する重回帰分析の結果，「仕事への無気力」，「自己卑下」が有意な負の影響を示した。HIS についての重回帰分析の結果も、ほぼ同様に、「仕事への無気力」，「自己卑下」が有意な負の影響を示した。これらのことから、仕事に伴う無気力感、自己卑下は、人生への満足度、他者とも協調して幸福を求めようとする指向性と強く負の関連のあることが示唆される。

SWLS との間には、仕事に伴って感じている無気力感、自己卑下は、強い負の関連があったことから、well-being 傾向は、小野（2011）にあるように、媒介項を考える必要があろう。現代の多様な職業、就労形態の多様化からすると、上司・部下・同僚との関係、勤務形態、勤務家族や居住環境との関連は検討課題である。（だいぼう いくお・かくやま たかし）

ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク認知に与える影響

○髙 橋 尚 也[1)]
([1)] 立正大学心理学部)

キーワード：ステレオタイプ，リスク態度，寛容性

ホームレスとなった者の多くは、仕事を持っていたり（厚生労働省,2003）、路上生活前に通常の生活を営んでいたり（岩田,2008）することが明らかにされている。このように何らかのきっかけがあれば、誰しもがホームレスになる一定のリスクを抱えているものと考えられる。しかし、ホームレスに対しては、否定的イメージが抱かれる可能性が高く、社会的排斥の対象として取り上げられることが多い（岩田,2008）。そこで本研究では、ホームレスに対するステレオタイプが回答者本人のホームレスとなるリスク態度にどのように影響を与えるかについて、個人特性との関連を通して分析することを目的とする。

【方法】

首都圏の私立大学生計 144 名（男性 41 名，女性 102 名，不明１名，平均年齢 19.17 歳，標準偏差 2.69）を対象に質問紙への回答を依頼した。有効回答数は 140 名であった。調査は 2015 年７月に実施された。分析項目は、(1)ホームレスに対するイメージ（独自作成、44 項目５件法）、(2)回答者本人がホームレスとなるリスク認知（独自作成、20 項目５件法）、(3)クリティカルシンキング志向性尺度（廣岡ら,2001）、(4)寛容性（世界価値観調査に基づき９項目５件法）、(5)自尊感情尺度（山本ら,1982），(6)性別・年齢。

【結果】

1　ホームレスに対するステレオタイプの構造

因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果、解釈可能性から５因子が抽出された。第１因子は「がんばらない」「努力をしない」など 14 項目から構成され『スキルと動機の欠如』、第２因子は「家族が犯罪を犯した経験がある」「親が離婚した」など８項目から構成され『家族関係の欠如』、第３因子は「不潔だ」「汚い」など５項目から構成され『嫌悪感』、第４因子は「本人が会社で失敗した」「本人が失業した」など４項目から構成され『社会的孤立』、第５因子は「暴力的だ」など３項目から構成され『恐怖感』とそれぞれ命名された。

2　回答者本人がホームレスとなるリスク態度の構造

因子分析（主因子法・プロマックス回転）の結果、解釈可能性から３因子が抽出された。第１因子は、「家族がいればホームレスになることはない」など８項目から構成され、『対人的資源による低リスク認知』と命名した。第２因子は、「自分には一定以上の能力があるからホームレスにならない」など５項目から構成され、『能力評価による低リスク認知』と命名された。第３因子は、「兄弟姉妹を失ったらホームレスになる可能性はある」など６項目から構成され『高リスク認知』と命名された。

3　その他の尺度構成

寛容性については、因子分析を行い「異文化に対する寛容性」と「身体疾患に対する寛容性」に分類し指標とした。クリティカルシンキング志向性尺度については元論文に沿って尺度化し指標とした。

4　ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク態度に与える影響

ホームレスに対するステレオタイプが本人のリスク態度に与える影響を分析するために、第１水準に寛容性とクリティカルシンキング志向性と自尊感情、第２水準にホームレスに対するステレオタイプ、第３水準に本人がホームレスとなるリスク態度と変数を分類した。そのうえで変数増加法による重回帰分析の繰り返しによるパス解析を行った（図１）。その結果、自尊感情の高さは低リスク態度を促進し、自尊感情の低さは高リスク態度を促進していた。身体疾患への寛容性の高さは、恐怖感と社会的孤立を媒介して、対人的資源による低リスク態度を促進していた。異文化への寛容性は、恐怖感を媒介して対人的資源による低リスク態度を、スキルと動機の欠如を媒介して能力評価による低リスク態度をそれぞれ促進していた。また、身体疾患への寛容性は家族関係の欠如を媒介した場合には高リスク態度を促進するが、嫌悪感を媒介した場合には高リスク態度を抑制していた。

【考察】

大学生のホームレスステレオタイプは路上ホームレスに相当する内容であり、否定的イメージが強かった。ホームレスになる回答者本人の高リスク態度を規定していた要因は、自尊感情の低さと、ホームレスイメージにおいて家族関係の欠如という外的帰属をしている者、ホームレスへの嫌悪感が低い者であることが明らかとなった。これに対し、ホームレスイメージがスキルや動機が欠如しているというようにホームレスの内的に帰属したり、嫌悪や恐怖といった否定的感情を抱いた場合には、本人のリスク態度が低くなる、すなわち、ホームレスと自分とを切り離し、楽観的認知を行う可能性が示唆された。また、本研究におけるクリティカルシンキング志向性や寛容性はリスク態度に対し直接的影響が低く、ホームレスとなった理由の帰属による影響がみられた。

表１　回答者本人がホームレスとなるリスク態度の構造

項目内容		因子1	因子2	因子3
家族がいればまずホームレスになることはない		.877	-.225	-.135
親と親密な関係が築けているからホームレスになることはない		.776	-.133	-.074
友人と親密な関係が築けているからホームレスになることはない		.749	.221	.207
兄弟姉妹と親密な関係が築けているからホームレスになることはない		.701	.010	-.036
自分が窮地に立たされても身内の誰かが助けてくれる		.678	-.073	-.163
友人がいればまずホームレスになることはない		.603	.285	.222
自分が窮地に立たされても友人の誰かが助けてくれる		.602	.212	.105
お金さえあればホームレスになることはない		.405	-.034	-.102
自分には一定以上の能力があるからホームレスにはならない		.004	.939	.017
自分はどんな環境の変化にも対応できるからホームレスにはならない		-.047	.910	.046
自分は社会でうまくやっていけるからホームレスにはならない		.070	.845	-.023
自分はコミュニケーション能力が高いからホームレスにはならない		-.104	.832	-.108
職を失っても，また自分には職を見つけられる自信がある		-.029	.502	-.301
兄弟姉妹を失ったらホームレスになる可能性はある		.028	.040	.823
友達を失ったらホームレスになる可能性はある		.019	.109	.793
親を失ったらホームレスになる可能性はある		.068	-.189	.747
病気になったらホームレスになる可能性はある		-.110	.015	.722
自分にもホームレスになる可能性は十分にある		-.262	-.196	.505
職を失ったらホームレスになる可能性はある		-.052	-.164	.434
因子間相関	因子1	—	.574	-.327
	因子2		—	-.321
	α係数	.88	.91	.86

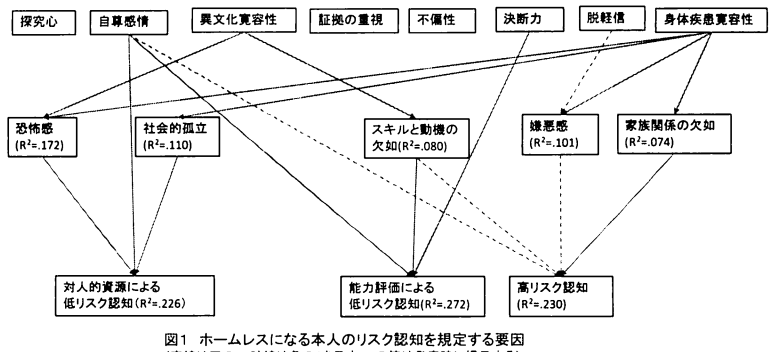


図1　ホームレスになる本人のリスク認知を規定する要因
（実線は正のβ、破線は負のβを示す。Bの値は発表時に提示する）

【注】本研究は著者の指導のもと土肥彩香氏が提出した 2015 年度立正大学卒業論文のデータに基づく。同氏の許可を得て著者による再分析結果を発表する。引用文献は発表時に提示する。　（たかはし　なおや）

保育士の対保護者コミュニケーションの検討

－幼稚園教諭との比較－

○日向野智子[1)]　山極和佳[2)]　藤後悦子[1)]　角山　剛[2)]
([1)]東京未来大学こども心理学部　[2)]東京未来大学モチベーション行動科学部)
キーワード：保育士，幼稚園教諭，対保護者コミュニケーション

【研究の目的】

保育士の仕事は、子どもとのコミュニケーションだけでなく、保育士間の連携、さまざまな価値観をもった保護者との関わりなど、高いコミュニケーション能力を求められる感情労働の職種である（戸田・中坪・高橋・上月, 2011)。保育士と保護者間の良好なコミュニケーションは、互いの信頼関係を高め、家庭と保育所が連携して健康な子どもを育むために必要不可欠である。近年では、障がいを抱える子どもをもつ保護者や母親の社会進出、単身の家庭など、保護者の置かれる環境は多様化している。そのため、子どもの保育のみならず、保護者支援の観点から保護者対応を求められており、より質の高いコミュニケーションが望まれている。このようなニーズの中で、保護者とのコミュニケーションに不安や悩みを抱える保育士も多く、それはストレスにつながりやすいことも報告されている（日向野・藤後・山極・角山, 印刷中)。

本研究では、保育士の保護者に対するコミュニケーション（以下、対保護者コミュニケーション）を取り上げ、全般的なコミュニケーションの基礎となる社会的スキル、職位、在職年数との関連について検討する。また、保護者の就労状況や子育て観、教育観等が大きく異なる保育園と幼稚園とでは、対保護者コミュニケーションが異なるとも考えられる。そこで、保育士と幼稚園教諭を対象に対保護者コミュニケーションについて比較検討していく。

【方法】

1)調査時期：2016年3月4日間程度。

2)調査方法：WEB調査（楽天リサーチ）による自己回答

3)対象者：保育士資格をもつ現職保育士（女性）146人（平均39.55歳, *SD*=10.58)、現職幼稚園教諭（女性）80名（平均35.31歳, *SD*=9.65)。

4)調査項目：園の形態、勤務年数、職位、園の規模、人数（園児・職員)。対保護者コミュニケーション（保育士数名にヒアリング後、独自作成）43項目（あてはまる5点～あてはまらない1点の5件法)、社会的スキル尺度(ENDE2, 堀毛, 1994)の改訂版（小川・磯, 2008）15項目（よくできる5点～全くできない1点の5件法）を使用した。

本研究では分析対象外としたが、苦手または関わりやすい保護者への報告場面における苦手意識（対人苦手意識尺度, 日向野・小口, 2002)、ストレス（PHRFストレスチェックリスト・ショートフォーム：今津他, 2006)、職場ハラスメント（職場の迫害尺度：田中, 2008を一部修正・追加）も尋ねた（各5件法)。

5)倫理的配慮：開始前に、①匿名性の保証、②データの統計的処理、③データの研究利用と発表、④回答の任意性と中断終了の権利について説明し、了解した者のみ調査に協力した。

【結果】

1)対保護者コミュニケーション尺度の因子分析結果　保育士と幼稚園教諭のデータを統合し、対保護者コミュニケーション43項目について因子分析を行った（最尤法,プロマックス回転)。共通性の低かった項目および複数の因子に負荷した項目を除きながら因子分析を数回行ったところ、2因子が得られた。第1因子は、「子どものよいところを伝える」、「保育中に落ち度があった場合は謝罪する」、「子どもの問題について話すとき、保護者を責めるような話の進め方をしない」等21項目が負荷したことから、「報告・支援型コミュニケーション」（α=.97）と名付けた。第2因子は、「外国籍の子を持つ保護者や外国籍の保護者との関わりでは、お互いの意思疎通ができているか確認しながら会話を行う」、「保護者からクレームを受けた場合、改善できる点と改善できない（または現状維持）点とを明確に伝える」等15項目が負荷したことから、「慎重・配慮型コミュニケーション」（α=.94）と名付けた。両因子の因子間相関は.80であった。

2)社会的スキル尺度の因子分析結果　社会的スキル尺度について因子分析（最尤法、バリマックス回転）を行った結果、従来（堀毛,1994；小川・磯,2008）と同様に、統制（α=.86)、解読（α=.88)、記号化（α=.84）の3因子が得られた。

3)保育士と幼稚園教諭における対保護者コミュニケーションの比較　対保護者コミュニケーションと社会的スキルの下位因子について、項目平均得点を算出した。これらの得点について、保育士と幼稚園教諭で差があるか*t*検定を行った。その結果、報告・支援型コミュニケーションは、保育士（*M*=4.38,*SD*=.52）の方が幼稚園教諭（*M*=4.08,*SD*=.94）よりも有意に高かった（$t_{(106.13)}$=2.60, p<.05)。

4)対保護者コミュニケーションと社会的スキルとの関連　対保護者コミュニケーションにおける報告・支援型または慎重・配慮型コミュニケーションの得点が平均項目得点から-2*SD*離れている対象者11名を除外した上で、対保護者コミュニケーションと社会的スキルの下位因子について相関係数を求めた。いずれも有意な正の相関がみられた（Table1)。

Table1
対保護者コミュニケーションと社会的スキルとの相関

社会的スキル	対保護者コミュニケーション 報告・支援型	慎重・配慮型
統制	.31***	.38***
解読	.32***	.45***
記号化	.29***	.34***

*** p<.001

5)対保護者コミュニケーションと在職年数,職位,年齢との関連　在職年数、職位、年齢と対保護者コミュニケーションが関わるか相関係数を求めたところ、職位が低いほど報告・支援型コミュニケーション（ρ=-.15, p<.05)、慎重・配慮型コミュニケーション（ρ=-.26, p<.001）が低かった。また、年齢と慎重・配慮型コミュニケーション間に有意な正の相関（r=.15, p<.05）がみられたが、在職年数と対保護者コミュニケーション間に相関はみられなかった。

【考察】

報告・支援型コミュニケーションは、保育中に子どもと接する時間の長い保育士の方が幼稚園教諭よりも高かった。また、園にかかわらず、園長や主任より担任など職位の低い保育士および幼稚園教諭ほど対保護者コミュニケーションが高かったことから、保護者と関わる機会の多い者ほど保護者との良好なコミュニケーションを心がけていると考えられる。

【主要引用文献】

日向野智子・藤後悦子・山極和佳・角山剛　(印刷中). 保育士の保護者に対する苦手意識がストレスに及ぼす影響 日本社会心理学会第57回大会発表論文集.

(ひゅうがのともこ・やまぎわわか・とうごえつこ・かくやまたかし)

新規学卒就職者の組織社会化に対する企業研修の効果

― 3時点時系列データを用いた検討 ―

竹内　倫和
（学習院大学経済学部）

キーワード：組織社会化，新入社員研修，研修効果，縦断的研究

【研究の目的】

新規学卒就職者（以下、新規学卒者）は、キャリア発達上、入社後に組織社会化を果たすことが求められている（Schein, 1978）。組織社会化とは、「新規参入者が組織の外部者から内部者へと移行していく過程」（Bauer et al., 2007）と定義づけられる概念である。組織社会化の結果として、新規学卒者は円滑な組織適応が可能になると同時に、企業としては新規学卒者の離転職を抑制し、早期の戦力化を図ることが可能になる。

このような重要性から、組織社会化研究では新規学卒者の組織適応を促進する要因の検討が多く行われてきた（Ashforth et al., 2007b; Lu & Tjosvold, 2013; Takeuchi et al., 2016）。とりわけ、企業施策などの「組織要因」が新規学卒者の組織適応にいかなる影響を及ぼすのかの検討が精力的に行われてきた（Saks et al., 2007; Takeuchi & Takeuchi, 2009）。具体的には、「組織社会化戦術」といわれる新規学卒者の組織社会化を促進するための企業施策に着目し、組織社会化戦術を制度的に行っている企業の方が、そうでない企業に比べて新規学卒者の組織適応が促進されることを明らかにしている（Bauer et al., 2007）。

しかしその一方で、新規学卒者の組織社会化を促進する組織要因の中で、具体的に企業で実施されている「導入研修」が新規学卒者の組織適応にいかなる影響を及ぼしているのかについては、検討の必要性が指摘されながらも（Andersen et al., 1996; Klein & Weaver, 2000）、これまで必ずしも十分な研究蓄積がなされていないという研究上の課題を指摘することができる。つまり、導入研修は多くの日本企業において、新入社員研修といった名称で広く行われているにもかかわらず、その効果については十分な検証が行われておらず、研修効果の解明は研究面及び実践面双方にとって重要な課題といえる。なお、導入研修は広義には新入社員に対する職場での上司や同僚からのインフォーマルな指導もその一部に含まれると解釈されることもあるが（Klein & Weaver, 2000）、本研究では組織レベルでフォーマルに実施される新入社員研修に限定して議論をしていく。

上記の課題を踏まえ、本研究では新規学卒者の組織社会化に対する新入社員研修の効果を明らかにするための図1の分析枠組みを設定した。具体的には、(1) 新入社員研修を受けることによって、新規学卒者が組織社会化過程で獲得すべき知識や態度を意味する「組織社会化学習内容」が高まり（仮説1）、(2) 新入社員研修により高められた「組織社会化学習内容」によって、研修終了10ヶ月後の組織社会化結果指標である「組織との社会的交換関係」、「職務満足」、「変革志向行動」が高まる（仮説2a~2c）ことが仮説化された。

そこで、本研究では新規学卒者に対して実施した3時点の縦断調査に基づき、上記分析枠組みの実証的検討を行うことを目的とする。

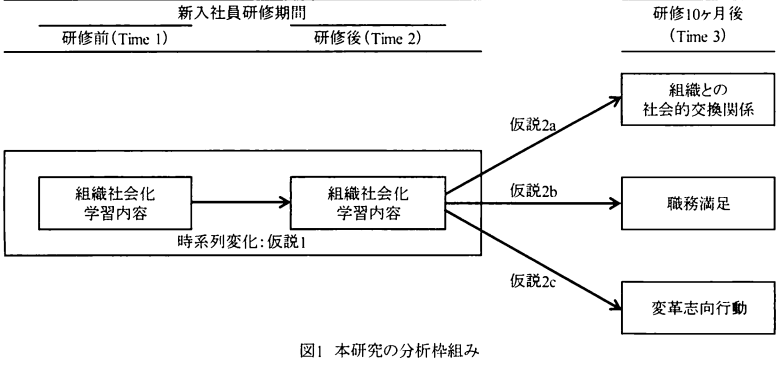


図1　本研究の分析枠組み

【方法】

(1) 調査対象・時期

本研究は、製造業A企業グループの新卒採用者（正規従業員）115名を対象に、分析枠組みに基づく3回の縦断的調査を実施した。なお、調査協力は回答者の自由意思であることが説明されると同時に、個人回答の企業への秘匿性への配慮が行なわれた。1回目調査（Time 1、以下T1）は、新入社員研修開始直前に集合一括調査を実施し、全数（115部）から有効回答を得た。2回目調査（Time 2、以下T2）は、新入社員研修（約2週間）終了後に、T1調査対象者に集合一括調査を実施し、115部を回収した。3回目調査（Time 3、以下T3）は、T2調査の10ヶ月後に同様の対象者に集合一括調査が行われた。その結果、115部を回収することができたが、マッチング等ができないサンプルを除いた113部を本研究の最終的な分析対象とした。

(2) 測定尺度

組織社会化学習内容（T1・T2）　Chao et al.（1994）を参考にした23項目を用いた。組織社会化学習内容は、6つの下位次元（「歴史」、「言語」、「人間」、「政治」、「組織目標・価値観」、「熟達」）が設定されており、確認的因子分析の結果、この下位次元モデルがデータと高い適合性を持っていることが確認された（T2データ：IFI＝.94; CFI＝.94; RMSEA＝.06）。また、各下位次元のα係数は、全て.70以上であることが示された。　**組織との社会的交換関係（T3）**　Shore et al.（2006）を参考にした8項目を用いた（α＝.80）。　**職務満足（T3）**　Cammann et al.（1979）を参考にした2項目を使用した（α＝.81）。　**変革志向行動（T3）**　Welbourne et al.（1998）を参考にした4項目を用いた（α＝.84）。　**統制変数（T1）**　年齢と性別を設定した。

【結果と考察】

第1に、新入社員研修の効果に関する仮説1を検証するため、新規学卒者の組織社会化学習内容の研修前後での *t* 検定を行った。その結果、組織社会化学習内容の全次元において、研修前よりも研修後の方が平均値が有意に高まっていることが示された。この結果は、新入社員研修によって新規学卒者が組織社会化過程で獲得すべき知識や態度が高まることを示すものであり、仮説1は支持された。

第2に、研修終了10ヶ月後の新規学卒者の社会化結果指標に対する研修後の組織社会化学習内容の影響（仮説2）を検証するため、階層的重回帰分析を行った。その結果、組織との社会的交換関係に対して、「人間」と「組織目標・価値観」が有意な正の影響を及ぼしていることが示された。また、職務満足に対して、「組織目標・価値観」のみが有意な正の影響を与えていることが明らかになった。最後に、変革志向行動に対して、「人間」と「熟達」が有意な正の影響を及ぼしていることが明らかになった。これらの結果から、研修後の組織社会化学習内容の「人間」、「組織目標・価値観」、「熟達」次元がその後の組織社会化結果に効果的な影響を及ぼすことが示され、仮説2は部分的に支持された。

上記の一連の結果は、新入社員研修によって新規学卒者が組織社会化段階で獲得すべき知識や態度である組織社会化学習内容が高められ、その中のいくつかの次元は、その後の組織社会化結果指標を有意に高めることを示すものである。このことは、既存の組織社会化研究で導入研修の効果が十分に明らかになっていない中、その有効性を明示したという意味において、既存研究及び実践面への貢献を示すものといえる。　（たけうち　ともかず）

企業のワーク・ライフ・バランス施策が従業員の離職抑制をもたらす心理的メカニズム

○鄭　有希[1)]　竹内　規彦[2)]
([1)] 学習院大学国際社会科学部　[2)] 早稲田大学大学院経営管理研究科)

キーワード：ワーク・ライフ・バランス（WLB）施策，組織プレステージ知覚，ニーズ－供給適合知覚，離職

【研究の目的】　本研究では、産業・組織心理学の観点から、ワーク・ライフ・バランス施策（work-life balance、以下 WLB：例えば、育児・介護休暇、フレックス・タイム制度など）の離職抑制効果（Bloom et al., 2011）とその心理的メカニズムの検証に焦点を合わせる。具体的には、以下の２点を研究の目的とする。

第１の目的は、企業レベルでの WLB 施策（実施度）と離職率との関係に関する検証である。すなわち、そもそも WLB 施策の実施が離職抑制の役割を果たすとする定説（Beauregard & Henry, 2009）を企業のアーカイブデータ及び調査データ（調査 I）より検証する。

第２の目的は、従業員個人レベルでの WLB 施策（利用可能性及び利用度）に対する知覚が彼・彼女らの離転職意思の低下をもたらす媒介効果の検証である。既存文献のレビューから、本研究では３つの媒介仮説を設定する。

具体的には、(1) 従業員が自社の WLB 施策の存在を組織の威信や名声として知覚することにより離職抑制につながるとする「組織プレステージ媒介仮説」（organizational-prestige-as-a-mediator-hypothesis）、(2) WLB 施策が共働き及び扶養家族をもつ従業員のニーズとフィットすることにより離職抑制を導くとする「ニーズ－供給適合媒介仮説」(needs-supplies-fit-as-a-mediator-hypothesis)、及び (3) WLB 施策が本来の機能を果たし、仕事と家庭のコンフリクト（work-family conflict: WFC）を低下させることで離職抑制をもたらすとする「WFC 低減媒介仮説」（WFC-reduction-as-a-mediator-hypothesis）を提起する。なお、(1) はシグナリング理論及び社会的同一性理論から、(2) は個人－環境適合、とりわけニーズ－供給適合理論から、また (3) は資源維持理論から仮説が導出された。以上、第２の研究目的における３つの媒介仮説は、個人レベルでの縦断的調査データ（調査 II）により検証される。

【調査 I 方法】　日経テレコン 21 より、従業者数 100 名以上の非製造企業 1,000 社がランダムに抽出され、アンケート調査が実施された。質問紙は対象企業の人事担当者宛に郵送し、回答を依頼した。その結果、164 部（有効回収率：16.4%）の回答が得られ分析に使用された。なお、回答―非回答企業の間に主要な属性間で有意な差は確認されなかった。測定尺度は以下の通りである。WLB 施策の実施度（implementation）は、Perry-Smith and Blum（2000）が作成した８項目（育児・介護支援、柔軟な働き方支援などの諸施策）について管理職・非管理職別の実施状況（100 分率）を尋ね、人数比を考慮した重み付け平均スコアを算出し分析に使用した（α＝.72）。離職率は、過去１年間における平均離職率を 100 分率で回答を求め素点を分析に用いた。コントロール変数は、アーカイブデータより組織年齢、企業規模、女性社員比率、及び業種を用いた。

【調査 I 結果】　離職率を従属変数とし、コントロール変数を独立変数の第１ステップで統制後、WLB 施策実施度を第２ステップに投入する階層的重回帰分析を行った。その結果、WLB 施策の実施度は離職率に有意な負の関係を持つことが確認された（β = -.16, p <.05）。よって、前提条件となる企業レベルでの WLB 施策実施度と離職率の負の関係は支持された。

【調査 II 方法】　非製造企業（100 名以上規模）の正規従業員を対象に３回の縦断的質問紙調査（T1、T2、T3 調査）が実施された。各調査は３ヶ月のタイムラグを挟んで実施され、それぞれ 2,342 名（T1）、1,207 名（T2：回収率：51.5%）、900 名（T3：回収率：74.6%）から調査票を回収した。なお、調査期間内に退職した 46 名は分析対象から除外した。Anderson et al.（2002）に従い、(1) 18 歳以下の子供がいる、(2) 共働きの夫婦である、(3) 65 以上の扶養家族がいる、のいずれかに該当する回答者（n＝568）を分析対象とした。

測定尺度は以下の通りである。WLB 施策の利用可能性（availability）及び利用度（utilization）は、調査 I 同様 Perry-Smith and Blum（2000）の８項目を用いて測定された（利用可能性（T1）：α＝.72；利用度（T1）：α＝.81）。組織プレステージ知覚（T2）は、Mael and Ashforth（1992）の６項目により測定された（α＝.91）。ニーズ－供給適合知覚（T2）は、Cable and DeRue（2002）の３項目を用いた（α＝.93）。WFC 知覚（T2）は、Netemeyer et al.（1996）の５項目により測定された（α＝.93）。離転職意思（T3）は、Cammann et al.（1983）の３項目により測定された（α＝.90）。コントロール変数には、性別、年齢、勤続年数、職種、職位、企業規模を含めた。

【調査 II 結果】　Preacher and Hayes（2008）による多重媒介モデルの検証方法をもとに、接続有意性及びブートストラップ法（resample size = 5,000）による間接効果のテストが行われた。個別の係数の推定結果は Fig. 1 の通りである。組織プレステージ媒介仮説は、WLB 施策の利用可能性及び利用度双方で支持された（それぞれ、M=-.02, LLCI=-.04, ULCI=-.01 及び M=-.06, LLCI=-.10, ULCI=-.03）。また、ニーズ－供給適合媒介仮説は、利用度と離転職意思との関係においてのみ支持された（M=-.02, LLCI=-.04, ULCI=-.01）。しかしながら、WFC の WLB 施策（利用可能性・利用度）と離転職意思を繋ぐ間接効果は確認されず、WFC 低減媒介仮説は棄却された。

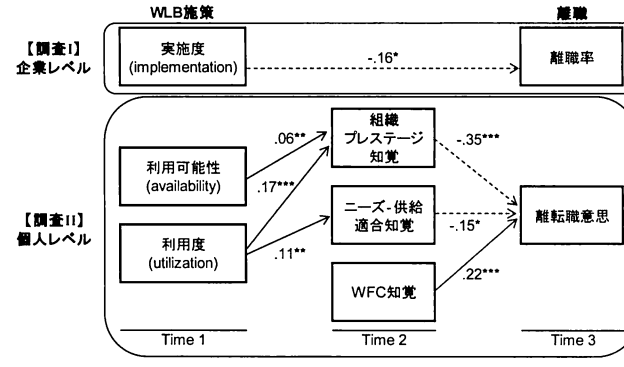


Fig. 1. 本研究における分析結果（個別の係数の推定値）[a]

a. 値は標準化偏回帰係数（β）で、表中は統計的に有意な係数のみを表示。*p < .05, **p < .01, ***p < .001.

【考察】　本研究の第１の貢献は、WLB 施策の離職抑制効果の検証を企業・個人の両レベルから行い、実施度と離職率及び利用可能性・利用度と離転職意思の関係がいずれも負（抑制作用）であることを確認した点である。特に同一国、同一産業にサンプルを統制し企業及び個人で一貫した効果が観察された意義は小さくない。

第２の貢献は、個人レベルにおける WLB 施策の離職（意思）抑制効果が、仕事と家庭のコンフリクト低下によるものではなく、実施企業をプレステージャスと認知することからもたらされている可能性が示唆された点である。この結果はシグナリング理論・社会的同一性理論の考えを支持している。すなわち、企業の社会的責任の一部である WLB 施策実施のシグナリング効果（Turban & Greening, 1997）により、施策の充実が従業員の組織に対する威信知覚と付随する所属組織へのアイデンティフィケーションを高め、その結果離転職意思を低下させるものと推察される。(引用文献一覧は当日配布致します。)　（ちょん ゆひ・たけうち のりひこ）

TPI(東大版総合人格目録)の2高点尺度についてII

—判断レベル2での高得点尺度の組み合わせ—

外島　裕（日本大学商学部）

キーワード：ＴＰＩ、2高点尺度、判断レベル2高得点尺度

【研究の目的】

ＴＰＩ（東大版総合人格目録）はMMＰＩの研究に基づいて、肥田野（1964）らによって日本で作成、標準化された心理検査である。MMPIにおいては2高点尺度等の組み合わせによりコード化して、臨床解釈の参考としている。本報告では、ＴＰＩの2高点尺度の3段階の分類により、特に得点の高い群についてどのようなパターンが多いのかを把握する。

【方法】

1）調査対象者：

Ｎ社①：2295名（男性）。424名（女性）。（社会人）
Ｎ社②：1971名（男性）。441名（女性）。（社会人）
Ｄ社　：1498名（男性）。415名（女性）。（社会人）
Ｔ社　：2886名（男性）。149名（女性）。（社会人）
Ｔ大学：2875名（男性）。772名（女性）。（文系大学生）
Ｊ大学：270名（男性）。151名（女性）。（大学生スポーツ）

2）実施時期：

Ｎ社では毎年、自己啓発に基づく影響力向上のために全社員を対象にＴＰＩを実施している。Ｎ社①2000年および②2015年、他は、Ｄ社・Ｔ社・Ｔ大・Ｊ大のデータによる。

また、全て、能力開発、自己理解のために、結果については回答者本人に直接提供し、説明の機会を準備している。

3）整理の方法：

基本尺度（1～9）において標準得点の高い順に2尺度をとり、その尺度を示す数字を並べて示す2けたコード法を用いた。本報告では有効性尺度は含めていない。臨床的に、正常と異常を識別する1つの規準として、以下の視点（神田・平田，1968）があり、この分類のｉ）に基づき検討した。

ｉ）判定レベル2：標準得点の高い方から2尺度を取った時、いずれも60点以上であり、かつそのうち少なくとも1尺度が70点以上であるものを異常と考える。

ii）判定レベル1：2尺度が60点から69点の間にあるものについては異常を疑われるものとする。

iii）判定レベル0：2尺度がいずれも59点以下か、または1尺度のみが60点以上であるものを正常と考える。

なお、標準得点60点以上、さらに70点以上は、心理的傾向にある程度の強い特徴が推察できるが、全てを臨床的に異常と想定することは、かなり慎重でなければならない。

【結果および考察】

1）判定レベル2の人数について。

各組織での判定レベル2となる人数はつぎのようとなる。各組織とも、（男性）、（女性）、（全体人数での％）である。

Ｎ社①：314名（13.68）。58名（13.68）。
Ｎ社②：452名（22.93）。107名（24.26）。
Ｄ社　：157名（10.48）。45名（10.84）。
Ｔ社　：355名（12.30）。12名（8.05）
Ｔ大学：517名（17.98）。89名（11.53）
Ｊ大学：74名（27.41）。44名（29.14）

各組織とも全体人数での割合は10%強程度である。しかし、Ｎ社①と②とでは、男性で9.25%、女性で11.58%増加している。2000年と2015年とでは、心的な緊張が高まっている可能性がある。また、Ｊ大学では男性、女性とも30%弱の割合である。

2）判断レベル2における2高点尺度のパターン。

基本尺度1から9の、得点が1番高い尺度を1位、2番目に高い尺度を2位とし、その各パターン別に人数と、各組織判定2の人数との比率を示す。（表1に示す）。

（男性）Ｎ社（2000）では、5－6、6－5、1－4、1－2等であり、Ｎ社（2015）では、5－6、1－2、6－5、1－4等となっている。5－6では、自己の考えは持ってはいるが周囲との意思疎通が固くなりがちで、わずかだが増加している。なお、2000年の2－1が、2015年では5－9となってきており、考えを外に押し出す人数が増えたのであろうか。Ｄ社では、4－1、9－5、等である。9－5では、自分の考えを活発に打ち出していく。Ｔ社では、1－4、4－1、等であり、仕事を丁寧におこない、ミスなど気にする姿勢といえる。Ｔ大では、4－1、4－2、2－4、等であり、やや神経質な気持ちであろう。Ｊ大では、5－6、5－7、6－5、等であり、自己の強気の気持ちを支えとしている。組織によって、判断レベル2での2高点尺度の割合が異なると思われる。女性についても検討する。

表1．判定レベル2の上位2尺度の割合（TOP5）

	男性				女性			
	1位	2位	人数	割合(%)	1位	2位	人数	割合(%)
2000 Ｎ社	5	6	37	11.78	1	2	5	8.62
	6	5	28	8.92	5	6	4	6.90
	1	4	25	7.96	6	5	4	6.90
	1	2	20	6.37	9	5	3	5.17
	2	1	19	6.05	7	5	3	5.17
2015 Ｎ社	5	6	69	15.27	5	6	14	13.08
	1	2	38	8.41	5	7	7	6.54
	6	5	37	8.19	4	1	6	5.61
	1	4	32	7.08	7	4	6	5.61
	5	9	17	3.76	7	3	5	4.67
Ｄ社	4	1	16	10.19	5	6	7	15.56
	9	5	15	9.55	5	9	4	8.89
	5	6	13	8.28	4	3	3	6.67
	2	3	10	6.37	5	3	3	6.67
	9	7	9	5.73	9	4	3	6.67
Ｔ社	1	4	36	10.14	5	6	3	25.00
	4	1	31	8.73	4	2	2	16.67
	2	1	21	5.92	9	5	1	8.33
	5	6	20	5.63	6	5	1	8.33
	1	2	19	5.35	4	3	1	8.33
Ｔ大	4	1	35	6.77	4	1	6	6.74
	4	2	27	5.22	4	3	5	5.62
	2	4	23	4.45	8	4	5	5.62
	3	8	23	4.45	3	4	4	4.49
	3	6	21	4.06	4	6	4	4.49
Ｊ大	5	6	11	14.86	4	1	7	15.91
	5	7	6	8.11	5	6	7	15.91
	6	5	4	5.41	5	3	3	6.82
	5	3	3	4.05	4	5	3	6.82
	9	6	3	4.05	9	4	2	4.55

【参考文献】

・TPI研究会（発行年未記載）『TPI実施手引』東大出版会.
・神田順治・平田久雄(1968)「TPIによるプロ野球選手の性格についての研究（第4報）」『体育学研究』Ⅶ－5.p.108.

（としま ゆたか）

学校組織レベルのエンパワーメントを構成する要素の検討

○池田 琴恵[1] 池田 満[2]
([1]東京福祉大学短期大学部 [2]南山大学)
キーワード:エンパワーメント, 学校, 組織

【研究の目的】

エンパワーメントとは,「個人の人生や組織の機能, コミュニティの生活の質に影響を与えるような決定において, 統制や影響力を発揮するための取り組みの過程や結果(Zimmerman, 2000)」と定義される。この定義に基づきZimmerman(2000)は, エンパワーメントの過程は①個人だけでなく, 組織やコミュニティレベルでも生じることや, ②エンパワーする過程(empowering)とエンパワーした状態(empowered)を区別することの必要性を述べている。しかし, 特に組織レベルのエンパワーメントについては, 組織をエンパワーする手法やエンパワーされていく過程, 組織エンパワーメントが組織の成員(のエンパワーメント)に及ぼす影響, いずれの観点でも十分な研究は行われていない。

組織レベルのエンパワーメントについてZimmerman(2000)は, (1)組織の成員が自身の生活に対して統制感を得る機会を提供している組織がエンパワーする組織(empowering organization)であり, (2)組織開発が順調に進み, 施策に影響を与えることができたり, 多様なサービス提供が可能となっている組織がエンパワーされた組織(empowered organization)であると述べている。つまり組織レベルのエンパワーメントは, 組織成員のエンパワーメントを促す方向性と, 組織自体がその活動において主体的かつ能動的に活動する方向性の2つをもっていると考えられる。しかしこれらの方向性が具体的にどのような変数で構成されているかについて実証的に検討はされてない。

そこで本研究では, 学校での組織変革の事例に基づき, 組織レベルのエンパワーメントを構成する要素を抽出することを目的とする。

【方法】

はじめに, エンパワーメントに関する文献レビューを行い, 特に組織レベルのエンパワーメントの定義や, 特徴づける構成概念を整理した。次に12名の小学校長へのインタビュー, さらに小学校5校で行った組織変革実践に関するフィールドノートを分析し, エンパワーメントの概念に合致すると思われる記述, 内容を抽出した。抽出された内容をもとに, 構成要素およびカテゴリを生成した。

【結果】

先行研究のレビューから, 組織レベルのエンパワーメントの構成概念には, 大きく, エンパワーする組織とエンパワーした組織という2つの方向性があることが示された。この2つの方向性を基礎として, 学校組織レベルのエンパワーメントの構成概念をTable 1に示した。

まずエンパワーする組織の構成概念として, 目標構造, 目標志向で意義のある役割, 責任・決定権の公正な配置と明確化, オープンな情報共有のための構造, 意思決定への参加のための構造, 職業能力向上の機会など①組織構造やシステムに関わる要素が抽出された。また②組織内の関係性に関わる要素として, リーダーシップを共有する組織運営方針, 自由な発言が可能な風土, 管理職による正当な評価・承認, さらに管理職・同僚間の信頼関係が抽出された。

次にエンパワーした組織の構成概念として, ③対外的な要素である積極的な情報公開, 外部・関係者との連携, 外部資源へのアクセス, ④組織の内向的な要素である教育活動の主体的な改善, 新たな実践への挑戦, 積極的な教職員間の情報共有や話し合いが抽出された。

Table 1 学校組織レベルのエンパワーメントの構成要素

カテゴリ	構成要素
エンパワーする組織	
①組織構造	目標志向で意義のある役割
	責任・決定権の公正な配置と明確化
	オープンな情報共有のための構造
	意思決定への参加のための構造
	職業能力向上の機会
②組織内の関係	リーダーシップを共有する組織運営方針
	自由な発言が可能な風土
	管理職による正当な評価・承認
	管理職・同僚間の信頼関係
エンパワーした組織	
③対外的な要素	積極的な情報公開
	外部・関係者との連携
	外部資源へのアクセス
④内向的な要素	教育活動の成果向上
	新たな実践への挑戦
	積極的な教職員間の情報共有や話し合い

【考察】

従来は, 組織に対する個人の認知の総体として捉えることが多かった。すなわち組織内の個人がエンパワーされていることからその組織がエンパワーする組織であると捉えたり, エンパワーされた個人の行動の集合を, エンパワーされた組織としての行動と理解するという捉え方がされていた。

しかし本研究では, 個人がどのように組織を認識しているかという要素だけではなく, 組織の構造やシステム自体をエンパワーする組織の構成要素として捉えることが可能であることが示唆された。またエンパワーした組織については, 対外的な要素と内向的な要素という2つの側面が見出され, 個人の行動の集合ではなく組織としての外的, 内的取り組みの有無から, エンパワーされた組織であるかを判別できることも明らかとなった。

今後は本研究で質的データから構成された概念および項目を用いて量的調査を実施し, 構成概念の妥当性を検証していく必要があるだろう。

【引用文献】

Zimmerman, M. A. (2000). Empowerment theory: Psychological, organizational and community level of analysis. In J. Rappaport & E. Seidman (Eds.) *Handbook of community psychology*. New York: Kluwer Academic/Plenum.

謝辞 本研究はJSPS科研費 15K17280「学校組織と教員のエンパワーメント過程および状態モデルの生成」の助成を受けたものです。

(いけだ ことえ・いけだ みつる)

看護師の情動知能尺度の信頼性と妥当性

○中島　正世[1)]　杉山　崇[1,2)]
([1)]神奈川大学大学院人間科学研究科　[2)]神奈川大学)
キーワード：看護師，情動知能，看護実践

【研究の目的】 看護は感情労働であり，ストレスの多い職業である（Smith:武井訳，2000)。その感情労働のストレスを緩衝するのが情動知能と報告されている(Karimi et al,2014)。

情動知能とは情動の意味および複数の情動の間の関係を認識する能力，ならびにこれらの認識に基づいて思考し，問題を解決する能力と定義されている(Mayer et al,1999)。次に，看護の質を維持しながら，看護師のストレスの緩和を図る方法として，情動知能の強化を図りたいと考えた。しかし，情動知能尺度は，看護師独自のものが見当たらない。そこで，看護師の情動知能を育成・評価するための尺度を作成し，その信頼性と妥当性を検証することを目的とした。

【方法】

広域関東圏の200床以上の一般病院から,各県約10施設を無作為に抽出し，一施設上限20人迄で，29施設に勤務する看護師477名を対象に，2015年12月～2016年2月，自記式質問紙法を行った。調査内容は①基本的属性（年齢，性別など)，②自作の看護師の情動知能尺度（以下 NsEIS と略）46項目：自己領域（感情理解・感情コントロール・感情表現)，患者領域（傾聴・共感・感情表現支援)，チーム領域（状況把握・共有・チームの方向性支援）の3領域を“1：全くない”～“5：いつもそうである”の5段階評定で回答を求めた。③日本語版 Wong and Law Emotional Intelligence Scale(以下 JWLEIS と略）16項目（豊田・山本，2011)：自己の情動評価，他者の情動評価，情動の利用,情動の調節という下位尺度からなり“1：まったく当てはまらない”から“7：非常にあてはまる”までの7段階評定で回答を求める。分析方法は，基本統計および探索的因子分析で分析を行い，さらに，信頼性分析と併存的妥当性分析を行った。データの解析には統計ソフト SPSS(version24.0)を用いた。

手続き：調査は施設長へ郵送にて依頼文書，調査用紙を郵送後，了解の得られた場合に調査対象者への調査用紙及び個別返信用封筒の配布を依頼した。さらに,調査用紙は回答後，調査対象者が厳封し研究者宛へ投函するように依頼した。

倫理的配慮：本研究は神奈川大学の人を対象とする研究に関する倫理審査会の承認を得て，施設長および対象者への研究の主旨，参加および中途辞退の自由，プライバシーの保護について文書で説明し実施した。さらに研究協力の質問紙の回答をもって同意とみなした。

【結果】

調査票回収数186名(38.99%)で,対象者の年齢構成は，多い順に30-39歳59名(31.7%)，40-49歳53名(28.5%)，20-29歳42名(22.6%)，50歳以上31名(16.7%)であった。

看護師の情動知能の因子構造

NsEISは,探索的因子分析にて最終的に因子負荷量.40以上を基準に11項目削除し，35項目を累積寄与率50%以上の5因子を主因子法，バリマックス回転にて因子分析を行った。その結果は，第1因子「私は患者の意思を大事にしている（.70)」，「私は患者の欲求が満たされるように実践している（.59)」，「私は、患者の感情や思考に沿って,相手の話に耳を傾けるようにしている（.58)」，「私は患者の立場で考えるように心がけている（.56）。」，「私は患者に感じたことを問いかけて確認している（.53）。」などの8項目で,【患者への傾聴と自己の情動理解と表現】と命名した。次に第2因子は「私はチームの中で自分の力を発揮している(.73)」,「私は自分の気持ちを表す言葉を簡単に探せる(.64)。」,「私はチームメンバーの個別の仕事のパターンを知っている(.59)。」などの7項目で【フォロワーシップ】と命名した。また，第3因子は「私は患者と一緒に悲しむことができる(.63)。」,「私は患者の傍らにいて時間と空間を共有する時間をとっている(.58)。」他3項目の8項目で【患者やチームとの共感】と命名した。さらに，第4因子は「私はチームメンバーとの関係性を大事にしている(.75)。」,「私はチームメンバーの意思を大事にしている(.73)。」,「私は他のメンバーから、良く話しかけられる(.64)。」などの6項目で【チームでの協働】と命名した。最後に第5因子は「私は患者の表情や仕草から患者の思いを読み取れる方だ(.65)。」,「私は患者のいつもと違う表情や言動を感じとれる(.61)。」,「私は患者の雰囲気の変化に気づく(.57)。」などの6項目で【患者の情動の察知能力】と命名した。各因子の *Cronbach* の α 信頼係数は，.85～.89と高い値であった。さらに，因子間の相関は，*Pearson* 相関係数.49～.72であった(Table1参照)。

Table. 1. NsEIS 及び JWLEIS の下位尺度間との関係（r）N=186

	NsEISの下位尺度				
	患者への傾聴と自己の情動理解と表現	フォロワーシップ	患者やチームとの共感	チームでの協働	患者の情動の察知能力
NsEISの下位尺度					
フォロワーシップ	.54				
患者やチームとの共感	.65	.58			
チームでの協働	.49	.64	.58		
患者の情動の察知能力	.65	.64	.72	.55	
JWLEISの下位尺度					
自己の情動評価	.50	.46	.40	.36	.36
他者の情動評価	.46	.49	.53	.49	.63
情動の利用	.36	.50	.43	.29	.41
情動の調節	.33	.41	.34	.35	.23

尺度間の相関関係

NsEISとJWLEISの相関は，Table1に示した結果はそれぞれの下位項目においてすべて1％水準で有意であり，.23～.63の低い相関からかなり強い相関をしめした。

【考察】 NsEIS の信頼性は，因子負荷量も十分で，α 信頼係数がどの因子も.85 以上と内的整合性をみとめ信頼性の高いことが示された。また，尺度間の相関係数が.49以上と高く，尺度の下位因子の信頼性が明らかになった。次にNsEIS併存的妥当性は，信頼性・妥当性が認められているWLEISの下位因子との相関が認められ，NsEIS の情動知能測定尺度としての妥当性を持つ尺度といえる。

【引用文献】

Karimi,L. et al.2014 Emotional rescue:the role of emotional intelligence and emotional labour on well-being and job-stress among community nurses Journal of Advanced Nursing 70(1)
Pam Smith(武井麻子監訳) 2000 感情労働としての看護 The emotional labour of nursing　ゆみる出版
豊田弘司・山本晃輔 2011 日本版 WLEIS の作成　奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要　20号

（なかじま　まさよ・すぎやま　たかし）

医療観察法病棟における他害及び自傷の要因に関する研究

○石川　真[1)]　山本勝則[2)]
([1)]独立行政法人国立病院機構花巻病院　[2)]札幌市立大学看護学部看護学科)
キーワード：医療観察法，他害行為，自傷行為

Ⅰ．研究の目的

医療観察法の精神医療は、対象者の社会復帰の条件として、他害行為の再発予防を重視している。他害行為の再発予防の為には、再発リスクを適切にアセスメントし、リスクに応じた支援体制を構築していく必要がある。その為に欧米圏においては他害行為に関する研究調査が多数行われ、司法精神科医療の向上に寄与している。一方我が国では他害行為のリスクアセスメントに関する研究は十分に進んでいるとは言えない。

2005年～2015年までの10年間について精神科領域の他害行為の研究に関する文献検討を行ったその結果、一般精神科領域では他害が虐待と関連がある事を示唆した研究が存在した[1)]。しかし司法精神医療領域の研究では他害と虐待との関係を調査した研究は見られない。そこで他害及び自傷行為と虐待との関連を明らかにする事を目的とする研究を行った。

Ⅱ．　研　究　方　法

1．研究デザイン

本研究は診療録および通院処遇中の精神保健観察から得られた情報を後方視的に調査する、非対照、観察研究（予後調査の一部については前向きコホート研究）である。調査資料は診療支援システム（電子カルテ）内の情報と予後調査データを利用した。

2．研究対象者

平成27年1月15日までに退院し、通院処遇に移行した対象者の117名を調査の対象とした。対象者には退院の前に文書と口頭で研究に関するインフォームドコンセントを行い、同意が得られたもののみを研究の対象とした。

3.研究方法

1）調査方法

自傷行為（以下、自傷）と他害行為（以下、他害）について、5つの時期別（①発症前、②発症後から対象行為まで③拘留・鑑定中④入院中⑤退院後の通院中）の発生件数を比較した。

2）分析方法

自傷と他害の有無について5つの各々の時期と5つの事象の有無（Ⓐ虐待、Ⓑ両親の精神障害、Ⓒ両親の離婚、Ⓓいじめ、Ⓔ学校の中退）について比較検討した。検定にはFisherの直説法（両側検定）を用いて、有意水準P=0.05とし判定した。

Ⅲ．倫理的配慮

本研究は平成27年度の倫理委員会の承認を得て行われた。データ解析は医療観察法病棟内で外部と切り離されたコンピューターにおいて行い、その際アクセス権を厳重に管理した。予後調査の結果は当院医療観察法病棟で保管し、研究終了後保存期間を設け、保存期間終了後に保存の必要がないと判断された場合にはシュレッダーにかけ破棄することにした。

Ⅳ．結　果

性別は男性が90名（76.9%）、女性27名（23.1%）であった。精神疾患を発病した年齢は平均28.6歳、退院時の平均年齢は49.3歳であった。対象者の疾患別割合はF2圏（統合失調症圏）が107名（91.5%）でその他の疾患が10名（8.5%）であった。対象行為の内容は殺人が37名（31.6%）、放火が35名(29.9)%、傷害が33名(28.2%)、わいせつが7名(6.0%)、強盗が5名（4.3%）であった。

虐待は10名（8.5%）で見られた。その内訳は身体的虐待が4名、心理的虐待は4名、ネグレクトが2名であった。

自傷は発症前が5名（4.2%）、発症後が34名（29.1%）、拘留・鑑定中が6名（5.1%）、入院中が8名（6.8%）、退院後の通院中が9名（7.7%）であった。他害は発症前が16名（13.7%）、発症後が44名(37.6%)、拘留鑑定中が0名(0.0%)、入院中が7名（6.0%）、通院後の通院中が7名（6.0%）であった（図1）。

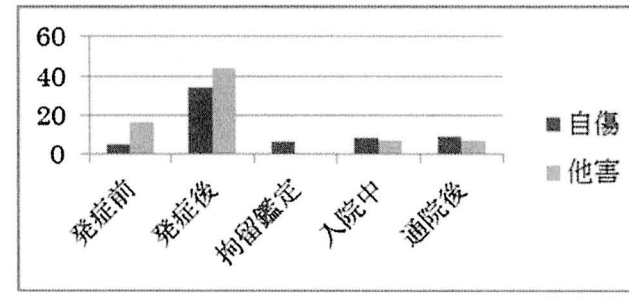


図1　時期別の他害・自傷の発生状況について

時期別にみると発症後の他害について、虐待の有無で有意差が（P=0.006）あった（表1）。自傷と虐待の有無では有意差はなかった。

離婚は11名(9.4%)、学校を中退した人は29名(24.8%)、いじめは16名（13.7%）であった。自傷、他害とこれらの有無では有意差はなかった。

表1　発症後の他害と虐待の有無との比較

他害の有無		虐待の有無		有意確率
		ある	なし	
発症後	ある	8	36	P=0.006
	なし	2	71	

Ⅴ．　考　察

他害と虐待において関連が見られたことから一般精神科領域と同様に、医療観察法領域においても虐待は他害を引き起こすリスク要因になる事が示唆された。虐待を受けた子供は成人期になって暴力のリスクが高くなると考える。入院時から虐待の有無について事前に情報をアセスメントしておく事が他害の予防につながると考える

Ⅵ．引用文献

1）研究代表者 横山浩之、廣瀬三重子他　2009；41：264-267
発達障害がある児（者）における行為障害の要因　脳と発達

自己評価能力向上のための指導方法

― 看護学生のメタ認知能力の実態 ―

○関口　恵子[1)]　所ミヨ子[1,)]　蒲生　澄美子[1,)]　宮﨑素子[1,)]　天野佑美[1,)]　小池啓子[1,)]　今野葉月[1,)]
([1)]埼玉医科大学短期大学　看護学科)
キーワード：自己評価能力，看護学生，メタ認知

【研究の目的】自己評価能力を高め、看護技術修得するための指導方法を検討するための資料とすることを目的に、看護学生のメタ認知能力の実態を知り、1,2 年次生のメタ認知能力に差があるか比較検討する。

【方法】

1．対象者：研究に同意が得られたA看護短期大学生 1,2 年次生

2．研究期間：平成 28 年 4 月～6 月

3．質問紙の構成

①フェイスシートにて学年、学習時間、看護技術練習時間について質問した。

②看護学生のメタ認知能力を測定する尺度として、吉野ら（2008）の成人用メタ認知尺度と阿部・井田（2010）の成人用メタ認知尺度の項目を参考に、看護技術に関連した項目を追加し 41 項目を作成した。評定は、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」の 6 段階評定とした。

4．分析方法

1) 日常の学習時間、看護技術練習時間は、単純集計し傾向を見た。

2) 看護学生のメタ認知能力は、因子分析し、下位尺度を作成し、下位尺度間の相関をみた。学年で差のある項目があるかｔ検定を行った。

3) 分析には、SPSS Statistics ver22 を使用した。

6．倫理的配慮

調査用紙は、研究目的のみに使用し、個人は特定されないこと、成績評価には一切関係しないこと、研究終了時には、すべて処分すること、提出を持って、同意したものとすること等、調査用紙配付前に口頭および調査用紙に同様内容を記載し説明した。

【結果】

1．同意が得られたアンケートの有効回答は、1 年生 111 名（97%）、2 年生名 89 名（81%）であった。

2．日常の学習時間の平均は、1.96 時間、看護技術の練習については、最も多かったのが、「試験の 2 週間前から」で 81 名、次に「試験の 1 ヶ月前から」で 66 名、「試験の 1 週間前から」が 21 名であった。

3．因子分析

主因子法(プロマックス回転)にて因子分析を行った結果、4 因子が抽出された。第 1 因子は、問 20「記録などでアドバイスをもらったら、それを次ぎの課題時にいかすようにしている。」や問 28「実技で失敗した時、次に同じ失敗を繰り返さないようにするために、失敗の原因を考えるようにしている。」、問 40「わからなくなったときは、一度中断してやり直してみる。」などの項目であった。自己の学習課題を今後に生かしたり、失敗を繰り返さないように分析する内容が含まれていることからメタ認知的コントロールの内容が含まれているため、第 1 因子は「学習コントロール」とした。

第 2 因子は、問 25「実技試験を受けた時、実際の点数を正確に予想できる。」、問 26「看護技術を練習する際、準備から後片付けまでのかかる時間を正確に予想できる。」、問 31「看護技術のようにたくさんの練習が必要な時、練習する前に自分の目標となるイメージを作り、それに近づけるよう練習している。」といった受けたテストの点数が自分で把握できる力や看護技術を実施する時間をある程度予測できる能力を問う項目が含まれていた。これは、メタ認知的モニタリングの要素が含まれていると考えられ、自己の能力を客観視する力と考えられたため、第 2 因子は、「自己の客観視」とした。

第 3 因子は、問 15「グループで討論する時、仕切り役が複数いると意見がまとまりにくいことを知っている。」や問「ワープロなどで文章や資料を作成する時、手書きの時に比べて誤字脱字が多くなりやすいことを知っている。」といった一般的な知識に関する内容が含まれていたため第 3 因子は、「一般的知識」とした。第 4 因子は、問 2「私は、勉強する時、自分にとってどんなことが最も重要か分かっている。」や問 1「私は、学業に関して自分の得意不得意を知っている。」など自己の特徴を客観的に捉えている内容であるため、「自己の内観」とした。

4 因子の信頼性係数は、第 1 因子 α =.93、第 2 因子 α =.83、第 3 因子 α =.80、第 4 因子 α =.77 であり高い値であった。

表 1　メタ認知下位尺度間の相関

	尺度得点(SD)	学習ｺﾝﾄﾛｰﾙ	自己の客観視	一般的知識	自己の内観
学習ｺﾝﾄﾛｰﾙ	4.60(.65)	1	.737**	.547**	.561**
自己の客観視	4.17(.71)	.737**	1	.458**	.507**
一般的知識	4.58(.67)	.547**	.458**	1	.460**
自己の内観	4.43(.68)	.561**	.507**	.460**	1

**P<. 01

また、下位尺度間は、すべて正の相関がみられた（表 1）。

4．学年間の差

ｔ検定の結果、有意な差が見られた項目は、問 7 の「重要なことがらに対して、意識的に注意を向けている」のみで 1 年生の方が有意に高かった（5%水準）。

【考察】

1．メタ認知能力尺度について

下位尺度間に正の相関がみられ、下位尺度に関連があることがわかった。今後、さらに具体的に関係性を検討したい。

2．学年間の差について

有意な差が見られた項目が 1 項目であり、1 年生の得点の方が 2 年生より高かった。これは、質問項目の理解度がより具体的にできる 2 年生の方が厳しく自己評価をしたことが考えられる。今回は、2 学年であったが、3 年生の違いも検討したい。また、今後の研究でさらに追究していきたい。

【引用文献】

吉野巌・懸田孝一・宮崎拓弥・浅村亮彦　2008. 成人を対象とする新しいメタ認知尺度の開発. 北海道教育大学紀要.
阿部真美子・井田政則　2010-成人用メタ認知尺度の作成の試み-Metacognitive Awareness Inventory を用いて　立正大学心理学研究年報　創刊号.

(せきぐち けいこ・ところ みよこ・がもう すみこ・みやざき もとこ・あまの ゆみ・こいけ けいこ・こんの はづき)

歩行観察における印象評価と動作評価の関係

― オノマトペと歩行異常性尺度を用いて ―

○大桐将[1)]　来田宣幸[1)]
([1)]京都工芸繊維大学 大学院工芸科学研究科)
キーワード：リハビリテーション，高齢者，多変量解析

【研究の目的】 理学療法士は，座る，立つ，歩くなどの基本的動作能力を改善や維持させるために運動療法や物理療法などによるリハビリテーションをおこなう専門職である．臨床の現場においては限られた時間しか与えられていないため，動作を観察して素早く分析・判断することは極めて重要なスキルといえる．基本的動作の中でも歩行動作の評価は非常に重要である．また，医療従事者だけでなく，ロコモティブシンドロームに代表されるように一般の家庭や非医療従事者が歩行の異常性や問題点を早期発見することで，運動器障害の発生を未然に防いだり，発生したとしても早期復帰に繋げること可能になる．その際，医療従事者が用いる表現や思考プロセスに関しては，学術および医学的なバックグラウンドがない人は理解しにくいという課題があった．この問題を解決するためには，わかりやすい表現方法を使用して歩行動作自体を伝えることが必要となる．そこで，本研究では実際にリハビリテーションを受けている患者をモデルとした歩行動画を作成し，この動画を用いてオノマトペなどの感性的言語表現による印象評価を実施し，動作評価との関連性を明らかにすることを目的とした．

【方法】歩行動画の作成　評価で使用する歩行動作の対象となるモデルは実際の患者 10 名とした．歩行の撮影は整形外科病院内のリハビリテーション室にて実施した．ビデオ撮影のための歩行路として 4m の直線路を作成し，患者の歩行を側画像と前後画像から撮影した．歩行の撮影は直交した 2 つの歩行コースを通常の歩行スピードでそれぞれ 2 往復させた．

歩行動画の評価　理学療法士そのほかリハビリテーション領域を専門としない一般の大学生 30 名を対象として歩行評価の調査を実施した．調査は二段階に分けて実施され，まず，第 1 ステップとして，10 名の歩行動画を観察して，相応しいと感じるオノマトペなど感性的言語表現を回答させた．

次に第 2 ステップとして，印象評価と動作評価の 2 種類の評価を実施した．歩行動画の印象評価はウェブ上の評価システムを採用し，動作評価については集団での一斉実施法を用いた．印象評価には，第 1 ステップで収集した感性的言語表現の中から選択された表現を用いて，感じない（1 点），感じる（2 点），とても感じる（3 点）の 3 段階で評価させた．

また，歩行の動作評価には歩行異常性尺度を用いた．歩行異常性尺度とは，歩行動画を観察し，複数の質問項目に対して選択肢から 1 つを回答させ，その点数から転倒リスクを同定する尺度であり，理学療法士を対象とした研究において評価者間の信頼性が確認されている（小林ほか 2012）．本研究では，作成された日本語版の尺度を一般学生向けに修正し，足の運び，歩く姿勢，側方へのよろめき，接地の様子，股関節の運動範囲，腕振り，腕振りと踵接地の同期の 7 つの観点に対して，順序尺度となる 4 つの選択肢の中から択一式で回答させた．なお，すべての項目において 1 が最も良好な状態にあり，数値が大きくなるほど歩行の異常性が高いとなる順序尺度とした．

【結果と考察】 自由記述によって得られた感性的表現には，147 種類の表現が得られ，最も出現頻度が高かったのはスタスタの 28 回であった．感性的言語表現と動画種類（患者）のクロス表を作成し，この行列を用いたコレスポンデンス分析をおこなった．得られた成分 1 と成分 2 を用いて感性的言語表現と患者を同時に表示した（図 1）．

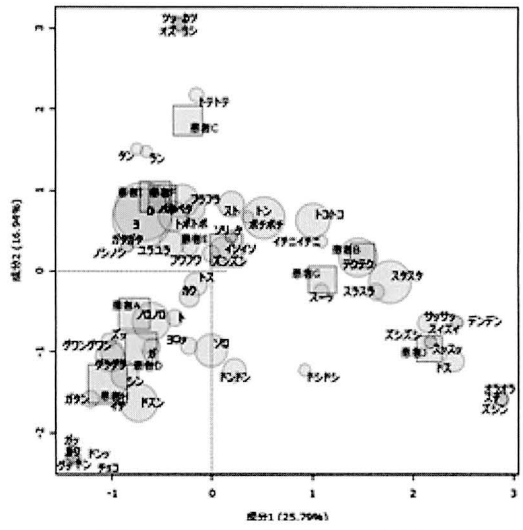


Fig. 1. コレスポンデンス分析

図 1 の結果に基づき 21 種類の感性的言語表現を用いて 3 段階で評価させた値を説明変数，歩行の動作評価の値を目的変数とする重回帰分析をおこなった．その結果，「足の運び」は，グラグラ（β=.94）によって説明され（R^2=.89），「歩く姿勢」はグラグラ（β=.93），ギシギシ（β=-.81），カツカツ（β=.46）によって説明された（R^2=.99）．「側方へのよろめき」はグラグラ（β=.93）とイソイソ（β=.29）によって説明され（R^2=.95），「接地の様子」はグラグラ（β=.99）とペタペタ（β=.29）によって説明された（R^2=.92）．「股関節の運動範囲」はグラグラ（β=.92），ギシギシ（β=.95），カツカツ（β=.51）によって説明された（R^2=.98）．「腕振り」および「腕振りと踵接地の同期」はグラグラ（β=.64，β=.87）によって説明された（R^2=.40，R^2=.76）．

本研究では，重回帰分析の結果，動作評価の 7 項目すべてで有意な回帰が得られた．この結果は，足の運びや歩く姿勢，側方へのよろめきなど，歩行動作の部分的な具体的項目に関する評価と印象の評価との間に密接な関係が存在することを示唆するものである．歩行動画を観察して，その動作や動作パターンの特徴や運動器疾患としての問題点などを探ろうとする思考プロセスにおいて，直感的な感性表現による印象評価で歩行の運動学的な特徴を説明できる要素が存在する可能性があるといえる．医療従事者と非医療従事者との間において，双方向的かつ良好なコミュニケーションを実現させるための 1 つの方策としての発展可能性が高いといえる．

【引用文献】

小林まり子・原田和宏・福田敦美・玉利光太郎・遠藤彰・小林隆司 2012 地域高齢者における動画観察による歩行異常性尺度の評価者間信頼性，理学療法学，39：397－403

（おおぎり まさる・きだ のりゆき）

白杖で叩いた時に生じる音を用いた対象の硬さ判断における握り方の影響

○布川清彦
（東京国際大学 人間社会学部）
キーワード：白杖，硬さ，音

【研究の目的】白杖は視覚障害者の単独歩行を支援する道具として，最も広く使われている物の一つである．白杖の基本的な機能は，石突きと物体との接触による反響音や接触情報を利用して路面の状況や障害物の存在等を認識することである．著者らは，白杖を用いた対象認知の精度を高める操作方法について検討するために，白杖を利用して間接的に対象を触りその特性を探索する場合に関する基礎的な知見を得ることを目的として研究を進めてきている．白杖ユーザが移動時に利用する事がある握り方には，次の 3 種類がある．1）白杖のグリップの平らな面に人差し指を伸ばした状態で合わせ，親指と他の三指で軽く握る方法（標準握り）．2）鉛筆を持つようにしてグリップ部分を握る方法（ペン握り）．3）親指をグリップの平らな部分に当て四指で握りこむ方法(包丁握り)．先行研究では，硬さ知覚に関する実験を行い，硬さの違いに対する感度に対して，握り方の違いや聴覚情報が影響する事が明らかになった（布川 2012）．本研究では，3 種類の握り方で握った白杖で対象を叩いた時に生じる音を利用した硬さの違いに対する感度をマグニチュード推定法によって測定し，聴覚情報の有効性と握り方の影響について検討する．

【方法】硬さを推定する対象として白杖で叩いたのは，一辺の長さが 300mm の正方形で，その厚さが 12mm であるゴム板であった．ゴムの硬さは，20 度から 10 度刻みで 90 度までの 8 種類であった（単位：JIS A；(株) テクロック社製デュロメーター硬度計 GS-719G タイプ A で計測，竹井機器工業株式会社)．使用した白杖（ジオム社）は，主体がアルミニウム合金シャフト（軽金属）で，長さは 1200mm であった．そのうち，ゴムのグリップ部は 260mm，ナイロン製石突部が 75mm であった．また，重さは約 200g であった．判断の対象となる音には 2 種類あり，1）叩いて生じた音の録音を再生したもの（録音再生）と 2）その場で実際に叩いた音（原音）であった．録音再生条件で用いた刺激は，実験者が白杖を標準握り・ペン握り・包丁握りで握り，白杖でゴム板を叩いた音を録音した．どちらの種類も，無響室において録音した．録音マイクはショットガンマイク（Audio-technica AT-815）で，オーディオユニット（Roland FA-66）を通して採音した．記録には MacBook Pro とアプリケーション Audacity（Ver. 1.3.12: Dominic Mazzoni）を使用した．実際に参加者の前でゴム板を叩いた音の条件(標準握り(原音))では，実験場面で実験者が標準握りで白杖を握り，ゴム板を叩いた．一般教室で行った．

実験参加者は，これまでに白杖に触れる機会が無かった晴眼の大学生 5 名であった．実験前に利き手の人差し指の指腹部で触二点閾を測定し，触覚の感度に問題が無いことを確認した．その後，木製の円盤（直径を変数とする）を用いて，マグニチュード推定の手続きについて練習を行った．スピーカーを用いて録音した音を聞かせる条件では，アイマスクをした参加者は高さ 40cm の台座の上に立ち，台座の前面に設置したスピーカーから音を聞いた．台座の中心からスピーカーユニット部までの距離は 109cm であり，この距離は，実験者が標準握りで白杖を握ってゴム板を叩く条件における，白杖の石突部分が当たった床面から耳までの距離であった．また，台座の横には高さ 139cm の棒を設置し，参加者がその棒を握ることで身体の安定性を確保した．実験者は，ランダムな順番で，録音した音をスピーカーから流した．参加者はスピーカーから流れてくる音を聞き，その音の硬さの推定値を報告した．原音条件では，参加者は床の上に立ち，参加者正面の位置にゴム板を設置した．実験者がランダムな順番で各ゴム板を白杖で叩き，参加者はそこで生じた音を聞いて硬さの推定値を報告した．参加者への教示では，聞いた音に対して感じたゴム板の硬さについて，それに相当する数を割り当てて報告するように指示した．また，硬いほど数値が大きくなるように指示した．値の決まった標準刺激やモデュラスは用いなかった．各条件の音についてそれぞれ 1 回のマグニチュード推定を行った．

【結果と考察】得られたマグニチュード推定値の幾何平均を算出し，両対数グラフの横軸にゴムの硬度，縦軸に推定値をとってプロットし，冪関数で近似した．結果は，次の通りであった（Fig. 1）．

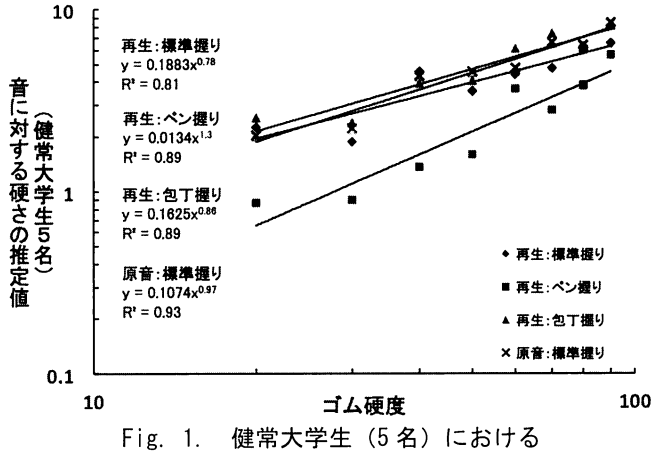


Fig. 1. 健常大学生（5 名）における
ゴム板を叩いた音と硬さ判断の関係

録音再生条件では，標準握りの冪指数は 0.78，ペン握りの冪指数は 1.30，包丁握りの冪指数は 0.86 であった．従って，対象を白杖で叩くことによって生じる音のみを利用して対象の硬さを推定することが可能であり，叩く時の握り方が音による硬さ判断に影響すると考えられる．そして，参加者の前で直接叩いた原音条件の標準握りは 0.97 であり，硬さの違いに対する感度が最も高いと言える．しかし，同じ標準握りの冪指数が録音再生条件と原音条件で異なる冪指数であったため，この違いが生じた理由について検討を進める必要がある．

【引用文献】

布川清彦 2012 白杖の打撃音を利用した対象の硬さ知覚に関する実験的検討 日本応用心理学会第 79 回大会発表論文集

【謝辞】

本研究は JSPS 科研費 15K12090，16H03753 の助成を受けたものです．

（ぬのかわ きよひこ）

研究発表（ポスター発表）

2日（金）

物体の慣性系情報が持ち上げ時に知覚される重さに与える影響

—手元から物体重心までの距離の影響—

○川合　悟[1,2]　渡邉拓人[2]　小原宏基[2]
([1] 帝塚山大学心理学部心理学科　[2] 帝塚山大学大学院心理科学研究科)
キーワード：知覚，重さ，慣性力，精密把握

【研究の目的】 物体の把握持ち上げ運動およびそれに付随する重さ感覚など人間の知覚－運動系機構の解明は心理学分野だけでなく、人間工学、ロボット工学、リハビリテーション工学などにも重要である(Kawai, et al.,2012)。

持ち上げ時に知覚される物体の重さ（Heaviness）は、単に重量だけでなく、他のさまざまな物理的特性、保持者の生理的、認知的要因に影響される(Kawai et al.,2012)。中でも、指先から得られる大きさや密度情報は組織的かつ決定的な影響(Kawai, 2003)を及ぼし、視覚から得られる大きさ情報は組織的だが個人差があり弱い影響を示す（Kawai et al., 2007)。物体の慣性系情報（Inertia tensor)もまた重さに影響する(Amazeen & Turvey, 1996)。しかし物体の慣性力そのものが知覚される重さに直接影響しているのか、手元から物体重心までの距離や物体の軸周りの質量分布（大きさ）など慣性情報の構成成分が個々に影響しているのかは明らかにされていない。また、先行研究では強力把握を用いており、精密把握での報告は見られない。そこで、①精密把握においても慣性系情報が重さ知覚に影響しているのか、もし影響するとすれば、②慣性系情報の構成成分である手元から物体重心までの距離が知覚される重さにどのように影響を及ぼすか検討した。

【方法】 (1) 被験者：指先の感覚および運動機能に支障のない成人 26 名（男子 13 名、女子 13 名：平均年齢 22.9±3.2 歳）が同意の上実験に参加した。

(2) 刺激：図 1 のように、竿付立方体を用いて被験者の手元から物体中心までの距離（3 条件;S:50mm, M:75mm, L:100mm)を変化させた。竿先端部には直径 15mm の木製球状グリップを取り付けた。台座を用いて把握位置を一定にした（132.5mm)。大きさの異なる 3 種類の立方体（S:30mm, M:35mm, L:50mm）を用いたが試技間では同じ大きさの立方体を用いることによって大きさの影響は除いた。刺激全体の質量は一定（34.0 g）にした。

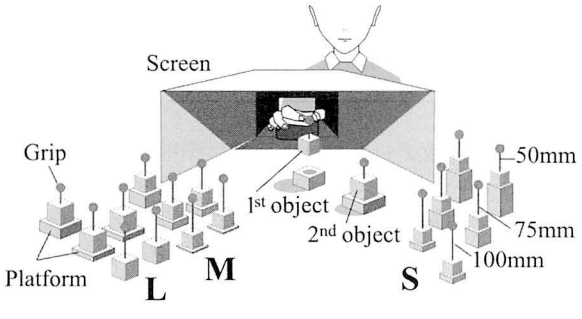


Fig. 1. 実験概略図

(3) 弁別の手続き：被験者は視覚遮断のためのスクリーン内に利き手を入れ、上腕をマット上に安定させ、拇指および指示指を 20mm 程度開いた。実験者によってその指間に第 1 刺激の球状の先端部分を挿入されたら、それを摘まみ、垂直に約 30mm の高さに持ち上げ、感じられた重さを記憶し、台上に戻した。その直後（< 1 sec)、第 2 刺激が挿入されたら、第 1 刺激同様に摘み持ち上げ、第 1 刺激の重さに比べて、第 2 刺激の方が「重たい」「軽い」「同じ」に感じたかを実験者に報告した。

(4) 試技数：両刺激間の重量 (34g) および大きさは一定 (S-S, M- M, L-L) とし、すべての距離の組合せ（9 組）で 6 試技ずつ実施した。結果、各被験者は 162（3×9×6）試技行った。条件は被験者間でカウンターバランスをとり試技は疑似ランダムに配置した。

【結果および考察】 図 2 は、距離の増大（+50、+25)、同じ (0)、減少（-25、-50）に対して被験者が「A; 重たい」あるいは「B; 軽い」と知覚された試技の割合の平均および標準偏差を示している。

分散分析の結果からは「重たい」という反応の出現率 (F(2.4, 58.9)=33.87) も「軽い」という反応の出現率 (F(2.8,71.1)=19.93) も有意に距離に影響した (p<.001)。それゆえ、同じ重量・大きさであっても、手元から物体重心までの距離が長くなるとより「重たく」、短くなるとより「軽く」知覚されると推察された。

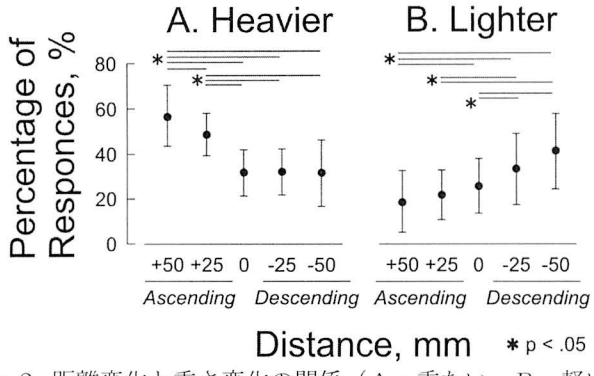


Fig. 2. 距離変化と重さ変化の関係（A：重たい、B：軽い）

【引用文献】

Amazeen E. L. & Turey, M.T.,1996 Weight perception and the haptic size-weight illusion are functions of the inertia tensor, J. Exp Psychol., 22:213-232.

Kawai,S., et al.,2012 Phantom graphic and Phantom haptic displays: Powerful tools to understand how human perceive heaviness, Haptics rendering and applications, (Saddik, A.E. Ed.), pp.25-46, InTech Open Access Publisher, Croatia.

Kawai, S.,et al., 2007 A reexamination of the size-weight illusion induced by visual size cues. Exp Brain Res., 179:443-456.

Kawai, S., 2003 Heaviness perception IV. Weight x aperture-1 as a heaviness model in finger-grasp perception, Exp Brain Res.,153:297-301

(かわい さとる・わたなべ たくと・おはら ひろき)

尺度信頼性係数の信頼区間の被覆確率

― 連続変数データによる検討 ―

服部　環
(法政大学現代福祉学部)

キーワード：尺度信頼性係数，アルファ係数，信頼区間，被覆確率，シミュレーション実験

【研究の目的】信頼性の高さは良い心理検査の要件であり，高い妥当性の必要条件でもある。信頼性の指標として信頼性係数が利用されることが多く，その推定値の 1 つとして Cronbach (1951) のα係数がある。また，近年ではα係数に代わり，心理尺度の確認的もしくは探索的因子分析に基づく尺度信頼性係数 (Raykov, 1997) やω（ω_h）係数 (McDonald, 1999) が推奨されている (岡田, 2011)。心理尺度を作成した論文では，こうした指標の推定値が報告されるが，信頼性の高さを適切に判断するためには，他の統計量と同様に信頼区間を報告することが望まれる (高本・服部, 2015)。

そこで本稿では，確認的因子分析に基づく信頼性係数の推定値とα係数の信頼区間の被覆確率をシミュレーション実験により検討する。

【方法】・項目数　5 項目と 10 項目とした。
・回答者数　100, 200, 400, 800, 1600, 3200 とした。
・データ生成モデル (項目間相関)　因子負荷量を.4 から.8 (.1 刻み；10 項目条件では各 2 項目) とする同族測定モデル (項目間相関係数の範囲=.16～.32；平均相関係数=.355) と項目間相関係数をすべて.355 とする平行測定モデルとした。
・データ生成方法　項目母分散を 1 とし，R 言語の mnormt パッケージを用いて数値を生成した (以下，連続変数)。
・母集団の尺度信頼性係数とα係数　データ生成モデルが同族測定モデルのとき，同族測定モデルを仮定した尺度信頼性係数は.744，タウ等価測定モデルは.750，平行測定モデルとα係数は.733 である。また，データ生成モデルが平行測定モデルのとき，尺度信頼性係数とα係数は.733 である。
・推定モデル　同族測定モデル (ω係数と一致)，タウ等価測定モデル，平行測定モデルを仮定した。
・信頼区間の算出　lavaan パッケージ (Rosseel, 2015) を利用して因子負荷量，誤差分散，尺度信頼性係数を算出し，信頼度 95%と 99%の信頼区間を求めた。因子負荷量と誤差分散の推定には最尤推定法を用いた。Romano et al. (2010) と Cui & Li(2012)はα係数の信頼区間の被覆確率を検討しているが，回答者数が少ないので，ここでは van Zyl et al. (2000) の標準誤差を用いる方法，Feldt (1965) の方法，Fisher の z 変換を利用する方法でα係数の信頼区間を求めてみた。
・シミュレーション回数　データ生成条件を組み合わせた各条件について，10000 回とした。

【結果】・バイアス　尺度信頼性係数の平均推定値-尺度信頼性係数の真値，およびα係数の平均値-α係数の真値をバイアスとしたところ，5 項目条件で回答者数を 100 としたとき，バイアスは-.005 から.000，200 から 800 では-.002 から.000，1600 と 3200 では.000 であった。また，10 項目条件では回答者数を 100 としたときのバイアスが-.003 から.000，200 から 400 では-.002 から.000，800 以上では.000 であった。
・被覆確率　信頼度を 95%としたときの被覆確率 (%) を Table 1 から Table 4 に示す。Fisher の z 変換を用いたときの被覆確率(α係数)が理論値よりも 2%ないし 4%ほど大きいが，他の結果は理論値に近い。また，99%としたときの被覆確率（数表を省略）でも，Fisher の z 変換を用いたときの被覆確率（α係数）が 99.45 から 99.67 となり，理論値よりも大きいものの，他は 98.33 から 99.37 となり，理論値に近い。

Table 1　信頼度95%の被覆確率（5項目：同族・連続変数）

	推定モデル			α係数		
回答者数	同族	タウ	平行	van Zyl	Feldt	Fisher
100	94.58	94.86	95.13	94.97	95.16	96.98
200	94.78	95.06	95.18	95.07	95.15	96.86
400	95.23	95.28	95.41	95.36	95.51	97.13
800	95.04	95.17	95.36	95.25	95.46	97.11
1600	95.23	95.18	95.45	95.40	95.62	97.04
3200	95.07	94.96	95.04	95.00	95.04	96.90

Table 2　信頼度95%の被覆確率（5項目：平行・連続変数）

	推定モデル			α係数		
回答者数	同族	タウ	平行	van Zyl	Feldt	Fisher
100	94.42	94.89	95.13	95.05	95.11	96.95
200	94.76	94.88	94.99	94.98	95.13	96.88
400	94.99	94.99	95.11	95.10	95.21	97.07
800	94.94	94.97	95.07	95.07	95.24	97.06
1600	95.31	95.19	95.22	95.20	95.21	97.03
3200	94.89	94.89	94.87	94.87	94.88	96.91

Table 3　信頼度95%の被覆確率（10項目：同族・連続変数）

	推定モデル			α係数		
回答者数	同族	タウ	平行	van Zyl	Feldt	Fisher
100	94.76	95.43	95.42	95.09	95.39	98.62
200	95.11	95.63	95.57	95.27	95.68	98.47
400	94.77	95.55	95.36	95.09	95.38	98.83
800	95.10	95.74	95.44	95.15	95.55	98.99
1600	95.02	95.67	95.41	95.11	95.46	98.76
3200	95.01	95.55	95.24	94.99	95.24	98.70

Table 4　信頼度95%の被覆確率（10項目：平行・連続変数）

	推定モデル			α係数		
回答者数	同族	タウ	平行	van Zyl	Feldt	Fisher
100	95.04	95.16	95.33	95.25	95.33	98.58
200	95.08	95.17	95.20	95.16	95.20	98.52
400	94.98	95.12	95.24	95.22	95.24	98.70
800	95.16	95.21	95.15	95.15	95.43	98.94
1600	94.91	94.96	94.97	94.97	94.94	98.70
3200	95.08	95.01	95.05	95.03	94.97	98.64

【考察】連続変数データでは，尺度信頼性係数の推定値のバイアスは小さいと判断できよう。また，尺度信頼性係数の被覆確率はほぼ理論値に近いので，項目得点が正規分布する場合，実データでも妥当な信頼区間を推定できると示唆される。α係数では，Fisher の z 変換を用いた場合，被覆確率が理論値よりも大きくなることがある点に留意する必要があろう。

評定尺度法を前提としたシミュレーション実験の結果については，今後，報告する予定である (服部, 2016)。

【引用文献】

服部　環 2016 日本教育心理学会第 58 回総会（予定）
高本真寛・服部　環 2015 国内の心理尺度作成論文における信頼性係数の利用動向，心理学評論，58，220-235.

(はっとり　たまき)

商品の選択と購買に関わる応用心理学的研究(1)

—Product Placement の効果の検討—

○Penwannakul Yuwadee[1)]　坂井信之[1)]
([1)]東北大学文学研究科)

キーワード：購買行動，選択行動，意思決定

【研究の目的】 Product Placement（PP）とはドラマや、PV や、映画を通じ、商品を視聴者に間接的にまた無意識に暴露することを意味する。そのため、視聴者はその商品を見ないでおくことは難しく、その結果効果的な広告方法だと考えられている（Hawkins et al., 2007）。本研究では、日本のドラマにおける PP の効果とそのメカニズムを検討することを目的として行った。PP のメカニズムは広告と同様に、単純接触効果の現象により、商品に対する好意が上昇すると考えられている(Law&Braun, 2000)。そのため、本実験の仮説 1 は「*PP あり条件は PP なし条件より、PP の商品を選択する確率が高くなる*」と設定した。さらに、単純接触効果から、そのドラマの鑑賞経験の影響も見られるだろうと考え、仮説 2 として「*PP あり条件にはドラマを見た経験がある人は初めて見た人より PP の商品の選択率が高い*」と設定した。

さらに、PP は Celebrity Endorsement のように、有名人の影響が見られることが考えられる。Celebrity Endorsement とは有名人に対する好意やイメージが商品にに伝播するというメカニズムで説明される現象である。従って、有名人に対する態度が好意的である場合には、商品に対する態度も好意的になると考えられる。そこで、仮説 3 は「*PP あり条件に、ドラマの主人公の役者に対する好意を持つ人はそうではない人より、PP の商品を選択する確率が高くなる*」と設定した。

【方法】

・参加者：大学生 36 名（男性 12 名、女性 24 名）

・動画刺激：『リッチマン、プアウーマン』というテレビドラマのシーン（約 3 分半）を使用した。PP あり条件は 1.30～1.36 の間に缶コーヒーの PP を入れた。PP なし条件では PP の部分を切り取り、動画の最後に 6 秒間のシーンを入れた。

・商品刺激：本実験で使用した商品は B、F、U の 3 種類の市販のブラックコーヒーブランドを使用した。これらのうち、B は動画中に PP された商品であった。

・質問紙：動画鑑賞後に、参加者に対して、実験で使用した動画の場面に関する質問と、鑑賞経験、主人公の俳優に関する質問への回答を求めた。動画に関する質問はキャラクターの名前、服装の色などという質問であった。鑑賞経験の項目は「見たことがない」、「1 回見たことがある」、「2 回以上見たことがある」という 3 択の質問であった。そして、俳優に対する態度の項目は、「知りません」、「名前だけ知っています」、「知っているけど、好きではありません」、「ファンです」という 4 択の質問であった。

・実験の手続き：映像に対する注意の研究という名目で参加者を募集した。参加者は PP あり条件（缶コーヒーの PP が挿入されたドラマのシーン）と PP なし条件にランダムに分けられた。それぞれの参加者は動画中に出てくる場面について記憶するようにとの教示を受けた。それから動画を鑑賞し、鑑賞後にその動画についての質問に回答した。実験終了時に実験参加への謝礼として 3 つの市販ブランドブラックコーヒーを提示し、いずれか一つ選択するように依頼した。最後に参加者に実験の真の意図を説明し、再度、実験への同意を得た。

【結果】条件別の差を分析するためにカイ二乗検定を行った。その結果は、PP あり条件は PP なし条件より、PP ブランド(B)を選択する比率が有意に高かった($\chi 2 = 3.94$, $df=1$, $p<.05$)。(Fig. 1)

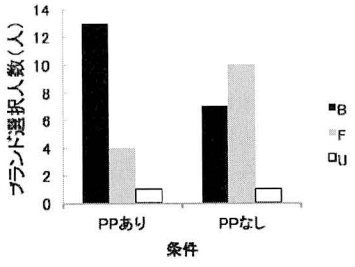


Fig. 1. 条件別で、選択されたブランド

PP あり条件において、「1 回見たことがある」と「2 回以上見たことがある」という回答者を鑑賞経験あり群として、他の選択肢の回答者は鑑賞経験なし群として分け、鑑賞経験あり - なし群間の PP ブランドの選択率を比較した。その結果、PP ブランドの選択率には有意な群間差が見られなかった($\chi 2 = .450$, $df=1$, $p>.05$)。

また、主人公の俳優に対する態度項目に基づき「ファンです」以外の選択肢を選んだ参加者は好意を持たない群、「ファンです」を選んだ参加者は好意を持つ群として分けた。それぞれの群の PP ブランド選択率を比較した結果、PP ブランドの選択率は有意な群間差は見られなかった($\chi 2= 1.27$, $df=1$ $p>.05$)。

【考察】本研究の結果から、PP あり条件では PP ブランド(B)を選択する比率は有意に高かったため、Product Placement の効力を確認することができた。また、鑑賞経験あり群となし群の選択率には有意な差が見られなかったため、仮説 2 は支持されなかった。このことから、PP の一つのメカニズムと考えられる単純接触効果の影響は本研究では確認できなかった。さらに、主人公の役者に対して好意を持つ人とそうではない人の選択率には有意な差が見られなかったので、仮説 3 も支持されなかった。そのため、Celebrity Endorsement の効果も確認できなかった。今後、PP を支持する心理的メカニズムについてさらに検討する。

【引用文献】

- Hawkins, D. I., Mothersbaugh, D.L., & Best, R. J. (2007). Consumer Behavior: Building Marketing Strategy 10th edition, McGraw-Hill.
- LawS., & Braun, K. A. (2000). I'll have what she's having: Gauging the impact of product placement on viewers. *Psychology & Marketing, 17(12)*, 1059-1075.

（ぺんわんなくんゆわでぃー・さかいのぶゆき）

商品の選択と購買に関わる応用心理学的研究（2）

—「限定」ラベルが商品の魅力度評価に及ぼす影響—

○坂井信之[1)]　Penwannakul Yuwadee[1)]
([1)]東北大学文学研究科)
キーワード：購買行動，選択行動，意思決定

【研究の目的】我々消費者の購買行動は計画購買と非計画購買に大別される。後者は初めて訪れる店舗での購買や時間に追われているときによくみられる。さらに、最初は買うつもりではなかったものの、店舗にある商品をみて、それが必要だったと思い出して、購入することも非計画購買に含まれる。

このような非計画購買に大きな影響を与える要因に、POP（Point of Purchasing）広告がある。POP広告の手法には、商品の展示を印象付ける手書きの広告から、店頭での商品のデモンストレーション、無料サンプルの配布など、様々なものがある。その中でも地域限定や期間限定など「限定」に関する情報を示す販売方法は広く応用されている。2009年に実施された調査でも、購入したくなる謳い文句として筆頭に挙げられたのは「限定」というキーワードであった。このことは実際の市場でもみられ、例えばネスレが発売しているキットカットという商品では、世界的に販売されている商品に準拠する商品だけでなく、日本国内限定のレギュラー製品、期間限定品、地域限定品、制限区域内限定製品など常時30種類程度の派生品を販売している。

「限定」が購買行動に及ぼす影響を調べた先行研究（布井・中嶋・吉川，2013）では、食料品の画像に期間限定、数量限定、地域限定のそれぞれのラベルを添付し、それぞれの商品に対する魅力度を実験参加者に9点法により評定させた。その結果、限定ラベルを添付された商品は、限定には無関係のラベルを添付された商品に比べて、より魅力的だと評価された。ただし、限定の種類には効果の差はみられず、一様に評価が高まる結果が得られた。

先行研究で用いられた商品は典型的な消費財である食料品であった。食料品であれば、値段も安価であるため、仮に購入が失敗（不満足）に終わっても、経済的・心理的なリスクは少ない。そのため、消費者は「一度経験してみてもよいのではないか」という軽い気持ちで魅力度を高めた可能性もある。そこで、このような知見が商品すべてに効果的かどうかを検討するため、本研究では商品として比較的高価であり、かつ実験参加者が現実的に購入するであろうと思われる電化製品を刺激として用い、限定ラベルの効果を調べた。

【方法】

・参加者：大学生48名（男性24名、女性24名）

・写真刺激：予備実験により一定の魅力度を持つ電気製品（乾電池、イヤホン、ドライヤー、ホットプレート、電球、モバイルバッテリー、液晶保護フィルム、電動歯ブラシの8種類、計40枚）を用いた。商品画像刺激の右下にメーカーの名前・商品名が同時に呈示された。また，1つの商品につき、商品の限定を示す2種類の限定ラベル刺激（期間限定・数量限定）に価格を加えたものと価格のみを示すラベル刺激を作成した。ラベル刺激は，数量限定の場合には先着50名様限定，初回生産分限り，在庫分限り，数量限定を用い，期間限定の場合には本日限り，1週間限定，今季限り，期間限定を用いた。価格は，ネットショッピングサイトによるものであった。

・手続き：商品画像刺激が1枚ずつモニタ中央に呈示され，商品画像刺激の下部にラベル刺激と価格が同時に呈示された。商品画像刺激とラベル刺激は1,500ms呈示された後に消え，続いて魅力度評定画面が呈示され，実験参加者は呈示された商品の魅力度を9段階で評定することが求められた（1：全く魅力的でない～9：非常に魅力的である）。各商品画像刺激は，実験を通して3回呈示された。そのうち2回は2つの限定条件の限定ラベル刺激に価格を加えたものとともに呈示され，もう1回は価格のみのラベル刺激とともに呈示された。実験の本試行は，全120試行からなり，80試行が限定ラベル刺激（期間限定・数量限定）に価格を加えたものとともに呈示される試行であり，40試行が価格のみのラベル刺激とともに呈示される試行であった。

【結果】魅力度評定値に対して分散分析をおこなったところ、ラベルの有意な主効果（$F(2,1104)=17.40$, $p<0.001$）がみられた。下位検定の結果、限定ラベルのついた刺激は、価格のみのラベルのついた刺激よりも有意に魅力的だと判断されたことがわかった（$p<0.05$）。しかしながら、数量限定と期間限定のそれぞれのラベルの間には有意な差はみられなかった。

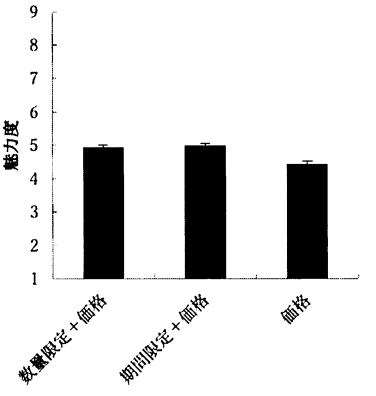


Fig. 1. 限定ラベルが商品の魅力度に及ぼす影響

【考察】本研究の結果から、先行研究と同様に、「限定」ラベルを商品画像に添付することにより、その商品魅力度が上昇することが明らかとなった。また、先行研究と同様に、期間限定あるいは数量限定のラベルの間に効果の差はみられなかった。

本研究の結果から、「限定」ラベルの効果は、食料品だけでなく、電気製品の購入場面でも確認できた。本研究では製品カテゴリーの有意な主効果はみられなかったため、安価で短期使用の消費財から、比較的高価で長期使用の耐久財にも同等にみられることが示唆された。今後は「限定」ラベルの効果がより高価でより長期使用される住居や自家用車などの耐久財にも見られるかどうかを検討する必要があるだろう。

【引用文献】

・布井雅人・中嶋智史・吉川佐紀子（2013）．限定ラベルが商品魅力・選択に及ぼす影響．認知心理学研究，11, 43-50.

（さかいのぶゆき・ぺんわんなくんゆわでぃー）

くすぐったさの感覚が異性との会話時の距離に及ぼす影響

岡村靖人
(甲子園大学大学院心理学研究科)
キーワード：身体化認知、プライミング、皮膚感覚

研究の目的

身体化認知研究においては、皮膚感覚がわれわれの認知や行動に影響を及ぼすことが知られている。温度(e.g. Williams & Bargh, 2008)、手触り(e.g. Ackerman, Nocera, & Bargh, 2010)、重量感(e.g. Jostmann, Lakens, & Schuber, 2009)などがこれまで検討されてきた。これらの研究では、皮膚感覚などの物理的経験が抽象的概念と結びついており、メタファーを通して私たちが世界を認識していることが示されてきた。例えば上述の Williams & Bargh (2008)は物理的な温かさを感じると、対人認知において他人を温かい人物だと判断することを明らかにした。この結果は私たちがメタファーを通じて温度感覚と親密さを結びつけていることの証左である。Lakoff & Johnson (1980)の概念メタファー理論では、概念メタファーは二つの性質の異なった概念から構成されているとされる。一方は target と呼ばれる抽象的で複雑な概念で、もう一方は皮膚感覚に代表されるような source と呼ばれる発達の初期段階から利用できるような具体的で身体経験に基づく概念である(Mandler, 2004; Landau, Robinson, & Meier, 2014)。この target と source のどちらか一方の概念の活性化は、もう一方の概念の活性化をもたらすことが示されている(Landau, Meier, & Robinson, 2010)。

くすぐったいにはむずむず感を伴う皮膚感覚を表す意味(source)の他にも、「ほめられてくすぐったい」などの例が示すように「恥ずかしい、きまりが悪い」といった意味(target)がある。これまで身体化認知研究ではくすぐったさに焦点を当てた研究は管見の限り見当たらず、同様の指摘が本元・菅村(2014)でもなされている。そこで本研究では参加者にくすぐり刺激を与えることで source 概念を活性化させ、そのことによる初対面の異性との接触に対する「恥ずかしさ」という target 概念の活性化の可能性を異性との会話時における距離を測ることを通して検討する。

方法

実験参加者：男子大学生 26 名

測定項目：くすぐったさの程度を測定するために 10cm の視覚的アナログスケール(VAS)を用い、現在の気分について 1:非常に悪い～5:非常に良いの 5 件法で調査をした。従属変数の測定には 4 本足のパイプ椅子を用い、2 つの椅子の前足 2 本の中間地点どうしの距離を計測した。

手続き：参加者をくすぐったさ喚起群と無喚起群の 2 群に 13 名ずつ分類した。参加者は 1 人ずつ実験室に入室する。実験群であるくすぐったさ喚起群の参加者は実験者によって筆で前腕部をこすられ、そのくすぐったさの程度を VAS に記し、現在の気分を回答した。統制群の参加者はくすぐったさ喚起の手続きは行われず、最初に上述の気分を尋ねる調査に回答した。その後、参加者は以下のような説明を受けた。「これから初対面の異性の大学生と少しの間会話をしてもらいます。(実験者はすでに置いてある椅子を指差しながら)あちらに女性の方が座るので、ご自身で会話をするのに適当だと思う場所に椅子を置いてください。」参加者は実験室の端に置いてある椅子を手に取り、実際に置いた。その後、参加者はデブリーフィングを受け、実験室を退室した。実験者は 2 つの椅子の距離を計測した。

実験デザイン：一要因被験者間計画で分析を行った。

結果

2 つの椅子の距離の平均と標準偏差は実験群(M=129.00 SD=43.75)、統制群(M=95.85 SD=29.44)であり、一要因分散分析の結果、両群の間に有意差がみられた($F(1,24)=5.14$, $p=.033$, $\eta^2=.18$)。(図 1)

両群間で気分に有意な差はみられなかった($F(1,24)=.62$, n.s.)。

実験群において VAS に記されたくすぐったさの程度と椅子の距離との間に有意な相関はみられなかった($r=-.32$, n.s.)。

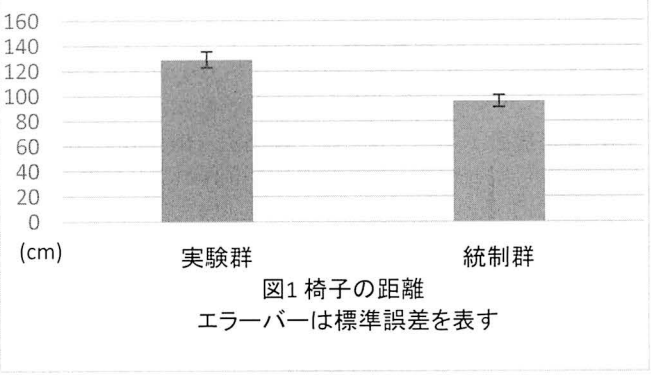


図1 椅子の距離
エラーバーは標準誤差を表す

考察

実験群は統制群と比べて有意に椅子を離して置いた。このことは「くすぐったい」という source 概念の活性化によって生じた「恥ずかしさ」という target 概念の活性化が会話時の椅子を離して置くという実際の行動面に表れたと考えられ、仮説は支持されたといえる。

両群間で気分の差はなかったことから椅子の距離を離して置いたのはくすぐられたことによる意識的な不快感から生じたとは考えられない。実際、target 概念と source 概念の結びつきは自動的で無意識的なものだとされている(Hewson, 2011; Wang & Lu, 2011; Núñez, Edwards, & Matos, 1999)。したがって今後は潜在的な態度を測ることが望まれる。

また本研究では、男性の実験者が友人ではない男性の参加者らに対してくすぐり刺激を与えた。山口(2006)で述べられているように、くすぐったさは不快と快の入り混じった感覚であり、親密な人間関係とも関わりのある感覚であるとされている。ゆえに例えば仲の良いもの同士でくすぐり刺激を与えあった場合には今回の実験とは異なった結果が得られる可能性も考えられる。

謝辞

本研究をまとめるにあたり甲子園大学心理学部の金綱知征先生・上野大介先生にご指導いただいた。ここに感謝の意を表する。

(おかむらやすと)

高齢者の交通場面における注意機能

○小菅　英恵[1)]　佐藤　七瀬[1)]　熊谷　恵子[2)]
([1)]筑波大学大学院　[2)]筑波大学)
キーワード：空間的注意，注意切り替え，見落とし（チェンジブラインドネス），復帰抑制

【研究の目的】

ある場から他の場への能動的な移動は，空間的選択機能，すなわち注意の移動・解放・集中の繰り返しによって遂行される。本研究ではこれら注意機能に関連する以下の課題タイプを設定し，特に加齢により注意機能が低下する高齢者を対象に，移動時の不注意との関連を確認する。また各注意機能が高齢者の注意不全の特徴としてどのようにあらわれるのかを探索的に検討する。

【方法】

調査参加者：都内シルバー人材センターの登録者および郊外居住高齢者 46 名（70.74±5.73 歳，男性 23 名・女性 23 名）。
実験課題：刺激提示，反応時間・タッチの座標軸などの計測・記録は，iPad 4th generation（アップル社製）に搭載したアプリケーション（ジェナ社製）で制御した。**(1) 空間的情報選択**：先行手がかり法（Posner,1980）に基づき，感情的刺激を手がかりに，画面上ランダムな位置に提示される標的刺激に反応する。**(2) 注意切替**：ＣＤＣＴ（大橋・行場・守川，1999）を参考に，複合パタン刺激の 2 つの文字同士の階層（全体・部分）の一致性をランダム提示の指示に従い判断する。**(3) 変化検出**：フリッカー変化検出法（Rensink,2000）による，元の写真とその一部が変化した写真が交互に提示され，変化を検出する。
移動時注意不全チェックシート：4 因子 30 問から成る質問紙。過去 1 年間に生じた移動時の不注意について 6 件法（「1：全く無かった」～「6：非常によくあった」）で回答する。
手続き：小集団で，実験課題の練習後，本施行を実施した。

【結果】

1．各注意課題の成績と移動時注意不全得点の関係：実験課題ごと課題全体の得点の平均値を基準に，＋1SD を高，-1SD を低，それ以外を中の 3 群に分け，各群のチェックシートの得点について分散分析を行なった。どの注意機能でも有意差はみられなかったが，注意切替・変化検出課題の成績が高くなるにつれ，注意不全得点が低下する傾向を示した（Fig.1）。
2．各注意課題の成績：反応時間及び画像切替回数は，誤答・無反応の施行を分析から除外した。**(1) 空間的情報選択**：手がかり（快・不快）×刺激位置（一致・不一致）の分散分析の結果，不快な手がかりは快に比べ有意に正答率が低下し，無反応率が高かった。RT は交互作用が有意傾向であり，不快手がかりで一致の RT が有意に遅延した。**(2)注意切替**：文字の階層的処理（全体・部分）の分散分析の結果，全体文字の処理は部分文字に比べ有意に正答率が低く，無反応率が高い傾向であった。また，全体文字の処理は RT が有意に遅延した。注意切り替えの方向性（部分から全体・全体から部分）の分散分析の結果，全てにおいて有意差はみられなかった。**(3)変化検出**：場面内の対象への注意補足（集中場面・分散場面）の分散分析の結果（Fig.2），正答率・無反応率に有意差はみられなかったが，画像切替回数では，集中場面は分散場面に比べ有意に回数が多かった。また，変化の種類（消失・追加・移動）の分散分析の結果（Fig.3），追加は消失よりも正答が低下し無反応率が高かった。消失・追加は移動に比べ正答率が低く，追加は消失・移動に比べ無反応率が高かった。画像切替回数では，追加は移動に比べ回数が多く，追加・移動は消失に比べ回数が多かった。

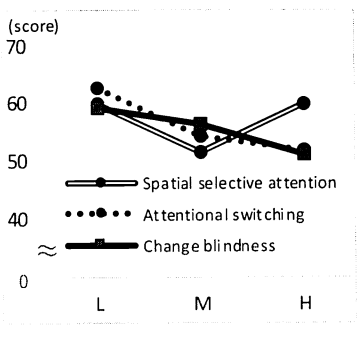


Fig.1 各注意課題と質問紙得点

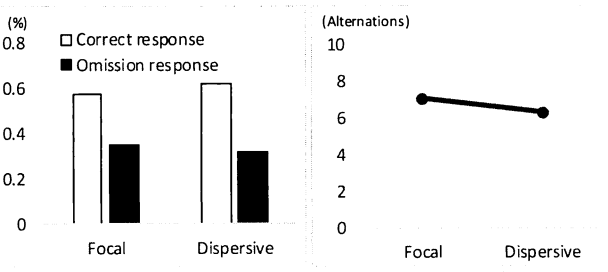


Fig.2.　場面内の対象への注意補足による変化検出

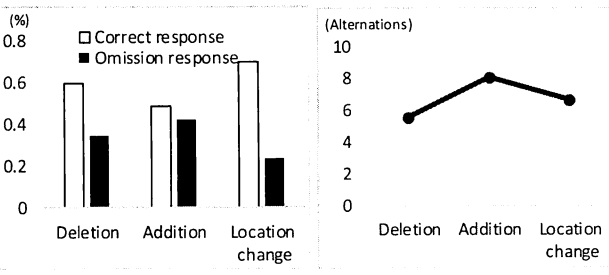


Fig.3.　変化の種類による変化検出

【考察】

本結果から，高齢者の移動時に自覚する不注意は，注意の切り替え，変化検出が関わることが示唆された。交通場面は時々刻々と変化する状況で，刺激の複数階層に対し柔軟な注意焦点の切り替えが求められる。注意焦点化の切替を行なう視覚作業で大域処理のエラーと処理時間を要したことから，高齢者の移動時の不注意は，局所と大域情報への注意配分の不適切さが影響を及ぼすのかもしれない。また，場面内の特定対象に注意が集中する場面で変化検出の時間がかかり，追加の検出の困難さが明らかとなった。高齢者において急な飛び出しなどの見落としは，割り込まれた注意を解放したり抑制する過程の困難さが関与することを示唆している。

空間的情報選択は，移動時注意不全得点との間に関連は確認できなかったが，高齢者の日常場面の危険感が注意課題のパフォーマンスを向上させること(小菅，2015)は示されている。不快手がかりの影響により空間的情報選択の成績が低下を示した結果は，手がかりにより一度捕捉された注意が，再度同じ空間位置に戻らないよう抑制的に働いた（Klein，2000）と考えられる。このような復帰抑制は，高齢者の交通場面の情報処理効率に関連すると考えられる。今後は日常の移動時の不注意現象と，これら注意機能との関連性について，交通場面という文脈から詳細に検討する必要がある。

（こすげ　はなえ・さとう　ななせ・くまがい　けいこ）

身体満足感と身体可変性との関連

○大村美菜子[1)]・沢宮容子[2)]・小島弥生[3)]
([1)]東京福祉大学学生相談室　[2)]筑波大学大学院人間系　[3)]埼玉学園大学人間学部)
キーワード：身体満足感，身体可変性，青年期

【問題と目的】

内閣府が実施した「平成25年度 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」によると,13歳から29歳までの日本人男女青年が「心配」な事柄として「容姿」を挙げる割合は，調査対象者の半数近く(『心配である』18.1%,『どちらかといえば心配である』32.2%)にのぼる。また「容姿」について『誇りを持っている』と答えた割合も33.4%と低い。そして，複数の先行研究(鍋田, 2004; Phillips, Menarda, & Fay, 2006)において，容姿にこだわりを示す者の特徴として自分の身体に満足していないことが指摘されている。

身体に対する不満足感には，身体全体に対するもののほかに，個々の身体部位に対するものもあることが指摘されている（石原・大澤，2003)。大村ら(2014a)では青年期女子における身体のさまざまな部位に対する満足感について因子分析を行い，「体型」「目」「鼻・口」「肌」「髪」の5因子を抽出している。そして，個人内で身体部位ごとの満足感が同一ではないことを示している。さらに，大村ら（2014b）は，青年期女子の個々の身体部位への可変性に対する認知と満足感との間にどのような関連がみられるか検討し，「肌」，「髪」，「鼻・口」の3部位について，変えにくいと認知しているほどその身体部位に満足していないという関係があることを示している。

近年，女性に比べれば少数ながら，青年期男子にも容姿に対するこだわりをもつ者が増えてきていることが報告されている（内閣府政策統括官，2014)。そこで本研究では，身体部位への可変性に対する認知と満足感との間にどのような関連がみられるかに関して男女の共通点と相違点を検討することを目的とする。なお，身体部位は大村ら（2014a）にならい，「体型」「目」「鼻・口」「肌」「髪」の5つとする。

【方法】

調査対象・時期：女子学生342名および男子学生197名を対象に，2013年7月～10月および2014年7月に，授業時間内の一部を用いて調査を行なった。

分析に用いた尺度：

①身体満足感に関する項目群（32項目）

枡田・牛田・永野（1992）が，自己の身体に対してもつ満足度を測定するために考案した「身体カセクシススケール」の26項目に,新たに6項目を付け加えた計32項目について，全く満足していない～満足しているの5段階評定で尋ねた。なお，大村ら(2014a)の因子分析の結果を参照し，32項目のうち26項目を分析に用い,「体型」(10項目),「目」(3項目),「鼻・口」(4項目),「肌」(6項目),「髪」(3項目）の5つの身体部位について満足感得点を算出した。項目の評定値を単純加算し，数値が大きいほど身体部位への満足感が高くなるよう得点化した。

②身体可変性に関する項目群（32項目）

上記の満足感を尋ねた32項目と同じ項目について，“自分の外見をどの程度変えられると思いますか”という教示文を提示し可変性に対する認知（以下，可変性認知とする）の程度を尋ねた。回答は“非常に変えやすい”から“非常に変えにくい”までの5段階評定とした。満足感同様，項目の評定値を単純加算し，数値が高いほどその身体部位を変えやすいと認知しているよう得点化した。

【結果と考察】

5つの身体部位のそれぞれについて，満足感得点と可変性認知得点との相関係数を算出した（Table 1)。

Table 1 身体満足感と身体可変性との相関係数

	男性	女性
体型	.122	.138 *
目	.023	.102
肌	.241 **	.293 **
鼻・口	.084	.195 **
髪	.068	.205 **

男性では「肌」に対する満足感と可変性認知との間に r=.24 (p<.01)と正の相関が認められた。一方で「体型」「目」「鼻・口」「髪」に対する満足感と可変性認知との間には有意な相関は認められなかった（それぞれ順に r=.12, .02, .08, .07；いずれも *ns.*)。女性では「体型」に対する満足感と可変性認知との間に r=.14 (p<.05),「肌」に対する満足感と可変性認知との間に r=.29 (p<.01),「鼻・口」に対する満足感と可変性認知との間に r=.20 (p<.01),「髪」に対する満足感と可変性認知との間に r=.21 (p<.01)と，それぞれ弱いから中程度の正の相関が認められた。一方で「目」に対する満足感と可変性認知との間には相関は認められなかった（r=.10, *ns*)。

男女ともに「肌」に対する可変性認知と満足感に有意な正の相関関係がみられた。すなわち，肌を変えにくいと思っているほど肌に不満足感を抱いていることが明らかになった。「肌」は，男女ともにスキンケアや規則正しい生活で日々変化するため，調子が悪いと満足感も低下しやすい身体部位であることが考えられる。一方で,「体型」「鼻・口」「髪」の3部位については男女で相関のパターンが異なっており，女性では「肌」同様に，変えにくいと思っているほど，これらの身体部位へ不満足感を抱いていたが，男性ではそのような関連は見られなかった。中でも女性において相対的に相関係数の大きかった「髪」については，女性のヘアスタイルが男性以上に多様であることが満足・不満足を左右することが考えられる。女性にとっては「髪」は「肌」同様，より変化が可能な身体部位であるからこそ，状態が悪い場合に満足感が低下することが考えられる。

【主な引用文献】

Minako OHMURA, Yayoi KOJIMA, Yojiro NAKATA and Yoko SAWAMIYA (2014a). Beautiful skin hide all faults -Effects of body satisfaction on self-esteem and shyness in Japanese female youth - International Journal of Psychology and Counselling, Vol.7(3), 47-53.／大村美菜子・小島弥生・中田洋二郎・沢宮容子(2014b). 青年期女子の身体可変性への認知と身体満足感との関連 埼玉工業大学人間社会学部紀要 第12号 35-40.

(おおむら みなこ・さわみや ようこ・こじま やよい)

記憶術の習得過程に関する事例研究

藤田　勉
（長野県短期大学幼児教育学科）
キーワード：記憶術，数のとめくぎ法，短期大学生

【研究の目的】

担当する「教育心理学」の授業の中で記憶術をとりあげ，学生が記憶術を習得できるよう指導している。記憶術には，場所法，数のとめくぎ法，物語構成法，チャンキング，ごろ合わせなどの方法があるが（椎名，1983），本研究では，数のとめくぎ法を用いて単語のリストを記銘させる課題を計4回学生に課し，それに対する想起項目数を指標として，記憶術習得の過程を検討した。

【方法】

被験者：短期大学幼児教育学科の専門教育科目「教育心理学」（2年次配当，半期，選択1単位）を受講した学生115名（平成25年度38名，平成26年度37名，平成27年度40名）。「教育心理学」は保育士資格を取得するための必修科目である。

手続き：50項目からなる単語リストを記銘する記憶力テストを各年度4回ずつ実施し，平均想起項目数の推移を調べた。記憶力テストでは，教員が約5秒に1項目のペースで50の単語を読み上げ，すべての単語を読み終えた後に所定の用紙に想起できた単語を記入させた（系列再生法）。教員が単語を読み上げる際には，「○番，○○」というように単語の前に項目番号をつけて読み上げた。第1回目の記憶力テストは，記憶術について解説する前に行い（ベースライン），その後記憶に関する基本的な事項の説明と心理学的研究の紹介をしてから，記憶術の具体的方法について演習を交えて説明した。第2回目以降の記憶力テストは記憶術解説後の3回の授業の中で実施した。授業では5種類の記憶術について説明したが，記憶力テストの単語リストを記銘する際には数のとめくぎ法を用いるよう指示した。数のとめくぎ法は，あらかじめ1～50までの数字に対応する基礎リストを作成させ（「1. いちご」，「2. にんじん」，「3. サンタクロース」など数字から容易に連想できる単語が基礎リストとなる），イメージを使ってそれらと記銘する項目を結びつける方法である。

【結果および考察】

年度ごとの結果を図1～3に示す。図1が平成25年度の結果，図2が平成26年度の結果，図3が平成27年度の結果である。各図では，横軸に記憶力テストの実施日，縦軸に平均想起項目数がとられている。

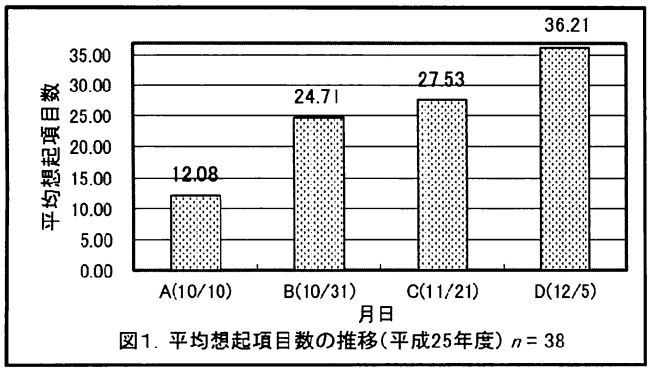


図1．平均想起項目数の推移（平成25年度）n = 38

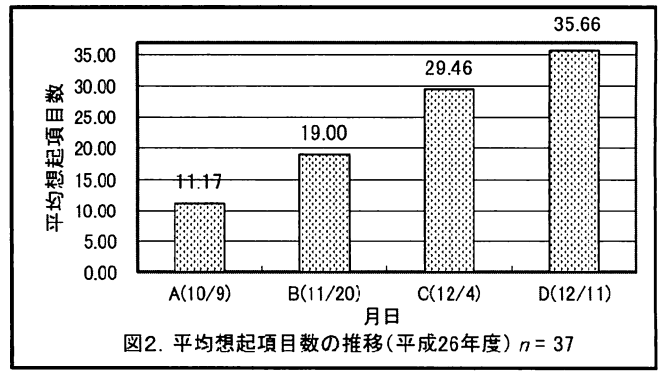


図2．平均想起項目数の推移（平成26年度）n = 37

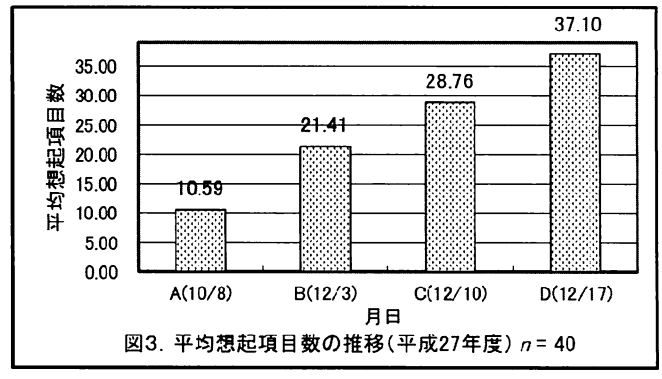


図3．平均想起項目数の推移（平成27年度）n = 40

図1～図3をみても明らかなように，各年度とも被験者の平均想起項目数は記憶力テストの回を重ねるごとに増加しているのがわかる。記憶術について解説する前の平均想起項目数（図中A）をベースラインとし，それと第2回目の記憶力テスト（図中B），第3回目の記憶力テスト（図中C），第4回目の記憶力テスト（図中D）の平均想起項目数との間で平均値の差の検定を行ったところ（AとBの差，AとCの差，AとDの差の検定），すべてのケースで統計的に有意差がみられた（p<.01）。各年度とも受講生が記憶術に習熟していく様子をみてとることができる。

記憶に関して苦手意識をもつ学生が多いが，本研究の結果からもわかるように，記憶術に関する短期間の指導で学生の記憶力は大幅に向上する。アメリカでは記憶術を利用して子どもたちに単語の学習をさせる著書がベストセラーになるなど，記憶術は一般的になっている（Max & Burchers, 2013）。我が国においても記憶術を教育現場に積極的に導入するためには，記憶術の有用性に関する実証的な研究が必要であると思われる。

【引用文献】

Max, S., and Burchers, B. (2013). Vocabulary cartoons: Kids learn a word a minute and never forget it. New Monic Books, Punta Gorda, FL

椎名健（1983）．記憶術：忘れないための整頓術　小川捷之・椎名健（編）　心理学パッケージPart 2：心の世界の扉を開く　pp.78-81.

（ふじた　つとむ）

成長感と自尊感情および自己意識との関連

佐藤　舞
（早稲田大学大学院文学研究科）
キーワード：成長感，自尊感情，自己意識

【研究の目的】 人は他者との社会的比較によって，自らが何らかの面で優れている，あるいは劣っていると判断する。このとき，他者に対する優越の認知は，自分には価値があるという自尊感情に結びつく。しかし一方で，人は自分自身との経時的比較によって，自らの優劣を評価することがある。すなわち，過去の自分よりも優れているかどうかという成長の感覚である。本研究では，成長感を現在の自己認識と過去の自己認識との差として捉え，成長感が自尊感情とどのように関連するか調べることを目的とする。また，自己認識を問題とするにあたって，自分自身への注意の向けやすさである自己意識との関連もあわせて検討する。

【方法】 大学生 114 名を対象とし，個別に質問紙を配布して回答を求めた。質問紙の構成は以下の通りである。(1) 成長感：山本・松井・山成（1982）の自己認知の諸側面測定尺度から「社交」，「スポーツ能力」，「知性」，「優しさ」，「趣味や特技」，「まじめさ」の 6 因子各 3 項目計 18 項目を抜粋して用いた。各項目について「高校生の時の自分」および「現在のあなた自身」にどの程度あてはまるか 5 段階評定で尋ねた。(2) 自尊感情：山本他（1982）の自尊感情尺度 1 因子 10 項目を一部改訂し，5 段階評定で尋ねた。(3) 自己意識：菅原（1984）の自己意識尺度を用いた。「公的自己意識」因子 11 項目と「私的自己意識」因子 10 項目について，自分がどの程度あてはまっているか 7 段階評定で尋ねた。

【結果】 すべての尺度について，主因子法による因子分析を行った。1 因子構造を示した自尊感情尺度を除いては，プロマックス回転を行った。因子負荷量.30 を基準として，設定された通りの因子構造が得られた。各因子を構成する項目の平均値を下位尺度得点として，以降の分析を行った。まず，過去と現在の自己認識に差があるか確認するため，性別×時期の 2 要因分散分析を行った。結果を Table 1 に示す。次に，成長感と自尊感情との関連を分析した。自己意識の水準によって関連の強さが異なる可能性が考えられたため，公的・私的自己意識の高低群別に，現在と過去の自己認識の差得点と自尊感情との相関係数を求めた。自己意識の群分けは，下位尺度得点の中央値より低い場合を低群，高い場合を高群とした。結果を Table 2 に示した。

Table 2.自己認識下位尺度の過去と現在における差（成長感）得点と自尊感情との自己意識高低群別相関係数

	公的自己意識		私的自己意識	
成長感	低(n=55)	高(n=59)	低(n=56)	高(n=58)
社交	.030	.004	.081	−.034
優しさ	−.062	.174	.127	.040
まじめさ	.083	.031	−.125	.086
スポーツ能力	−.047	.209	.000	.131
知性	.426 **	−.014	.175	.131
趣味や特技	.410 **	−.154	.109	.141

注1)**p <.01.

【考察】 Table 1 より，「社交」と「優しさ」は大学に入ってから上昇したのに対し，「まじめさ」と「スポーツ能力」は低下していた。「知性」では有意な交互作用効果が見られ，男性は過去よりも現在の方が頭が良いと認識しており，女性は現在よりも過去の方が頭が良いと認識する傾向が見られた。また，Table 2 より，公的自己意識が低い場合に，「知性」と「趣味や特技」のみ自尊感情との相関係数が有意であった。つまり，より「頭が良くなった」，「趣味や特技に自信がもてるようになった」と感じているほど自尊感情が高いという関係が，他者の目に映る自分をあまり気にしない者においてのみ見られた。よって，公的自己意識は一部の成長感と自尊感情の関連を調整していた。成長感を感じられれば自尊感情が高まるわけではなく，たとえ過去の自分自身との内的な比較であっても，外的な他者からどう見られるかを気にしやすいか否かによって，「自分は昔から見れば成長したが，それでも他人から見ればまだまだかもしれない」というように自尊感情との関連が見られなくなる可能性が示唆された。

【引用文献】

菅原健介 1984 自意識尺度（self-consciousness scale）日本語版作成の試み．心理学研究, 55, 184-188.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

（さとう まい）

Table 1. 自己認識得点の時期・性別平均値と標準偏差

	男性(n=44)				女性(n=70)				F(1, 112)		
	高校		大学		高校		大学		時期	性別	交互作用
社交	3.11	(1.21)	3.58	(1.02)	2.91	(1.07)	3.40	(0.98)	23.68 **	*n.s.*	*n.s.*
優しさ	3.80	(0.84)	4.01	(0.74)	3.64	(0.83)	3.76	(0.75)	6.66 *	*n.s.*	*n.s.*
まじめさ	3.40	(0.69)	3.20	(0.80)	3.37	(0.88)	3.27	(0.90)	6.78 *	*n.s.*	*n.s.*
スポーツ能力	3.30	(1.26)	2.76	(1.18)	2.56	(1.25)	2.26	(1.09)	37.59 **	8.07 **	*n.s.*
知性	3.16	(0.79)	3.32	(0.87)	3.04	(0.92)	2.74	(0.98)	*n.s.*	4.81 *	10.06 **
趣味や特技	3.39	(1.13)	3.44	(1.08)	3.33	(1.10)	3.16	(1.11)	*n.s.*	*n.s.*	*n.s.*

注1)*p <.05, **p <.01.
注2)( )内は標準偏差.

大学生の食事マナーと過去の食習慣等との関連

―心的特性を含めた分析―

亀岡　聖朗
（桐生大学医療保健学部）

キーワード：食事マナー，食への躾，自意識

【研究の目的】 近年、人々の食事マナーの乱れが指摘されることがある。食事マナーは、それを身につけている者ほど家族全員で夕食を食べる頻度が高い(内閣府,2010)など、食生活とのかかわりが大きいと考えられ、子どもが育つ家庭環境や、公的な場所で他者からどう見られるかを気にする傾向、そして、その中でどの程度自分の考えに基づいて行動するかという自己意識の問題ともかかわると考えられる。そこで本研究では、現在の食事マナーに影響する要因として、過去の食事習慣、家庭での親との関係、心的特性としての自己意識に注目し、その関連を検討することを目的とした。

【方法】 **調査項目**：(1)プロフィール項目(性別、年齢、朝食と夕食の過去の習慣、誰と食べていたか、1週間にどの程度家族全員と食べていたか)。(2)過去の食事内容：6項目。(3)子どものころの食事に対する躾：15項目(乾ら,2010)。(4)現在の食事マナー：15項目(乾ら，2010)。(5)箸の持ち方(独立行政法人日本スポーツ振興センター,2007)。(6)箸の持ち方の躾の時期。(7)親との愛着の程度：15項目(李,2006)。(8)自意識尺度(公的自意識11項目、私的自意識10項目)(菅原,1984)。このうち本報告では、(3)(4)(7)(8)を扱う。これらの尺度は、値が高いほど食事の躾を受けた、マナーが身についている、親との愛着の程度が強い、自意識が高いことを示す。
調査対象者：大学生158名(平均年齢20.3歳、*SD*=1.18)。
調査手続：集団での質問紙調査。調査概要と、匿名での回答とする旨等を説明、同意が得られた者を対象として平成26年11月から12月に実施した。
結果の処理：(3)(4)(7)(8)の結果をすべて数値化して分析した。各尺度で合計得点を算出し、各尺度の評定段階の違いを考慮して標準化した値(偏差値：平均50、標準偏差10)を算出、それに基づき以下の分析を行った。
相関分析；(4)の現在の食事マナーと、(3)の子どものころの食事に対する躾、(7)の親との愛着の程度、(8)の公的、私的自意識得点との相関係数を算出、相関の強さから関連を検討した。
G-P分析；(4)の合計得点でマナーが身についている上位25%(上位群38名)、そうでもない下位25%(下位群44名)を抽出し、(3)(7)(8)における相違を*t*検定により比較した。
倫理的配慮：本調査は、筆者所属大学の倫理委員会の審査を受け、承認を得てたうえで実施された。

【結果】 **現在の食事マナーに影響する要因(相関分析)**：食事マナーと子どものころの躾との間に強い正の相関がみられた(*r*=.82)。続いて公的自意識(負の相関)との相関係数が高かったが(*r*=-.19)、子どものころの躾以外の変数との相関はみられなかった。
現在の食事マナー上位群と下位群の比較(G-P分析)：食事マナー上位群と下位群で各尺度の値を比較したところ、公的自意識のみ下位群の方が上位群より値が高かった(図1)。*t*検定の結果、子どものころの躾で上位群が下位群よりも有意に高く(*t*(63)=13.28，*p*<.05)、公的自意識で下位群が上位群よりも有意に高かった(*t*(80)=2.68，*p*<.05)。親への愛着、私的自意識では有意差はみられなかった。

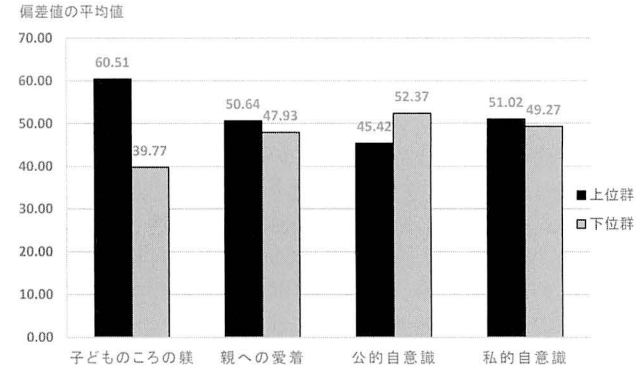


図1　各尺度における食事マナー上位群・下位群の比較

【考察】 食事マナーと子どものころの躾との相関係数が最も高かった。この結果から、子どものころの躾が現在の食事マナーの基盤となっていることが考えられた。他に特徴的だったのは、食事マナーと公的自意識との間に負の相関がみられたことである。相関係数の値は低いが、これは食事マナーが高い(低い)と公的自意識が低い(高い)関係を示唆し、相反する関係があることが推察される。

G-P分析の結果をみると、公的自意識で下位群が上位群よりも有意に高い値を示している。公的自意識が高い人は、対人場面で自己の行動をコントロールし、他者に与える印象を操作しようとする傾向の強さを示す研究があるとの指摘がある(菅原,1986)。このことから、下位群は子どものころの躾が上位群に比べて身についておらず、公的自意識が高いことで(図1)、マナーを守ることへの自己の規範が弱いと推察された。つまり、雰囲気に流されやすく、場面によってマナーを守ったり守らなかったりすることが多いと考えられた。一方、上位群は子どものころの躾が身についており、公的自己意識が下位群に比べて低いことから、マナーを守ることへの自己の規範が強いのではないかと考えられた。

【引用文献】

独行政法人日本スポーツ振興センター 2007 平成17年度児童生徒の食生活等実態調査報告書
乾陽子・前澤いすず・三浦彩・山田芳子 2010 高校生の食生活の実態 鈴鹿短期大学紀要, 30, 219-230
内閣府 2010 食事に関する習慣と規範意識に関する調査報告書
<http://www8.cao.go.jp/syokuiku/more/research/h21/netchosa/index.html>(2014/11/18アクセス)
李和貞 2006 青年の父・母へのアタッチメント表象と自尊感情の関係．早稲田大学教育学部学術研究(教育心理学編)，54, 35-45
菅原健介 1984 自意識尺度(self-consciousness scale)日本語版作成の試み 心理学研究, 55(3), 184-188
菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求－公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について－心理学研究, 57(3), 134-140

（かめおか　せいろう）

小学校内での負傷予防を目指した安全教育の有効性検証

― 校内版「ひなどり」の有効性評価 ―

○中井　宏[1)]　岡　真裕美[2)]　臼井伸之介[2)]　森泉慎吾[2)]
([1)]東海学院大学人間関係学部　[2)]大阪大学大学院人間科学研究科)
キーワード：安全教育、負傷予防、子ども、教育効果

【背景と目的】これまでに、目標設定理論や実行意図を理論的背景とし、児童自らが危険な状況を見つけ、事故や負傷を防ぐための具体的な行動目標を立て、その目標をピクトグラムにして様々な箇所に掲示する一連の安全教育プログラム「ひなどり」(e.g., 中井, 2015; 中井・岡・臼井, 2014) を開発した。本稿では、特に学校内での負傷予防を目的とした校内版ひなどりの効果測定について報告する。

【方法】校内版ひなどりでは、まず学校内の危険状況を児童に考えてもらい、当該状況での怪我を防止するための具体的な行動目標を設定させる。次に、各自が設定した行動目標をピクトグラムに表し、作成した作品を自身の手で掲示させた。

教育対象は、大阪府内の市立小学校の 4 年生 64 名（男児 37 名、女児 27 名）であった。2014 年 10 月 8 日の 2 コマで、危険状況の発見と行動目標の設定、ピクトグラム案の下書きを行い、10 日の 2 コマで画用紙にマジックで作品を完成させた（のべ 105 作品）。また 26 日の 1 コマで、ラミネートされた作品をクラスメイトに発表後、校内各所に作品を掲示した。

教育効果は、不安全行動の頻度に関する自己報告と、負傷で保健室を訪ねた児童数の変化から検証した。また教育の波及効果を検討するため、3 年生と 5 年生にも質問紙調査を行った。質問紙は、教育実施直前と 1 ヶ月後の 2 回、各学級の担任教諭から配付され、記入後の提出を求めた。図 1 の 5 項目について「1：ぜんぜんない」から「4：よくある」の 4 件法で、約 1 ヶ月間を振り返るよう求めた。問⑤については、逆転項目として処理した。前後比較のため、2 回の質問紙には学年とクラス、出席番号の記入を求めた。

校内での負傷件数の推移から教育効果を検証するため、怪我を訴えて保健室を訪ねた児童数の記録（養護教諭による手書きノート）を分析した。教育前後の 20 登校日分について、学年ごとに来室のべ人数を抽出した。なお、負傷の頻度に学年間差が見られる可能性が想定されたため、さらに学校行事や単元進捗による負傷の季節変動も考慮し、教育前年（2013 年）の同期間についてもデータ収集を行った。

なお本研究は、著者ら所属機関の倫理審査委員会の承認と学校長らの同意を得て行われた。

【結果】質問紙の分析には 3 年生 56 名、4 年生 64 名、5 年生 59 名のデータを用いた。5 項目それぞれについて、調査時期 2 水準と学年 3 水準を要因とした 2 要因分散分析を行ったところ、問③の机や椅子、ロッカーなどの上にのぼる行動についてのみ、時期の主効果が有意であり ($F(1, 176) = 8.36, p < .01, \eta^2 = .02$)、教育前よりも教育後のほうが不安全な行動の頻度が有意に高くなった。なお、問②を除く 4 項目で、学年の主効果が有意であり、高学年ほど不安全行動をしていた。

表 1 は、教育実施前後の 20 登校日と、前年同時期の保健室来室者数を、学年別に集計したものである。2013 年の 3 年生が、2014 年の 4 年生であり、この学年はその前後の学年に比して、負傷者数がもともと少ない傾向が見られた。2013 年は、9 月 6 日～10 月 7 日までに保健室を訪ねた 2～5 年生はのべ 105 名、10 月 29 日～11 月 26 日はのべ 141 名（9 月 6 日～10 月 7 日に比べ 34%増）であった。一方で 2014 年は、教育前に保健室を訪ねた 2～5 年生はのべ 135 名、教育後はのべ 131 名（教育前に比して 3%減）であった。学年別に見ると、4 年生は、31 名から 16 名へほぼ半減した。他学年では、2 年生と 3 年生で 30～40%増加、5 年生は 14%減少だった。

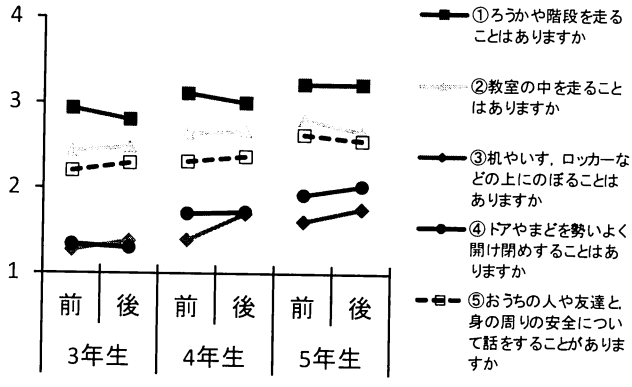


図 1 教育前後の不安全行動の頻度

表 1 学年別の保健室来室数変化

2013年				2014年		
	9/6～10/7	10/29～11/26			教育前	教育後
				2年生	21	29 +38%
2年生	38	52 +37%		3年生	33	43 +30%
3年生	14	29 +107%		4年生	31	16 -48%
4年生	33	42 +27%		5年生	50	43 -14%
5年生	20	18 -10%				

【考察】不安全行動の自己報告の面では有効性は確認されなかった。教育前後において、どの学年にも不安全行動の減少は見られず、机や椅子、ロッカーなどの上にのぼるという行動は教育後にかえって増加した。しかし一方で、負傷を原因に保健室を訪ねた児童数は、4 年生において半減した。前年同時期の来室者数推移を考慮すると、校内版ひなどりの実施により、負傷者数が減少した可能性も考えられる。ただし前年同時期ほどではないが、増加した学年もあり、学校内の広範囲にピクトグラム作品を掲示したものの、他学年への波及効果は極めて限定的であった。すなわち、掲示作品を見るだけでは校内版ひなどりの効果はなく、「危険箇所を自ら発見する」、「自身で具体的な行動目標を立てる」、「目標を作品にする」、「クラスメイトなどの人前で発表する」、「作品を自身の手で掲示する」という一連の流れ、あるいはその一部に、直接関与する必要があると考えられる。この点は、教育プログラム開発の理論的根拠とした目標設定理論や実行意図の重要性を、強調する結果とも言える。

【引用文献】

中井　宏 2015 児童に対する安全教育の実践 日本交通心理学会第 80 回大会発表論文集, 26–29.
中井　宏・岡　真裕美・臼井伸之介 2014 小学校における安全教育プログラム「校内版ひなどり」の実践 日本人間工学会 H26 年度中四国支部・関西支部合同大会論文集, 140–141.

（なかい ひろし・おか まゆみ・うすい しんのすけ・もりいずみ しんご）

机上名札提示による授業中の私語抑制効果に関する考察

濱　保久
（北星学園大学文学部 心理・応用コミュニケーション学科）
キーワード：授業中の私語、名札提示、抑制効果

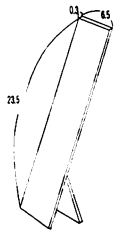
【目　　的】

北星学園大学心理・応用コミュニケーション学科では毎年新入生全員に机の上に置くことができる名札（横 6.5 センチ、縦 23.5 センチ）を配布し学科の授業に際してはその名札を机の上に置くよう指導している。定員 90 名の学科なのでたとえ最後列に着席している学生の名札であっても教壇から読み取ることができる。表向きは、できるだけ早く学生諸君の顔と名前を一致させたいという理由で説明しているが、実は匿名集団意識を崩壊させ一人ひとりが教員から個別的に認識されているという意識を学生諸君にもたせて私語発生を予防しようという隠れた目的を有している。

何年も前から全国的に問題となっている大学の講義中の私語抑制に対してこの名札提示がもつ効果を検証することが本研究の目的である。

【方　　法】

提示名札：



心理・応用コミュニケーション学科では、建築系フィールド実習の練習課題として 2 年生が 4 ミリシナベニアを用いて左図のような自立式名札を全新入生分作成している。この表面に大きな太文字のフォントで氏名を印刷した透明フィルムを張り付ける。教室最後列に着席している学生の氏名も判読可能である。

被調査者：北星学園大学生 92 名（男子：33 名、女子 58 名、不明 1 名）

調査時期：2008 年 7 月 17 日

調査方法：授業中に調査票を配布し記入させたうえで回収した（有効回答率 100%）。

質問項目：授業中に名札を提示している程度（学科の新入生には学科学生だけが受ける講義時には基本的に名札を机上に提示するよう指示しているが必ずしも完全に守られているわけではない）、授業中の私語発生程度、授業中に自分が私語を発生させている程度、名札を提示することで自分自身の私語発生が抑制されている程度、名札を提示することで他の学生が私語を抑制していると思われる程度、についてすべて 7 件法で回答を求めた。

それ以外の質問項目には、高校時代の授業中私語行動や大学入学後の授業態度、交友関係、推測する自分の当該授業科目の成績、着席場所、私語発生場所なども含まれているが本報告では分析対象とはしていない。

【結果・考察】

1．名札提示が自分の私語発生に及ぼす効果

まず、「名札をどの程度提示していましたか」という質問（7 件法）において 1,2,3 と回答した被験者を名札提示低郡とし、5,6,7 と回答した被験者を名札提示高群（以下同様）とした。「あなたはこの授業中にどの程度私語をしていましたか」という質問に対する評定値に基づいて t 検定を行ったところ学科専門必修科目においても大学共通科目においても有意な差が認められなかった（M=1.56,SD=.727, M=1.48,SD=.852,t[87]=.362,*n.s.*；M=2.68,SD=1.64, M=3.00,SD=.15,t[82]=.791,*n.s.*）。また、どちらの科目においても両者の間に有意な相関も認められなかった。つまり、事象としての自己の私語発生に対しては名札の提示効果がなかったということになる。そもそも、自己の私語発生程度平均回答値が学科専門科目で 1.55（SD=.93）、大学共通科目で 2.93（SD=1.53）と低い値を示していることから、教員による私語コントロールが名札を提示しているかどうかに関わらず全学生に浸透している可能性が考えられる。

2．名札提示が自己の私語抑制意識に及ぼす効果

1．で述べたように、名札提示は事象としての自己の私語発生に有意な効果を示さなかったわけであるが、私語抑制の意識向上に対しては効果があるのかもしれない。そこで、「では、あなた自身は名札を立てることによって授業中に私語をしなくなったと思いますか」という質問（7 件法）の回答値に基づいて、名札提示低郡と名札提示高群の間で t 検定を行ったところ学科専門科目においては有意な差が認められなかった（M=2.19,SD=1.11,M=2.96,SD=1.82,t[87]=1.63,*n.s.*）。しかし、大学共通科目においては有意な差が確認された（M=2.00,SD=1.11,M=2.72,SD=1.45,t[82]=2.00,p<.05）。

名札掲示が自己の私語抑制に効果を示したのは大学共通科目だけで学科専門科目においては認められなかったということである。つまり、大学共通科目受講学生の中で名札をよく提示している学生は、その自己の名札提示行為のよって自己の私語発生を抑止できていると思っているということである。

3．名札提示が他者の私語抑制意識に及ぼす効果

2．において名札提示が自己の私語抑制意識に及ぼす効果は一部検証されたわけであるが、次に他者の私語抑制意識に対する効果を検証するために「あなたの周りの人は、名札を立てることによって授業中に私語をしなくなったと思いますか」という質問（7 件法）の回答値に基づいて、名札提示低郡と名札提示高群の間で t 検定を行ったところ学科専門科目と大学共通科目の両者において有意な差が認められた（M=2.13,SD=.96,M=3.23,SD=1.72,t[87]=2.49, p＜.05；M=1.84,SD=.90,M=2.66,SD=1.43,t[82]=2.36,p<.05）。

つまり、名札をよく提示している学生はそうでない学生に比べて、他の学生が名札を立てる行為によってその学生が自ら私語を抑制している可能性をより高く見積もっているということである。

【まとめ】

本研究では机上に名札を提示することが私語抑制や私語抑制意識におよぼす効果を明らかにした。名札の提示程度によって学生を名札提示高群と名札提示低郡に 2 分し、両者の間で比較検証を行ったところ自分自身の私語発生においては有意が差がなかったが、私語抑制意識に対しては有意な差が認められた。とりわけ、名札提示高群の学生は名札を提示することで他の学生が自分の私語抑制を意識するようになると考える傾向を示した。このことは名札提示高群の学生は規範の成立を期待して自ら積極的に名札を提示している可能性も示唆していると考えられる。

本研究の遂行にあたり、佐藤綾香氏の多大なる協力を得た。ここに記して謝意を表す。　　（はま　やすひさ）

首尾一貫感覚の3要素の組み合わせに関する探索的研究

～友人関係態度、ストレス・コーピングと日常いらだちとの関係から～

○銅直　優子[1)]
([1)] 流通科学大学　人間社会学部　人間社会学科)

キーワード：首尾一貫感覚（SOC)、3要素、友人関係態度、ストレス・コーピング、日常いらだち～

【目的】

ストレスに対処する力として知られている、首尾一貫感覚（Sense of Coherence：SOC）は、Aron Antonovsky（1987）によって提唱された。近年では、わが国でもSOCに関する研究は増えており、その研究の殆どは、把握可能感（Comprehensibility:Co)、処理可能感(Manageability:Ma)と有意味感(Meaningfulness:Me)の3要素の合計得点と他の要因との関連が検討されている。しかしながら、これらの3要素のバランスは個人によって違うと考え3要素の得点の組み合わせを見たところ、いくつかのタイプに分かれることが確認された（銅直,2012)。

そこで、本研究では、SOCの3要素得点の組み合わせによるタイプの分類を行い、探索的研究ではあるが、各タイプの特徴を把握するために友人関係態度、ストレス・コーピング特性と日常で体験するいらだちとの関連を見ていくことを目的とする。

【方法】

対象と調査期間：

対象は、関西私立A大学学生321名（男子：206名、女子115名）であった。調査時期は、2010年から2014年である。

調査用紙：

〔SOCスケール〕Antonovsky(1987)が作成した13項目を山崎らが日本語に翻訳したものを使用した。

〔友人関係態度〕友人関係への態度について尋ねる質問項目である（中園・野島,2003)。「本音・関係深化」、「評価懸念・関心」、「広く・楽しく」、「自己中心的」の4下位尺度から構成された30項目の質問である。

〔General Coping Questionnaire〕ストレス・コーピングの特性を尋ねる質問項目である（佐々木・山崎,2002)。「感情表出」、「情緒的サポート」、「認知的再解釈」、「問題解決」の4下位尺度から構成された32項目の質問である。

〔日常いらだち事〕日常生活のでき事に対するいらだたしさを尋ねる30項目の質問紙である（宗像ら，1986)。

（これらの質問紙は、調査時期が違うため、質問紙によって、対象者数が異なっている。）

【結果と考察】

SOCの3要素得点におけるタイプの分類：

SOCの3要素（Me、Ma、CO）の得点を変量としたグループ内平均連結法によるクラスター分析を行った。その結果6つのクラスターを抽出した。クラスター1は全要素の低い群、クラスター2は全要素がやや低めの群、クラスター3はMeが低い群、クラスター4は3要素全て高くその中でも特にCoが高い群、クラスター5はMeのみが高い群、クラスター6はMeとMaが高い群であった。

友人関係態度、ストレス・コーピングといらだちとの関係：

友人関係態度、ストレス・コーピング特性と日常いらだち事の各尺度得点におけるクラスター間の比較を行うために、1要因の分散分析を行った。基本統計量と分散分析の結果は表1の通りである。

友人関係態度では、クラスター4と6がクラスター1よりも本音・関係深化をとり、クラスター6がクラスター1よりも広く・楽しい関係をとることが分かった。クラスター6は、本音を言い合い深く付き合っていきたいと思っている一方で、広く浅い関係も求めている点で矛盾している。このクラスターは、ストレスフルな出来事に意味があると感じているが、先のことは予測がつかないため動揺しがちな特徴を持つ。つまり、親密な関係を築いていく中で生じるストレスフルなことは意味があると感じているが、関係の中で生じることに対する予測安定感がなくそのことがCoの低さと関係しているのかもしれない。

表1　クラスターごとの友人関係態度、特性ストレスコーピング、日常いらだち毎の基本統計量及び1要因分散分析結果

クラスター			1	2	3	4	5	6	F値 多重比較結果
友人関係	本音・関係深化	N	34	48	26	36	59	30	
		平均値	48.18	52.73	52.58	54.36	53.15	54.90	2.787*
		標準偏差	7.945	7.740	8.391	8.900	8.658	7.743	1<4=6
	評価懸念	平均値	29.41	27.65	27.15	26.11	28.00	27.20	1.452
		標準偏差	4.781	5.063	5.259	6.287	4.931	6.255	
	広く・楽しく	平均値	17.76	19.40	19.77	19.06	20.03	21.60	3.503**
		標準偏差	4.046	3.044	3.468	5.372	3.815	2.799	1<6
	自己中心	平均値	13.85	15.44	14.19	14.11	13.64	13.77	1.579
		標準偏差	3.368	3.293	4.517	4.118	2.845	4.014	
ストレス・コーピング	感情表出	N	23	28	13	28	41	23	
		平均値	24.26	23.93	21.54	22.21	23.95	23.00	0.696
		標準偏差	8.406	4.883	5.158	6.562	4.733	6.060	
	情緒的サポート希求	平均値	26.35	26.25	18.00	21.71	25.85	26.78	6.165***
		標準偏差	7.872	5.622	5.244	6.229	5.543	5.274	3<1=2=5=6,4<6
	認知的再解釈	平均値	20.83	23.82	23.77	24.29	25.39	27.13	3.658**
		標準偏差	6.028	5.354	4.419	6.743	4.165	4.939	1<5=6
	問題解決	平均値	25.78	25.21	26.77	27.21	27.80	28.00	1.925
		標準偏差	4.824	4.281	4.226	4.999	3.076	4.348	
日常いらだち事		N	32	59	27	36	63	40	16.532***
		平均値	24.25	14.61	12.93	8.17	15.22	9.93	2,3,4,5,6<1
		標準偏差	7.923	9.507	7.731	5.695	8.505	7.184	4<2=5　6<5

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

ストレス・コーピング特性については、クラスター1、2、5と6がクラスター3より、またクラスター6がクラスター4よりも情緒的サポートを求め、クラスター5と6がクラスター1よりも認知的再解釈を行うことが分かった。クラスター3のMeの低さとやや高めのCoとMaは、ストレスフルな出来事への意味づけが低く、特に何とか自分で処理できるという感覚があるため、他者からの情緒的サポートを必要としないのかもれない。また、認知的再解釈においては、クラスター5と6はMeが高くCoが低いという点で共通している。外界で起こっていることを理解しがたい感覚がある（低いCo)、一方で積極的に意味づけを行っていく（高いMe）特徴がある。再解釈を行うことでその出来事が自分にとって意味あるものと変換することができ、理解しがたいものを理解するための対処法となっているのかもしれない。

日常いらだち事については、クラスター1が最も得点が高く、クラスター5がクラスター4と6よりも高く、クラスター2がクラスター4よりも高かった。クラスター1が他のクラスターよりも得点が高かったのは、SOCの3要素全てが低いからだと考えてよいであろう。しかし、クラスター4と6で違いが見られなかった点については、MeとMaがある程度高ければ、ストレスフルな出来事に対しては意味があるし、対処できるという感覚から、日々のいらだちを低減することを可能にしているのかもしれない。　（どうべた　ゆうこ）

姿勢に対する評価および意識とQOL

― 成人男女を対象に ―

○鈴木公啓[1)]
([1)]東京未来大学)

キーワード：姿勢，容姿，QOL

【目的】

姿勢は，容姿を構成する要素の1つであり，その面積の大きさからも，自他に及ぼす心理的影響は大きいといえる。従来，姿勢についての研究は，姿勢に対する評価や，姿勢が自身の心身に及ぼす影響などを扱ってきた。姿勢に対する意識などについては，原田（2011）などの研究が認められるが，そこで対象者としているのは，若年層のみに限定されているという問題がある。また，姿勢に対する意識が心身のどのような側面に影響を及ぼしているかは明らかにはなっていない。

本研究は，姿勢に対する自他の評価，意識，そして希望が，QOLとどのように関連しているか明らかにする。

【方法】

対象　日本に居住する20歳から59歳の男女1002名（男性485名，女性517名，平均年齢44.00歳，SD=13.12）を対象とした。なお。年齢層と性別は対象は基本的にはほぼ同数に割り付けて実施したが，実施の都合で，60代が他の年齢層に比べて人数が少なくなっている。

調査内容　姿勢に関する4項目「自己評価：自分は姿勢が良いと思う」，「意識：普段から良い姿勢であるように意識している」，「希望：良い姿勢になりたいと思う」「他者評価：周りの人から姿勢が良いと言われる」に対して，普段の自分にどのくらい当てはまるか「1. まったくあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」の6件法で回答を求めた。また，「日々の生活が充実している」，「自分に満足している」，「今の生活を幸せだと思う」など，QOLを尋ねる6項目について「1. まったくあてはまらない」から「6. とてもあてはまる」の6件法で回答を求め，それらの平均値をQOL得点とした。

調査時期および手続き　2016年5月に調査会社を介してインターネット調査を実施した。なお，回答者にはポイントが付与された。

【結果】

姿勢に関する4項目の記述統計量および相関分析の結果をTable 1に示す。自己評価と他者評価，そして意識の平均値および中央値は理論的中央値よりも低値であった。一方，希望のそれらは，理論的中央値よりも高値であった。また，自己評価と他者評価は強い相関が認められた（r=.75）。自己評価および他者評価は，意識と強い相関が認められた（r=.58および.55）。希望は意識と弱い相関が認められるのみであった（r=.31）。

Table 1　姿勢の項目の記述統計量および相関分析結果

	記述統計量				相関分析		
	平均値	中央値	歪度	尖度	意識	希望	他者評価
自己評価	2.64	3.00	0.50	-0.22	.58	-.04	.75
意識	3.34	3.00	-0.02	-0.41	-	.31	.55
希望	4.59	5.00	-0.77	0.28	.31	-	-.01
他者評価	2.58	3.00	0.54	-0.12	.55	-.01	-

姿勢の4項目とQOLとの相関分析をおこなったところ，自己評価でr=.33，意識でr=.31，希望でr=.14，他者評価でr=.30であった。

これらの結果から，希望はQOLと関連しないこと，そして，自己評価と他者評価がかなり重なりのある事象であることが確認された。そこで，自己評価と意識に焦点をあてて以降の分析をおこなうこととした。

まず，自己評価が調整変数となっているか明らかにするために，QOL得点を目的変数，自己評価と意識の2項目およびその交互作用項を説明変数とした重回帰分析をおこなった。モデルは有意であり（調整済み R^2=.144，F(3,998)=57.35，p<.001），自己評価（β=.21，p<.001），意識（β=.23，p<.001）が有意であった。交互作用項は有意では無かった（β=-.04，$n.s.$）。

次に，自己評価が意識とQOLの媒介変数となっているかを明らかにするために，媒介分析をおこなった。なお，分析にはHAD（清水，2016）を使用した。分析結果をFigure 1に示す。意識からQOLへのパスの値は，自己評価による媒介によって低下したが，自己評価からQOLへのパスの値よりも大きい値であった。

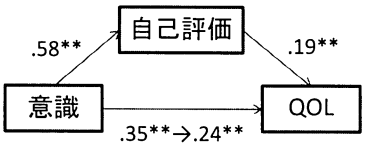


Figure 1　自己評価が意識とQOLを媒介するモデルの媒介分析結果

【考察】本研究により，以下の点が明らかとなった。まず，姿勢についての自身の評価と他者からの評価は強く関連していること，そして，それらの評価は両者ともに悪いことが示された。そして，良い姿勢であることを普段あまり意識していないことが明らかとなった。一方，良い姿勢になりたいという希望はあることも確認された。つまり，良い姿勢になりたいとは思うが，普段は特段それを意識しておらず，そして，良い姿勢を保てていないという現状が示された。また，良い姿勢になりたいという希望は，現状の姿勢にかかわらず多くの者が有していることが示された。

自己評価と意識がQOLと関連していることが示されたため，自己評価が意識とQOLの調整変数である場合と媒介変数である場合の両者について，それぞれ分析をおこなった。その結果，良い姿勢であろうとしている人は，実際に自身を良い姿勢と認識し，それがQOLに関連していること，ただし，良い姿勢であろうとしている人は，実際の姿勢に関わらず，QOLが高いことも併せて示された。

自律的な生活への態度が，良い姿勢であろうとする意識の背景にある可能性が考えられる。今回は，姿勢に関する自己評価や意識を，QOLに関連するものとして扱っている。しかし，背景に自律的な生活への態度というものが存在し，それがQOLと関連しており，そして，姿勢はその自律的な生活への態度の1つの現れである可能性が考えられる。姿勢が人々の中でどのように位置づけられどのような特徴があるのか，さらに検討を進める予定である。

（すずきともひろ）

主観的ウェルビーイングの測度に関する研究（10）

角野 善司
（高崎健康福祉大学 人間発達学部）
キーワード：主観的ウェルビーイング，人生に対する肯定的評価尺度，妥当性

＝ 問題と目的 ＝

主観的ウェルビーイング（subjective well-being）は，幸福についての心理学的研究の鍵概念であり，“ある程度の時間的安定性・状況一貫性をもった，知覚された幸福（角野，1995a,b）”と定義される．

主観的ウェルビーイングの認知-判断的要素として挙げられてきた“人生に対する満足（life satisfaction）”は，専ら過去から現在にかけての人生の評価のみを扱ってきたのに対し，角野(1995a,b,1997,1998)は，過去－現在－未来にわたる人生の主観的評価を“人生に対する肯定的評価”という，主観的ウェルビーイングの新たな下位概念としてとらえ直した．そして，大学生・成人を被験者に研究を行って尺度構成を図り，この尺度が一因子構造をなし，一定水準の信頼性・妥当性をもつことを示した．その後，この尺度を用いて中学生・高校生・大学生を対象に研究を重ね，本学会を中心に報告を行ってきた(角野,2000a,2000b,2001a,2001b,2002,2003,2004, 2005, 2006,2007,2008,2009,2010,2011,2012,2013,2014,2015)．

今回の報告では，大学生を対象とした研究に基づき，非機能的態度尺度（Tajima et al.,2007）およびネガティブな反すう尺度（伊藤・上里,2001）との相関関係から，人生に対する肯定的評価尺度の妥当性に更なる検討を加えることを目的とする．

＝ 方法 ＝

被験者　大学生 152 名（男性 62 名，女性 90 名）
平均年齢 18.80 歳（SD 0.84 歳）

質問紙

1. 人生に対する肯定的評価尺度（角野,1995a,b,1997）：
7 点尺度 12 項目．以下，「本尺度」と表記する．
2. 非機能的態度尺度 24 項目日本語版（Tajima et al.,2007）[Dysfunctional Attitude Scale; DAS24-J]：
7 点尺度 24 項目．ベックの認知療法の理論に基づき，抑うつスキーマを測定するために，Power et al.(1994)が作成した尺度の日本語版である．「達成動機」「セルフコントロール」「他者依存性」の 3 つの下位尺度から構成される．
3. ネガティブな反すう尺度（伊藤・上里,2001）：
6 点尺度 11 項目．否定的なことを繰り返し考えてしまうネガティブな反すうを、「ネガティブな反すう傾向」「ネガティブな反すうのコントロール不可能性」の 2 つの下位尺度から測定する．

＝ 結果と考察 ＝

本尺度と，非機能的態度尺度およびネガティブな反すう尺度との相関係数を，Table 1 に示した．

非機能的態度尺度との関係　単純相関では，本尺度と総得点との間には有意な相関は見られず，達成動機との間に有意な負の相関が得られた．他の下位尺度得点の影響を排した偏相関では，達成動機との間に負の，セルフコントロールとの間に正の有意な相関が認められた．抑うつスキーマの適応的な側面は，普段はポジティブな感情を引き起こしているとも指摘されており，セルフコントロールとの正の相関は，このために生じた可能性が考えられる．

ネガティブな反すう尺度との関係　単純相関・偏相関ともに，本尺度とネガティブな反すう傾向との間に有意な負の相関が認められた．ネガティブな反すうは，うつ状態を生み出す思考パターンであり，今回本尺度がその傾向との間に負の相関を示したことは，Y-G 性格検査の D 尺度（角野,1995b），PHRF-SCL のうつ気分・不全感（角野,2013）との間に負の相関を見出したこれまでの研究とも合致する妥当な結果であったと言えよう．

＝ 文献 ＝

伊藤 拓・上里一郎　2001　ネガティブな反すう尺度の作成およびうつ状態との関連性の検討　カウンセリング研究 34, 31-42.

Tajima M, et al. 2007 Reliability and validity of the Japanese version of the 24-item Dysfunctional Attitude Scale. *Acta Neuropsychiatrica*, 19, 362–367.

＝ 主要な関連発表 ＝

角野善司　1995a 教心第 37 回総会発表論文集, 95.
角野善司　1995b 日心第 59 回大会発表論文集, 23.
角野善司　1997　日心第 61 回大会発表論文集, 83.
角野善司　1998　応心第 65 回大会発表論文集, 149.
角野善司　2013　応心第 80 回大会発表論文集, 86.
※主観的ウェルビーイングの測度に関する研究
第 1 報：応心第 74 回大会（2007）
～第 9 報：応心第 82 回大会（2015）

（すみの　ぜんじ）

Table 1　人生に対する肯定的評価尺度と非機能的態度尺度およびネガティブな反すう尺度との相関係数

非機能的態度	総得点	達成動機	セルフコントロール	他者依存性
	−0.043	−0.169*	0.150	0.025
		(−0.341***)	(0.323***)	(0.079)
		ネガティブな反すう傾向	コントロール不可能性	
ネガティブな反すう		−0.237**	−0.156	
		(−0.180*)	(−0.002)	

注　1) * $p<.05$　** $p<.01$　*** $p<.001$
2) 括弧内の数値は、他の下位尺度得点の影響を排した偏相関係数

学校コミュニティにおける学校マネジメントシステムの開発に関する研究

—A 中学校においての介入実践的研究　生徒を対象に—

○山口　豊一[1)]
([1)]跡見学園女子大学文学部臨床心理学科)
キーワード：学校コミュニティ，心理職活用，介入実践的研究

【研究の目的】

不登校、いじめ、発達障害（ADHD、自閉症スペクトラム障害等）などにより、学校において困難を抱えている児童生徒は多く存在している。昨今、児童生徒の問題が多様化する中で、山本（2011）は、従来の学校の支援システムでは対応しきれないケースが増えてきたと指摘している。学校の中の組織や人だけでは、児童生徒の多様な援助ニーズに応えることに限界があるのである。そこで、学校コミュニティにおける心理職の効果的活用を目的とし、心理職の活用システムの開発のための知見を得ることにした。本研究では、生徒指導部委員会の出席者及び調査協力者の各教員、学校組織の責任者である管理職及びミドルリーダーを対象者に介入を行った。その結果、生徒の学校適応感にどのような影響を及ぼすのかについて検討する。

【方法】

1.　調査協力者

関東圏内 A 中学校に在籍する生徒計 237 名（男子 114 名，女子 122 名，不明 1 名）。（1 年生 74 名：男子 34 名，女子 40 名，2 年生 85 名：男子 41 名，女子 43 名，3 年生 78 名：男子 39 名，女子 39 名）。

2.　調査期間

2015 年 4 月～2016 年 3 月。

3.　調査手続き

調査協力者に対して調査目的及び概要が説明され，同意を得た後に実施された。1 回目（2015 年 4 月）の質問紙調査（プレテスト）の後，調査協力校の生徒指導部委員会に第一著者の心理職が 10 回参加し、心理的な介入（主にコンサルテーション）を行った。その後、心理的な介入が生徒に、間接的にどのような影響を与えるかを明確にするため、2 回目（2016 年 3 月）の質問紙調査（ポストテスト）を行った。

4.　質問項目

①　フェイスシート

性別，学年についてそれぞれ尋ねた.

②　学校生活の適応感を測る尺度（茨城県教育研修センター，2000）：学校への適応感を測定するために用いる。学校生活の「生徒相互の人間関係」，「教師と生徒の人間関係」，「学習意欲」を問う尺度。計 18 項目。「まったく思わない」～「とてもそう思う」の 5 件法で回答を求めた。

【結果と考察】

介入前後の各下位尺度における高群・低群の人数比をカイ 2 乗検定で比較した結果を Table1 に示す。

Table1 学校生活の適応感による人数比（人）

		生徒相互			教師と生徒			学習意欲		
		プレ	ポスト		プレ	ポスト		プレ	ポスト	
1年	高群	46	56	**	53	50		56	41	*
	低群	28	12		21	18		18	27	
2年	高群	55	48		53	31	**	49	30	**
	低群	30	33		32	50		36	51	
3年	高群	44	48		34	39		34	41	
	低群	34	30		44	39		44	37	

*<.05,**<.01

まず、プレテストの平均値で高群・低群に二分し、介入前と介入後の各下位尺度における高群・低群の人数の偏りを、男女別にカイ 2 乗検定で比較した結果、すべての下位尺度において有意な差が見られなかった。

次に、介入前と介入後の各下位尺度をにおける高群・低群の人数の偏りを、学年別にカイ 2 乗検定で比較した結果、1 年生の「生徒相互の人間関係」において、1%水準で有意な差が見られた（χ^2=7.14, df=1, p<.01）。また、「学習意欲」においては、5 %水準で有意な差が見られた（χ^2=3.87, df=1, p<.05）。2 年生においては、「教師と生徒の人間関係」において、1 %水準で有意な差が見られ（χ^2=9.62, df=1, p<.01）、「学習意欲」において、1%水準で有意な差が見られた（χ^2=7.06, df=1, p<.01）。3 年生の下位尺度については、いずれも有意な差が見られなかった。

以上のことについて、まず 1 年生の「生徒相互の人間関係」が介入後に上がった要因は、5 月に行われた遠足に関する助言が、実際の遠足に活かされたためだと推測される。入学して間もない 1 年生が学校行事を通してお互いを知ることで、仲が深まったためだと考えられる。次に、2 年生の「教師と生徒の人間関係」が介入後に低下した要因は、思春期という発達段階が、身近な大人から心理的距離を取り始める時期であり、教師との心理的距離が広まったことによると推察される。そして、1、2 年生の「学習意欲」が介入後に低下したことについては、ポストテスト実施の時期が関係していると考えられる。ポストテスト実施前の 2 月には、学校の定期テストがあり、3 年生は高校受験を控えているため、学習意欲を維持することができたが、1、2 年生はテストに対する不安や不満を持つ生徒が多くいたのではないかと推察される。

心理職が生徒指導部委員会に心理的な介入を行うことで得点が上がったのは、「心理職の有用性」のみであった（山口・新，2016）。そのため、心理職が教師に対して心理的な介入を行うことは、生徒に間接的な影響を与えるに至らなかったと考えられる。

【引用文献】

茨城県教育研修センター　2000　児童生徒の自己実現を援助する学校教育相談の在り方　教育相談の研究第 10 集，研究報告書第 37 号，68－69.

山本健治　2011 学校心理臨床の展開に関する新たな試み　佛教大学大学院紀要，39，139-151.

山口豊一・新彩子　2016　学校コミュニティにおける学校マネジメントシステムの開発に関する研究—A 中学校においての介入実践的研究—　日本カウンセリング学会ポスター発表予定

（やまぐち　とよかず）

ケース引き継ぎのスキーマに関するPAC分析（5）

― 学校臨床における前任者としての事例から ―

○佐藤佑貴　内藤哲雄
（福島学院大学）

キーワード：引き継ぎ，PAC分析，スクールカウンセラー

【研究の目的】心理療法において、セラピスト（以下、Th）の都合によって支援が継続できなくなり、かつ支援の継続が必要と判断された場合、後任者への“引き継ぎ”が生じる。筆者らが所属する臨床心理士養成校では、上記タイプの引き継ぎの必要性が毎年少なからず発生する。引き継ぎは別れと出会いのプロセスであり、Th およびクライエント（以下、Cl）の両者とも心的負担を強いられる。このプロセスが Cl にとって支援上、害にならないようにしなければならない。筆者らは、引き継ぎを心理療法の治療過程として機能させるために必要な要因について知り、臨床家養成に生かすべく、引き継ぎにおける Th の体験について分析を進めてきた。

これまで、初学者や中堅 Th が前任者または後任者として引き継ぎにあたりどんな体験をしているのかについて調査をしてきた。本研究では、スクールカウンセラー（以下、SC）を対象とする。SC は学校現場における心の専門家であり、1995（平成7）年の調査研究に関連する配置に端を発している。しかし、事業開始当初から、基本的に単年度の非常勤職であり、必ずしも継続的な配置が約束されていない立場にある。そういった意味で、臨床心理士養成校附属実習機関と同様、引き継ぎが起こりやすい環境にあるといえる。SC の立場にある者は、単年または数年で所属の変更があることから、より引き継ぎに対してエネルギーを注ぐ体験していることが推測される。彼らを対象に引き継ぎの体験を調査することによって、治療的引き継ぎとするための示唆を得ることが期待できよう。

【方法】＜協力者＞A:B 県教育委員会が委嘱する SC として働く 40 代前半女性臨床心理士。SC としての経験は 5 年 7 ヶ月（間に 1 年間の産休育休が入るがその期間を除いた年数）。これまでの勤務校数は 9 校で、調査時は 4 校（すべて高等学校）を担当している。前任者として 6 校で後任者への引き継ぎを経験する。その他、クリニックでのテスター（非常勤:4 年）、地域の乳幼児健診への参加（非常勤：1 年）の経験を持つ。

＜手続き＞「あなたが前任者からケースを引継いだとき、子どもはあなたにどのように関わろうとすると感じますか。最初から受け持った時とどのような違いがあると感じますか。また、あなたはどのように応じようとしますか。そして、『子どもとあなたとの関係』はどのように変化していくと感じますか。また、どんな不安や葛藤を感じやすいでしょうか。頭に浮かんできたイメージや言葉を思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記載してください。」と教示し、文章も提示した。次に連想項目を重要順に並べ替えさせた後、各項目の直感的類似度を 7 段階で評定させた。ついで、ウォード法でクラスター分析し、各クラスター（以下 **CL**）のイメージや併合理由、単独の＋－イメージを聴取した。

分析には、PAC 分析を採用した。PAC 分析とは、Personal Attitude Construct（個人別態度構造）は、内藤哲雄が開発した研究手法で、「当該テーマに関する自由連想、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法」である。

【結果】連想された項目は Fig. 1 の通り。連想項目の＋－イメージは、プラス項目 6、0 項目 1、－項目 4 であった。**CL1** は 5 項目すべてプラス。**CL2** は 2 項目すべてマイナス。**CL3** はプラス項目 1、マイナス項目 2、0 項目 1 であった。

＜被検者の解釈：抜粋＞CL1（「安心」～「いつも通り」の 5 項目）：受け渡すときの気持ち。影響を最小限に抑えたい。だからいつも通り。平常心。動揺、残念というのを表に出してしまうと必ずしもいい影響だけじゃないかなと。丁寧さと安心感を与えるように。いつも通りなんだけど、エネルギーがかかる。

CL2（「つめたい」と「わがまま」の 2 項目）：（Cl が）私のことを冷たいと思うかもしれないし、態度として表れているかもしれない。“私のこと途中にして何なの？”。今、思ったのは、私自身にもある。冷たい、どうでもいいという感じを出さないように。

CL3（「残念」～「肩の荷がおりる」の 4 項目）：私自身の気持ち。これで終わり、残念、さみしさ。そこと相反するけど、自分には大変だったケースはやらなくていいんだと肩の荷がおりる。“残念”は相手も思うかもしれないけど“うしろめたさ”“肩の荷がおりる”は私が思うこと。

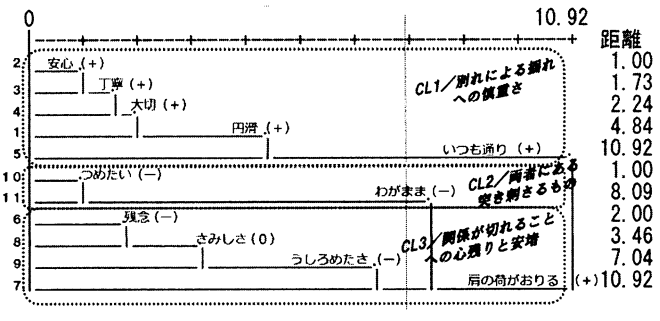


Fig. 1 ケースの引き継ぎに関する PAC 分析（左端の数字は重要順位）

【考察】CL1 は、Th が安心・丁寧に別れの動揺と向き合おうとし、Th からの表現は控えることを意識しているところから ***＜別れによる揺れへの慎重さ＞***と解釈した。**CL2** は、「つめたい」「わがまま」といった別れに伴う反応で、直接的ではないものの比較的強く受けとめられているところから ***＜両者にある突き刺さるもの＞***と命名した。**CL3** は、難局から離れられることの安堵、職務を全うできない残念さ・さみしさ、これらに関連するうしろめたさという様々な Th の思いがみられる。ここから ***＜関係が切れることへの心残りと安堵＞***と名づけることができよう。

本研究からは、引き継がざるをえない状況における Th の葛藤が表れていると思われる。一方、別れに対して平常心“いつも通り”である方がよいという思いが見られ、このことが前任者としての責任を果たすことであるという理解が見え隠れする。別れが引き起こす情緒の揺れは両者に訪れることであり、このこととどう向き合うかは、別れを互いに受けとめていくプロセスを進められるか否かに影響するであろう。心の動きとしっかり向き合うことにエネルギーを注ぐことが“治療的”な引き継ぎの重要な要素の一つとなろう。

（さとう ゆうき・ないとう てつお）

新たな援助規範意識尺度作成の試み

○山本陽一
（筑波大学大学院人間総合科学研究科）
キーワード：援助規範意識，愛他罰，援助行動

【研究の目的】援助規範意識は、社会の規範を反映した個人の意識であり、さまざまな状況下で行われる援助行動には、内在化された種々の下位規範が関わる（松井・堀, 1978）。援助規範意識の研究では（松井・堀, 1979; 箱井・高木, 1987）、“弱い立場の人を助けるべきである”といった規範（社会的責任）や、“自分を助けてくれた人にはお返しをするべきである”といった規範（互恵）などの存在が確認されている。さらに、援助規範意識には性差がみられたが、社会的責任規範の性差については研究間で知見が一貫していなかった。

一方、協力行動の実験研究では、協力行動をとらない相手（規範逸脱者）へ罰を与えようとする傾向である“愛他罰（altruism punishment）”が確認され（Fehr & Gächter, 2002 など）、協力行動と罰行動には正の相関がみられた（李・山岸, 2014）。これらの結果から、規範逸脱者への罰行動は、協力行動の進化とともに獲得されたとする“強い互酬性モデル（strong reciprocity model）”が提唱されている（Gintis, 2000）。しかし現実場面では、直接罰を与える行動には、規範逸脱者からの反撃などが考えられる。したがって、現実場面においては、規範逸脱者に直接罰を与えるよりも、規範逸脱者への援助を抑制することにより、間接的に罰を与えようとすると予想される。

そこで本研究では、先行研究で導出された援助規範意識に、規範逸脱者への愛他罰という概念を加えて、援助規範意識の構造と関連について検討する。

【方法】調査対象者：5 大学（東京都 3 校、茨城県、高知県各 1 校）に通う大学 1～4 年生 394 名（男子 175 名、女子 214 名、性別不明 5 名、平均年齢 20.2 歳（±1.9 歳））。
調査時期と方法：2016 年 4 月に、各大学の講義時間内に調査票を配布し、その場で回答と回収を行った。
尺度の構成：社会的責任、互恵、非関与に該当する項目として、松井・堀(1978)より 10 項目、箱井・高木(1987)より 12 項目を採用し、測定概念をより反映するように語句の修正を行った。非関与については、独自作成した 8 項目を追加し、愛他罰に該当する 10 項目を独自作成した。項目の選定と作成にあたっては、心理学を専攻する大学教員 1 名と検討した。また、尺度の信頼性を検証するために、1 大学において本調査実施 4 週後に再テストを実施した。

調査の実施に当たり、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得た（承認番号 27-20）。

【結果】(1)援助規範意識の構造：援助規範意識の構造を検討するために、主因子法バリマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰状況（7.39, 7.01, 2.94, 2.08, 1.28…）と解釈可能性から、最終的に 4 因子 35 項目を採用した（累積寄与率 55.5%）。第 1 因子は、周囲に迷惑をかける相手には援助するべきではないという意識と考えられるため“愛他罰”と命名した（項目例：周りに迷惑をかけている人が困っていても、助ける必要はない）。第 2 因子は、社会的に弱い立場の人を助けるべきであるという意識と考えられるため“社会的責任”と命名した（項目例：社会的に弱い立場の人は、必ず救わなければいけない）。第 3 因子は、自分を助けてくれた相手にはお返しをするべきであるという意識と考えられるため“互恵”と命名した（項目例：受けた恩は、必ず返さなくてはいけない）。第 4 因子は、人とはあまり深く関わるべきではないという意識と考えられるため“非関与”と命名した（項目例：相手には相手の事情があるので、安易に口出しをするべきではない）。4 尺度と理論的中間点(3.00)との比較では、非関与のみが有意に高かった（$t(389)=2.56$, $p<.05$）。尺度の信頼性検証のために、4 週後に実施した再テスト（$n=109$）の相関係数は、.610-.781 の範囲であった（すべて $p<.01$）。
(2)援助規範意識間の関連及び性差：援助規範意識間の関連および性別による違いを検討した。その結果、愛他罰とその他 3 尺度間には有意な相関が見られた。援助規範意識の性差を検討した結果、愛他罰及び社会的責任の 2 尺度に性差がみられ、愛他罰は男子が高く（$t(383)=4.25$, $p<.01$）、社会的責任は女子が高かった($t(384)=3.61$, $p<.01$)。

【考察】本研究では、従来の援助規範意識に加えて、“周りに迷惑をかけている人が困っていても、助ける必要はない”という愛他罰規範の存在が確認された。また、愛他罰規範は互恵規範との間に弱い正の相関が見られ、協力行動と罰行動との関連を示した実験の結果（李・山岸, 2014）と整合していた。また、男子は愛他罰規範が高く、女子は社会的責任規範が高かったことから、大学生を調査対象とした松井・堀（1979）の結果と整合していた。援助行動研究では、女性の方が援助行動を行うことが指摘されていたが（例えば Bar-Tal, 1976）、本研究の結果から、援助規範意識の性差が援助行動の生起に影響を及ぼす可能性が考えられる。

援助規範意識尺度の項目、引用文献については、当日資料に記載する。本研究は、上廣倫理財団研究助成により実施された。

本論文の作成に当たり、ご指導いただいた松井豊教授（筑波大学）、調査にご協力いただいた大学の皆様に感謝申し上げます。

（やまもと よういち）

Table. 1 援助規範意識尺度の平均値、標準偏差、信頼性係数、再検査信頼性、尺度間相関

尺度	*n*	項目	全体	*SD*	男子		女子	α	re-test	*F1*	*F2*	*F3*
F1 愛他罰	390	10	3.04	0.74	3.22	>	2.90	.938	.731 **	—		
F2 社会的責任	391	9	3.31	0.70	3.17	<	3.42	.903	.781 **	-.157 **	—	
F3 互恵	388	9	3.64	0.66	3.57		3.70	.859	.618 **	.140 **	.509 **	—
F4 非関与	388	7	3.84 *	0.55	3.80		3.87	.772	.610 **	.200 **	-.046	.089

**$p<.01$, *$p<.05$

メイク顔刺激の作成と妥当性の検討

○九島 紀子[1)] 上瀬 由美子[2)]
([1)]立正大学大学院心理学研究科 [2)]立正大学)
キーワード：顔，メイク，印象

【研究の目的】化粧は外見的印象に強く影響することが知られており，広く社会生活で使用されている。九島・齊藤(2015a;2015b)では，基準となる顔刺激とメイクの具体的基準を設定し，メイクと対人印象との関係について検討している。その結果，顔とメイクの差異により異なる印象を与えることが明らかになった。しかし，九島・齊藤(2015b)で作成されたメイク顔刺激について，妥当性の検討がその一部に限られていた。そこで本研究では，メイク顔刺激が九島・齊藤(2015a)で作成された当該の顔それぞれの印象に近づいているかどうかを検討する。

【方法】集合形式の質問紙調査を実施した。対象者は，大学生148名(男性76名，女性72名，M=19.45歳・SD=1.67)であった。

顔刺激　九島・齊藤(2015a)により顔とメイクの形態印象モデルとして，先ず基準となる原型顔が作成され，次いで成熟性(幼稚的－－成熟的)と，性的二型性(男性的－－女性的)の2次元を取り上げ，4つの印象の顔（幼男；幼稚的×男性的な顔，幼女；幼稚的×女性的な顔，成女；大人的×女性的な顔，成男大人的×男性的な顔)が作成された。

メイク顔刺激　九島・齊藤(2015b)により上記モデルを基準に，メイクにより4つの各印象の顔になるようメイク顔刺激が作成された。

提示方法　顔刺激の内4つを，A4サイズ用紙横向き上段に横並びに貼り付け，メイク顔刺激4つを下段に横並びに貼り付けた（全て各縦700ミリ×横400ミリのサイズ)。例えば幼女顔をベースとしたメイクの場合には，幼女顔を除いた4つの顔を上段に配置し，幼女顔への4種類のメイク顔を下段に配置した。成女，幼男，成男も同様に作成された。提示した刺激について，4つのメイクと近い印象の顔を1つ選択するよう求めた(Figure 1 ＊提示刺激にはラベルは貼っていない)。

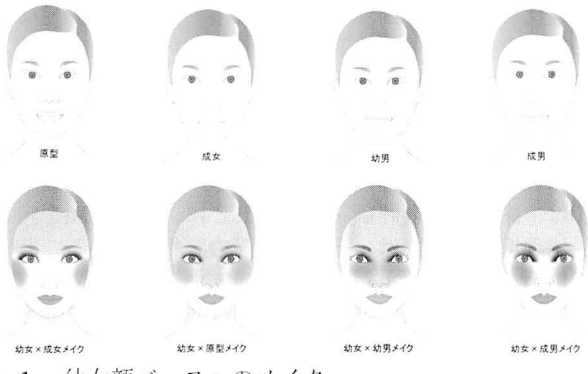


Fig. 1.　幼女顔ベースへのメイク

【結果・考察】作成された4つの顔をベースとしたそれぞれ4つのメイクが，4つの顔とどの程度印象が近いのかを検討するため，カイ二乗検定を行った。その結果は以下の通りであった。

幼女顔ベース(Table 1)　成女メイクはその他のメイクとの印象に有意な差がみられ（χ^2=250.27, df=3, p<.001)，原型メイクも他のメイクとの印象の間に（χ^2=121.73, df=3, p<.001)，幼男メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=93.51, df=3, p<.001)，成男メイクもその他のメイクとの印象に有意な差が見られた（χ^2=83.73, df=3, p<.001)。また，全てのメイクにおいて対応する顔刺激が選択された。

成女顔ベース　成男メイクは他のメイクとの印象に有意な差みられ（χ^2=45.62, df=3, p<.001)，幼女メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=168.43, df=3, p<.001)，幼男メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=66.21, df=3, p<.001)，原型メイクもその他のメイクとの印象に有意な差が見られた（χ^2=60.48, df=3, p<.001)。また，全てのメイクにおいて対応する顔刺激が選択された。

幼男顔ベース　幼女メイクは他のメイクとの印象に有意な差みられ（χ^2=39.96, df=3, p<.001)，原型メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=21.95, df=3, p<.001)，成女メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=27.83, df=3, p<.001)，成男メイクもその他のメイクとの印象に有意な差が見られた（χ^2=96.89, df=3, p<.001)。また，全てのメイクにおいて対応する顔刺激が選択された。

成男顔ベース　成女メイクは他のメイクとの印象に有意な差みられ（χ^2=33.54, df=3, p<.001)，幼女メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=23.31, df=3, p<.001)，原型メイクもその他のメイクとの印象の間に（χ^2=15.42, df=3, p<.001)，幼男メイクもその他のメイクとの印象に有意な差が見られた（χ^2=146.25, df=3, p<.001)。また，全てのメイクにおいて対応する顔刺激が選択された。

以上，全てのメイク顔刺激がそれぞれチャンスレベルである25%を超えて対応する顔刺激との印象が近いと選択されたことから，刺激としての妥当性があると判断した。

本研究で作成された刺激は，顔とメイクを構成する要因に制限を設けたため，実際の人間の顔やメイクの要因をすべては取り入れておらず，顔やメイク印象に対する現実世界との乖離があることは否めない。今後，今回取り入れなかった色や質感なども含め，実際に人物に対してメイクを施し，より実証的に研究を発展させていきたい。

Table 1.　幼女顔ベースメイクと4つの顔の選択率

	1. 原型	2. 成女	3. 幼男	4. 成男	χ^2	df
幼女×成女メイク n(%)	15 (10.1)	120 (81.1)	6 (4.1)	8 (5.4)	121.73 **	3
幼女×原型メイク n(%)	95 (64.2)	16 (10.8)	20 (13.5)	16 (10.8)	250.27 **	3
幼女×幼男メイク n(%)	17 (11.5)	4 (2.7)	84 (56.8)	44 (29.7)	93.51 **	3
幼女×成男メイク n(%)	21 (14.2)	8 (5.4)	38 (25.7)	80 (54.1)	85.95 **	3

ライアンの名義水準を用いた多重比較（有意水準 alpha = 0.05）

2 > 1 ＊	1 > 2 ＊	3 > 1 ＊	4 > 1 ＊
2 > 3 ＊	1 > 3 ＊	3 > 2 ＊	4 > 2 ＊
2 > 4 ＊	1 > 4 ＊	3 > 4 ＊	4 > 3 ＊

【引用文献】

九島紀子・齊藤勇 2015a 顔パーツ配置の差異による顔印象の検討 立正大学心理学研究年報 **6**, 35-52.
九島紀子・齊藤勇 2015b 化粧が対人印象に及ぼす影響 応用心理学研究 **41**, 1, 39-55.

（くしま のりこ・かみせ ゆみこ）

謝罪による信頼回復

― 逆転効果を巡る検討 ―

○渥美惠美[1)]　大渕憲一[2)]
([1)]東北福祉大学健康科学部　[2)]放送大学宮城学習センター)
キーワード：謝罪，釈明，信頼

【研究の目的】信頼とは他者が期待に応えると信じて何かを委ねることである。信頼は、他者が期待に応えるだけの能力があると信じる能力期待と期待に応えようと努力するであろうと信じる倫理期待から成る。行為者がいずれかの期待に反した場合には信頼が低下するが、研究者たちは、そうした場合、釈明（account）が信頼回復をもたらすと論じてきた。

米国人を参加者とする実験においてKim et al. (2004)は、能力違反の場合には謝罪によって信頼が回復されたが、倫理違反の場合はむしろ謝罪によって信頼が低下したという逆転効果を見出した。釈明の文化差を検討したOhbuchi et al. (2008)は、個人主義者である米国人は自己主張に寛容であることから正当化を肯定的に評価し、一方、集団主義者である日本人は、関係宥和を志向する謝罪に対して好意的であることを見出したが、この観点からすると、謝罪選好の強い日本人では謝罪の逆転効果は起こり得ないのではないかとの予測が成り立つ。本研究の第1の目的は、謝罪の逆転効果が日本人においても見られるかどうかを検討することである。

Kim et al.は逆転効果についてReeder & Brewer（1979）の性質帰属スキーマ・モデルに基づき、能力評価では負の情報よりも正の情報が重視されるが、倫理評価では逆に、正の情報よりも負の情報が重視されるからと解釈した。謝罪は責任受容という負の情報と行動改善の誓いという正の情報を含んでいる。このうち、正の情報は能力評価を高めるため、能力違反では謝罪は信頼を回復させるが、負の情報は倫理評価を低下させるので、倫理違反では謝罪は信頼を低下させるとされたのである。本研究の第2の目的は、釈明の信頼回復（あるいは低下）がKim et al.の主張する認知メカニズムによるものかどうかを検討することである。

【方法】参加者には、職場において行為者が不適切な行為（違反）を行い、その後、釈明（謝罪か正当化）を行う様子を描いたイラストをPCで提示し、その後、従属測度に回答させた。違反状況はKim et al.が用いたものと同じで、採用面接に来た男性志願者が面接者から前の勤務先で顧客の税務申告を不正に行ったのではないかと指摘された。

能力違反条件では、志願者は「知識不足であった」と認め、倫理違反条件では「わざと行った」ことを認めた。釈明において行為者は、謝罪条件では責任受容、悔恨、改善の誓いを表明したが、正当化条件では責任否定を行った。東北地方の二つの大学の男子学生65名が自発的に参加し、報酬を受け取った。彼らは違反（能力、倫理）×釈明（謝罪、正当化）の4条件にランダムに配置された。

志願者の釈明を聞いた後、参加者には彼に対する能力評価（3項目）、倫理評価（3項目）、信頼評価（1項目）を6点尺度（1「全く思わない」～6「とても思う」）を使って行わせた。能力評価と倫理評価のα係数は.86と.93と高かったので、項目平均値をそれぞれの評価指標として分析に用いた。

【結果】信頼評価に対して違反×釈明の分散分析を行ったところ、交互作用だけが有意で（$F(1, 61)=8.217$, $p=.006$）、図1に示すように、参加者は能力違反条件においては正当化した志願者よりも謝罪した志願者に対して強い信頼を示し（$p=.075$）、倫理違反条件では、逆に、謝罪した志願者よりも正当化した志願者に対して強い信頼を示した（$p=.026$）。

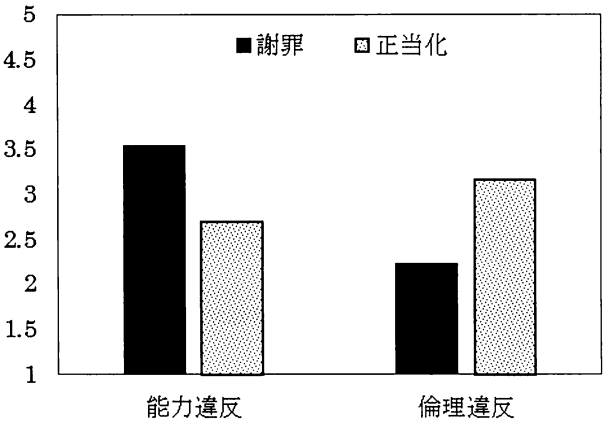


図1　違反と釈明による信頼の違い

媒介分析では、釈明はダミー変数（正当化=1、謝罪=2）とし、これが信頼に与える効果を能力評価と倫理評価が媒介するかどうかを違反条件別に検討した。その結果、能力違反条件では倫理評価にのみ媒介効果が認められ（$z=2.319$, $p<.05$）、謝罪が倫理評価を高めることによって間接的に信頼を増加させた。倫理違反条件では能力評価に弱い媒介効果が認められ（$z=1.690$, $p<.10$）、正当化は倫理評価を高めることによって間接的に信頼を増加させた。

【考察】能力違反においては謝罪が正当化よりも行為者に対する信頼を向上させたが、倫理違反においては、逆に行為者に対する信頼を低下させたことが見いだされ、米国人同様、日本人においても謝罪の逆転効果が確認された。

認知メカニズムの分析では、Kim et al.の理論とは反対に、能力違反では釈明は倫理評価を介して、また、倫理違反では能力評価を介して信頼を変化させることが見いだされた。この結果は、謝罪が協調的人物像の形成に対し、正当化は自律的人物像の形成に対して寄与するとする大渕（2010）の釈明印象改善理論に一致するものである。同時に、この結果は、信頼回復における相補性を示唆するものである。能力違反条件では、謝罪は倫理評価を高めることによって信頼を向上させ、倫理違反条件では、正当化が能力評価を高めることによって信頼を回復させたが、信頼を構成する2要素のうち一方が違反によって損なわれると、釈明は他方の要素を強化することによって信頼を回復させる可能性が示唆されている。

【主な引用文献】

Kim, P. H.et al. (2004). Removing the shadow of suspicion: the effects of apology versus denial for repairing competence-versus integrity-based trust violations. Journal of Applied Psychology, 89, 104-118

大渕憲一(2010). 謝罪の研究.東北大学出版会.

[本研究は科学研究費補助金（基盤研究(C)、課題番号26380837）の助成を受けて実施された]

（あつみえみ・おおぶちけんいち）

趣味への熱中と受動的幸福感

― オタクの幸福感の検討 ―

○山岡　重行
（聖徳大学心理学科）
キーワード：受動的幸福感，趣味への熱中，オタク度尺度

【問題】 オタクは、他者から見ると価値の低い趣味に多くの時間と金銭と労力を投入する。なぜ社会的に価値が低いと見なされる趣味に多くの資源を投入するのだろうか。それは楽しいからである。他者がどのように評価しようと、自分にとってその趣味は非常に高い価値があるものであり、他の趣味では得られない充実感や満足感を与えてくれるからである。オタクにとって、その趣味は生きがいになる。生きがいとなる趣味を持つ人間は、趣味を持たない人間と比較するとはるかに幸せなのではないだろうか。本研究の目的は、オタクの幸福感を検討することである。

心理学では幸福感を「生活の質（Quality of Life：QOL）」という概念で捉えることが多い。人生の内容の質や生活の質のことであり、ある人がどれだけ人間らしく、自分らしく生活し、人生に幸福を見出しているかを表す包括的な概念である。そのためQOL尺度は健康、人間関係、仕事、住環境、教育、レクリエーションやレジャーなど、様々なQOLを測定している。田崎・中根（2013）の日本語版WHO QOL26改訂版は、26の質問項目で構成されているが、中には高齢者向けの質問項目や既婚者向けの質問項目が存在し、大学生が回答することは困難であったり不適切な項目もある。山岡(2016)は不適切と判断された6項目を削除し、残りの20項目も大学生が回答しやすいように表現を改訂し、改訂版QOL尺度を作成した。この改訂版QOL尺度を用いてオタクと一般群の生活満足感、生活健康感、自己肯定感、ゆとり感の4つの下位尺度得点を比較したところ、有意差は一つも認められなかった。

オタクは基本的に消費者である。供給されるアニメ、マンガ、ゲームなどに熱中する過剰な消費者である。オタクが趣味への熱中から感じる幸福感は、QOLのような包括的な幸福感とは異なるものだと考えられる。自らの活動を通して成長し、何事かを達成し充実感と満足感を得ながら生活の質を高めることで感じる大きな幸福感とは異なる、日常生活の中で得られる小さな幸福感もあるだろう。オタクや腐女子の幸福感は、QOLよりも限定されたもっと小さな幸福感だと考えられる。あくまでも他者の作品やパフォーマンスを見ることで感動し、充実感や満足感を得て感じる幸福感を、本研究では「受動的幸福感」と呼ぶことにする。本研究は受動的幸福感を測定する尺度を作成し、オタク度が高いオタク群とオタク度が低い一般群の受動的幸福感を比較する。本研究の仮説は、「オタク群は一般群よりも受動的幸福感が高い」である。

【方法】 **受動的幸福感尺度の作成**　オタクを自認する女子大学生を対象に、オタク趣味から得られる満足感、感動、充実感や生き甲斐などについて面接調査を行った。得られた回答を整理し、「自分の生きがいとなる他者の作品やパフォーマンスがある」、「とても素晴らしいものを見たり体験したりすることがある」、「他者の作品やパフォーマンスをみて明日も頑張ろうという元気をもらったことがある」など16の質問項目を作成した。そのような体験をどのくらいしたことがあるかを、「1：まったく体験していない、2：すこし体験している、3：わりと体験している、4：かなり頻繁に体験している、5：ほとんど常に体験している」の5件法で回答を求めた。その際、「質問文中の『他者の作品やパフォーマンス』とは、スポーツ、音楽、絵画、小説、映画、演劇、お笑い、アニメ、マンガ、ゲーム、ダンスなど、他者のさまざまな活動や他者により作られた作品のことを指します」という注釈を付けた。

調査対象者　首都圏私立大学3校の大学生355名（男性106名、女性249名）。平均年齢19.977歳（SD=3.065）。

手続　通常の授業時間の一部を利用して質問紙調査を行った。オタク度尺度（山岡,2016）と受動的幸福感尺度で構成された質問紙を調査対象者に配付し、回答記入後に回収した。調査は2015年7月と9月に実施した。

【結果】　受動的幸福感尺度項目に、主因子法プロマックス回転の因子分析を行った。その結果、固有値1.00以上の因子が2因子抽出された。第1因子は「他者の作品やパフォーマンスをみて感謝することがある」、「他者の作品やパフォーマンスをみて涙が出るほど感激することがある」、などの11項目に負荷量が高く、他者の作品やパフォーマンスを見ることで感動し、充実感や満足感を得て感じる受動的幸福感因子と解釈できる。この11項目の信頼性係数はα=.940で、内的一貫性が高いと判断できる。この11項目の平均点を、受動的幸福感得点とした。第2因子に負荷量が高かったのは「生きがいがある」、「生きがいのために頑張れると思うときがある」、などの5項目に負荷量が高く、生き甲斐因子と解釈できる。5項目の信頼性係数はα=.904で、内的一貫性が高いと判断できる。この5項目の平均点を、生き甲斐得点とした。

オタク度尺度の平均点で調査対象者を二分し、高得点者をオタク群、低得点者を一般群とした。各群の受動的幸福感と生きがい感の平均と標準偏差をTable 1に示した。t検定を行ったところ、オタク群の方が一般群よりも受動的幸福感と生きがい感が高いことを示す有意差が認められた。

Table 1 受動的幸福感尺度の平均値と標準偏差

		度数	平均	SD
受動的幸福感	一般群	180	3.476	0.871
	オタク群	169	3.980	0.858
生きがい感	一般群	181	3.622	0.888
	オタク群	167	3.933	0.938

【考察】 本研究で使用したオタク度尺度はマンガ、アニメ、ゲームとそのキャラクターに対する熱中、趣味を通した人間関係も含めた趣味全般に対するこだわりとコミットメントの程度の指標である。このような傾向が高いほど、生き甲斐の実感や受動的幸福感が高くなるのである。これは本研究の予測を支持する結果である。基本的にオタク趣味は社会的な高評価とは無縁である。しかし他者からいかに無価値な行為と見なされようとも、オタク趣味は本人にとっては生き甲斐となり、受動的幸福感を高めることにつながるのである。

【引用文献】　山岡重行 2016 **腐女子の心理学**　福村出版

（やまおか　しげゆき）

日中大学生の交友関係の実態に関する実証的比較分析

施　桂栄
（関東学院大学人間共生学部・大原記念労働科学研究所）
キーワード：交友関係，交友態度，交友行動

【研究の目的】現代社会では、人間をめぐる社会的環境が急速に変化しつづけている。日本においては、60年代以降、経済の高度成長に伴い、若い世代が都市へ移動し、「家」という意識が急速に変容した。それにより、一般的な家族形態は，複雑な大家族から小人数の核家族へと変化してきた。さらに、90年代以降、インターネットや携帯電話の普及、情報技術の高度化が進展し、人と人との結びつきに大きな影響を与えている。一方、中国では、80年代になってから、経済の高度成長が始まり、都市化や工業化、情報化が急速に進んできているため、人々のライフスタイルも著しく変わってきた。さらに、一人子の政策や競争社会の形成などが様々な社会的問題を生み出し、人と人のかかわりに大きく影響している。

本研究では、このような環境のなかで生まれ育てられてきた日本と中国両国の若者たちを対象とし、他者との付き合いの意識や方法など（対人関係）の実態を調査し分析する。さらに、両国の若者の間にそれらの相違を比較し、異文化という視点からの検討を行うことを目的とする。

【方法】交友関係の実態を評価する質問紙を作成し、2014年に日中両国の大学生を対象としたアンケート調査を行った。日本人大学生119名(男82名、女37名;平均年齢19.20歳)、中国人大学生166名（男30名、女136名；平均年齢20.60歳）が質問紙への回答に参加した。質問紙内容の構成および評価方法：①「交友態度」尺度（友人関係に対する認識や感情)、5項目、5段階評価；②「交友行動」尺度（友人との付き合いにおける具体的な行動)、8項目、5段階評価；③「友人依存度」尺度（普段の生活の中、友人に対する依存の度合い)、8項目、5段階評価；④「友人信頼感」尺度（普段の生活の中、友人に対する信頼の度合い)、5項目、5段階評価。

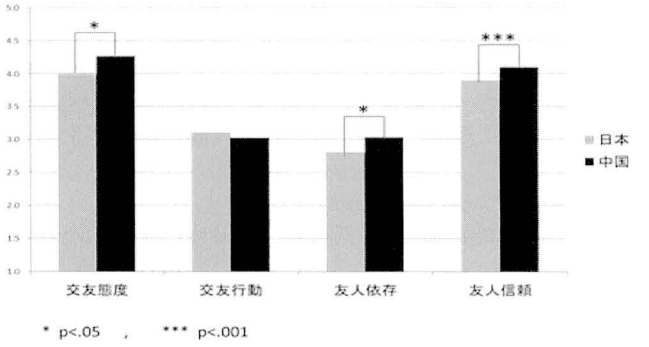
【結果】アンケート調査から得られたデータに基づいて、友人関係の各評価項目の平均値および標準偏差（全体・男女別）を求めた。その結果は表1.に示されている。

表1．日中大学生の友人関係各評価項目の平均値および標準偏差（全体・男性・女性）

	日本人大学生						中国人大学生					
	全体		男性		女性		全体		男性		女性	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD	平均	SD
交友態度	4.0	0.7	4.0	0.7	4.1	0.7	4.3	0.6	4.1	0.6	4.3	0.6
交友行動	3.1	0.6	3.1	0.6	2.9	0.6	3.0	0.4	3.1	0.5	3.0	0.4
友人依存	2.8	0.9	2.9	0.9	2.8	0.9	3.0	0.7	2.9	0.7	3.1	0.7
友人信頼	3.9	0.7	3.8	0.7	4.1	0.5	4.1	0.6	3.9	0.6	4.2	0.6

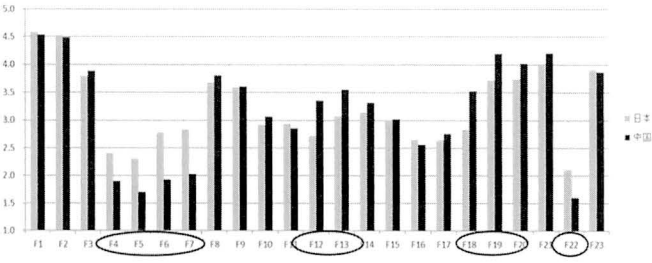
日中大学生間全体の相違を分析するために、交友関係の4評価分野それぞれにおいて、日本人大学生と中国人大学生の間に評点平均の有意差検定を行った。「交友行動」においては、日中大学生間の有意差がなかったが、「交友態度」と「友人依存」、「友人信頼」それぞれにおいては、平均得点の有意差が見られた。日本人の大学生よりは、中国人の大学生のほうが交友に対してより積極的であることが明らかになっている。さらに、友人に対しては、中国人の大学生のほうがより信頼し依存していることも分かった（図1.）。

また、「交友行動」においては、日中大学生間の有意差がなかったものの、「交友行動」評価項目のF6とF7、F12、F13の平均得点より、中国人大学生と比べて、日本人大学生が表面的に交友する行動をとる傾向があると見られた。さらに、「友人依存」のF18評価項目からは、中国人大学生のほうが仲間外れをいつも気にしていることも分かった（図2)。



* p<.05　，　*** p<.001

図1．日中大学生交友関係の各評価項目平均値の差の比較



F4：　友人関係に対してあまり関心を持っていない
F5：　自分にとって友人関係は煩わしいものだと思っている
F6：　友人には自分の内面的なことを話さないようにしている
F7：　友人に自分の弱さや欠点をいつも隠そうとしている
F12：　友人からバカにされないように気をつけている
F13：　友人からどう見られているか、いつも気にしている
F18：　仲間外れをいつも気にしている
F19：　普段、友人とお互いに誠実にかかわっていると思う
F20：　自分が困ったときには、友人からの援助が期待できる
F22：　私には頼りにできる友人がほとんどいない

F1～F5:	交友態度
F6～F13:	交友行動
F14～F18:	友人依存
F19～F23:	友人信頼

図2．日中大学生交友関係の全評価項目平均値の比較

【考察】本研究では、中国人大学生の交友関係は比較的にポジティブであることが明らかとなった。現代日本の若者たちは、友人との間にあまり心のなかに踏み込まず、互いに相手に合わせて不快にならないようにしている（上野、2009)。また、中国人大学生は先行研究の知見と異なって、より「集団主義」的である（施ら、2012）ということから、現代社会において、日本人若者の交友関係は「密着的」から「表面的」へ変化している一方、中国人若者の行動様式は「個」から「衆」へ変わりつつあると考えられる。今後の課題として、このような変化の背景要因を究明することが必要となる。

【謝辞】本研究は、2014年度関東学院大学人間環境研究所研究助成金の支援を受けました。ここに記して感謝申し上げます。

【引用文献】上野行良　2009　対人関係の形成　堀洋道監修／吉田富二雄・松井豊・宮本聡介編（新編）社会心理学　福村出版
施　桂栄・井上枝一郎・讃井純一郎・伊藤典幸・鈴木公基・朱　建育　2012　日中両国間の大学生の環境意識とそれに基づく社会的行動に関する比較調査研究　関東学院大学人間環境研究所報告書

（し　ぐいろん）

高齢の保育・教育者の役割のPAC分析

○午来和子　齋藤厚子　佐藤大輔　内藤哲雄
（福島学院大学大学院心理学研究科）
キーワード：保育士・幼稚園教諭経験、高齢、ＰＡＣ分析

【目的】社会の高齢化が進行して労働人口が減少し、幼稚園教諭・保育士の不足はますます深刻となっている。それでは高齢の幼稚園教諭や保育士が働き続けることで、どのような役割を果たすことができるであろうか。本研究では、保育園での長年にわたる勤務経験を持つ保育者を調査対象者として、高齢の保育士と幼稚園教諭が担うことができる役割を探索することを目的とした。

【方法】＜**被検者**＞保育士６年、園長 34 年で合計 40 年の経験を持つ、大学院修士課程２年の女子Ａ。

＜**手続き**＞「高齢の幼児教育の専門家が、現場で勤務した時に示す特徴や担うことが可能な役割についてイメージして、思いついた順にカードに記入してください。」と教示し、連想反応を得た。次に重要順に並べ変えさせた後、各項目の直観的イメージ上の類似度を７段階で評定させた。ついでウォード法でクラスター分析し、各クラスターのイメージや併合理由、単独の＋－０イメージを質問した。

【結果と考察】重要順位、クラスター分析及び単独＋－イメージの結果は Fig.1 のようになった。

＜**被検者Aによる解釈：抜粋**＞《クラスター1》「顔の表情や表現が優しい」～「話し方ゆっくりで聞き易い」の６項目：子どもは老人といることによって安心感が持てる、一緒にいると楽しい、優しい気持ちになれる。子どもの話が弾む、素直な気持ちになれる。温かさや人柄が感じられて子どもの情緒が安定するように感じる。

《クラスター2》「子育ての不安なお母さんに対してアドバイスが上手」～「遊びの創造性が豊か」の９項目：豊富な経験と判断力が感じられます。それから、親が元気になれて、子育てを楽しまれるようにも感じられる。男性教諭や女性教諭、そして老人がいれば世代間の交流にも繋がっていく気がする。

《クラスター３》「体が動かないから子どもが待ってくれる」～「おり紙が上手でなんでも折ることができる」の８項目：子どもの内省を引き出すように感じる。思いやりの心、「おばあちゃん大丈夫」と心配する、優しくする、やってあげるねと援助的行動が感じられる。

《クラスター4》表現が豊かになる。昔の遊びを覚える。言葉が豊かになる。遊びの文化を知る。想像力が湧いてくるように感じる

【総合的解釈】クラスター1 は、高齢の幼児教育専門家は、表情や表現がやさしく、子どもがけんかをしていてもだまって見守り、いつもニコニコして、ゆっくりと話して子どもの話をよく聞いており、子どもたちに安心感や一緒にいて楽しいと感じさせ、情緒を安定させ、自信を持たせることから＜**子どもへの受容的、共感的な関わり**＞　と解釈できよう。クラスター２は、子どもにも親にも気配りでき、親世代のイメージを持たせながら母親にアドバイスでき、若い先生の相談にのれ、仕事の割り振りや環境整備の助言ができることから＜**長年の経験による気づきと他世代へのアドバイス**＞とよぶことができよう。クラスター３は、子どもの名前を忘れ、鉄棒にぶら下がるのが苦手で、身体が動かないことで、子どもに「大丈夫？」と声かけさせる援助的な行動を誘発し、周囲をいたわり、思いやりを育てるという、教育者が高齢で弱体化することで逆説的に建設的役割を果たし＜**子どもにとっての配慮、援助の対象**＞となることを示す。クラスター4 は、わらべうた、お手玉、草笛など昔の遊びが多いにしても、遊びの玉手箱の役割を果たしていることから、＜**子どものための遊びの玉手箱**＞と命名することができよう。

【結論】本研究の結果は、1 事例によるとはいえ、高齢の幼児教育専門家が現場の一員となることで、労働人口の補充以上の価値を現場にもたらす可能性が示唆されたといえよう。

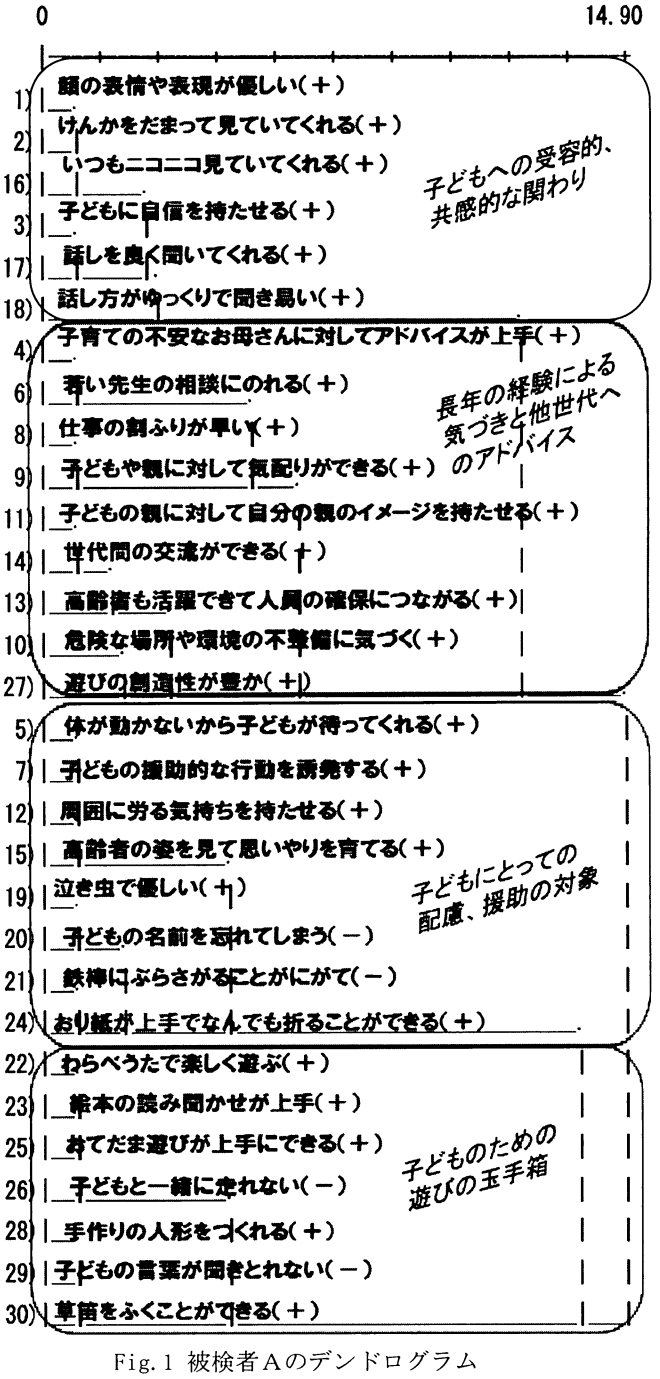


Fig.1 被検者Ａのデンドログラム
左の数値は重要順位

（ごらいかずこ　さいとうあつこ　さとうだいすけ　ないとうてつお）

子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討（1）[i]

－対象別の選択理由の特徴－

○西村　太志[1)]　古谷　嘉一郎[2)]
([1)]広島国際大学心理学部　[2)]北海学園大学経営学部)
キーワード：社会的代理人，子育て，対人ネットワーク

【研究の目的】本稿は，子育て期における母親の対人関係拡充過程に関して，Bradshaw(1998)が示した「社会的代理人」仮説に基づき多面的な検討を行う一連研究(Nishimura et al., 2016;西村ら, 2016）の一環として，周囲の他者を「社会的代理人」として選択する際の理由に着目する。

「社会的代理人」仮説とは，対人関係の構築に苦手意識を持つ人が，入学や就職など新規の対人関係を拡げる必要性がある場合，既知の人物（＝社会的代理人）をその場に伴うことで，その状況への不安などを低減させ，相互作用を社会的代理人が支援し，対人関係を拡充することができるというものである。Gameiro et al.（2010）や森永・山内（2003）の知見を踏まえると，子育て期には対人ネットワークの縮小から再構築，維持という過程が生じやすいと考えられる。その時期に周囲の他者を「社会的代理人」として活用することは，養育者自身の心理・社会的適応に影響を及ぼすと考えられる。

Bradshaw(1998)は社会的代理人を利用する理由について3つの観点から検討している。第一の理由は「勧誘しやすさ」である。社会的代理人として他者を伴うためには，その相手を誘うという行為が必要となる。相手から誘われるということもあるが，そのような関係性を有しているか否かという観点が重要である。第二の理由は「利用可能性を相手が有しているか」である。相手が自分に誰かを紹介してくれたりしないならば，結果として自分自身のネットワーク拡充には貢献しない。第三の理由は，「パフォーマンスの上昇」である。他者との関わりを持つ場面に不安を覚えるならば，親しい他者を伴うことは自身の心理的安定にも寄与すると考えられる。

これらの理由はいずれか単独で代理人選択に作用する訳ではなく，自己評価動機が同時に複数顕現化するという指摘(Sedkides & Strube, 1997)を援用すれば，これらの理由も複合的に作用すると考えられる。しかしながら，様々な代理人となりうる対象に対して，どの理由が強く作用しているのかを検討することも基礎的データとしては必要である。そこで本研究では，社会的代理人として活用したことがある4つの対象に対して，3つの理由がどの程度作用していたのかを調査し，その特徴を検討する。

【方法】調査対象者：(株)クロスマーケティングのモニターのうち，既婚者で配偶者と同居しており，就学前の子どものみを養育している女性600名。なお全てのデータ分析では，回答における論理的矛盾が含まれる回答を除き，545名（平均年齢30.60歳）を対象とした。調査時期・手続き：2015年10月上旬にオンライン調査を実施。分析使用尺度（本報告に含む変数のみ）：(1)フェイスシート：年齢，子どもの数，就業状況などを尋ねた。(2)「社会的代理人」の選択の有無：「1.配偶者」，「2.配偶者以外の家族(自分の親，配偶者の親，自分のきょうだい，配偶者のきょうだい，自分の親族，配偶者の親族)」，「3.友人・知人(出産前から，出産後子育てをきっかけ，出産後子育て以外のきっかけ)」，「4.自身の子ども」を社会的代理人として設定した。「子どもが生まれ，子育てをすることをきっかけに，あなたがあなた自身の人とのつながりをどのように変化させていったのかというご自身の経験についてお聞きします」と教示を行い，「対象者自身の子育てに役立つ人とのつながりを増やすために，4つの対象人物と一緒に行動したこと」の有無を尋ねた。(3) 対象別の選択理由：4つの対象それぞれについて，社会的代理人として利用したことがあると回答した場合，その理由について尋ねた。なお，「配偶者以外の家族」「友人・知人」については，いずれかサブカテゴリーの対象一つでも利用したことがある場合に，理由の回答を求めた。理由の設問はそれぞれの対象について3項目ずつ設定した。「勧誘しやすさ（以下「勧誘」と表記）」については，「(対象は）誘うといつも一緒に行ってくれる人物だった」とした。なお，子どもについては想定しやすい内容とするため「子どもを連れて行くことはいつもおっくうだった」とした。この項目のみ逆転して用いることとした。「相手の利用可能性（以下「利用」と表記）」は，「(対象）が自分の人とのつながりを増やすことに役立つ人物であると思っていた」とした。「パフォーマンスの上昇（以下「上昇」と表記）」は，「(対象と）一緒にいると落ち着くことが多かった」とした。いずれも5件法（1. 全くあてはまらない～5. 非常にあてはまる）で回答を求めた。

【結果】分析には，清水（2016）のHAD15.007を用いた。

4つの対象別に，社会的代理人として選択した回答者数と，勧誘・利用・上昇に関する理由得点の平均値と分散分析の結果を表1に示した。配偶者を社会的代理人として利用する理由としては，誘いやすいという勧誘の側面と，一緒にいてくれると落ち着くというパフォーマンスの上昇という側面が強く示された。家族と友人に関しては，理由に差は示されたなかった。子どもを社会的代理人として利用する理由としては，利用可能性を高く見なしているということが示された。

表1 対象別の選択理由得点の平均値，標準誤差，分散分析の結果

	利用有り人数（545人中）	勧誘(A)	利用(B)	上昇(C)	F値	偏η^2	p値	多重比較(Holm法)
配偶者	293	3.98 (0.06)	3.35 (0.06)	3.90 (0.06)	61.51	0.17	.00	A≒C>B
家族	268	3.87 (0.06)	3.82 (0.06)	3.89 (0.06)	0.77	0.00	.46	
友人・知人	280	3.71 (0.05)	3.79 (0.05)	3.82 (0.05)	2.44	0.01	.09	
子ども	400	3.62 (0.05)	3.89 (0.05)	3.63 (0.06)	13.13	0.03	.00	B>A≒C

註：括弧内は標準誤差

【考察】社会的代理人として育児期の母親が用いやすい4つの対象の選択においては，異なる理由が作用していることが示唆された。配偶者には一緒にいてもらうこと自体を求めている。配偶者は子育てにおいて最も中心的役割を果たす人物であり，誘いやすく行動を共にすることで心理的安定をもたらすという関係の良好さは，自身の対人ネットワークの拡充にも寄与することが示唆された。

一方，自身の子どもを介して自身の対人ネットワークの拡がりを母親が期待していることが窺える。実際子育てにおいては，子どもが何らかの活動（保育園や体験活動など）に携わることで，親同士のつながりが構築されることが多々ある。子育て期の対人ネットワークの拡充において，自身の子どもが持つ機能的意味を今後詳細に検討する必要がある。

（にしむらたかし・ふるたにかいちろう）

[i] 本研究は科研費（15K01787）の助成を受け，相馬敏彦（広島大学大学院），長沼貴美（創価大学），片桐咲恵（山口大学大学院）各氏と共同で行った。

子育てにおける「社会的代理人」選択に関する検討（2）

― 自尊心と一般的信頼が代理人選択に及ぼす影響 ―

○古谷　嘉一郎[1)]　西村　太志[1,2)]
([1)]北海学園大学経営学部　[2)]広島国際大学心理学部)
キーワード：社会的代理人，自尊心，一般的信頼

【研究の目的】　本研究は，社会的代理人を選択する人の自尊心と一般的信頼の程度が，代理人選択に及ぼす影響を子育て中の養育者を対象に検討するものである。

出産、子育て期には，母親の対人関係の特徴が大きく変化する（森永，2003）ため、社会的代理人が役に立つ可能性がある。例えば、加藤（2012）は，母親のネットワークの広さが心理的に正の影響を与えていることと，家族との関わりが多いほど母親の幸福感が低いことを示している。この点から，養育者が配偶者や親族といった固定的な関係はネガティブな効果も考えられる。ゆえに、多様な他者との関係を媒介する社会的代理人がこのネガティブ効果を緩和する可能性を持つ。

社会的代理人とは、新規対人関係の構築時の相互作用において、対人関係構築に苦手意識を持つ人（シャイネスが高い人）の相互作用の支援等を行う（対人関係構築に苦手意識を持つ人にとって）既知の人物のことを指す（西村, 2016）。

この代理人を活用することにより、シャイな人は対人関係を構築することができる（Bradshaw, 1998）。社会的代理人を活用する対人拡張のメカニズムに、社会的代理人仮説がある。対人関係構築に苦手意識を持つ人（シャイネスが高い人）は、新規対人関係の構築時に機知の人物（社会的代理人）をその場に伴わせる。この代理人は関係構築状況における高シャイネス者の不安を低減させる。さらに、相互作用を代理人が支援し、最終的に高シャイネス者と新規他者との関係構築を補助する。このように、高シャイネス者は対人関係の媒介に社会的代理人を用いていることが考えられる。

そして、シャイネスの高さと自尊心の高さには負の関連が認められている（r = -.447; 相川, 1991）ことから自尊心と代理人行動に対しても一定の関連が考えられる。高シャイな人は自尊心が低いといえる。このことから、自尊心が低い人ほど社会的代理人を活用するだろう。一方，シャイネスの高さは，他者からの被受容感の低下や低い社会的スキルを規定するとも指摘されている（徳永ら，2013）。このことから，多様な代理人の利用にシャイネスは抑制的に作用する可能性も考えられよう。加えて、他者からの被受感の低下は自尊心の低さも招く(Leary et al., 1995; Murray et al., 2000)ことから、自尊心が低い人ほど社会的代理人を活用しないことも考えられる。以上より、社会的代理人の活用に自尊心が及ぼす効果を明らかにすることが本研究の目的の１つである。

本研究では一般的信頼にも着目する。信頼の解き放ち理論(e.g., 山岸, 1998)は，一般的信頼には関係性を拡張する機能が備わっていることを論じている。低信頼者は自身の築いてきた個別的な関係外部から得られるかもしれない利益を過小評価しやすい。そのために、特定の個別的関係性へのコミットメ ントを維持させやすい。反対に，高信頼者は特定の個別的関係性以外の関係性を信頼できるため，そのような外部に目を配ることが可能であるという。

社会的代理人に対して、一般的信頼が持つ影響は２つ考えられる。第１に、代理人そのものが個別的関係であることから、低信頼者のほうが代理人を活用しやすい。第２に、代理人を介して、個別的関係以外の関係を構築するわけであるから、高信頼者のほうが代理人を活用しやすい。本研究ではこの問いについて検討を行う。さらに、自尊心と一般的信頼の交互作用についても探索的に検討する。

【方法】　調査対象者：(株)クロスマーケティングのモニターのうち，既婚者で配偶者と同居しており，就学前の子どものみを養育している女性 600 名。回答における論理的矛盾が含まれる回答を除き，545 名（平均年齢 30.60 歳）を分析対象とした。調査時期・手続き：2015 年 10 月上旬にオンライン調査を実施。分析使用尺度（本報告に含む変数のみ）：(1) フェイスシート：年齢，子どもの数，就業状況などを尋ねた。(2)「社会的代理人」の利用の有無：「1.配偶者」，「2.配偶者以外の家族(自分の親，配偶者の親，自分のきょうだい，配偶者のきょうだい，自分の親族，配偶者の親族)」，「3.友人・知人(出産前から，出産後子育てをきっかけ，出産後子育て以外のきっかけ)」、「4.自身の子ども」を社会的代理人として設定した。「子どもが生まれ，子育てをすることをきっかけに，あなたがあなた自身の人とのつながりをどのように変化させていったのかというご自身の経験についてお聞きします」と教示を行い，「対象者自身の子育てに役立つ人とのつながりを増やすために，それぞれの対象人物と一緒に行動したこと」の有無を尋ねた。(3) 自尊心尺度（10 項目 5 件法）(4) 一般的信頼(山岸, 1998)の尺度より「ほとんどの人は信頼できる」1 項目を用いた（5 件法）。

【結果】各対象の利用有無それぞれに対して，回答者の年齢等を統制し，自尊心と一般的信頼の主効果および交互作用項を投入する階層的ロジスティック回帰分析を行った。

その結果、友人で交互作用効果が認められた（B = .315, p < .01 R^2 = .052, p < .01, ΔR^2 = .020, p <.01)。また、子どもで自尊心の効果（B = .312 , p < .01)、交互作用効果の傾向（B = .245, p < .10）が認められた（R^2 = .040, p < .10, ΔR^2 = .015, p <.10)。一般的信頼が高い人では、自尊心が高いほど代理人を活用する一方、一般的信頼が低い人においては、自尊心の高さは代理人の活用に影響をしていなかった。また高自尊心者では、一般的信頼が高いほど代理人を活用する一方、低自尊心者では、一般的信頼の影響は認められなかった。

【考察】予測は支持されなかった。しかしながら、自尊心と一般的信頼の交互作用効果が認められた。自尊心が高く、一般的信頼が高い人が代理人を使うことが明らかになった。

自尊心が高く、一般的信頼が高い人は、被受容感を慢性的に感じている人だろう。また、自尊心は過去の対人関係上の経験を体系化したものとして捉えることが可能であり，慢性的な被受容／排斥感を導くと考えられる（柳澤, 2011)。このことから、自尊心が高く、一般的信頼が高い人は、自尊心が安定的である可能性がある。脇本（2007）は、自尊心が高い水準で安定している場合、自尊心の高低と被援助志向性、援助要請数とに関連を確認している。しかしながら、自尊心の安定性と一般的信頼の関連は確認できていないため、今後の課題となる。配偶者、家族に影響が認められなかった理由として、相手側が先じて代理人をしてくれた可能性がある。

（ふるたにかいちろう　にしむらたかし）

本研究は科研費（15K01787)、(26750352）の補助を受けた。

リスク受容経験とベネフィット認知・リスク受容との関係

○森泉　慎吾　臼井　伸之介
（大阪大学大学院人間科学研究科）
キーワード：ベネフィット認知，リスクテイキング行動，　コスト

【研究の目的】 リスク受容に伴うベネフィット（見返り）は意思決定に大きく影響し，見返りが大きくなるほど，リスク受容が促進されることが多くの先行研究にて指摘される。一方で，ベネフィットの主観的な評価であるベネフィット認知の影響要因に言及した研究は少ない。本論文では，リスク受容の経験に着目し，リスク受容時に経験したベネフィットの大きさが，後のリスク受容時のベネフィット認知および行動に及ぼす影響を実験的に検証する。従来の知見に従えば，ベネフィットが相対的に小さい場合よりも，ベネフィットが大きい場合にリスク受容は促進されると予想される。しかし，日常にてリスク受容を多く経験している者は実験環境でも同様にリスクを受容する傾向にあり（森泉・臼井, 2012），リスク受容の経験によってベネフィットの大きさとリスク受容との関係は異なる可能性がある。

【方法】 **実験参加者**　21 歳から 29 歳までの男女 40 名（男性 20 名，女性 20 名）であった。平均年齢は 24.72 歳（SD= 2.07）であった。参加者は，人材派遣会社を通じて募集された。参加の謝礼として，謝金 3,000 円が支払われた。

課題　課題は知覚判断課題（ターゲットと判断基準との一致を弁別するダミー課題；Fig. 1 左）と上書き課題（「知覚判断課題の保存」と称した課題；Fig. 1 右）で構成された。上書き課題には，上書き待機時間の発生（4 秒／8 秒）という時間的コストが伴った。上書きは省略可能であり，省略した分はまとめて上書きが可能であるが，上書きに失敗する可能性があり，その場合「失敗 1 回につき 50 円を謝金から差し引く」と虚偽の教示を行った。よって，本実験では「上書きの省略」をリスク受容、すなわちリスクテイキング行動として定義した。また，参加者が上書きした回数を把握できるように，上書き回数を画面上部に表示した。

ベネフィット条件　上書き待機時間が 4 秒の「ベネフィット小」条件，8 秒の「ベネフィット大」条件の 2 水準であった。

ベネフィット条件の順序　先にベネフィット小条件を経験する「4 秒→8 秒」群（20 名）と先にベネフィット大条件を経験する「8 秒→4 秒」群（20 名）の 2 水準であった。

デザイン　ベネフィット条件（小／大）×ベネフィット条件の順序（4 秒→8 秒／8 秒→4 秒）の 2 要因混合計画であった。

質問紙　ベネフィットに対する認知として「上書き省略にどの程度得を感じるか」について 10 件法にて回答を求めた。

手続き　知覚判断課題の後に上書き課題について教示し，練習試行にて上書きが実際に失敗する様子，またその発生確率を体感させた。知覚判断課題 1 回と上書き課題 1 回を合わせて 1 試行として，計 120 試行の本試行を実施した。なお，本試行では上書きに実際に失敗することは無かった。

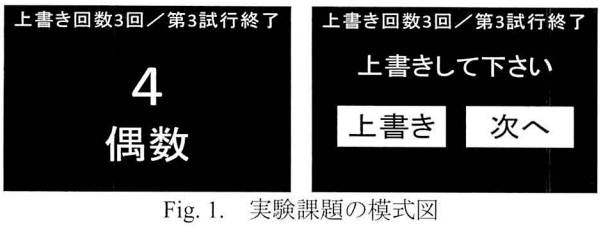


Fig. 1.　実験課題の模式図

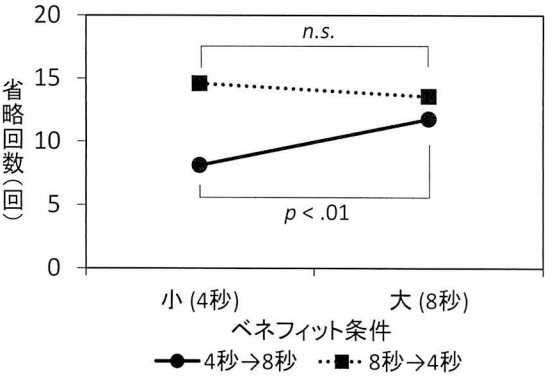


Fig. 2. 実験にて設定した各条件と省略回数との関係

【結果】 分析対象者 32 名について，本課題での省略回数を従属変数，ベネフィット条件，ベネフィット条件の順序を独立変数とする 2 要因分散分析を実施した。その結果，ベネフィット条件と順序の交互作用が有意であり（$F(1, 30) = 9.48$, $p < .05$, $\eta_p^2 = .24$），単純主効果の検定の結果，「4 秒→8 秒」条件の参加者は，ベネフィットの大きさが 8 秒の方が 4 秒に比べて省略回数が多くなる一方で（$p < .01$），「8 秒→4 秒」条件ではベネフィット条件間に有意な差がなかった（$p = .34$）。Fig. 2. に各条件での省略回数を示す。また，ベネフィット認知得点を従属変数として同様に 2 要因分散分析を実施したところ，同じくベネフィット条件と順序に交互作用が有意傾向で見られ（$F(1, 30) = 3.83$, $p < .10$, $\eta_p^2 = .11$），単純主効果の検定の結果，「4 秒→8 秒」条件の参加者は，ベネフィットの大きさが 8 秒の方が 4 秒に比べてベネフィット認知が高くなる一方で（$p < .05$），「8 秒→4 秒」条件ではベネフィット条件間に有意な差がなかった（$p = .75$）。

【考察】 本研究にて，従来の知見であるベネフィットの大きさとリスク受容の程度との相関は，先にベネフィットの相対的に小さい条件を経験した参加者にて確認された。一方で，先にベネフィットが相対的に大きい条件を経験した参加者は，後のリスク小条件におけるベネフィット（4 秒）をベネフィット大条件（8 秒）と同程度に認知する結果，ベネフィット大条件と同程度にリスクテイキング行動を敢行しやすいことが示唆された。換言すれば，リスク受容において，得られるベネフィットが客観的に小さいかどうかは問題ではなく，小さいベネフィットであっても，状況次第では高く認知され，結果としてリスクは受容されうることを意味する。今後は，このような認知の歪みがなぜ生じるかについて，例えば，制御焦点理論（e.g., Higgins, 1997）といったリスク受容に対する動機づけの理論的観点から実証的に検討する必要があると考えられる。

【引用文献】

森泉慎吾・臼井伸之介 2012 日常でのリスク傾向と違反行動との関連について 交通科学, **43** (2), 38-45.

Higgins, E. T. 1997 "Beyond Pleasure and Pain", *American Psychologist*, **52** (12), 1280-1300.

（もりいずみ しんご・うすい しんのすけ）

ヒューマンファクター教育における効果の持続性

○畑岡　真紀子[1)]　和田　一成[1)]
([1)]西日本旅客鉄道株式会社安全研究所)
キーワード：ヒューマンファクター、教育効果、安全意識

【目的】

安全行動の促進にはヒューマンファクター（以下、HF）の理解が欠かせない。畑岡・和田（2015）はHF教育直後の教育効果を測定し、教育直後には効果が上がったが、その持続性は不明である。そこで、HF教育を行った際の効果が、その数ヵ月後まで持続するのかを検討した。

【方法】

教育概要　HF教育は、社員研修センターで集合教育として行い、1回の人数は最大20人としている。講義時間は1時間で、「HFとヒューマンエラー」「ルール違反」「注意の特性」について説明した。

調査対象　平成27年8月から11月にかけてHF教育を受講した者（1168名）の内、各系統で受講者の多い20社（1044名）を対象とした（性別：男性899名、女性108名、不明37名、年代：10代・20代267名、30代236名、40代207名、50代293名、60代以上3名、不明38名）。

手続き　教育実施の際、講義開始前に「教育前」質問紙を配布し、講義終了後に「教育後」質問紙を配布し、それぞれ回答を求めた。

教育から3ヶ月後に、3ヶ月後質問紙を各社ごとに送付し、対象者に配布した。対象者には返信用封筒にて返送させた。

質問項目　調査用紙は教育前と教育後、3ヶ月後とも、各3枚からなり、安全意識21項目、教育内容の習得8項目、教育内容への興味3項目とした。これに加え、教育前の調査用紙では、年代、職務階層など個人属性について記入を求め、教育後の調査用紙では、授業自体の感想を求め、3ヶ月後の調査用紙では、役に立った経験の有無を求めた。

教育の前後で調査比較した項目の詳細は次の通り。

（ア）教育内容の理解

教育内容が理解されているか確認するため、教育内容の項目について回答を求めた。回答は、「5：とてもそう思う」から「1：全くそう思わない」の5段階評価とし、判断のできない場合には「0：わからない」を選択するよう教示した。

（イ）教育内容への興味

興味や好奇心は内発的動機の源泉のひとつであるため、これらが高まると学習への積極性が増したり、学習内容を保持しやすくなると考えられる。そこで教育内容に関する興味が高まったかどうかを3つの項目により確認した。回答は、「5：非常によくあてはまる」から「1：全くあてはまらない」の5段階評価とした。

（ウ）安全意識

HF教育が安全意識・態度の変化にどう影響するかを調べた。質問項目は、小島（2000）で抽出された因子7つから、因子付加量の高い項目を3項目ずつ抜粋し、前後比較ができるように、意識についての質問にアレンジした。なお、7つの因子とは、「仕事に対する誇り」「事前チェック」「行程優先」「早仕舞」「安全優先」「事故防止意識」「過信」である。回答は、「5：とてもそう思う」から「1：全くそう思わない」の5段階評価とし、判断のできない場合には「0：わからない」を選択するよう教示した。

【結果・考察】

返送数は780通で、教育前質問紙で属性の記入に不備があったものは除き、有効回答数は722名（有効回答率69.2%）となった。

分析は、教育内容は3テーマ、動機づけ1項目、安全意識7因子とし、独立変数を調査時期、従属変数を評定値とする1要因分散分析を行なった。

教育内容について、3ヶ月後には教育後に比べて有意に下がっていたが、教育前と比べると3ヶ月後は有意に上がっている（HF：$F(2, 1330) = 456.65$, $p < .001$、ルール違反：$F(2, 1310) = 157.73$, $p < .001$ 注意：$F(2, 1350) = 264.87$, $p < .001$）（Fig.1）。このことから、教育から3ヶ月経ってもHF教育の内容が理解されていることが示された。動機づけは、3ヶ月後は教育後・教育前に比べて有意に下がっていた（$F(2, 1420) = 209.75$, $p < .001$）（Fig.1）。安全意識・態度の変化については、4因子において教育前の水準に戻り（事前チェック：$F(2, 1414) = 78.76$, $p < .001$、工程優先 $F(2, 1382) = 84.65$, $p < .001$、事故防止意識 $F(2, 1398) = 34.58$, $p < .001$、過信 $F(2, 1368) = 15.71$, $p < .001$）、1因子は3ヶ月は教育前に比べ有意に上がっていた（早仕舞：$F(2, 1408) = 67.86$, $p < .001$）（Fig.2）。

理解度については、HF教育を受けたことで考え方を知り、日頃の業務を通じて教育内容の理解が深まったため、評定値が上がったのではないかと考えられる。

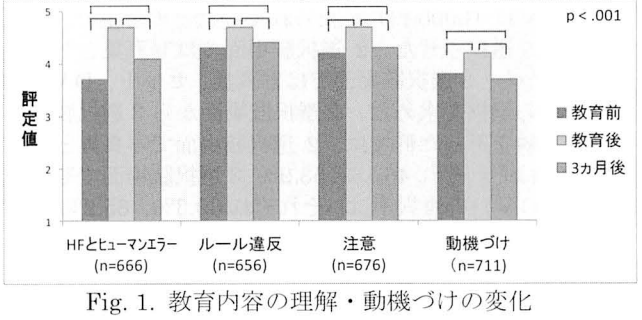


Fig. 1. 教育内容の理解・動機づけの変化

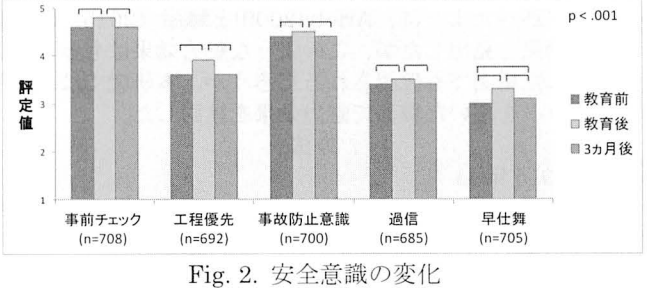


Fig. 2. 安全意識の変化

【引用文献】

畑岡真紀子・和田一成 2015 ヒューマンファクター教育における教育内容の理解度と安全意識・態度の向上　日本応用心理学会第82回大会発表論文集，79.

小島三弘・廣瀬文子・高野研一・長谷川尚子・庄治卓郎・鈴木芳美 2000 組織面・意識面からみた安全文化構築に関する調査研究－その4現場従業員を対象としたアンケート調査の結果－　電力中央研究所報告，1-20.

（はたおか　まきこ・わだ　かずしげ）

商品選択における文脈効果

—3 選択肢場面と 4 選択肢場面の比較—

蜂屋　真

（流通科学大学　人間社会学部）

キーワード：商品選択、魅力効果、選好

研究の目的

市場には属性に関して異なる多くの商品が提供されているが、我々はそのような商品群の中から希望する商品を選択し購入しなければならない。意思決定の心理学では、2 属性に関して異なる商品を用いて、魅力効果と呼ばれる現象を見出している。魅力効果を検討する実験では、属性 1 に関して優れている商品Ａ（競争者）、属性 2 に関して優れている商品Ｂ（標的）、商品特性は商品Ｂに近いが商品Ｂより劣る商品Ｃ（おとり）が用いられる。魅力効果とは、商品Ａと商品Ｂが提示される 2 選択肢場面と、商品Ａ、商品Ｂ、商品Ｃが提示される 3 選択肢場面とを比較すると、商品Ｂの選択率が 2 選択肢場面と比較して 3 選択肢場面で高まるという現象をさす。

例えば、Ariely(2009)は、エコノミスト誌の購読方法として、ウェブ版（59 ドル）、印刷版とウェブ版のセット（125 ドル）、印刷版（125 ドル）から選択を求めると、ウェブ版、セット、印刷版を選んだ人はそれぞれ 16%、84%、0%であった。しかし、次いでウェブ版、印刷版とウェブ版のセットの 2 選択肢から選択を求めると、ウェブ版、セットを選んだ人はそれぞれ 68%、32%になった。このようにセットの選択率が 2 選択肢場面と比べて 3 選択肢場面で 52 ポイント高かった。

蜂屋（2015）は、タレントの写真集（3000 円）を買いに行った所、写真集の他にも写真集とＤＶＤのセット（6000 円）とＤＶＤ（6000 円）が売られていたとの想定で、購入したい商品を選択させた。2 選択肢場面では写真集とセットの 2 選択肢から、3 選択肢場面では写真集、セット、ＤＶＤの 3 選択肢から選択を求めた。2 選択肢場面から 3 選択肢場面の系列で実験を行った群では、2 選択肢場面で写真集とセットの選択率はそれぞれ 46.1%、53.9%、3 選択肢場面で写真集、セット、ＤＶＤの選択率は、それぞれ 30.3%、65.2%、4.5%になった。このようにセットの選択率が 2 選択肢場面と比べて 3 選択肢場面で 11.3 ポイント高まった。3 選択肢場面から 2 選択肢場面の逆系列で実験を行った群では、セットの選択率は 3 選択肢場面の方が 20 ポイント高かった。

以上に述べたように、Ariely(2009)と蜂屋（2015）は頑健な魅力効果を見出したが、このような魅力効果はもっと商品を増やした場面でも確認されるだろうか。本研究では、2 種類のセットを用いた場面で魅力効果を検討した。

方法

日時：2015 年 11 月

調査対象者：平均年齢 19.3 歳の大学生 204 名（男子 150 名、女子 54 名）

実験手続：実験は、心理学 3 と心理学 5 の授業で行われた。心理学 3 の授業では、写真集を買いに行った所、写真集（3000 円）と、写真集とＤＶＤ1 のセットであるセット 1（6000 円）と、写真集とＤＶＤ2 のセットであるセット 2（9000 円）が売られていることに気付いたという想定で、どの商品を購入するかを 3 選択肢場面で選択してもらった。2 か月後に写真集（3000 円）、セット 1（6000 円）、ＤＶＤ1（6000 円）、セット 2（9000 円）の 4 選択肢場面で購入したい商品を選んでもらった。心理学 5 の授業では、同様な 3 選択肢場面で購入したい商品を選択してもらい、2 か月後に写真集（3000 円）、セット 1（6000 円）、セット 2（9000 円）、ＤＶＤ2（9000 円）の 4 選択肢場面で購入したい商品を選択してもらった。

結果及び考察

図 1 は、まず 3 選択肢場面で、次いで DVD1 を追加した 4 選択肢場面で商品選択をした群で、写真集、セット、ＤＶＤ1 の購入を選んだ被験者の割合を示す。3 選択肢場面では写真集とセット 2 に比べてセット 1 が選択される割合が低かったが、4 選択肢場面では写真集とセット 2 に比べてセット 1 が選択される割合が高かった。さらに、被験者ごとに両選択場面の選択商品を分析した所、両場面で一貫して同一商品を選んだ被験者は 57.5%、両場面で選択商品が異なる被験者は 42.5%であった。両場面で選択商品が異なる被験者の内、60.5%の被験者が 4 選択肢場面でセット 1 を選択していた。

図 2 は、まず 3 選択肢場面で、次いで DVD2 を追加した 4 選択肢場面で商品選択をした群で、写真集、セット、ＤＶＤ2 の購入を選んだ被験者の割合を示す。3 選択肢場面では写真集とセット 2 に比べてセット 1 が選択される割合が低かったが、4 選択肢場面では写真集とセット 2 のセット 1 との差は減少した。さらに、被験者ごとに両選択場面の選択商品を分析した所、両場面で一貫して同一商品を選んだ被験者は 55.3%、両場面で選択商品が異なる被験者は 44.7%であった。両場面で選択商品が異なる被験者の内、38.9%の被験者がセット 1 を、30.4%の被験者がセット 2 を、4 選択肢場面で選択していた。

以上の結果は、4 選択肢場面でＤＶＤ1 を用いた場合魅力効果が見られるが、4 選択肢場面でＤＶＤ2 を用いた場合魅力効果が見られないことを示している。

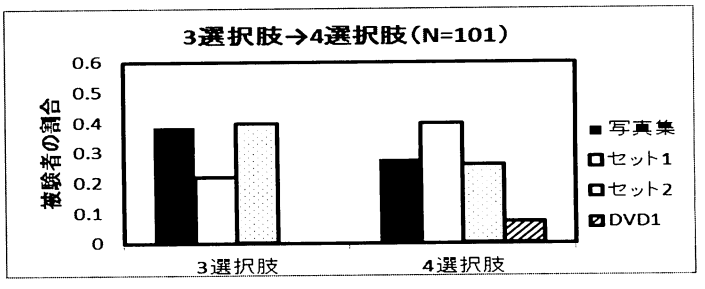


図 1　3 選択肢場面と 4 選択肢場面で、写真、セット、ＤＶＤ1 を選んだ被験者の割合

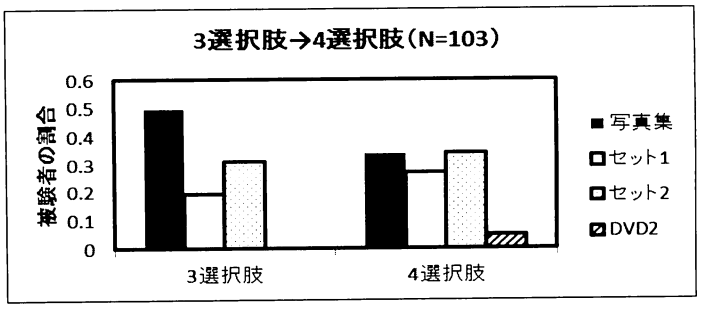


図 2　3 選択肢場面と 4 選択肢場面で、写真集、セット、ＤＶＤ2 を選んだ被験者の割合

（はちや　しん）

組織での安全作業に関連する性格特性についての研究

○稲葉　緑　　楠神　健
（JR 東日本研究開発センター 安全研究所）
キーワード：リスクテイキング，安全行動，性格

【研究の目的】 リスクテイキング行動への志向性・回避性には性格特性が影響することが報告されている（上市・楠見，1998；森泉・臼井，2011）。危険を伴う職務に従事する社員は職務において危険行動を回避し、安全を保障するための行動に対して積極的である性格特性を有していることが望ましいが、先行報告の多くは普段の日常生活におけるリスクテイキング行動を対象としている。性格特性のリスクテイキング行動への影響が状況や場面によって異なる（上市・楠見，1998）ことを考慮すると、先行知見を危険業務における個人特性にそのまま適用することは不適当であるおそれがある。

本研究は、鉄道会社での現場第一線の業務に従事する社員を対象とし、危険回避および安全確保に寄与する行動への志向性と関連の深い性格特性を明らかにすることを目的とする。

【方法】 事故や問題の発生を回避するための行動、あるいは、安全を保障するための行動に関する性格や態度を、次の過程を経て選定した。

① はじめに、412 項目の質問項目を準備した。上述の行動や態度に関連のあると推測された心理尺度およびそれらの質問項目を既存の心理尺度から選び、見つからないものについては質問項目を作成した。

② 一般参加者 8 名および社員 9 名に、各質問項目について「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」から選択肢を 1 つ選んで回答するよう求めた。また、質問の内容についての理解し易さ等について評価してもらった。理解し易さ等の主観評価や回答の中心化傾向などの点から、288 項目を除外した。

③ 残った 124 項目を使用し、一般参加者 600 名を対象としたインターネット調査を実施した。回答への負担軽減を目的として、124 項目を大きく 2 グループに分けた。Hollnagel の Safety-I、Safety-II の分類を参照し、各質問項目を「A）既存のルールに対する遵守」あるいは「B）事故・問題の回避あるいは安全の保障に対する自主的な工夫」のいずれかに、より強く関連するか判断し、前者に 59 項目、後者に 65 項目を割り当てた。A、B 各グループの質問項目に対し 300 名分の回答を収集した。各参加者の回答方法は②と同様であった。

④ 鉄道会社に勤務する様々な職種・年代の社員（管理職を除く）888 名を対象に質問紙調査を実施した。各参加者の回答方法は②と同様であった。A グループの質問項目については 443 名分、B グループの質問項目については 445 名分の回答を収集し、それぞれについて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。

⑤ ④の調査に参加した社員の管理者に、当該社員の性格特性などについての質問 31 項目への回答を求めた。管理者向け質問項目は 31 項目であった。各参加者の回答方法は②と同様であった。④で実施した社員データと照合ができた 785 名分について、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を実施した。

⑥ ④で抽出された因子（社員側因子）の回答値（例「あてはまる」は回答値 4）平均と⑤で抽出された因子（管理者側因子）の回答値平均を算出し、これらの平均値同士について回帰分析を実施した。

【結果・考察】 方法⑤で抽出された管理者側因子 4 つのうち 2 つを「安全作業に対する積極的姿勢」と「業務に対する否定的評価」と名付けた（これらの因子間相関は－.71）。これらの因子と統計的に有意であった社員側因子を表 1 に示す。「A）既存のルールに対する遵守」については社員側因子 6 因子が抽出されたが、上述の管理者側因子 2 因子との関係が有意であるものはなかった。一方、「B）事故・問題の回避あるいは安全の保障に対する自主的な工夫」について抽出された社員側 5 因子のうち、2 因子が管理者側因子「安全作業に対する積極的姿勢」と、1 因子が「業務に対する否定的評価」との関係が統計的に有意であった。

B グループの社員側因子のみ、管理者側因子との関係が有意であった理由としては、状況等に合わせて適切に行動するなど、複雑な判断を必要とする業務の方が、より性格特性によって左右されやすい（Guillén & Saris, 2013）ことが考えられる。また、ルールの実行は社員全員の職務であり、管理者が社員間での個人差を大きく観測しにくい可能性の関与も推測された。

（いなば みどり・くすかみ けん）

	質問項目
管理者側因子「安全作業に対する積極的姿勢」	
1	安全上の工夫や安全行動のコツについて熱心に知ろうとしている
2	安全の取り組みに積極的に参加している
3	失敗から学ぼうとする姿勢がみえる
4	物事に関して自分なりの目標を持って努力している
5	自分の失敗を正しく振り返ることができる
6	重要なことを忘れない工夫（メモ、アラーム、付箋など）をしているようだ
7	必要なことであっても、やったことがないことはしたがらない

	質問項目
管理者側因子「安全作業に対する積極的姿勢」	
1	物事に対して楽観的に取り組むほうだ
2	提出物などの期限を忘れることがある
3	結果がよければ過程は気にしないようだ
4	準備が不十分のまま物事を始めようとすることがある
5	話の途中で、最後まで理解したつもりになっていることがある
6	やるべきことを話したのに、その後話題を変えるとやるべきことを忘れてしまうことがある
7	同じようなミスを繰り返す
8	ぼんやりとしていて、やるべきことを思い出せずに対応しないことがある
9	全体のうちの一部の情報だけで判断することがある

表 1　回答値同士が統計的に有意な関係であった社員側因子・管理者側因子

	質問項目	出典・参考資料
社員側因子（Bグループ）「多面的思考態度」		
1	難しいことを解決しようとして色々な方法を考えてみる方だ。	レジリエンス尺度・自己志向性
2	自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかをわかろうとする。	多次元共感性尺度、視点取得
3	人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。	多次元共感性尺度、視点取得
4	1つ2つの立場だけではなく、できるだけ多くの立場から考えようとする。	批判的志向態度尺度、客観性
5	努力の成果がすぐにあらわれなくても、そこから得るものは多いはずであると思っている。	能力・努力観、能力相対視
社員側因子（Bグループ）「自己効力感」		
1	幸せを感じられると、自分の努力が報われた気がする。	Locus of Control
2	人からほめられたいという気持ちが強い。	ナルシシズム　注目欲求
3	目標をやり遂げられると、自分自身で人生を決定していると心から感じる。	Locus of Control

	質問項目	出典
社員側因子（Bグループ）「楽観性」		
1	何か物事に失敗しても、仕方なかったと思いあまり悩まない。	多面的楽観性測定尺度、楽観性
2	困ったことが起きても、悩んでも仕方がないと思っているのであまり気にしない。	多面的楽観性測定尺度、楽観性
3	自分ではどうしようもないと思っていることは、あまり深く考えない。	多面的楽観性測定尺度、楽観性

事故発生時の責任の予測と道路横断意図の関係は横断者の年齢で異なる

紀ノ定　保礼
（大阪大学大学院人間科学研究科）
キーワード：交通事故，横断，責任，若年者，高齢者

【研究の目的】車両が接近する無信号交差点を横断する際の意図のメカニズムを検証した。横断者は自転車利用者とした。
仮説 1　横断して事故が発生した場合に，自身の責任を低く予測する横断者ほど，無信号交差点を横断する意図が高い。
仮説 2　接近車両が道を譲ることへの信頼が，責任の予測とリスク回避行動の関係を媒介する（Fig. 1）。

場面想定法を適用した質問紙調査により，横断者の年齢（若年者／高齢者）と，横断者から接近車両までの距離（近い／遠い）の組み合わせで，上記の仮説を検証した。

【方法】
回答者　大阪府内の自動車教習所に通う若年者に質問紙を配布し，その場で記入を求めた。全員，普通自動車第一種運転免許（以下免許と略記）はまだ取得していないが，当該教習所の卒業試験には合格しており，免許を取得可能な水準の知識や運転技量を有していたと判断した。また，当該教習所の指導員が関わる高齢者講習や講演会に参加した高齢者に質問紙を配布し，その場で記入を求めた。データ獲得後に，回答に記入漏れがあった回答者のデータは除外した。また，免許を所持していない高齢者のデータも除外した。有効な回答は，若年者 142 名（平均 20.19 歳，男性 54.93%）と，高齢者 108 名（平均 73.52 歳，男性 76.85%）であった。
質問紙　自転車利用者が無信号交差点を非優先道路側から横断しようとしている状況を，後方からパノラマ撮影した写真を用いて，回答者にシナリオを想定させた。交差道路上には，右方から接近する車両が存在した。自転車利用者から車両までの距離は 2 通り設定された（遠い条件：実際の距離は 24m，近い条件：実際の距離は 16m）。回答者は自身が写真内の自転車利用者であると想定するように教示された。分析に使用した質問項目のみを以下に抜粋した。すべて 7 件法であった。
・自身の責任：当該状況で横断して事故が発生した場合に想定される，自身の責任の程度（1: 非常に低い-7:非常に高い）
・接近車両の責任：当該状況で横断して事故が発生した場合に想定される，接近車両の責任の程度（1: 非常に低い-7:非常に高い）
・信頼：当該状況で予測される，接近車両が道を譲ってくれる程度（1: 非常に有り得ない-7:非常に有り得る）
・意図：当該状況で横断しようと思う程度（1: 非常に有り得ない-7:非常に有り得る）

【結果】
R version 3.3.0 と rstan version 2.9.0-3 を用いて，年齢群×距離のいずれの組み合わせに関して，媒介過程が成立するかをベイズ推定した。統制変数として，回答者の性別，日常的な自転車利用の有無，日常的な自動車運転の有無（若年者は教習を含む）をダミーコード化して投入した。chain = 4, iteration = 10000, warmup = 2000 とした。全パラメータの Rhat は 1.001 以下であり，事後分布は収束していた。

まず，媒介変数である信頼を除いて，自身の責任が横断意図に直接影響するかどうかを推定した。いずれの組み合わせにおいても，Table 1 の通り，若年者では接近車両までの距離が遠い条件でのみ，自身の責任の係数に関する 95%信用区間は 0 を含んでおらず，自身の責任を高く予測する若年者ほど横断意図が低かった。その他の組み合わせでは，いずれも 95%信用区間が 0 を含んでいたが，係数が負である確率は高齢者かつ接近車両までの距離が近い条件で著しく小さかった。

95%信用区間が 0 を含まなかった，若年者かつ遠い条件でのみ，間接効果をベイズ推定した。間接効果（MAP 推定値：-0.119，間接効果の係数が負の確率：97.83%）に関する 95%信用区間は 0 を含まず（-0.246: -0.003），事故発生時の自身の責任を低く予測する若年者ほど，接近車両が道を譲ることの信頼が強く，交差点を横断する意図が高かった（Fig. 1）。

自身の責任と接近車両の責任は，負の相関関係を示した（MAP 推定値：-0.41，95%信用区間[-0.533: -0.257]）。

【考察】
高齢者では，接近車両までの距離が近い条件において，自身の責任が横断意図に影響する確率が著しく低かった。高齢者は接近車両までの距離に基づき横断の可否を判断しているため（e.g., Dommes & Cavallo, 2011），車両が近接した状況ほど，事故が発生した場合に予測される責任という社会的要因が影響しにくかったと考えられる。

一方で若年者では，接近車両までの距離が遠い条件において，自身の責任を低く予測する自転車利用者ほど横断意図が高かった。道路利用者は自身の責任を問われる状況では，他者との接触を回避するよう行動すると考えられる。新規な発見は，道路の横断状況では，自身の責任の認知が横断意図に及ぼす影響は，接近車両が道を譲ることの信頼により媒介される点である。自身の責任と接近車両の責任の評定は負の相関関係にあるため，自身の責任を低く評定するほど，接近車両側の責任を重く予測し，接近車両が道を譲ると信頼することで，より横断意図が高くなったと考えられる。すなわち若年者は高齢者よりも，横断判断に際して，より社会的な要因や将来の交通環境の変化を考慮しているといえる。

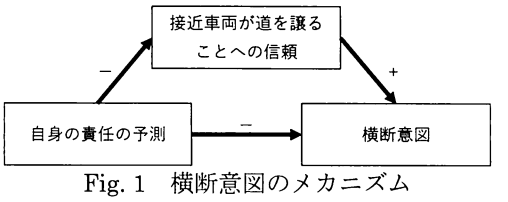


Fig. 1　横断意図のメカニズム

Table 1　自身の責任が意図に及ぼす影響

	若年者		高齢者	
	遠	近	遠	近
MAP推定値	-0.226	-0.113	-0.174	-0.073
95%信用区間	-0.425: -0.001	-0.281: 0.045	-0.365: 0.016	-0.271: 0.123
係数が負の確率	0.975	0.924	0.963	0.766

【引用文献】
Dommes, A., & Cavallo, V. (2011). The role of perceptual, cognitive, and motor abilities in street-crossing decisions of young and older pedestrians. *Ophthalmic Physiol Opt, 31*, 292-301.（きのさだ　やすのり）

高齢ドライバーの認知機能と運転行動の関連

○中村行宏[1)]　蓮花一己[2)]　多田昌裕[3)]
([1)]帝塚山大学大学院心理科学研究科　[2)]帝塚山大学心理学部　[3)]近畿大学理工学部　)

キーワード：MMSE,　高齢ドライバー,　運転行動

[目的]日本では他の年齢層と比較して、交通事故に占める高齢ドライバーの割合が大きい。彼らの交通事故の主な原因は、運転技能の低下・身体機能の衰え・過去の経験からなる油断などである。他にも、加齢に伴う認知機能低下（病的老化）も彼らの運転や交通事故に影響を与えているのではないかと予測できる。本研究では、高齢ドライバーの認知機能検査に焦点を当て、指導員による運転評価得点との関連を分析していくことにした。

本研究では「MMSE」を用いた認知機能検査を中心に分析を行う。MMSE は 30 点満点の 11 項目から構成され、27～30 点を“正常値”、22～26 点を“軽度認知障害の疑いがある”、21 点以下を“認知症などの認知障害がある可能性が高い”と 3 つの段階に分ける。本研究では、高群（30 点のみ）・中群（27～29 点）・低群（22～26 点）に分けて、群間比較を行った。高群は「特に問題なし」、中群は「少し認知機能低下の兆しあり」、低群は「軽度認知障害の疑いあり」とした。また 92 名全員が 22 点以上で、医師により認知症ではないと診断された。

本研究の目的は、高齢ドライバーによる MMSE 得点と指導員による運転評価得点に関連があるかを検証することだ。仮説 1 として「MMSE 高群は中群・低群よりも指導員評価の得点が高い」、仮説 2 として「MMSE 中群は低群よりも指導員評価の得点が高い」の 2 つを検証した。

[方法]高知県自動車学校において、平成 26 年 9 月 30 日、同年 10 月 7～11 日及び平成 27 年 10 月 26 日～31 日の計 12 日間で行った。MMSE 及び運転行動調査での実験者は 96 名で、そのうち分析対象者は 92 名、平均年齢は 76 歳（*SD*=5.05）であった。MMSE 高群は 24 名、中群は 53 名、低群は 15 名となった。運転行動調査では自動車学校の走行コースを使用した。コースには一時停止交差点や見通しの悪い交差点、S 字、カーブ、踏切、バックなどが設置されている。指導員は助手席に着席し、対象者には練習走行を 1 回、本走行を 2 回してもらった。調査終了後、『運転ぶりの指導員評価表』計 21 項目を 5 点評価（1：できていない～5：非常に良くできている）で指導員が評価した。算出した全体指導員評価得点（総合評価・確認・速度・合図・ふらつき・ポジショニング・ハンドル操作の計 7 項目）を MMSE 得点と関連して分析した。

[結果]各 MMSE 得点群における全体指導員評価得点の違いを検討するために 1 要因分散分析（3 水準：高群・中群・低群）を行った。その結果、全体指導員評価得点の 7 項目の中で、「総合評価」「確認」「速度」「合図」「ふらつき」の計 5 項目で有意な差がみられた（Figure1）。多重比較を行ったところ、MMSE 高群と中群間、高群と低群間では 5 項目全てにおいて有意な差がみられた。MMSE 中群と低群間では、「総合評価」「確認」「速度」の 3 項目においてのみ有意な差がみられた。有意差が見られた項目数は中群と低群間よりも高群と中群間、高群と低群間の方が多いという結果になった。

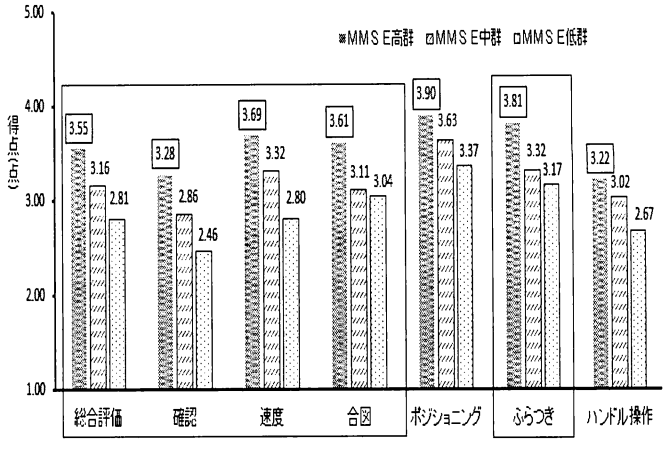


Figure1. MMSE 高群・中群・低群における指導員評価得点

以上から、MMSE 高群は中群・低群よりも指導員評価の得点が高いといえる。また MMSE 中群は低群よりも指導員評価の得点がある程度高いことが示された。そのため、MMSE 中群は低群よりも指導員評価得点が高いことがいえる。よって、仮説 1「MMSE 高群は中群・低群よりも指導員評価の得点が高い」は支持された。また仮説 2「MMSE 中群は低群よりも指導員評価の得点が高い」においても一部支持された。

[考察]これらの結果から、高齢ドライバーによる MMSE 得点と指導員による運転評価得点には一定の関連が示された。中でも「総合評価」「確認」「速度」の 3 項目は MMSE 得点との関連が特に強いことが分析により判明した。MMSE 高群・中群・低群では群間で明確な差がみられた。また「合図」「ふらつき」の 2 項目では、MMSE 高群と中群、高群と低群で有意な差がみられた。これらの項目は微細な認知機能低下の影響を受けて容易に低下してしまう運転行動なのかもしれない。残りの「ポジショニング」と「ハンドル操作」の 2 項目では、全ての群で有意な差がみられなかった。そのため、この 2 項目は認知機能の低下にそれほど影響されない運転行動だといえる。

MMSE 高群と中群間で有意な差がみられたことから、“正常値”の範囲であっても少しの認知機能低下が運転行動の低下に結びついていると解釈できる。それゆえ，MMSE の従来の判定基準である“正常値”の範囲内であっても認知機能低下の兆しがみられる（30 点でない）ならば、運転行動への留意が必要となるかもしれない。今後，MMSE に限らず、各種の検査バッテリーで高齢ドライバーとの運転行動との関連を精査して、的確なアドバイス等の介入手法の検討を進める必要がある。

（なかむら　ゆきひろ・れんげ　かずみ・ただ　まさひろ）

注）本研究は、文部科学省科学研究費・基盤研究（B）「高齢ドライバーの加齢による脳機能変化と運転行動の関連に関する基礎的研究（研究代表者・蓮花一己）」の一環として行われた

視覚刺激の動態提示による識閾の低下

歩行者事故抑止への新しい着想（仮説）

新潟大学　　長塚康弘

問題　メデイアは、高齢者の横断中の轢死、暴走、高速道逆走などを頻繁に伝え、高齢者の事故防止対策は急務であると報じる。資料は更に詳細に分析、考察を要するので、事故発生状況を軽々に即断することはできないが、最近は大事故も頻発しており、今後の動向については予断は許されない。

今求められるのは我々が事故の発生を可能な限り未然に防止する具体的な方策を探らなければならないということである。

(1) 高齢者の加害事故防止対策

統計によれば、高齢者加害事故の最多原因違反は安全不確認であり、2 位が一時不停止違反である。この２種類の違反行動を除去することが高齢者の事故防止、特に加害事故防止のポイントになる。これはすでに専門家の指摘にも明らかなことである。加害事故防止対策の第一は、長山（1979）が車の運転にとって最も重要なものとして「正確な知覚」を挙げたように、「見るべきもの、即ち視覚刺激の確実な見極めである。これは高齢者の運転の場合にも該当することである。歩行者、先行車、後続車などの環境内の「視覚刺激」を確実に知覚することである。そのために確実な一時停止の実行による刺激の確認が不可欠になる。

(2) 高齢者の被害事故防止対策

高齢者の交通事故を語る時には、交通弱者とされる高齢者を守る立場からの方策が問われるが、筆者は守られる弱者として行動するのではなく高齢者には自分の行動をこれまでとは異なるものに変える努力を期待し求なければ成らないと考える。

従来横断者は右手を翳（かざ）しながら前進したがこれに横断の意志を加えるのがわれわれの新たな着想である。横断の意志を接近する運転者に伝えるために腕振り動作を加える。視覚刺激の動態提示である。刺激の空間位置の変化は生物にとって強力な刺激要因である。横断歩行を生物学的に考察すると、環境内の動く刺激物は生物にとって潜在的な危険性がある。動く刺激はすばやく知覚され、用心の対象になる。

簡単な観察結果を記す。ある商店前の横断道で A 挙手のみの場合と B 挙手＋腕振りの場合の 2 条件下で 10 数両の観察を行った。B において停止した車及び停止への構えを見せた車が多く見出された。

結論　本報告は視覚刺激を動態提示した場合の視覚刺激の識閾低下に関する筆者らの仮説的試みを示すものである。実験条件を統制し今回見出された予備的観察結果を補強する。

（ながつか　やすひろ）

看護学生のレジリエンスからみたメンタルサポートのあり方

○中本明世[1) 2)]　近藤純子[1)]
([1)] 千里金蘭大学看護学部　[2)]金沢大学大学院医薬保健学総合研究科)
キーワード：看護学生，レジリエンス，メンタルサポート，学生相談

【研究の目的】

看護学生にとって専門職者として働くための看護師免許取得は必須である。免許取得に向けた国家試験は，自らの将来を決定づける試験であるというプレッシャー，試験合格レベルまで引き上げることを目指して行う継続的な勉強などにより，精神的なストレスを多く抱えている。このような状況をうけ本学看護学部では，学部4年生を対象とした国家試験対策に関するメンタルサポート相談窓口を設け，学生が将来の展望や学習について精神的な問題が生じた場合にカウンセリングを行い，自分自身で問題解決策を見出し，国家試験対策をより円滑に進めるためのサポート体制を整えている。看護学生のメンタルサポートを行うに辺り，単なる二次予防（早期発見・早期対応）としての精神的支援に留まらず，一次予防（問題が起こる前の予防的対策）として学生のレジリエンスを高めることも視野にいれサポート体制を整えていく必要がある。本研究は，看護学部4年生を対象に，看護学生のレジリエンスおよび学生のメンタルサポート相談窓口に対するイメージについて調査し，学生に対するメンタルサポート体制のあり方への示唆を得ることを目的とする。

【方法】

1. **対象とデータ収集方法**　**看護系大学看護学部4年生85名を対象に，2015年11月に自記式質問紙調査を実施した。**

2. **調査項目**　①属性：年齢，性別，メンタルサポート相談窓口の必要性など，②レジリエンス：この指標には，大学生用レジリエンス尺度（斎藤，2010）を用いる。「コンピテンス」「ソーシャルサポート」「肯定的評価」「親和性」「重要な他者」の5要素に分類され，4件法で点数の高いほどレジリエンスが高いことを意味する。②学生相談機構イメージ：この指標には，学生相談機関イメージ尺度（伊藤，2006）を用いる。「有益イメージ」「危機支援イメージ」「不利益イメージ」「不気味イメージ」の4要素に分類され，5件法で点数の高いほど学生相談機関に対するイメージが高いことを意味する。

3. **分析方法**　SPSS Ver.19 を用いて，記述統計，一元配置分散分析，Pearsonの相関係数を算出した。

4. **倫理的配慮**　対象者には，研究目的，方法，参加は自由意思であり成績評価とは無関係であることなどについて文書および口頭で説明し同意を得た。データはすべて記号化して管理し，結果は統計的に処理した。本研究は，研究者所属機関の倫理審査委員会の承認を得た。

【結果】

回収は85件（回収率100%）。分析対象は無回答のあった2件を除外した83件（97.6%）とした。対象者の平均年齢は22.1歳，全員が女性である。

「メンタルサポート相談窓口は必要だと思うか」という問いに対し，「必要」が33名（39.8%），「どちらかといえば必要」が34名（41.0%），「どちらかといえば必要でない」が2名（2.4%），「わからない」が14名（16.9%）であった。

『学生相談機関イメージ』の4つの下位尺度項目の平均値（SD）は，高い順に「有益イメージ」3.85（0.55），「危機支援イメージ」3.16（0.63），「不気味イメージ」2.72（0.77），「不利益イメージ」1.76（0.61），であった。『レジリエンス』の5つの下位尺度項目の平均値（SD）は，高い順に「重要な他者」3.27（0.57），「ソーシャルサポート」3.06（0.50），「親和性」2.92（0.50），「コンピテンス」2.84（0.44），「肯定的評価」2.59（0.58），であった。

『学生相談機関イメージ』と『レジリエンス』の相関では，『レジリエンス』の「コンピテンス」，「ソーシャルサポート」，「重要な他者」と，『学生相談機関イメージ』の「有益イメージ」に正の有意な相関，『レジリエンス』の「重要な他者」と，『学生相談機関イメージ』の「不利益イメージ」に負の有意な相関，『レジリエンス』の「コンピテンス」，「ソーシャルサポート」，「親和性」と，『学生相談機関イメージ』の「不気味イメージ」に負の有意な相関がみられた。(Table1)

レジリエンスの平均値が2.94であることから，3を基準としてレジリエンスの高群（31名）と低群（52名）に分類し，学生相談機関イメージの下位尺度との差について分散分析を行った。その結果，「有益イメージ」（$F(1,81)=11.23, p<.01$）と「不利益イメージ」（$F(1,81)=11.06, p<.01$）に有意な交互作用がみられた。これらから，レジリエンスが高い場合は学生相談機構に対して有益イメージが高く，レジリエンスが低い場合は学生相談機構に不利益イメージが高いことがわかった。(Table2)

Table1. 学生相談機関イメージとレジリエンスの下位尺度間相関

	有益イメージ	危機支援イメージ	不利益イメージ	不気味イメージ
コンピテンス	.349 **	-.075	-.082	-.295 **
ソーシャルサポート	.340 **	.020	-.188	-.307 **
肯定的評価	.136	-.169	-.049	-.137
親和性	.149	-.116	-.127	-.231 *
重要な他者	.433 **	.004	-.420 *	-.163

**<.01　*<.05

Table2. レジリエンス高低群と学生相談機関イメージによる各得点と分散分析結果

	レジリエンス低群	レジリエンス高群	交互作用
有益イメージ	3.70（0.46）	4.10（0.62）	11.23 **
危機支援イメージ	3.14（0.58）	3.20（0.73）	0.13
不利益イメージ	1.92（0.60）	1.48（0.54）	11.06 **
不気味イメージ	2.84（0.71）	2.52（0.83）	3.39

平均値(SD)，**<.01

【考察】

メンタルサポート相談窓口を必要としている割合は高く、相談窓口のイメージも有益イメージが最も平均値が高いことから、メンタルサポート相談窓口を肯定的に捉えていると考える。さらに、レジリエンスが高い学生は学生相談機関を自分にとって有益となる場であると捉えているが，レジリエンスが低い学生は相談機関を不利益となる場と捉えていると考えられる。サポート体制としての一次予防的取り組みとして，学生の周囲の環境が整っているか確認し、コンピテンスを高められるような働きかけが必要といえる。

【引用文献】

斎藤和貴，岡安孝弘（2010）大学生用レジリエンス尺度の作成：明治大学心理社会研究，5，22-32
伊藤直樹（2006）学生相談機関イメージおよび周知度と来談意思の関係：心理学研究，76，540-546

（なかもと　あきよ・こんどう　じゅんこ）

看護学臨地実習で学習の停滞を経験した学生と学生の指導に困難を感じる教師のPAC分析

○堀　良子
（北里大学　看護学部）
キーワード：臨地実習指導，学習停滞，指導困難

【研究の目的】 看護学臨地実習で学習が停滞し、学習困難に陥っている学生を指導する際、教師は、学生の沈黙や求めることに反応が返らないなど、指導に困難を感じることを経験することがある。本研究は、学習の停滞を経験した学生と学習が進まない学生の指導に困難を感じる教師の認知・感情・行動傾性について、個人別態度構造を描き出し、学習停滞時の学習の進行を促進する実習指導の在り方を考察することを目的とする。

【方法】 看護大学、3年課程看護短期大学・看護専門学校の実習教育を対象とした。教師については全国調査でインタビューを受けても良いと回答のあった人の中から無作為に選定した。学生については教師対象候補者の学校で呼びかけに応じた3年生を対象とした。

今回の分析対象となった学生Aは、実習単位が不足し留年が決まっている看護専門学校3年生、女性、21歳であった。教師Aは、看護専門学校専任教員で臨床経験6年、教育経験5年の女性、37歳であった。両者は違う学校に所属していて師弟関係はない。

調査方法は、PAC分析（Personal Attitude Construct Analysis：個人別態度構造分析）を用いて行った。

調査期間は、平成28年1月～2月であった。

本研究は、北里大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

（用語の定義）

学習の停滞：看護基礎教育における臨地実習において、患者との関係形成が上手くいかない、看護の方向性が見えない、記録が書けないなどの理由により、数日間あるいはそれ以上学習が進まないで出口が見えないでいる状況

指導困難：臨地実習で学習が停滞し、出口が見えずにいる状態にある学生に対して、その問題や解決方法が見えないなどにより指導が難しいと感じる状態

【結果】

1．臨地実習で学習が停滞した経験をもつ学生Aの事例

学生Aは、「患者と関わるのが怖くて辛い」、「患者とのコミュニケーションが難しい」、「教師のサポートを求めたいが引いてしまう」の3つのクラスターで構成されていた。疾患や血圧などの看護の専門的なことは聞けるが、普通の会話が続かなくて患者が何も話してくれない事が多く、疾患の原因の理解までたどりつかないことが多かった。高齢患者だと孫のように思い受け入れてくれたが、成人の男性は反応してくれなかった。**「自分はこうして患者さんのことも思っているのに、なんか自分が悪いのでなく患者さんが悪いという、負の方向にどんどん思考が向いちゃって」**患者と関わるのが怖く、実習に行くことが辛かった。教師に、**「日常の会話が全然進まないんですっていう話はしてて。でもなんか、あーそうなんだくらいしかなくて」、「コミュニケーションとかも一緒にしてほしかったなって」**思っていたが、1年生の時習った基礎的なことを今更質問するのは、**「なんでこんなのもわからないのっていう雰囲気になりそうで怖かった」**。そして**「相談したいけど、なんでもっと早く言ってくれなかったのっていうのが多くて、怒られそうでなんかなかなか踏み出せない」**と述べた。話して行くうちに、次のことに気付いた。小さい頃、男性恐怖症があって、父親と兄以外に触られると泣き喚くこともだった、大人の男の人は怖いってイメージがあって、挨拶に行っても顔を背けられて目を合せてくれず、ますます苦手になったと。実習当時はこのことに気づいていなかった。

2．指導困難を感じる教師Aの事例

教師Aのクラスターは、「学生が躓いている理由を知りたい」、「自分がどうして良いかわからない」の2つで構成されていた。教員を始めた頃は、**「なんで動かないのか、どうして記録を書いてこないのか、さぼっているのかな」**というようなネガティブな感情をもつことがあった。今は、よくよく学生と話したり、振り返ったりすると、**「思う以上に学生の緊張感が高いことや患者のためを思ってもなかなかたどり着けない現状があるんだ」**と認識している。だから、学生が何を思って躓いているか知りたいと思う。**「これはどう？、これは？と聞いちゃうと、学生の方は、わかりません、わかりません」**と。できていない学生は、**「すごく責められていると感じるみたいでどんどん、こう、ひゅーと距離が遠くなっていくのを感じることがある」**、そんな学生の反応に困ったなどうしようと思う。**「患者と関わって看護を提供することで、看護って楽しいな、やって良かったと思える実習にしたいと思っているのでいろいろ考える」**が、**「私は結構厳しいと言われることがある」**と、一生懸命学生と関わろうとしているが、引かれてしまう状況に指導困難を感じると語った。

【考察】 学生Aの事例では、基礎的な日常会話に躓き、患者の信頼を得る関係づくりができず、結果的に実習目標が達成できずに単位を落とす結果となっていた。学生Aは、受動的で、自ら働きかけることや、患者の立場に立って相手を思いやることの態度形成が、まだ未成熟であると考えられた。教師のサポートを得ることに、もう一歩踏み出せない学生と学生の個別性に目を向けるというより、患者の症状把握や看護ケアの指導にパターン化している教師の指導によって、抱えている問題が解決されずにそのままに経過したものと考えられた。

一方、教師Aは学生に真摯に向き合い、やって良かったと思える実習にしたいと一生懸命であったが、そのことが実習が上手くいかない学生にとって、質問に答えられなかったり、責められているように感じて反応できないなど、ますます焦りを感じることとなっていた。教師がよかれと思い一生懸命になることは、混乱している学生を更に追い詰める結果となり、逆効果となることがある。性急に学生は育たない。実習目標を達成する観点から、学生の状況を何とかしようとせず、ありのままの学生の声に耳を傾け、学生と一緒に考える態度こそが求められていると考えられた。　（ほり　りょうこ）

基礎看護学実習における社会人学生の特徴

—学生の満足度調査—

○武士由美[1)]　阿児馨[2)]　國宗多恵[3)]
([1)]甲南女子大学看護学研究科　[2)]常盤大学看護学部　[3)]甲南女子大学心理学部)
キーワード：基礎看護学実習，社会人学生，満足度

【研究の目的】少子高齢化、超高齢社会のための看護師の人材確保、景気低迷等の社会情勢から看護師を目指す社会人経験をもつ学生（以下　社会人学生）が増えている。「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」（厚生労働省,2011）の中では、学生間の学習状況や生活体験の差が広がっている現状を指摘している。これからの看護基礎教育には、多様な背景の学生に合わせた学習支援が必要とされる。

国は、看護基礎教育における臨地実習を1035時間と定め、重要な教育方法に位置付けている。その中でも基礎看護学実習は、看護学生が初めて実習を経験する科目であり、緊張感も高いものである。また、その後の実習意欲に基礎看護学実習の経験が大きな影響を与える。初めての実習は、さまざまな経験のある社会人学生にとっても、緊張と困難が予測される。

そこで、本研究では、基礎看護学実習で社会人学生が満足できる理由の特徴を検討する。

【方法】調査対象者は、社会人学生と現役学生が在籍しているA看護専門学校1年生69名を対象とした。調査期間と回収方法は、基礎看護学実習Ⅱ(2単位90時間)を履修直後の2016年2月12日に自己記入式の調査用紙を配布し、回答後は回収箱に各自投函を依頼した。質問項目は、基礎看護学実習の満足度を100%でもとめた。そして、「そう考える理由」を自由記載とした。分析は、質的記述的分析をおこなった。自由記載の記述をコード化し、社会人学生と高校卒業後すぐの学生（以下　現役生）に分けた。それぞれ類似するものをサブカテゴリー化、カテゴリー化した。分析の信頼性、妥当性を測るために、研究者3人で検討を繰り返し行った。

倫理的配慮は、学生に調査用紙配布の際に、調査の趣旨、調査の協力は自由意志であること、調査への協力の有無によって成績には影響がないこと、調査は無記名で行われることを口頭で説明し、調査用紙の提出をもって同意を得たこととした。

【結果】68名の学生から回答を得た。（回収率98.6%、有効回答率100%）学生の割合は、現役生39名（57.4%）、社会人学生29名（42.6%）であった。学生が満足度を考える理由のコードは、120コードであり、そのうち現役生は77コード、社会人学生は、43コードであった。サブカテゴリーは、現役生20サブカテゴリー、社会人学生15サブカテゴリーであった。社会人学生、現役学生に共通していた15サブカテゴリーは、〈臨地で学ぶことの大切さ〉〈自己の課題の発見〉〈学びの有無〉〈看護の探求〉〈振り返る〉〈充実感〉〈援助の大切さ〉〈考える〉、〈看護援助の実施〉〈患者とのコミュニケーション〉、〈指導体制と指導者の姿勢〉〈実習病棟の環境〉、〈実習記録〉〈自己の頑張り〉、〈患者の理解〉であった。社会人学生にみられなかったサブカテゴリーは、〈自己の成長〉〈技術を学ぶ〉〈勉強不足〉〈欠席〉〈理解・知識の不足〉の5サブカテゴリーであった。命名したカテゴリーは、社会人学生、現役生共に、[学びの内容][援助の実施][実習環境][実習への姿勢][患者の理解]の5カテゴリーであった。

【考察】共通した5カテゴリーは、様々な経験をしている社会人学生といえども、現役生と同じ体験であったことが明らかになった。そのため、満足度を考える理由のカテゴリーは現役生と同じ理由であったと考えられる。

表1.実習の満足度を考えるその理由

カテゴリー	サブカテゴリー	
	社会人学生	現役生
学びの内容	臨地で学ぶことの大切さ	臨地で学ぶことの大切さ
	自己の課題の発見	自己の課題の発見
	学びの有無	学びの有無
	看護の探求	看護の探求
	振り返る	振り返る
	充実感	充実感
	援助の大切さ	援助の大切さ
	考える	考える
		自己の成長
		技術を学ぶ
援助の実施	看護援助の実施	看護援助の実施
	患者とのコミュニケーション	患者とのコミュニケーション
実習環境	指導体制と指導者の姿勢	指導体制と指導者の姿勢
	実習病棟の環境	実習病棟の環境
実習への姿勢	実習記録	実習記録
	自己の頑張り	自己の頑張り
		勉強不足
		欠席
患者の理解	患者の理解	患者の理解
		理解・知識の不足

しかし、[学びの内容]のサブカテゴリーの〈自己の成長〉が社会人学生の満足の理由には見られなかった。前田(2004)は社会人学生の認知の特性として、現役生と比較して自己成長期待が高いと報告している。社会人学生は、90時間の実習では、〈自己の成長〉を感じにくかったと考えられる。また、根岸(2012)は、社会人学生は、学び続ける強い意志をもっており、努力することが必要だと認識していることを示した。〈勉強不足〉〈欠席〉〈理解・知識の不足〉の3つのサブカテゴリーが社会人学生から抽出されなかったのは、社会人学生は達成欲求度が高く、努力する姿勢を特別と感じていなかったと考える。

以上のことから、基礎看護学実習において社会人学生の特徴は、自己の成長を満足の理由に考えない、すなわち達成欲求の高さを表していた。そのため、自己肯定感が低下することが考えられる。社会人学生が、自己の努力を認め、学生自身が成長を感じられるように支援することが次の実習につながると考える。

【引用文献】

- 厚生労働省 2011 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書
- 前田幹香 2004 社会人経験を学生のもつ看護学生の学校生活に関する認知の特性 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究収録 No.29
- 根岸貴子 2012 社会人経験を持つ学生が看護学校で学ぶことの認識 第42回（平成23年度）日本看護学会論文集 看護教育

看護学生（1年次と2年次）の医療安全管理意識の比較

○蒲生澄美子[1)] 所ミヨ子[1)] 関口恵子[1)] 宮﨑素子[1)] 今野葉月[1)] 小池啓子[1)] 天野佑美[1)]
([1)]埼玉医科大学短期大学看護学科)
キーワード：看護学生，医療安全管理意識，学年

【はじめに】
対象者の生活行動に基づいた危険を認識し、危険を回避するためには適切な判断が必要がある。筆者らは基礎看護実習（臨地実習）時に「安全管理に関するチェックシート」を導入している。看護学生が対象への援助場面における危険を認識し、事故防止行動に必要な看護技術の修得には医療安全に対する意識を高める必要があると考えた。

【研究の目的】
学年ごとの医療安全管理意識の比較をし、どのような差があるのかを明らかにする。

【方法】
1)研究対象：A 短期大学の看護学生で基礎看護実習Ⅱ（2 年次履修）を終了し研究の趣旨に賛同、了解を得た学生、計 151 名。
2)研究期間：平成 26 年 12 月～平成 28 年 6 月。
3)研究方法：医療安全管理意識は基礎看護実習（臨地実習）で使用している「安全管理に関するチェックシート」の記述内容と援助場面や見学場面から質問項目を作成した。計 56 項目を「常に意識して、毎回実践できた」から「全く意識せず、実施もできなかった」の 4 段階の評定で調査し、医療安全管理意識因子を抽出する。対象学生が 1 年次の調査結果（蒲生，2015）と比較し特徴をみる。
4)分析方法：SPSSVr.22.0 for windows を用いて次の分析を行った。
(1)医療安全管理意識因子を抽出する。
(2)因子間の相関関係をみる。
(3)対象学生が 1 年次の調査結果と比較し、t 検定を行う。
5)倫理的配慮：対象者に研究の趣旨、方法、参加の自由意志、プライバシーの保護等について文書・口頭で説明した。調査票は無記名自記式とし、対象者の回答により参加の同意が得られたとした。

【結果】
1)主因子法（プロマックス回転）による因子分析を実施したところ、4 因子が抽出された（表 1）。Cronbach の α 係数は第 1 因子 α=.868、第 2 因子 α=.795、第 3 因子 α=.850、第 4 因子 α=.758 であった。第 1 因子を「助言により気づく」、第 2 因子を「物品の安全確認」、第 3 因子を「周囲の状況確認」、第 4 因子を「守秘義務」と命名した。
2)第 1 因子は第 3 因子と中程度の相関（p<.01）がみられ、第 2 因子は第 3 因子、第 4 因子と中程度の相関（p<.01）がみられた。
3)因子を構成している下位尺度は 1 年次と共通しているものとそうでないものがあるため新たな因子名とした。因子を構成している下位尺度に注目し、t 検定を行ったところ第 2 因子を構成している項目のうち 2 年次のほうが有意に高かった項目は「血圧測定時、皮膚損傷しないようにマンシェットを巻いた」（p<.05）、「血圧計が患者にぶつからないように配置し測定した」（p<.05）であった。第 3 因子を構成している項目のうち 2 年次のほうが有意に高かった項目は「指導看護師と行動計画の打ち合わせ時、行動の流れに沿って事故防止、感染予防を意識していた」（p<.01）、「教員に行動計画の報告、打ち合わせ時、行動の流れにそって事故防止、感染予防を意識していた」（p<.01）、「留意点に事故防止、感染予防などをふまえて記入した」（p<.01）であった。1 年次のほうが有意に高かった項目は「構造・設備・機能が事故防止、感染予防にどのように関係しているかを考えて見学した」（p<.05）であった。

表1 因子分析 （主因子法 プロマックス回転）

因子名	下位尺度	因子 1	2	3	4
助言により気づく	conf：看護師の助言から、自己の安全管理の認識・判断・行動について過不足を確認した	.953	.150	-.181	.068
	conf：教員の助言から、自己の安全管理の認識・判断・行動について過不足を確認した	.888	.004	-.030	.114
	conf：他者の発言から、自己の安全管理の認識・判断・行動について過不足を確認した	.752	-.025	.243	-.107
	報告：教員・指導者・看護師から指摘されたとき、自己の安全管理の意識・判断・行動について過不足を確認した	.588	.021	.111	-.079
物品の安全確認	血圧測定時、皮膚損傷しないようにマンシェットを巻いた	.008	.886	-.087	.040
	体温測定では、破損していない体温計を挿入し、確実に回収した	.156	.620	-.083	-.110
	使用後の聴診器は消毒した	-.023	.613	-.022	.077
	血圧計が患者にぶつからないように配置し測定した	.017	.556	.172	-.027
	感染予防（感染源、ゴミなど）を意識して環境整備した	.071	.403	.060	-.008
周囲の状況確認	指導看護師と行動計画の打ち合わせ時、行動の流れに沿って事故防止、感染予防を意識していた	.140	-.093	.803	.024
	教員に行動計画の報告、打ち合わせ時、行動の流れに沿って事故防止、感染予防を意識していた	.183	-.081	.755	.016
	構造・設備・機能が事故防止、感染予防にどのように関係しているかを考えて見学した	-.097	.002	.751	-.166
	病棟における事故防止、感染予防がどのようになされているかを考えて見学した	-.091	.003	.710	.068
	転倒防止、ｽﾀｯﾌﾞｰﾄﾞﾌﾟﾘｺｰｼｮﾝなどに注意しているかを意識して見学した	.031	.076	.415	.047
	留意点に事故防止、感染予防などをふまえて記入した	-.127	.100	.373	.226
守秘義務	情報収集：病棟以外の場所で患者に関することを話題にしなかった	-.014	-.021	.169	.840
	患者・家族に情報漏洩しなかった	.019	.263	-.057	.646
	報告：病棟以外の場所で患者に関することを話題にしなかった	.111	-.134	-.236	.641

【考察】第 2 因子「物品の安全管理」はバイタルサイン測定の内容が有意差がみられた。これは 1 年次は自分が実践することで精一杯だが、2 年次は血圧測定する機会が増えてきていることで操作だけでなく、対象に配慮することができるようになったと考えられる。第 3 因子「周囲の状況確認」では指導看護師および教員への行動計画発表時の意識と留意点の記入について 2 年次が高い。これは 1 年次に 4 日間の臨地実習を経験し、臨地実習の流れがわかってきたこと、行動計画の中に事故防止・感染予防を組み入れる方法がわかってきたので意識できてきたためと考えられる。病棟の構造などの見学について 1 年次が有意に高かった（p<.05）のは、1 年次の実習目標が患者をとりまく環境を理解することであり、見学を通して学ぶことが中心であるためであると考えられる。

【引用文献】
石井裕美・西土泉・所ミヨ子他 2008 –臨地実習における安全管理に対する看護学生の意識- 埼玉医科大学短期大学紀要 第 19 巻
蒲生澄美子・所ミヨ子・関口恵子他 2016 –看護学生の学習スキルと医療安全管理意識の関係- 埼玉医科大学短期大学紀要 第 27 巻

（がもう すみこ・ところ みよこ・せきぐち けいこ・みやざき もとこ・こんの はづき・こいけ けいこ・あまの ゆみ）

索　引

人名索引

ア ――――――――

阿児　馨　121
渥美　惠美　106
阿部　光弘　29
天池　雅彦　40
天野　佑美　83, 122
雨宮　俊彦　73
荒木　晴海　44, 45
安藤　昌也　17

イ ――――――――

池田　琴恵　80
池田　満　36, 80
伊坂　裕子　70
石岡　綾香　30, 31
石川　真　82
石橋　裕子　20, 21
市川　優一郎　48, 49
稲葉　緑　115
井上　孝代　54
岩崎　章浩　16
岩見　広一　10

ウ ――――――――

浮谷　秀一　63
臼井　伸之介　97, 112
内田　誠也　9, 53
内海　裕里花　8
宇部　弘子　48, 49, 66

エ ――――――――

烏帽子田　彰　9

オ ――――――――

王　晋民　72
大門　耕平　24
大桐　将　84
大関　貴久　32, 33
太田　智子＃　16, 38
大西　麻仁　69
大野　夏代　7
大渕　憲一　106
大村　美菜子　93
岡　真裕美＃　97
岡崎　祐史　32, 33
岡田　和久　64
岡田　龍司　32, 33
緒方　浩志　6
岡部　忠司　54
岡村　靖人　91
小川　拓郎　48, 49
長船　直子　54
小野　公一　11
小野　洋平　30, 31
小原　宏基　13, 14, 87

カ ――――――――

角山　剛　74, 76
加藤　信子　55, 59
蒲倉　聡　46
神澤　創　25, 34
上瀬　由美子　67, 105
亀岡　聖朗　96
蒲生　澄美子　83, 122
軽部　幸浩　30, 31, 48, 49
川合　悟　13, 14, 87

キ ――――――――

木島　恒一　60
来田　宣幸　16, 22, 23, 24, 38, 84
紀ノ定　保礼　116
木村　友昭　9, 53
木村　真依子＃　66
桐生　正幸　29

ク ――――――――

九島　紀子　105
楠神　健　115
國宗　多恵　121
熊谷　恵子＃　92

コ ――――――――

小池　啓子　83, 122
向　佳怡　34
小島　弥生　93
小菅　英恵　92
午来　和子　109
近藤　純子　119
今野　葉月　83, 122

サ ――――――――

齋藤　厚子　109
才野　雄大　25
坂井　信之　89, 90
佐々木　晶子　43
佐藤　茜　17
佐藤　惠美　61, 62
佐藤　大輔　55, 59, 109
佐藤　七瀬＃　92
佐藤　舞　95
佐藤　佑貴　8, 103
沢宮　容子　93

シ ――――――――

施　桂栄　108
静間　健人　15
徐　贇君　39

ス
杉山　沙羅　27, 47
杉山　大成　27, 47
杉山　崇＃　81
鈴木　秋絵　65
鈴木　公啓　100
鈴木　悠介　48, 49
角野　善司　101
セ
関　陽子　18
関口　恵子　83, 122
ソ
染矢　瑞枝　29
タ
大坊　郁夫　1, 74
高井　秀明　50
髙橋　千佳　54
髙橋　尚也　75
高山　藍　19
竹内　久美子　42
竹内　倫和　77
竹内　規彦　78
竹内　康子　54
武士　由美　121
武田　知也　38
田崎　元久　32, 33
多田　昌裕　117
田中　真介　58
田中　共子　26, 37
谷口　泰富　30, 31
チ
鄭　有希　78
ツ
土田　昭司　15, 69
テ
鉄川　大健　37
ト
藤後　悦子＃　76
銅直　優子　99
所　ミヨ子　83, 122
外島　裕　54, 79
戸田　岳志　6
ナ
内藤　哲雄　8, 27, 47, 55, 59, 65, 71, 103, 109
中井　宏　97
中川　祥治＃　9
中川　知宏　68
中島　正世　81
長塚　康弘　118
中村　惠子＃　2, 5
中村　行宏　117
中本　明世　119
ニ
西村　太志　110, 111
ヌ
布川　清彦　85
ハ
芳賀　千夏子　41
萩原　広道　58
橋上　愛子　54
畑岡　真紀子　113
蜂屋　真　114
服部　環　88
濱　保久　98
林　潔　44, 45
林　幸範　20, 21
ヒ
日向野　智子　76
兵藤　好美　26
平田　裕美　57
廣山　祐仁　54
フ
深澤　伸幸　2, 3, 4
深見　将志　48, 49
福田　彩　36
福場　久美子　32, 33, 48, 49
藤澤　伸介　19
藤田　主一　32, 33, 48, 49, 63
藤田　勉　94
古谷　嘉一郎　110, 111
古屋　健　56
ヘ
Penwannakul　Yuwadee　89, 90
ホ
星　洋　51
堀　良子　120
マ
松下　由美子　42
松田　浩平　61, 62
松原　詩緒　52
松本　洸　9, 53
松本　友一郎　41
ミ
水野　百合子＃　9
宮城　徹　36
宮﨑　素子　83, 122
ム
村上　裕子　54
モ
森泉　慎吾　97, 112
森下　高治　39
守村　洋＃　43
森脇　保彦　32, 33
ヤ
安木　博臣　28
山岡　淳　53
山岡　重行　107

山極　和佳＃　76
山口　司　35
山口　豊一　102
山本　勝則　2, 7, 43, 82
山本　陽一　104
山本　礼美子＃　7
ヨ ――――――――
吉田　浩之　22, 23
蓮花　一己　117
ワ ――――――――
和田　一成　113
和田　万紀　70
渡邉　拓人　13, 14, 87
渡辺　智之＃　8

※「＃」付きの方は，非会員

日本応用心理学会第 83 回大会委員会

大会顧問　中村　惠子
（札幌市立大学特別顧問・名誉教授）

大会委員長　　山本　勝則（札幌市立大学）
大会副委員長　守村　　洋（札幌市立大学）

事務局長　　藤井　瑞恵（札幌市立大学）
編集委員長　　宮島　直子（北海道大学）
実行委員長　　山本真由美（札幌市立大学）

大会委員
柏倉　大作（札幌市立大学）
伊東健太郎（日本赤十字北海道看護大学）
星　　幸江（札幌市立大学）
中村　　創（医療法人資生会　千歳病院）
奥山真治郎（医療法人勉仁会 中垣病院）
鈴木　真人
（札幌保健医療大学非常勤実習指導教員）
松浦　明奈（東日本電信電話株式会社）
山崎　陽子（医療法人資生会　千歳病院）
佐々木晶子（医療法人こぶし　植苗病院）
大島　友美（札幌市立大学大学院 院生）
田巻乃里子
（北海道医療センター附属札幌看護学校）
齊藤　幸子（札幌市立大学大学院 院生）

Web 論文集の閲覧には、以下の「共通 ID」
「パスワード」をご利用ください。
共通 ID：jaap-83
パスワード：r5ru57ey

Web 論文集掲載ページ URL: http://conference.wdc-jp.com/jaap/83/abstract.html

日本応用心理学会第 83 回大会発表論文集
発行日　　2016 年 8 月 22 日
発行者　　日本応用心理学会
第 83 回大会委員会委員長　山本　勝則
〒060-0011 北海道札幌市中央区北 11 条西 13 丁目
印刷・製本　　（株）国際文献社